

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏名	佐藤 宙洋
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 359 号
学位授与の日付	2023 年 10 月 11 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	現代ドイツ語における接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合

Name	Takahiro, Sato
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 359
Date	October 11, 2023
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	The Competition between Prefix and Particle Verbs in Modern German

現代ドイツ語における
接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合

佐藤宙洋

目次

1. はじめに	7
1.1 問題の所在	7
1.2 動詞前綴りの分類	9
1.2.1 タイプ分け	10
1.2.2 先行研究における分類	11
1.2.3 本稿における分類	13
1.2.3.1 接頭辞動詞	13
1.2.3.2 不変化詞動詞	14
1.3 接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合言説	16
1.3.1 「競合」の定義	17
1.3.2 タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞	20
1.3.2.1 文法書	20
1.3.2.2 造語論の文献	21
1.3.2.3 類義語および語法研究の文献	25
1.3.3 タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞	28
1.3.3.1 語義の違いがある場合	28
1.3.3.1.1 前置詞的 vs. 副詞的	28
1.3.3.1.2 抽象的・比喩的 vs. 具体的・原義的	30
1.3.3.2 競合する場合	34
1.4 章末まとめ、本稿の構成	35
2. 先行研究の検討	37
2.1 タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞	37
2.2 タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞	38
2.2.1 結果強調 vs. 過程強調	39
2.2.1.1 Streitberg (1895) 説以後	39
2.2.1.2 その他の説	47
2.2.1.3 項末まとめ	49
2.2.2 抽象的・比喩的 vs. 具体的・原義的	49
2.3 接頭辞動詞一般と不変化詞動詞一般：総観的 vs. 連続的	50
2.4 章末まとめ	51

3. 事例研究に向けて	54
3.1 事例の選定	54
3.2 事例の収集および分析方法	56
3.2.1 使用コーパスと検索エンジン	56
3.2.2 検索と出力から有効データ収集まで	56
3.2.3 有効データの分析	57
3.3 判断基準	60
3.3.1 過程性の判断に向けて	61
3.3.1.1 状況のタイプと階層構造	61
3.3.1.1.1 de Swart (1998a, 2012, 2019)	62
3.3.1.1.1.1 状況タイプの数と規定	62
3.3.1.1.1.2 文の時間的相的階層構造	63
3.3.1.1.2 Smith (1997)	68
3.3.1.1.2.1 状況タイプの数と規定	68
3.3.1.1.2.1.1 動性	69
3.3.1.1.2.1.2 持続性	72
3.3.1.1.2.1.3 非分離可能性	75
3.3.1.1.2.1.4 有界性	76
3.3.1.1.2.1.5 曖昧なケース	78
3.3.1.1.2.2 文の時間的相的階層構造	79
3.3.1.1.3 目末まとめ：本稿のアプローチ	81
3.3.1.2. 持続性による弁別：Accomplishment と Achievement	82
3.3.1.2.1 時間の副詞規定との共起	83
3.3.1.2.1.1 Accomplishment 表現の場合	83
3.3.1.2.1.2 Achievement 表現の場合	84
3.3.1.2.1.3 付説：時間の in 前置詞句	86
3.3.1.2.1.4 中間まとめ	87
3.3.1.2.2 現在時制における無標のエピソード用法解釈	88
3.3.1.2.3 gerade との共起	92
3.3.1.2.4 否定の作用域	94
3.3.1.2.5 開始や終了を表す動詞による支配	95
3.3.1.2.6 内部構造を前提とする表現との共起	98

3.3.1.2.7	その他の基準	99
3.3.1.2.8	目末まとめ：本稿の基準	100
3.3.1.3	項末まとめ	101
3.3.2	比喩性・抽象性の判断に向けて	102
3.4	章末まとめ	104
4.	事例研究 I：タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞の競合	106
4.1	durch- 動詞	106
4.1.1	durchbohren	106
4.1.1.1	接頭辞動詞	106
4.1.1.2	不変化詞動詞	109
4.1.1.3	中間まとめ	111
4.1.1.4	競合の考察	112
4.1.1.4.1	過程性	112
4.1.1.4.2	比喩性・抽象性	113
4.1.1.4.3	その他の観点：第 1 項の典型性	114
4.1.1.4.4	目末まとめ	115
4.1.2	durchblättern	116
4.1.2.1	接頭辞動詞	116
4.1.2.2	不変化詞動詞	117
4.1.2.3	中間まとめ	118
4.1.2.4	競合の考察	118
4.1.2.4.1	過程性	118
4.1.2.4.2	比喩性・抽象性	121
4.1.2.4.3	目末まとめ	123
4.2	über- 動詞	123
4.2.1	übersiedeln	123
4.2.1.1	接頭辞動詞	123
4.2.1.2	不変化詞動詞	125
4.2.1.3	中間まとめ	126
4.2.1.4	競合の考察	127
4.2.1.4.1	過程性	127
4.2.1.4.2	比喩性・抽象性	128

4.2.1.4.3	その他の観点 1 : 地域差	130
4.2.1.4.4	その他の観点 2 : Dewell (2011) 説	132
4.2.1.4.5	目末まとめ	134
4.2.2	überführen	134
4.2.2.1	接頭辞動詞	134
4.2.2.2	不変化詞動詞	136
4.2.2.3	中間まとめ	138
4.2.2.4	競合の考察	138
4.2.2.4.1	過程性	138
4.2.2.4.2	比喩性・抽象性	140
4.2.2.4.3	その他の観点 1 : 地域差	141
4.2.2.4.4	その他の観点 2 : Dewell (2011) 説	142
4.2.2.4.5	目末まとめ	143
4.3	unter- 動詞 : unterschieben	143
4.3.1	接頭辞動詞	143
4.3.1.1	〈〜に…をこっそり押し付ける〉	145
4.3.1.2	〈〜に対して…と誣(し)いる〉	147
4.3.1.3	どの語義?	148
4.3.2	不変化詞動詞	149
4.3.3	中間まとめ	151
4.3.4	競合の考察	151
4.3.4.1	過程性	151
4.3.4.2	比喩性・抽象性	153
4.3.4.3	項末まとめ	153
4.4	章末まとめ	154
5.	事例研究 II : タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合	157
5.1.	blühen 群	157
5.1.1	個別の考察	158
5.1.1.1	abblühen	158
5.1.1.2	aufblühen	159
5.1.1.3	ausblühen	160
5.1.1.4	erblühen	165

5.1.1.5	verblühen	166
5.1.1.6	中間まとめ	167
5.1.2	競合の考察	168
5.1.2.1	〈咲き始める〉	168
5.1.2.1.1	過程性	168
5.1.2.1.2	比喩性・抽象性	172
5.1.2.1.3	その他の観点：選択制限	173
5.1.2.1.4	目末まとめ	174
5.1.2.2	〈咲き止む〉	174
5.1.2.2.1	過程性	174
5.1.2.2.2	比喩性・抽象性	177
5.1.2.2.3	その他の観点：Eberhard (171982 [1910]) 説	179
5.1.2.2.4	目末まとめ	180
5.2	klingen 群	181
5.2.1	個別の考察	181
5.2.1.1	abklingen	181
5.2.1.2	anklingen	182
5.2.1.3	aufklingen	186
5.2.1.4	ausklingen	188
5.2.1.5	erklingen	192
5.2.1.6	verklingen	194
5.2.1.7	中間まとめ	195
5.2.2	競合の考察：〈鳴り始める〉	195
5.2.2.1	過程性	195
5.2.2.2	比喩性・抽象性	198
5.2.2.3	その他の観点：選択制限？	199
5.2.2.4	項末まとめ	201
5.3	lügen 群	201
5.3.1	個別の考察	201
5.3.1.1	anlügen	201
5.3.1.2	belügen	202
5.3.1.3	(sich) durchlügen	202

5.3.1.4	erlügen.....	204
5.3.1.5	vorlügen.....	205
5.3.1.6	zusammenlügen.....	206
5.3.1.7	中間まとめ.....	210
5.3.2	競合の考察：〈～に嘘をつく〉.....	210
5.3.2.1	過程性.....	210
5.3.2.2	比喩性・抽象性.....	212
5.3.2.3	その他の観点1：有界性.....	213
5.3.2.4	その他の観点2：anlügenの有標性.....	215
5.3.2.5	項末まとめ.....	219
5.4	章末まとめ.....	219
6.	おわりに.....	222
6.1	結論.....	222
6.2	課題と展望.....	225
	引用文献.....	228
	A. 辞書・辞典.....	228
	B. 論文・研究書・語学書など.....	230
	謝辞.....	244

1. はじめに

本稿は、現代ドイツ語の接頭辞動詞および不変化詞動詞をテーマとする研究である。はじめに本章では、1.1「問題の所在」において、このテーマで何を問題とするのか、本稿の研究課題は何かについて述べる。1.2「動詞前綴りの分類」では、接頭辞（動詞）ないし不変化詞（動詞）とは何かについて論じる。1.3「接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合言説」では、まず競合という用語を定義し、それから先行研究における接頭辞（動詞）と不変化詞（動詞）の「競合」に関する言説を概観する。1.4「章末まとめ、本稿の構成」では本章の内容を総括するとともに、2章以下の章構成を予め示しておく。

1.1 問題の所在

現代ドイツ語には、多くの複合動詞（Komplexverb）が存在する。複合動詞の大部分は前綴りの付加によって、すなわち接頭辞による派生（Derivation/Ableitung）か不変化詞による合成（Komposition/Zusammensetzung）かによって形成されている（詳しくは1.2「動詞前綴りの分類」）。¹

例えば、**blühen**「咲いている」という基盤動詞（Basisverb, Simplexverb）に対して、**erblühen, aufblühen**「咲き始める」という前綴り動詞がある。**er-**は分離しない前綴り、すなわち非分離前綴り、またの名を接頭辞と言い、**auf-**は分離し得る前綴り、すなわち分離前綴り、またの名を不変化詞と言う。²

(1) a. Die Rose blüht. バラが咲いている。

b. Die Rose **erblüht**. バラが {咲き始める／咲き始めている}。

¹ ここで言う合成（動詞）のことを複合（動詞）と呼ぶ文献もあるが（例えば野入／太城 2002: 83ff.）、本稿は複合動詞という用語を、浜崎／野入／八本木（2008: 168ff.）や岡本（2013）の用語法に倣って、接頭辞動詞と不変化詞動詞（ないし分離動詞、非分離動詞、分離・非分離動詞）の上位語として用いる。

² **er-**、**auf-**の表記に見られる「-」を本稿は、前綴りであることを表す記号として用いる。また（1）におけるように、ドイツ語の文例を挙げる際には基本的に筆者による和訳（原文との対応を最優先にし場合によっては直訳）を付す。それから引用に際して筆者による補足がある場合は〔 〕ないし [] で表示し、同記号が原文で用いられている場合には、その旨を記す。なお例文番号は章ごとに振り直す。

c. Die Rose **blüht auf**. バラが {咲き始める／咲き始めている}。

(1) に示したように、**erblühen** と **aufblühen** は、**er-** か **auf-** かという違いはあるにしても、語義の点、あるいは前綴りの機能が開始相化であるという点では同じである。こうした関係は、Kühnhold / Wellmann (1973: 142) をはじめ多くの先行研究で「競合 (Konkurrenz)」の一種として扱われてきた (詳しくは 1.3 「接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合言説」)。したがって、**erblühen** と **aufblühen** は「咲き始める」という語義において、あるいは **er-** と **auf-** は開始相化という機能において競合している、ということになる。

現代ドイツ語には、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合が数多く見られることが知られている (詳しくは、1.3)。例えば、同じく **blühen** から形成された複合動詞では、「咲き止む」という語義において **abblühen** と **verblühen** が、あるいは終了相化という機能において **ab-** と **ver-** が競合している (詳しくは 5.1 「**blühen** 群」)。

接頭辞動詞と不変化詞動詞が競合する場合が存在すること自体は、それほど不思議なことではない。Bolinger (1977:1ff.) のように、形式が異なれば意味 (= 内容) も異なるはずであるという今日でも広く受け入れられている想定に立つならば、³ 例えば **erblühen** と **aufblühen** の競合には、「咲き始める」といった通常の語義記述や、開始相化といった前綴りの意味機能カテゴリーでは捉え切れないような内容的差異の表し分けという存在目的があるのではないかと予想される。

しかし、接頭辞動詞間の競合や不変化詞動詞間の競合は、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合に比べて「それほど頻繁でない」(Erben ⁵2006: 85) と言われていることに鑑みると、⁴ なぜ (接頭辞動詞と接頭辞動詞、あるいは不変化詞動詞と不変化詞動詞ではなく) 接頭辞動詞と不変化詞動詞が数多くの場合で競合しているのか、と問うことは妥当に思われる。

³ 野入／太城 (2002: 58) にも次のようにある：「一般論でいえば、完全な同義語が存在するとしたら、その両方が共に存在しているという理由がなくなるであろう。二つの語がともに存在している限りは、なんらかの意味での違いがあるはずである。」なお、この想定は経験的には正しい場合が多いと思われるが、だからと言って「[上記引用に続く:] 従って、同義語は理論上も、また現実的にも存在しえず、ただ意味が互いにきわめて似ている類義語があるだけであろう」(野入／太城 2002: 58) と言えるのかについては、疑問の余地がある。なぜなら、形式の違い自体が何かの役に立つ場合があるとすれば (そうしたことがあることは、同一語の反復の回避や音調の関係など、十分に考えられる)、意味が完全に同じで形式だけが異なる二語がもしあっても、「両方が共に存在しているという理由」がある、ということになるからである。

⁴ Erben (⁵2006: 85) のこの命題は本稿の事例研究からも支持される。例えば **blühen** から形成された複合動詞群においても、**ausblühen** と **abblühen** という不変化詞動詞間で競合が成り立つように見えるが、実際にはそうではなく、**abblühen** は接頭辞動詞 **verblühen** としか競合していない (詳しくは 5.1 「**blühen** 群」)。

詳しくは2章で論じるが、先行研究には、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合に関して、特定の内容的差異が多かれ少なかれ規則的に観察されると述べるものが少くない。とりわけ、いわゆる分離・非分離の前綴り動詞における分離可能な場合（＝不変化詞動詞）と分離しない場合（＝接頭辞動詞）、すなわち（2a）と（2b）の競合に関してはそうである。

(2) a. Er **durchbohrte** die Wand. 彼はその壁に穴を開けた。

b. Er **bohrte** die Wand **durch**. 彼はその壁に穴を {開けた／開けていた}。

もし実際に、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合において特定の内容的差異が規則的に表れるのであれば、それを表すのが、接頭辞動詞と不変化詞動詞という構造の違いとその対立の果たす機能であり、存在目的であるということになるであろう。

以上の問題意識のもと、本稿は、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合に関して少なからぬ先行研究が指摘する多かれ少なかれ規則的な内容的差異が、実際にはどの程度認められるのかを、実例の観察に基づく事例研究を通じて検討する。これが本稿の研究課題であり、この課題への取り組みを通じて、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合の存在目的について仮説を形成したい。⁵

1.2 動詞前綴りの分類

本節では、「動詞前綴り」の分類を論じ、本稿全体の基礎とする。動詞前綴りとは、語形成に関与する、語彙項目として見た複合動詞（Komplexverb）の先頭にくる形態素の総称である。

ドイツ語の前綴り動詞および動詞前綴りの分類は、文献によって必ずしも一致しているわけではない。⁶しかし、形態素の諸特徴に鑑みて前綴りを4つのタイプに分ければ（1.2.1「タイプ分け」）、先行研究の整理が可能である（1.2.2「先行研究における分類」）。そのように整理した上で、各分類の長所と短所を考慮し、本稿では中立的

⁵ より具体的な検討課題は2.4で提示する。なお、結論が仮説となってしまうのは、事例研究という、本稿にとって事実上唯一の選択肢である手法の性質に由来するものである。

⁶ 特にいわゆる不変化詞動詞に関しては、「総じて用語法、線引きや定義に関しても、不一致が大きく、明らかな共通傾向は成立し得ない（Insgesamt herrscht bei Terminologie, Abgrenzung und Definition eine große Uneinheitlichkeit, sodass sich keine klare gemeinsame Tendenz ausbilden kann）」（Elsen ²2014: 228: Der Begriff Partikelverb の見出し下）と述べる文献すらある。

な 4 分類 (=タイプ A 接頭辞動詞, タイプ B 接頭辞動詞, タイプ C1 不変化詞動詞, タイプ C2 不変化詞動詞) を採用する旨を述べる (1.2.3 「本稿における分類」)。

1.2.1 タイプ分け

ドイツ語の動詞前綴りには, 次の (3) に示すパラメータがひとまず設定できる。

- (3) a. 形態論的パラメータ：拘束形態素；非拘束形態素
- b. 音韻的パラメータ：強勢あり；強勢なし
- c. 統語的パラメータ：分離可；分離不可

このうち (3b) と (3c) は, *missverstehen*⁷ の場合のように, 特定の前綴りが特定の仕方で連続し, 前綴りが強勢を持ちかつ分離不可であるという特殊な場合を除いては,⁸ 強勢があれば分離可, 強勢がなければ分離不可という形で常に相関するので, 1 つのパラメータとして次のように統合できる。

- (4)' a. 形態論的パラメータ：拘束形態素；非拘束形態素
- b. 音韻的, 統語的パラメータ：強勢あり, 分離可；強勢なし, 分離不可

この 2 つのパラメータの 4 通りの組み合わせのうち, {拘束形態素, (強勢あり, 分離可)} という組み合わせは, 事実上存在しないことから以下では考慮しない。そうすると, ドイツ語の前綴りは表 1.1 に示すように A, B, C の 3 タイプに分類される。なお, 表 1.1 の「例」は網羅的なものではなく, 各タイプの成員に関する詳細は, 1.2.3 「本稿における分類」で論じる。

⁷ 当該下線を本稿は以下強勢の位置を明示する際に用いる。

⁸ *Sie missverstand ihn* (= **Sie verstand ihn miss*). 「彼女は彼を誤解していた。」ただし, この *miss* は *zu* 不定詞句では分離する。*misszuverstehen* (= **zu missverstehen*)

タイプ	例	(4a)'	(4b)'
A	be-, ent-, ⁹ er-, miss-, ver-, zer-	拘束形態素	強勢なし, 分離不可
B	durch-, hinter-, über-, um-, unter-, wider-	非拘束形態素	
C	durch-, hinter-, über-, um-, unter-, wider-, ab-, an-, auf-, aus-, bei-, ein-, gegen-, nach-, vor-, zu-, wieder- ¹⁰ zwischen-		強勢あり, 分離可

表 1.1 : ドイツ語の前綴りの 3 タイプ

1.2.2 先行研究における分類

ドイツ語文法では動詞前綴りに対して、分離前綴り、非分離前綴り、分離・非分離の前綴り、という 3 分類がしばしば用いられる (Henzen 1947: 92ff.; Paul ⁴1959: Bd.V: 242ff.; Brinkmann ²1971: 230; Erben ¹¹1972: 70ff.; Curme ²1974: 326ff.; Eroms 1982: 33; Wunderlich 1983: 453ff.; 橋本 1986: 296ff; 桜井 ⁵⁷2001: 308ff.; Durrell ²2003: 111ff.; Duden 9 ⁷2011: 938ff.; Hentschel/Weydt ⁴2013: 46f.; Helbig/Buscha 2017: 199ff., など)。

この 3 分類に対応するためには、タイプ C (表 1.1) をさらに、(5) に示すように、B と同形の C1 と、それ以外の C2 に下位区分する必要がある。そうすると、当該 3 分類は A, B, C1, C2 の 4 タイプと (6) の通り対応することになる。なお、そのことを表として示したのが表 1.2 である。

(5) C1: durch-, hinter-, über-, um-, unter-, wider-

C2: ab-, an-, auf-, aus-, bei-, ein-, gegen-, nach-, vor-, zu-, wieder-, zwischen-

(6) A : 非分離前綴り

B, C1: 分離・非分離の前綴り

C2: 分離前綴り

タイプ	例	3 分類
A	be-, ent-, er-, miss-, ver-, zer-	非分離前綴り
B	durch-, hinter-, über-, um-, unter-, wider-	分離・非分離 の前綴り
C1	durch-, hinter-, über-, um-, unter-, wider-	
C2	ab-, an-, auf-, aus-, bei-, ein-, gegen-, nach-, vor-, zu-, wieder-, zwischen-	分離前綴り

表 1.2: ドイツ語の前綴りの 4 タイプと 3 分類

⁹ 発音の関係で emp- になる場合も含める。

¹⁰ 例外的に wiederholen の wieder- はタイプ B である。

ドイツ語文法では他方で、接頭辞 (Präfix) という呼び方に代表されるカテゴリーと、もう 1 つ別のカテゴリーに分ける 2 分類もあり、特に近年の研究では、こちらがむしろ一般的である。特に後者のカテゴリーの名称は様々あるが (Zifonun 1973: 42: „Präverbien“; Weinrich 1993: 1032ff.: „Nachverb“; Donalies ²2005: 28ff., ²2011: 27: „Präverb“; Boettcher 2009: 237, Engel 2009: 229f.: „Verbzusatz“, など), 本稿では、不変化詞 (Partikel) という呼称を用いる (Stiebels/Wunderlich 1994: 913ff.; Eichinger 2000: 229ff.; 岡本 2002: 2ff., 2013: 194ff.; Duden 4 ⁸2009: 687ff.; Eisenberg ⁴2013: Bd.1: 243ff.; Szigeti 2017: 66ff., など)。¹¹

こうした 2 分法と上述の 4 タイプとの対応関係は、(7) のようになり、表 1.2 は表 1.3 のように拡張される。

(7) A, B: 接頭辞

C1, C2: 不変化詞 (など)

タイプ	例	3 分類	2 分類
A	be-, ent-, er-, miss-, ver-, zer-	非分離前綴り	接頭辞
B	durch-, hinter-, über-, um-, unter-, wider-	分離・非分離	
C1	durch-, hinter-, über-, um-, unter-, wider-	の前綴り	不変化詞 (など)
C2	ab-, an-, auf-, aus-, bei-, ein-, gegen-, nach-, vor-, zu-, wieder-, zwischen-	分離前綴り	

表 1.3 : ドイツ語の前綴りの 4 タイプおよび 3 分類と 2 分類

以上のように整理すると、2 種類の分類の長所と短所が見える。まず (7) の 2 分類について言えば、音韻的・統語的パラメータのみを基準とするという意味で、統一的な分類法である一方、形態論的パラメータは見えていないことが短所になり得る。また、それと関連して、接 (頭) 辞という用語は拘束形態素について用いられることが一般的であり (例えば Bußmann (Hg.) ⁴2008: 543; 斎藤/田口/西村 (編) 2015: 133), 非拘束形態素であるタイプ B を接頭辞と呼び、タイプ A と同様に扱うのは適切かという問題がある。¹²

次に (6) の 3 分類について言えば、タイプ B に関する上述の問題は生じない一方、

¹¹ Grimm (1878) は、分離可能 (trennbar) と分離不可能 (untrennbar) という 2 分類である。なお、この 2 分類は、Behaghel (1924: 105ff.) や Zifonun/Hoffmann/Strecker (1997: 2087ff.) などにも見られる。

¹² durch- に関しては Horlitz (1982: 260) がすでに同様の問題を指摘している。

タイプ C1 とタイプ C2 の共通性が見え難くなること、ならびに複数の分類基準（＝音韻的・統語的パラメータと形態論的パラメータ）が混在していることが短所になり得る。

1.2.3 本稿における分類

1.2.2 で見たように 3 分類, 2 分類のいずれにも長所と短所があり, どちらが適切な分類かは現時点では決め難い。したがって本稿は, まずは中立性を目指して, タイプ A 接頭辞動詞, タイプ B 接頭辞動詞, タイプ C1 不変化詞動詞, タイプ C2 不変化詞動詞, という 4 分類を採用したい。この 4 分類は, 大枠では 2 分類（＝接頭辞動詞, 不変化詞動詞）に依拠しているが, 例えばタイプ B をタイプ A と分けておくことで, 2 分類の短所を補うことを目指している。

このような分類を用いて考察を行うことで, 最終的には, 3 分類と 2 分類のいずれが現代ドイツ語の複合動詞の分類として適切かという問題にも本稿としての解答を与えることになる。6.1 で結論として述べる内容を一部先取りするならば, タイプ B とタイプ A の共通性は, 音韻的・統語的特徴を超えるものではなく, 意味的な特徴に鑑みるならば, むしろ形態論に重きを置く従来の 3 分類の方が適切と考えられる。

分類については以上とし, 以下では接頭辞動詞と不変化詞動詞それぞれについてもう少し立ち入って論じる。

1.2.3.1 接頭辞動詞

本稿では, タイプ A 接頭辞と基盤語から形成された¹⁴ 派生動詞（例えば *erblühen*）, およびタイプ B 接頭辞と基盤語から形成された合成動詞（例えば *durchbohren*）を, 接頭辞動詞と呼ぶ。¹⁵

ドイツ語の動詞接頭辞には, 強勢を基本的に持たず分離しないという音韻的統語的

¹⁴ より正確には, 例えば *erblühen* であれば, *blüh-* という語基から, 接頭辞 *er-* と不定詞の語尾 *-en* によって形成されたという言い方になるが, 動詞の不定詞が不定詞の語尾を伴うのは自明のことなので, *blühen* と *er-* から形成されたという見方を便宜的に採用し, その際 *blühen* を基盤動詞 (*Basisverb*) ないし基盤語 (*Basis*) と呼ぶ。なお *Basisverb* には「基礎動詞」という訳語が当てられることが多く, またこれは「派生や合成の基礎となる動詞」ということでそれ自体として見れば適切な訳語であるが, 基礎という言葉は他方で, 基礎的な, つまりよく用いられる, または学習において重要な語といった意味を喚起するように思われるので, 本稿では「基盤」という訳語を用いる。

¹⁵ Olsen (2017: 36) が指摘しているように, Paul (⁴1959 : Bd.V: 37) といった文法書 (他にも Wilmanns ²1899: 115ff. についても同様) においては, その歴史意識故に, タイプ A 接頭辞と基盤語からの語形成も派生 (*derivation, Derivation*) ではなく, 合成 (*compounding, Komposition*) として扱われてきた。しかしタイプ A 接頭辞は, 共時的にはもはや非拘束形態素とは考えられない以上, タイプ A 接頭辞による語形成は, 合成ではなく派生である。

特徴があり,¹⁶ さらにそれと関連して過去分詞で *ge-* が付与されないという特徴がある。次に挙げる *schlafen* 「眠っている」の例 (8a) と, 基盤動詞 *schlafen* に接頭辞 *ver-* が付いた *verschlafen* 「寝坊する」の例 (8b) を比較されたい。

(8) a. Er hat lange geschlafen.

彼は長く眠った [*geschlafen*: *schlafen* の過去分詞]。

b. Er hat heute wieder verschlafen.

彼は今日また寝坊した [*verschlafen*: *verschlafen* の過去分詞]。

現代ドイツ語の代表的な動詞接頭辞としては, 上述の *ver-* を含めた (9) の例が挙げられる。

(9) *be-*, *ent-*, *er-*, *miss-*, *ver-*, *zer-*, *durch-*, *hinter-*, *über-*, *um-*, *unter-*, *wider-*

(9) に挙げた以外にも他言語から借用された接頭辞 (例えば *Elsen* ^{2014: 230}: *de-*, *des-*, *dis-*, *hyper-*, *in-*, *ko-*, *post-*, *prä-*, *trans-*) や, 非常に限られた語にしか現れない接頭辞 (同書: 217: *ob-*, *ge-*) もあるが, これらの接頭辞は本稿では扱わない。

1.2.3.2 不変化詞動詞

不変化詞動詞は, 非拘束形態素である不変化詞 (*Partikel*) と基盤語から形成された合成動詞である。¹⁷

ドイツ語の不変化詞動詞には, 第 1 に, 不変化詞に第 1 強勢があるという音韻的特徴がある。それと関連して第 2 に, 定形動詞後置文の定形動詞として, または不定詞や分詞として実現する際には, 不変化詞の後に基盤動詞が来て (*zu* や *ge-* を間に介す場合を含め) 1 語として綴るのに対し, 定形動詞第二位文および定形動詞第一位文の定形動詞として実現する際には, 基盤動詞は枠構造の左枠, 不変化詞は右枠を埋めるという統語的, 正書法的特徴がある。次に挙げる *schlafen* 「眠っている」の例 (10a) (=8a) と, 基盤動詞 *schlafen* に不変化詞 *ein* が付いた *einschlafen* 「寝入る」の例 (10b) (10c) を比較されたい。

¹⁶ 既に見たように, 接頭辞動詞にさらに付与される接頭辞は, 強勢を持つ (例えば, *Duden* 4 ^{2009: 691}: *überbetonen*, *übererfüllen*, *untervermieten*, *missverstehen*)。

¹⁷ 英語の句動詞にある程度対応することが知られている。両者の比較については, *Olsen* (1997b: 314ff.) を参照した。

(10) a. Er hat lange geschlafen.

彼は長く眠った [geschlafen: schlafen の過去分詞]。

b. Er ist endlich eingeschlafen.

彼はようやく寝入った [eingeschlafen: einschlafen の過去分詞]。

c. Er schlief endlich ein.

彼はようやく寝入った [schlief ... ein: einschlafen の直説法能動態過去 3 人称単数形]。

こうした振る舞いから、不変化詞動詞は実際にはむしろ 2 語から成る句であるとする立場もある (Lüdeling 2001; 岡本 2002, 2013; Donalies ²2005, ²2011 など)。¹⁸ 確かに、不変化詞動詞を 2 語の句と見なせば、(10c) のような統語的な振る舞いは、ドイツ語の基本語順である SOV (dass er endlich ein-schlief) と、定形動詞第二文形成のための定形動詞の移動から、1 語と見なすよりもシンプルに説明できるし、加えて (11) のような結果構文や (12) のような動詞構造との共通点も捉え易くなる。

(11) Er hat sich satt gegessen.

彼はお腹いっぱい食べた。[< sich satt essen: 食べて自分を満腹にする]

(12) Er ist Rad gefahren.

彼は自転車に乗った。

(12) の Rad gefahren は、旧正書法では radgefahren と書かれ不変化詞動詞として扱われていた。こうした正書法の揺れからも分かるように、不変化詞動詞と他の動詞構造の間に境界を定めることは実際には困難である (詳しくは Lüdeling 2001 を参照されたい)。

しかし、仮に 2 語から成る句と見なすとしても、他の動詞構造との境界を定められないとしても、「不変化詞動詞」と名指されるカテゴリーを断念する必要はないと本稿は考える。なぜなら、いずれにしても、接頭辞動詞と競合し得るカテゴリーがあることに変わりはないからである。

本稿は以上の考えに立ち、不変化詞として、接頭辞と競合することの多い上述の

¹⁸ Lieber (2010: 151f.) のように、不変化詞動詞を語でも句でもないその中間の存在と説明する文献もある。

ein- のような、意味的に対応する前置詞を有する例 (13a; なお, ein- に意味的に対応するのは in) を中心に取り上げ, さらに必要に応じて, 同音の副詞を有する例 (13b) も取り上げることとする。

- (13) a. ab-, an-, auf-, aus-, bei-, durch-, ein-, gegen-, hinter-, nach-, über-, um-, unter-, vor-, wider-, zu-, zwischen-
- b. da-, darauf-, her-, hier-, hin-, herüber-, hinüber-, empor-, entgegen-, voran-, vorbei-, vorüber-, zurück-; los-, mit-, wieder-, zusammen-, zurecht-, ...

なお, 現代ドイツ語の動詞不変化詞としては他にも, 同音の形容詞を有する例 (fest-, früh-, fern-, voll-, aufrecht-, einig-, flüssig-, geheim-, gering-, gesund-, krank-, など) や同音の名詞を有する例 (eis-, gewähr-, halt-, kopf-, seil-, stand-, teil-, など) も挙げられることがある。

1.3 接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合言説

接頭辞動詞と不変化詞動詞それぞれについて論じるのは以上とし, 本節では両者の競合という本稿の本題に入る。まず 1.3.1 「競合」の定義」では, 先行研究での用法を踏まえ, 本稿における競合という用語を定義する。次に 1.3.2 では, 先行研究における, タイプ A 接頭辞動詞 vs. タイプ C2 不変化詞動詞の競合の言説を, 1.3.3 では, タイプ B 接頭辞動詞 vs. 同形のタイプ C1 不変化詞動詞の競合の言説を概観し, それぞれの場合においてどのような内容的差異が認められてきたかを見る次章 (2. 「先行研究の検討」) の準備とする。

なお 1.3.2 と 1.3.3 でこのように分けて概観するのは, Dewell (2015) を除くほとんどの先行研究において, タイプ A 接頭辞動詞 vs. タイプ C2 不変化詞動詞の競合と, タイプ B 接頭辞動詞 vs. 同形のタイプ C1 不変化詞動詞の競合とが, 分けて論じられてきたことに対応するためである。

本節を通じて, 接頭辞動詞と不変化動詞の競合が, ドイツ語造語論で多く論じられてきたことが示される。そのことに鑑みれば, 当該競合は, 多くの研究がある接頭辞動詞と基盤動詞 (+前置詞句構造) の競合および不変化詞動詞と対応する基盤動詞+

前置詞句構造の競合に比肩する,¹⁹ ドイツ語造語論の重要なテーマと言える。

1.3.1 「競合」の定義

競合 (Konkurrenz) はドイツ語動詞の造語論の用語としては, 例えば Kühnhold / Wellmann (1973: 142) において次の (14) のように用いられている。特に引用者による下線部に注目されたい。なお, こうした狭い意味での競合という用語は, 後述するように例えば Erben (⁵2006: 85) や Hinderling (1982: 93ff.) でも用いられているし, Fleischer/Barz (⁴2012: 100) で, 造語論的類義 (Wortbildungssynonymie) と呼ばれているものにも実質的に対応している。

(14) Die Konvergenz kann in manchen Fällen gerade zur „Konkurrenz“ in dem Sinne werden, daß verschiedene Präfixe mit der gleichen Basis verbunden vorkommen und im gleichen Kontext ohne wesentlichen Informationsunterschied austauschbar sind (der Flieder erblüht/blüht auf), obwohl die Mehrheit der Funktionsträger oft ökonomischerweise zu semantischer Differenzierung genutzt wird (z. B. *das Gebäude ersteht/der Kranke steht auf*) (Kühnhold/Wellmann 1973: 142)

収束 [=異なる形態素が同じ機能を有する現象] がまさに, 様々な前綴りが, 同じ基盤語と結びついて生起し, 同じ文脈で, 本質的な情報の差なく交換可能であるという意味での「競合」(「ライラックが咲き始める der Flieder erblüht/blüht auf」) になることもある。しかし前綴りの大半は, しばしば経済的に, 意味的な分化に利用されることが多い (例えば, 「その建物が建つ *das Gebäude ersteht* / その病人が起き上がる *der Kranke steht auf*)」)。

(14) に依拠すると, 本稿における狭い意味での競合という用語は (15) のように仮定義できる。

(15) 狭い意味での競合関係 (仮定義): 互いに異なる前綴りを持つが, 基盤語は同じである複数の動詞の類義関係。

¹⁹ 例えば, Eroms 1980; Kim 1983; Mungan 1986; 成田 1987; 黒田 1998, 2008.

(15) で問題になるのは、類義をどう定義するかである。²⁰ (14) に依拠するならば、その基準は交換可能性ということになるが、「本質的な情報の差なく交換可能である」とはどういうことか明確ではない。また、Harm (2015: 67) が指摘するように、特定の文脈での交換可能性という基準だけでは、類義とは通常区別される上位下位関係 (Hyperonymie/Hyponymie) を排除できないという問題がある。

類義関係を定義するにあたって、本稿ではまず、本稿で動詞に対して使うこととなる語義という用語を、(16) に示すように内包的ならびに操作主義的に定義し、語義という用語を用いて類義関係を定義する。なぜ動詞の語義を先に定義するかというと、動詞の意味をどのレベルで捉えるか定めなくては、どのレベルで動詞の類義を問うかも定まらないと考えるからである。

(16) 動詞の語義 (定義) : 動詞に内在する意味。ある動詞 x の語義 (A, B, C, ...) は、次の一連の操作によって得られる。

- (i) ある動詞 x には語義 a があると仮定する。語義 a を実例によって検証し修正したものを語義 A として認める。
- (ii) ある動詞 x が、例えば語義 A を実現する際と項構造²¹ および完了の助動詞選択は同じだが、語義 A からは予想できない意味を持つ場合、語義 b を仮定する。語義 b を実例によって検証し修正したものを語義 B として認める。
- (iii) ある動詞 x が、例えば語義 A を実現する際とは項構造あるいは完了の助動詞選択の点で異なる振る舞いをする場合、例えば語義 c を仮定する。語義 c を実例によって検証・修正したものを語義 C として認める。

語義記述に関する本稿の基本方針は、語義をなるべく粗く、つまりなるべく単義を指向して記述する、というものであり、(16) もそれを実現する仕様を目指している。なぜ単義を指向するかというと、そうした方が、競合関係を多く扱うことができるからである。別義を認めるのは (16) で定めた条件においてのみである。なお、(16ii) と (16iii) は、互いに順番が前後することもあれば、繰り返し適用されることもあ

²⁰ 類義をめぐる様々な立場・議論があり、未解決の問題もあるが (Cruse 2015:145: "much research remains to be done in the field of synonymy."; Stojohann 2010: 69f.), 以下ではあくまで、類義という用語を本稿がどのような意味で用いるかだけを問題とする。

²¹ 動詞 (= 述語) がそれについて述定する要素を項と呼ぶ。項は述語から意味役割 (詳しくは 3.2.3) を受け取る。また、ここで言う「項構造」とは、述語がいくつの項を取り、それを統語的にどう実現するかということ。

る。

例えば、後述の *durchbohren* と *durchbohren* の語義記述の一部を例にとると (4.1.1.1, 4.1.1.2), 一方の *durchbohren* には〈～を穿つ〉という語義が仮定され, 検証の後認められる (16i) (例文: *die Bankräuber durchbohren eine Betonmauer* 「銀行強盗がコンクリート壁を穿つ (= 穴を開ける)」。)。(16ii) (16iii) は *durchbohren* には当てはまらない。*durchbohren* には例えば *Ihr Blick durchbohrte ihn* 「彼女の視線が彼を貫いた」のような比喩的な用法があるが, この用法は〈～を穿つ〉という語義から十分予測できることから, 本稿ではあくまでも当該語義の比喩的な現れとして記述される (= 16ii は適用されない)。他方の *durchbohren* にも第 1 に〈～を穿つ〉という語義が仮定され, 検証の後認められる (16i) (例文: *der Dieb bohrt zwei Bleche durch* 「泥棒が 2 枚のブリキを穿つ」)。*durchbohren* にはしかし, 当該語義の第 2 項が被動物ではなく被成物の例も見受けられることから (例文: *die Stadt bohrt einen S-Bahn-Tunnel durch* 「市は市街鉄道のトンネルをつくる」), 第 2 に〈穴を開けて～をつくる〉という語義も仮定され, 検証の後認められる (16iii)。なお, *durchbohren* には実際にはさらに 3 つの語義が認められるが, これに関しては紹介を割愛する。

動詞の語義を定義したので, 次にそれに基づいて動詞の類義関係を次のように定義する。

(17) 動詞の類義関係 (定義): ある同じ語義を持つ, 異なる動詞の関係。

(17) は, 一方では Murphy (2003: 134) の類義の語用論的定義 (A synonym set includes only word-concepts that have all the same contextually relevant properties, but differ in form.) を参考に, 「類似」や「似ている」という曖昧な表現を排している。他方で (17) は, 「語義」という用語の使用に示されているように, あくまでも意味論的な定義である。意味には確かに文脈依存性があるにしても, 文脈から独立した意味を「語義」として抽出することは可能である, というのが本稿の前提である。

(17) を (15) に代入すると, 本稿における狭い意味での競合関係の定義が得られる。

(18) 狭い意味での競合関係 (定義): ある同じ語義を持ち, 前綴りの点のみで異なる複数の動詞の関係。

なお先行研究では、競合関係にある2つの前綴り動詞における2つの前綴りが「競合関係にある」と言われることもある（例えば Duden 4⁸2009: 703）。これは、意味機能は同じだが形態が異なるという意味での競合であり、いわば広い意味での競合であるが、こと動詞前綴りに関しては、狭い意味での競合が成り立つ時かつその時に限り広い意味での競合も成り立つので（例えば、*erblühen* と *aufblühen* は狭い意味で競合し、したがって両語において *er-* と *auf-* は広い意味で競合している）、本稿では以下両者を特に区別しない。

競合が定義できたので、本節の以下では、先行研究において接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合がどの程度意識されてきたかを、タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合と（1.3.2）、タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞の競合に分けて見ていく（1.3.3）。ただしここで言う競合は、(18) に定義する意味での競合では必ずしもない。²² したがって、本節の以下で取り上げるのは、あくまでも「いわゆる競合」の言説である点に留意されたい。

1.3.2 タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞

本項では、当該競合の言説を、先行研究の大まかなジャンル分け（文法書、造語論の文献、辞書としてまとめられたものを含む類義・語法研究の文献）に則って概観する。

1.3.2.1 文法書

ドイツ語の文法書の中で、タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合を最も明瞭に指摘しているのは、Duden 4⁸(2009) である。Duden 4⁸(2009: 703) は、不変化詞は、時間的空間的な意味に留まらない意味を持つ場合において、接頭辞と競合する (*konkurrieren*) と述べ、次の例を挙げている。²³

(19) *entzünden* – *anzünden* [火をつける] , *verändern* – *abändern* [変える] , *verheilen*

²² (18) に定義する競合の記述は、本稿の事例研究において行われる。

²³ ただし既に述べたように、ここで言う競合は「いわゆる競合」である点に留意されたい。実際 (19) には、本稿の定義する競合に当てはまらない可能性の高い例も含まれている。例えば *verändern* と *abändern* は、Latzel (1995: 1ff.) によれば、「変える」という意味では共通しているものの、後者は、「部分的に」という意味特徴を持っている。同様に、*erbauen* と *aufbauen* は、「建てる」という意味では共通しているものの、前者は「巨大であったり歴史的・社会的意義が大きい建物を建てる」という意味であるのに対し、後者はむしろ「組み立てる」という意味とされる (Latzel 1995: 11ff.)。

– ab-, ausheilen [治る] , erbauen – aufbauen [建てる] , verdecken – zudecken [覆う] (Duden 4⁸2009: 703)

他にも例えば, Paul (4¹⁹⁵⁸: Bd. IV: 65f.: einschlafen と entschlafen への言及あり), Erben (11¹⁹⁷²: 73: erblühen と aufblühen, entbrennen と anbrennen, entschlafen と einschlafen への言及あり), Heidolph/Flämig/Motsch (1981: 501ff.: erblühen と aufblühen への言及あり), Helbig/Buscha (2017: 62ff.: erblühen と aufblühen, zerreißen と abreißen への言及あり) は, 競合と明確に述べているわけではないが, 各動作相を論じる際に基盤語を同じくするタイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の双方を併記している場合があるので, 実質的には両者の競合を考慮していると言える。

反対に例えば, Weinrich (1993), Zifonun/Hoffmann/Strecker (1997), Engel (2²⁰⁰⁹), Hentschel/Weydt (4²⁰¹³) では, 当該競合に言及していないことに加え, 動作相に言及する際にも接頭辞動詞と不変化詞動詞が併記されたりはしていないので, 両者の競合が考慮されているようには見えない。

1.3.2.2 造語論の文献

ドイツ語造語論の代表的な入門書の1つである Erben (5²⁰⁰⁶: 85) は, 前綴りの働きについて概説する中で, ²⁴ 接頭辞 (動詞) と不変化詞 (動詞) の競合に言及している (20)。また, 引用者による下線部の指摘にも注目してほしい。

(20) Sie [= die Präfixe] bringen Inhaltsmerkmale hinzu, die eine paradigmatische Opposition ermöglichen, d.h. eine distinktive Abhebung des Präfixverbs vom Basisverb (BV) wie von Präfigierungen dieses Basisverbs mit anderen Präfixen; z.B. steht *er-blühen* sowohl in Opposition zu *blühen* wie zu *ver-blühen*, und (*jem.*) *be-lügen* sowohl zu *lügen* wie zu (*etwas*) *er-lügen* sowie (*sich*) *durch-lügen*.
Hingegen besteht kein Verhältnis der Opposition, sondern eher die Konkurrenz zwischen *er-blühen* und *auf-blühen*, sowie (*jem.*) *be-lügen* und (*jem.*) *an-lügen*, d.h. es gibt nicht nur Präfixe gegensätzlichen, sondern auch solche ähnlichen Inhalts

²⁴ Erben (5²⁰⁰⁶) は, (20) において Präfix という用語を, 文脈に鑑みると, 接頭辞と不変化詞を両方指して, つまり本稿における前綴りの意味で用いていると言える。なお, こうした用語法は, Zifonun/Hoffmann/Strecker (1997: 2087ff.) にも見られる。

bzw. gleicher grammatischer Funktion. Dabei ist auffällig, daß gerade die formal sehr deutlich unterschiedenen betonten und trennbaren „Verbzusätze“ (z.B. an-, auf-) funktional den schwachtonigen festen Präfixen teilweise nahezu gleichkommen – auch bei der Verbalisierung von Basisnomina (ent-gräte-n, aus-gräte-n; er-heiter-n, auf-heiter-n), während die Konkurrenz zwischen schwachtonigen Präfixen (er-blühen, °ent-blühen; er-löschen, ver-löschen) oder zwischen betonten Präfixen (ab-blühen, aus-blühen) weniger häufig auftritt. (Erben ⁵2006: 85) ²⁵

前綴りは、範列的な対立を可能にする意味素性を、つまり、基盤動詞 (BV) や、当該基盤動詞から他の前綴りによって形成された前綴り動詞からの弁別的区別を可能にする意味素性を付け加える。例えば、er-blühen [咲き始める] は、blühen [咲いている] とともに、ver-blühen [咲き止む] と対立し、(jem.) be-lügen [～に嘘をつく] は、lügen [嘘をつく] とともに (etwas) er-lügen [～を捏造する] や (sich) durch-lügen [嘘をついて切り抜ける] と対立する。

それに対し、er-blühen と auf-blühen [咲き始める] や (jem.) be-lügen と (jem.) an-lügen [～に嘘をつく] の間には、対立関係ではなく、むしろ競合関係が成り立っている。つまり、対立する前綴りだけではなく、似通った意味の、もしくは同じ文法的機能の前綴りも存在するのである。その際注意を引くのは、まさに、形式的に顕著に異なる、強勢を持ち分離する「動詞付加成分」 [= 不変化詞] (例えば an-, auf-) が、強勢を持たず分離しない前綴り [= 接頭辞] に、－これは、名詞類からの動詞派生においてもそうであるが (ent-gräte-n, aus-gräte-n [(魚の)骨をとる] ; er-heiter-n, auf-heiter-n [愉快にする])、部分的には機能的にほぼ等しいことである。他方、強勢を持たない前綴りの間 (er-blühen, °ent-blühen [咲き始める] ; er-löschen, ver-löschen [消える]) ないし強勢を持つ前綴りの間 (ab-blühen, aus-blühen [咲き止む・終わる]) での競合はそれほど頻繁でない。

下線部で言われているように、ドイツ語においては接頭辞 (動詞) と不変化詞 (動詞) の競合は珍しくないが、これは、接頭辞 (動詞) 間ないし不変化詞 (動詞) 間の競合が「それほど頻繁でない」ことに鑑みると、何らかの説明が求められる現象と言える。Erben (⁵2006) はこの点に関して立ち入って論じていないが、後述する

²⁵ entblühen に付与された「°」は、今日一般的な語でない、という印。

ように, Erben (¹¹1972: 73) では若干考察がなされている。

ドイツ語造語論の基本文献である Fleischer/Barz (⁴2012: 417f.) は, 前綴りの競合の抜粋を次の表にまとめている。本稿のテーマである, 接頭辞(動詞)と不変化詞(動詞)の競合とされる例に関しては当該基盤動詞に網をかけて引用する。

Präfix/Verbpartikel	synonym mit	bei
be-	er-	steigen
	über-	gießen, ziehen ²⁶
	ver-	decken, kleben
ent-	ab-	kuppeln, sagen
	an-	brennen, zünden
	aus-	laden, leihen, strömen
	ein-	schlafen, schlummern
	los-	kommen, reißen
	ver-	schwinden
er-	ab-	betteln
	an-	streben
	auf-	bauen, klingen, richten, wachen
	aus-	denken, rechnen
	durch-	leben, leiden
ver-	ver-	löschen
	ab-	ändern, blühen
	auf-	schieben, zehren
	aus-	heilen, klingen, lachen, löschen
	miss-	achten, leiten
	zer-	reiben, rinnen
ab-	zu-	decken, schließen
	aus-	heilen, schalten
an-	los-	fahren, lösen
	bei-	fügen
	zu-	lächeln

表 1.4: Übersicht 32: Synonymie deverbaler Präfix- und Partikelverben
(Fleischer/Barz ⁴2012: 417f., レイアウトは一部変更)

Fleischer/Barz (⁴2012: 417f.) は, 接頭辞(動詞)と不変化詞(動詞)の競合が, 接頭辞(動詞)間ないし不変化詞(動詞)間の競合よりも頻繁であるとは述べていないが, 表 1.4 では, 接頭辞と不変化詞の競合は 29 件 (entkuppeln, abkuppeln; entsagen, absagen; entbrennen, anbrennen; ...) 挙げられているのに対し, 接頭辞間の競合は 13 件 (besteigen, ersteigen; begießen, übergießen; beziehen, überziehen; ...), 不変化詞間のそれは 6 件 (abheilen, ausheilen; abschalten, ausschalten; abfahren,

²⁶ 「被せる」という意味が問題であると考えられる。そうだとすれば, これは überziehen ということになる。

losfahren; ...), つまり両者合わせても計 19 件しか挙げられておらず, やはり接頭辞と不変化詞の競合例が多くなっている。

同じくドイツ語造語論の基本文献である Kühnhold/Wellmann (1973) は, 表 1.4 よりもはるかに多くの競合例を列挙しているが, 中心的な例は表 1.4 と重複している部分もあるので引用は割愛する。²⁷

Motsch (²2004) は, 競合という用語は用いていないが, 各「意味型 (semantisches Muster)」を論じる際に, 接頭辞動詞と不変化詞動詞を両方とも例示しているのので, 両者の競合を実質的には考慮していると言える。例えば 149 頁では, 開始相化の型 [BEGINN (V (x, s))](x, s) に関して,²⁸ *entschlafen* 「眠りに落ちる」²⁹, *entflammen* 「点火する」; *erklingen* 「鳴り始める」, *erblühen* 「咲き始める」; *einschlafen* 「眠り込む」, *einnicken* 「居眠りしだす」; *loslaufen* 「走りだす」, *losschreien* 「叫びだす」; *anlaufen* 「走りだす」, *anfahen* 「(乗り物で) 走りだす」; *aufblühen* 「咲き始める」, *aufkeimen* 「芽がでる」が例示されている。

なお, 詳しくは事例研究の際に言及するが, 複数の動詞前綴りをテーマとする造語論ないし意味論の研究書では, 他にも例えば, Stiebels (1996), Dewell (2015), Schwenk (2019: 特に 202ff.) において, タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合が扱われている。

論文では例えば Hinderling (1982: 93ff.) が, 接頭辞と不変化詞の語源的な関連に着目し, *ent-* と *ein-* (例えば *entschlafen* と *einschlafen*), *er-* と *aus-* (例えば *erbleichen* と *ausbleichen* 「色あせる」) の競合を指摘している。確かに, *entschlafen* の *ent-* は, もともと *in* であったのが *int-* (> *ent*) と混同された (Duden 7⁵2014: 252) という経緯で *ein* と関連があり, *er-* は, もともと *heraus* の意味を有していた (同書:

²⁷ 既に述べたことであり, 他の先行研究にも当てはまることでもあるが, Kühnhold/Wellmann (1973) が競合とする例にも, 本稿の定義する競合には当てはまらない可能性の高い例が含まれている。1 例だけ挙げると, Kühnhold/Wellmann (1973: 174) は, *erschrecken* と *aufschrecken* において *er-* と *auf-* が「上へ (Aufwärtsbewegung)」という意味機能において競合しているとするが, 当該 *er-* に「上へ」の意味があるかどうかには疑問の余地がある。例えば Duden (³2018) は, *aufschrecken* の 1 語義を, 「驚きのあまり突然起き上がる, 驚いて飛び上がる (sich vor Schreck plötzlich aufrichten, wegen eines Schrecks in die Höhe fahren)」と記述する一方で, 対応する *erschrecken* の語義は「驚愕に陥る, 驚く (in Schrecken geraten, einen Schrecken bekommen)」と記述しており, この記述に鑑みると, *erschrecken* に「上へ」という意味特徴は認められず, 両語は本稿の定義する意味では競合していないことになる。

²⁸ V は基盤動詞, x は参与者の項, s は V を述語とする文が指示する状況の項。BEGINN という演算子はここで, x が V するという状況 s の開始を表している。なお, この型について Motsch (²2004) は, ‘ein Aktant vollzieht die Anfangsphase eines Geschehens’ 「参与者がある出来事の初期段階を遂行する」という説明もしている。

²⁹ *entschlafen* という語は, 今日普通には「永眠する」ことの婉曲表現であるが, 造語論的な成り立ちが分かり易いように「眠りに落ちる」という訳語を当てる。

255) という経緯で, aus と関連があると言える。

Hinderling (1982: 93ff.) においては, 語源的な関連を持たない例としては, er- と auf- (「こじ開ける」という意味の *erbrechen* と *aufbrechen*) が言及されるのみであるが, これまでの概観からも明らかなように, 接頭辞と不変化詞の競合は語源的関連にとどまるものではなく, 語源的関連に基づいて競合を割り出せる程度は, かなり限定的と言える。

Hinderling (1982: 93ff.) にも言及のある er- と auf- の競合は, 先行研究において特に注目されてきたと言える。両者の競合をテーマとする論文としては, 詳しくは事例研究の際に言及するが, 例えば Benoist (2011) や Kühnhold (1969) が挙げられる。

論文では他にも Stiebels/Wunderlich (1994: 952) が, 具体例にはあまり言及していないとはいえ, 接頭辞動詞と不変化詞動詞が「意味的に並行した振る舞い」を示すと指摘している。

個々の前綴りの研究書においても, 当該前綴りと他の前綴りとの競合も論じられることがある。例えば, aus- 動詞を研究した Hundsnurscher (1997 [1968]: 175ff.) では, 不変化詞 aus- と接頭辞 er-, ent-, ver-, be-, durch-, über- の競合も扱われ, be- 動詞を研究した Günther (1974: 228ff.) では, 接頭辞 be- と不変化詞 ab-, an-, auf-, aus-, bei-, durch-, ein-, um-, zu- の競合も扱われている。

1.3.2.3 類義語および語法研究の文献

類義語研究には, シソーラスに代表されるような, ある意味に関連する語彙項目をリストアップすることを目指す「集積的 (kumulativ)」(Haß-Zumkehr 2001: 269ff.) な研究と, 意味用法のよく似た表現の使い分けを説明する「弁別的 (distinktiv)」(ibid.) な研究の 2 種類があるが, ここでは後者を念頭に置く。

ドイツ語の類義語研究においては, タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合例に関しても, 多くの知見が蓄積されてきた。³⁰ 類義語辞典における扱いにつ

³⁰ ドイツ語の類義語を扱った文献の歴史は長い, Haß-Zumkehr (2001: 279) によると, 学問的な類義語研究は Eberhard の 6 巻本 (1795-1802) に遡る (筆者が参照したのは Eberhard/Maaß³1826-1830; なお, この辞典は後に中辞典としても出版され版を重ねる。本稿が事例研究の際に参照するのは, Eberhard¹⁷1982 [1910]; Eberhard の類義語辞典についてより詳しくは宮坂 1980 を参照されたい)。ドイツ語で書かれたドイツ語の類義辞典でより新しいものとしては, Duden 8 (1964) が挙げられる。Duden の類義語辞典は 1972 年以降, 従来の弁別的なあり方から集積的なあり方に方針が変わっており (岡村 1983 を参照), 事実上の縮約版である Schüler-Duden (1977) や, 「取り違えやすさ」という, 類義とは若干異なる観点から編まれた Müller (1973) を除けば,

いては、事例研究で適宜参照することにして、ここでは Latzel (1995) で扱われている、競合を含む諸例を確認しておく。³¹

Latzel (1995) が扱っているのは、次の表に整理して示す 30 グループの「同語幹類義動詞 (sinnverwandte stammgleiche Verben)」である。30 グループの大半にあたる 21 のグループで、接頭辞動詞と不変化詞動詞の「競合」が扱われている。

Duden 8 (1964) 以後にドイツ語で全く新たに編纂された弁別的な類義語辞典というのはほとんど存在しないと思われる。とはいえ、例えば英語圏では、Farrell (³1978), Beaton (1996), Durrell (2000) といった、優れた弁別的類義語辞典がその後も編まれている。また、Farrell (³1978) 等の研究の成果は、日本語で編まれたおそらくは唯一のドイツ語類語辞典である中條 (1982) にも多分に取り入れられている。

³¹ Latzel (1995) は、序文において自身の研究の独自性を強調しているが、実際には前註で述べた類義語研究の系譜に連なると考えられる。

基盤動詞	接頭辞 (動詞)	不変化詞 (動詞)
ändern	ver-	ab-, um-
arbeiten	be-, über-	um-
bauen	er-	auf-
bessern	ver-	auf-, nach-
bilden		aus-, fort-, weiter-, heran-
fälschen	ver-	um-
fragen		an-, nach-
hören		an-, hin-, zu-
kämpfen	be-	an-
kaufen		ab-, an-, auf-, ein-
klagen	ver-	an-
kleiden	be-	an-, ein-
kürzen	ver-	ab-
lesen	über-, ver-	ab-, aus-, herunter-, durch-, nach-, vor-
messen	ver-	ab-, aus-
prüfen	über-	nach-
reisen	ver-	ab-, an-, aus-, ein-
schießen	er-	ab-, tot-
schönen	be-, ver-	
schreiben		auf-, hin-, nieder-
sehen		an-, hin-, zu-
stärken	be-, ver-	
sterben	ver-	ab-, dahin-
suchen	durch-	ab-
tauschen	ver-	aus-, ein-, um-
wandeln	ver-	ab-, um-
wandern		ab-, aus-, ein-, zu-
wechseln	ver-	ab-, aus-, ein-, um-, über-
weisen	be-, er-	nach-
zählen	über-	ab-, aus-, durch-, nach-

表 1.5: Latzel (1995) の事例まとめ

1.3.3 タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞

durch-, hinter-, über-, um-, unter-, wider- を持つ複合動詞に関しては、タイプ B 接頭辞である場合とタイプ C1 不変化詞である場合で認められる語義が明確に異なることが多いが、語義の違いが認め難い例のあることも、つまり競合する例のあることも知られている。本稿にとって直接的に重要なのは、1.3.3.2「競合する場合」で扱う後者の例であるが、両者の区別を明確にする目的で先に前者を 1.3.3.1「語義の違いがある場合」で取り上げる。

1.3.3.1 語義の違いがある場合

本目では、タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞に関して、語義のレベルでどういった違いがあるとされてきたのか概観する。

先行研究では、前置詞的 vs. 副詞的 (1.3.3.1.1)、抽象的・比喩的 vs. 具体的・原義的 (1.3.3.1.2) という観点、それから他動詞的 vs. 自動詞的という観点で論述がなされてきたが、最後の観点に関しては、詳しくは後述するように、前置詞的 vs. 副詞的と実質的に同じ観点であることから、独立には取り上げないことにする。

1.3.3.1.1 前置詞的 vs. 副詞的

タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞に関しては、第 1 に、接頭辞の方は基本的に前置詞的であり、不変化詞の方は基本的に副詞的であると言われてきた。³² 例えば橋本 (1986) には、次のような用例と解説が挙げられている。(21) はタイプ B 接頭辞 durch- の例、(22) はタイプ C1 不変化詞 durch- の例である (なお引用に際しては強勢記号を省略した)。

(21) Er durchreiste die Gegend. 「彼はその地方を旅行して廻った」(durch die Gegend と考えられる。)(橋本 1986: 324)

(22) Er reiste durch. 「彼は旅をして通った」。(durch- に対する補足語はない。ただ「そこを通過して [=hindurch] という意味の副詞である [...]」(同書: 331)

³² その際言われていたのは、接頭辞動詞が基盤動詞＋前置詞句と、不変化詞動詞が基盤動詞＋副詞・形容詞句と等価であるといったことではなく、接頭辞動詞の意味的な特徴は、基盤動詞＋前置詞句に、不変化詞動詞のそれは基盤動詞＋副詞・形容詞句に対応させると把握しやすい、ということであったと思われる。なお、それぞれの構造の実際の違いに関しては、例えば黒田 (2008) が durchfahren を例に示している。

この区別は、橋本（1961）が強く打ち出し始めたようだが、³³ 橋本（1961）自身認めているように、多かれ少なかれ同趣旨の指摘は、より古くは Curme や Paul（⁵1959: Bd. III: 246ff., ⁴1959 Bd. V: 34f.）にも見出せる。³⁴ また近年では、Rich（2003）、成田（2003）といった文献が、この点に関して基本的には同じ見解である。

それから、Olsen（1996, 1997a）に代表されるような、接頭辞動詞においては前置詞の項が動詞の対格目的語へ格上げされ、不変化詞動詞においては前置詞の項が存在量化されるという説明も、ここで取り上げているタイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞に関しては、それ以前からなされていた前置詞的 vs. 副詞的という説明の延長線上にある。³⁵

これまで先行研究に合わせて「副詞的 (adverbial)」という用語を使ってきたが、この用語は「前置詞的」と比べて内実が多様なので、不変化詞が副詞的であるとはどういうことか次に簡潔に述べておく。

Blom（2005）や McIntyre（2004: 34）を参照しながらドイツ語の不変化詞の分類を示している大矢（2007: 33f.）は、ドイツ語の不変化詞を（23）に示すように 4 つにタイプ分けしている。

(23) A. RESULTATIVE PARTICLE

die Schuhe einlaufen ‘wear in the shoes’

den Ball aufwerfen ‘throw the ball up’

das Glas umwerfen ‘knock down/over the glass’

B. MODIFYING PARTICLE

das Gemüse vorkochen ‘cook the vegetables beforehand’

das Lied mitsingen ‘sing the song with others’

die Rechenaufgabe nachrechnen ‘work out the arithmetical problem once again’

³³ 「分離・非分離の前つづりが分離するか非分離になるかを決定する一番根本的の窮極の原理は、前つづりが副詞的な意味をもつか前置詞的な意味をもつかということである。このことは、ドイツ本国でも余り強調されたことがなく、従って日本のドイツ語学者でこの点を力説した例を聞かないだけに、なおさら重要なことである。」（橋本 1961: 29）

³⁴ 橋本（1961）が Curme の何年の版を参照したのか定かでないが、筆者が参照した Curme（²1974: 327f.）には、確かにそういった記述がある。なお、durch- 動詞に関しては、Kjellman（1945: 23）がすでに同様の区別を指摘している。

³⁵ なお、本稿のテーマである競合には直接関わらないので詳しくは立ち入らないが、大矢（1999）、鈴木（1999）には、Olsen（1996, 1997a）の想定するメカニズムによって説明できない接頭辞動詞及び不変化詞動詞の指摘がある。

C. RELATOR PARTICLE

1. ORIENTING PARTICLE

den Jungen ansehen ‘look at the boy’

2. PATH PARTICLE

die Sonate durchspielen ‘play through the sonata’

das Buch durchlesen ‘read the book through’

D. CONTINUATIVE PARTICLE

rumschieben ‘push around’,

rumflicken ‘do minor repairs’,

rumkritisieren ‘criticize pettily’,

ruminstallieren ‘install useless programs’,

rumstipulieren ‘stipulate rather than explain’,

rumerklären ‘explain away unconvincingly’,

rumformulieren ‘do minor formulating’

(大矢: 2007: 33f.)

(23) の4タイプのうち, C.「関係を表す不変化詞」は本稿が前置詞的と呼ぶ不変化詞に対応する。³⁶つまり A.「結果的不変化詞」, B.「修飾的不変化詞」, D.「継続的不変化詞」が本稿が副詞的と呼ぶものであるが, それらは一方で, 出来事の結果としての項の状態や位置について述定する A.「結果的不変化詞」と, 他方で, 基盤動詞が表す出来事自体について述定する B.「修飾的不変化詞」および D.「継続的不変化詞」に分かれると考えられる。

1.3.3.1.2 抽象的・比喩的 vs. 具体的・原義的

先行研究では第2に, タイプ B 接頭辞動詞の方は抽象的ないし比喩的であるが, 同形のタイプ C1 不変化詞動詞の方は具体的ないし原義的であるという指摘もなされてきた。例えば Helbig/Buscha (2017: 201) は, unter- および部分的には über- と hinter- に関して, それが非分離 (= 接頭辞) の場合, 当該動詞は「比喩的な (metaphorisch-bildlich)」意味を表し, それが分離する (= 不変化詞である) 場合,

³⁶ Duden (2014: 532) は durchspielen の一部の語義を, [probend] von Anfang bis Ende spielen や bis zum Ende spielen と記述している。このことに鑑みるならば, 当該 durch- は B.「修飾的不変化詞」と考えることもできるだろう。なお, 同様のことは durchlesen の durch- にも言える。

「時間的空間的な (zeiträumlich)」³⁷ 意味を表すと述べている。³⁸

(24) a. Der Gärtner *gräbt* den frischen Dung *unter*. [konkret]

[その庭師は新鮮な堆肥を地中に埋めている。]

b. Mein Onkel *untergräbt* durch vieles Rauchen seine Gesundheit (= zerstören)

[abstrakt]

[私のおじは、タバコをたくさん吸って健康を損なう。]

c. Er *warf* sich eine Jacke *über*. [konkret]

[彼はジャケットを羽織った。]

d. Er *überwarf* sich wegen einer Bagatelle mit seinem Nachbarn. (= sich verfeinden)

[abstrakt]

[彼は些細なことで隣人と仲違いした。]

e. Ich *bringe* die Tablette nicht ohne Wasser *hinter*. [konkret]

[私は錠剤を水なしでは飲み下さない。]

f. Er *hinterbrachte* ihr sofort meine kritische Bemerkung. (= verraten) [abstrakt]

[彼は彼女にすぐさま私の批判的発言を告げ口した。]

(Helbig/Buscha 2017: 201)

こうした見解は、橋本 (1961: 10ff.) やそれ以前から、多くの例外および基準の曖昧さ故に繰り返し批判されてきたが、³⁹ 少なくとも前置詞的 vs. 副詞的という差異 (1.3.3.1.1) が当てはまらない場合に限っては、有効であると言える (橋本 1961 自体もそれを否定しているわけではない)。事実、次の (24') に示すように、(24) の

³⁷ ただし、実際に挙げられている例文においては、ほとんどの場合空間的な意味が問題であって、時間的な意味が問題となるのは、*durchfahren* 「とまらずに通り過ぎる」といった場合に限られる。

³⁸ 他には例えば関口 (1980: 156) も、「8 個 [の分離・非分離前綴り] を通じて、いかなる際に分離しないかを一言のもとに断じうる共通の法則はない」としながらも「ただ、分離する場合には空間的、具体的な原意に取られることが多く、非分離の場合には多少象徴的、抽象的な意に転じることが多いとは言えないこともない」と述べ、*übersetzen* の例を挙げている。

³⁹ 当該批判は少なくとも Henzen (1947: 92f.) の記述にまで遡れる。その一部を引用しておく (原文隔字は下線で代用表示する)。Man sagt wohl gern, Zusammensetzungen seien fest geworden, sobald sie im *übertragenen* Sinn auftreten. Das trifft aber nur sehr bedingt zu! (Henzen 1947: 92)

「複合 [動詞] はそれが比喩的な意味で現れるやいなや非分離になる、とよく言われるが、それは非常に限定的にしか正しくない！」他方、抽象 vs. 具体という説を支持する文献でも、um については反対のことが当てはまるということはいしばしば指摘されてきた (例えば、梅内 1996: 219)。なお、『現代独和辞典』(三修社) を調査・研究した荒木 (1997: 3, 5) によれば、空間的/比喩的という基準が当てはまる割合は、全体では 54.6%、個別では高い順に、wider- 94.1%、voll- 88.2%、über- 85.5%、hinter- 82.4%、unter- 79.3%、durch- 59.0%、wieder- 52.6%、um- 3.5% とのことである。

例のうち, a, c, e において, つまり不変化詞動詞の例においては, 不変化詞は確かに副詞的であるが, b, d, f において, つまり接頭辞動詞の例においては, いずれの接頭辞も (21) 式に, すなわち対応する前置詞句で直接言い換えることは難しく,⁴⁰ そしてまた字義通りの意味には還元できないため, 当該接頭辞は, 基盤語の意味を抽象的ないし比喩的に拡張していると見なせる。

(24)' a. Der Gärtner *gräbt* den frischen Dung *unter*.

unter は副詞的 : Der Gärtner gräbt den frischen Dung unter die Erde

b. Mein Onkel *untergräbt* durch vieles Rauchen seine Gesundheit

前置詞句による直接の言い換えは不可 : *Mein Onkel gräbt durch vieles Rauchen unter seine Gesundheit

c. Er *warf* sich eine Jacke *über*.

über は副詞的 : Er warf sich eine Jacke über die Schultern

d. Er *überwarf* sich wegen einer Bagatelle mit seinem Nachbarn.

前置詞句による直接の言い換えは不可 : *Er warf wegen einer Bagatelle mit seinem Nachbarn über sich

e. Ich *bringe* die Tablette nicht ohne Wasser *hinter*.

hinter は副詞的 : Ich bringe die Tablette nicht ohne Wasser hinter die Kehle.

f. Er *hinterbrachte* ihr sofort meine kritische Bemerkung.

前置詞句による直接の言い換えは不可 : *Er brachte ihr sofort hinter meine kritische Bemerkung.

以上のことから, 少なくとも一部のタイプ B 接頭辞 (*unter-*, *über-*, *hinter-*) による動詞派生には, 「前置詞抱合」(Olsen 1997a: 11) による自動詞からの他動詞化だけでなく, 基盤語の意味の抽象的ないし比喩的な拡張という働きを認めるのがやはり妥当だろう。

こうした抽象的ないし比喩的な拡張には, 接頭辞がアクセントを持たず, したがってそれが担い得る空間的・時間的な意味が弱まること, 理論的な根拠の 1 つとして考

⁴⁰ 対応する前置詞句による間接的な言い換えはできる (藤縄康弘先生の指摘)。例えば (24)'b) には, Mein Onkel gräbt durch vieles Rauchen den Boden unter seiner Gesundheit という言い換えが可能である。

えられる。⁴¹ (25) に示すように、例えば Curme (1974: 327) は実際にそのような見解である。

(25) This shifting of the accent upon the verb may result in intensifying the verbal force of the new compound or the weakening of the distinctly local force of the prefix by the weakening of its accent, which latter result often facilitates the use of the compound in a figurative sense. (Curme 1974: 327)

桜井 (2001: 317) も、(25) とほぼ同趣旨の指摘をしているが（「分離する場合は前つづりの意味が強調される結果、それらの本来の意味が強く働き、保持される。これに反し、非分離の場合は前つづりの意味は弱められ、比喩的になるのを原則とする」）、加えて「um はその逆になることがしばしばである」とも述べている。

他の理論的な根拠としては、非分離である方が構成性が弱くなりやすいということが考えられる。これに関しては、例えば池上 (1980: 288) の次の論述が参考になる。

(26) 一般に構成要素となる意義素が一对一の関係で語彙素に実現される場合に較べると、それらが一つの複合的意義素に融合して全体として一個の語彙素に表現される場合は個々の構成要素である意義素に対するわれわれの意識は弱くなる。そうすると人間のゲシュタルト的知覚の傾向として複合的なまとまり全体に構成部分の総和とは等しくない価値を与えるということが起こる。(池上 1980: 288)

本稿は意義素論を採用するわけではないが、非分離の方が、構成要素たる形態素それぞれの意味が弱くなって、全体として構成的な意味を超えて、抽象的ないし比喩的な意味を実現するということは一般論として妥当に思える。

なお、当該事例に関して橋本 (1986: 332f.) は、例えば *übersetzen* 「翻訳する」を例に、副詞的な *über-* が非分離である場合は比喩的といった説明をしているが、⁴² 「副詞的」という用語をここで使う必要があるのかには疑問の余地がある。この種の接頭辞は確かに非前置詞的であるが、だからといって副詞的とはいえないのではないだろうか。

⁴¹ 本稿は「理論的(な)根拠」という表現を「経験的(な)根拠」、つまり実際に観察できるという意味での根拠と区別して使う。

⁴² 他には高橋 (2003) も、ある種の動詞接頭辞を副詞的と捉える提案をしている。

1.3.3.2 競合する場合

1.3.3.1 で概観したような語義の違いが認め難い場合には、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合が生じることになる。先行研究では、主に *durch-* に関して (27) (28) (30), しかし時には *über-* にも (29), しばしばそうした競合が指摘されてきた。⁴³

(27) But the distinction in meaning is often barely noticeable, e.g.:

Er <i>ritt</i> durch den Wald <i>durch</i>	<i>He crossed the forest on horseback</i>
Er <i>durchritt</i> den Wald	<i>He rode through the forest</i>
Er <i>schnitt</i> das Brot <i>durch</i>	<i>He cut the loaf in two</i>
Der Fluss <i>durchschneidet</i> die Ebene	<i>The river cuts through the plain</i>

(Durrell ²2003: 115)

(28) Der Maurer *bohrt* die Wand *durch*. [その左官はその壁に穴を開ける]

Der Maurer *durchbohrt* die Wand. [同上]

(Herbig/Buscha 2017: 202)

(29) Die Familie *siedelt* nach Deutschland *über*. [その家族はドイツに移り住む]

Die Familie *übersiedelt* nach Deutschland. [同上]

(Herbig/Buscha 2017: 201)

(30) Eine nahe Berührung zwischen den festen und den trennbaren Verbindungen findet dann statt, wenn ein Obj. zugleich als abhängig von dem Verb an sich und von *d[urch]* gedacht werden kann. So stehen z.B. nebeneinander *durchschnéiden* – *dürchschneiden*, entspr[echend] *durchhauen*, *-zählen*, *-wärmen*. Auch Verbindungen von intr[ansitiven] Verben berühren sich, z.B. *durchgéhen* – *dürchgehen*, entspr[echend] *durchdenken*. Indem die leise Verschiedenheit der Bed[eutung] nicht mehr festgehalten wird (vgl. z.B. *wenn Sie sie vorher noch ein wenig durchgedacht haben* Le[ssing]), entsteht Unsicherheit des Sprachgefühls. So kommt es, daß recht häufig die trennbare Verbindung aus stilistischen, rhythmischen Gründen

⁴³ 橋本 (1986: 324ff.) は、競合する場合の「感じ方の違い」も、前置詞的 vs. 副詞的に還元できるという見解であるが、論拠が明確でないので取り上げないこととする。

angewendet wird, wo die feste Zus[ammensetzung] grammatisch richtiger wäre, vgl. *er fliegt die Schrift d[urch] Schi[l]ler*, *die Sonne hat uns durchgeglüht Goe[the]*[...] (Paul ¹⁰2002: 237)

非分離動詞と分離動詞で接近が生じるのは、目的語が動詞自体に依存しているとも、*durch* に依存しているとも考えられる場合である。例えば、*durchschnéiden* – *dúrchschneiden* [2 つに切り分ける] の場合であり、同様のことは *durchhauen* [2 つに断ち切る]、*durchzählen* [数え切る]、*durchwärmen* [暖め切る] にも当てはまる。自動詞と結びつく場合でも意味が接近する場合がある。例えば *durchgéhén* – *dúrchgehen* [通り抜ける] の場合であり、同様のことは *durchdenken* [考え抜く、熟考する] にも当てはまる。意味のわずかな差異がもはや保持されないことによって（例えば次を参照：「あなたがそれを前もって少しでも熟考していたなら *wenn Sie sie vorher noch ein wenig durchgedacht haben*」, レッシング), 語感の不安定さが生じる。そうして、非分離動詞が文法的により正しいような箇所では、文体的、音韻的な要因から、分離動詞が用いられることがかなり頻繁に生じる。次を参照：「彼はその文書にざっと目を通した *er fliegt die Schrift durch*」(シラー), 「太陽が私たちが灼熱させた *die Sonne hat uns durchgeglüht*」(ゲーテ) [...]

競合における微妙な意味的差異、つまり語義には関わらない意味の差の指摘に関しては、次の 2. 「先行研究の検討」で詳しく論じるので、ここでは、先行研究において意味の差が認め難い、もしくは意味の差がほとんど無いとして挙げられている例の紹介に留める。

1.4 章末まとめ、本稿の構成

本章では、まず 1.1 「問題の所在」で、本稿が、なぜ現代ドイツ語においては接頭辞動詞と不変化詞動詞が数多くの場合で競合しているのかという問題意識のもと、「接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合に関して少なからぬ先行研究が指摘する多かれ少なかれ規則的な内容的差異が、実際にはどの程度認められるのかを、実例の観察に基づく事例研究を通じて検討する」ことを述べた。

次に 1.2 「動詞前綴りの分類」で、動詞前綴りを 4 タイプに分けて先行研究における分類を整理すると共に、本稿では中立的な 4 分類 (=タイプ A 接頭辞動詞, タイプ

B 接頭辞動詞，タイプ C1 不変化詞動詞，タイプ C2 不変化詞動詞）を用いる旨を述べ、それから接頭辞（動詞）と不変化詞（動詞）というカテゴリーの規定と説明を行った。

最後に 1.3 「接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合言説」で、本稿における競合の定義を行なった上で（1.3.1 「競合」の定義），1.2 での 4 分類に基づく場合分けのもと、先行研究における当該動詞間の競合の言説を概観した（1.3.2 「タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞」，1.3.3 「タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞」）。

1 章を終えるにあたって、本稿の以降の章構成について示しておく。2. 「先行研究の検討」では、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合について、その存在を指摘したり考慮したりするだけに留まらずに、その存在目的に関わる論述を含む文献（＝規則的内容的差異を指摘している文献）を取り上げて論じる。3. 「事例研究に向けて」では、2 章で明らかになった検討課題に取り組む上で、どのような基準を立て実例を観察するかを主に論じる。4 章と 5 章は、事例研究の実践であり、6 章はその結果のまとめ、および本研究の総括である。

2. 先行研究の見解

本章では、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合に関して、先行研究がどのような規則的内容的差異を認めてきたかを論じる。その際、先行研究の実態に合わせて、タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の差異 (2.1)、タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞の差異 (2.2)、接頭辞動詞一般と不変化詞動詞一般の差異 (2.3) とに分けて論じる。

2.1 タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞

当該競合の存在自体は、1.3.2「タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞」で概観したように、多くの文献で考慮されているが、当該競合にどのような規則的内容的差異があるかまで述べている文献は稀である。そのような中 Erben (¹¹1972: 73) は、開始相 (inchoative/inceptive)⁴⁴ のタイプ A 接頭辞 (動詞) およびタイプ C2 不変化詞 (動詞) について述べる際に、ある程度踏み込んだ考察を行なっている。

(1) Partikeln wie *er-* und *ent-* (< *en* < *in*): *er-blühen*, *ent-brennen*, *-schlafen*. *er-*, *ent-stehen*; vor allem aber *an-*, *auf-*, *ein-*, ferner *los-*: *an-brennen*, *-fahren* (Wagen), *-laufen*, *-segeln* (die Segelsaison eröffnen); *-bohren*; *auf-blühen*, *-dämmern*, *-stehen*; *ein-schlafen*; *los-gehen*, *-rennen*, *-schwimmen*, welche nur eine lose Bindung mit dem Verbum eingehen und weniger das punktuelle Einsetzen eines Vorgangs als die Phase des Anlaufens, Ingang-kommnes oder -bringens bezeichnen. (Erben ¹¹1972: 73; 註は省略)

er- や *ent-* (< *en* < *in*) といった前綴り [=ここでは、本稿における接頭辞] [も開始を表す]: *er-blühen* 「咲き始める」, *ent-brennen* 「燃え始める」, *-schlafen* 「眠りに落ちる」。 *er-*, *ent-stehen* 「生じる」; とりわけしかし, *an-*, *auf-*, *ein-* さらには *los-* といった [不変化詞が開始を表す]: *an-brennen* 「燃え始める」, *an-fahren* (車が) 「走り始める」, *-laufen* 「走り始める」, *-segeln* 「帆走しはじめる」 (ヨッ

⁴⁴ Smith (²1997: 49) によれば, *inceptive* (起動相) と *inchoative* は, 出来事 (event) の開始を表す前者と, 状態 (state) の成立を表す後者とで, 厳密には区別される。

トの季節を開幕する) ; -bohren 「穿鑿し始める」 ; auf-blühen 「咲き始める」 , -dämmern 「明るくなり始める」 , -stehen 「起き上がる」 ; ein-schlafen 「寝入る」 ; los-gehen 「歩き出す」 , los-rennen 「走り出す」 , los-schwimmen 「泳ぎ出す」 , これら Partikel [=ここでは、本稿における不変化詞] は、[基盤] 動詞との結びつきが緩く、ある過程の瞬間的な開始よりは、起動段階 [=始まるどころだということ] を表す。

(1) では、開始相での競合において、分離可か非分離かの差に起因して、タイプ A 接頭辞動詞は瞬間的な開始、タイプ C2 不変化詞動詞は非瞬間的開始の表現であることが示唆されている。

なお、Erben (¹¹1972: 71f.) は、次節 (2.2) で取り上げるように、タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞についても同趣旨の指摘をしており、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合一般に対し、ある程度一貫した見解を持っていたことが窺われる。⁴⁵

2.2 タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞

接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合の中では、タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞の競合 (=分離・非分離の前綴り動詞の競合) が、最も研究されているが、その際指摘されてきた両者の構造的な意味の違いは、(i) 結果強調か過程強調か、(ii) 抽象的ないし比喩的か具体的ないし原義的か、の2つに大別できる。したがって本節では以下この2点について項を分けて論じる。

⁴⁵ 特に後述のタイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞の競合の言説に鑑みると、タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合には、他にも理論的に可能な存在目的は考えられる。例えば (タイプ A) 接頭辞動詞の方が抽象的ないし比喩的であり、(タイプ C2) 不変化詞動詞の方が具体的ないし原義的といった観点である。この観点の理論的な根拠は第1に接頭辞動詞よりも不変化詞動詞の方が形態的のみならず意味的にも構成性が高いと考えられること、第2に接頭辞よりも不変化詞の方が固有の意味が認め易いこと (Weisgerber ³1962: 194) にある。実際に個別事例に関してはこうした見解の研究もある。例えば auf- と er- の競合を論じた Benoist (²2011: 148) は、両者が開くことを表す場合に関してそのような見解である。しかし Benoist (²2011) にしても、両前綴りの他の意味機能における競合に関してはむしろ反対の指摘をしていることから分かるように、普遍性を指向しているわけではない。

2.2.1 結果強調 vs. 過程強調

2.2.1.1 Streitberg (1895) 説以後

当該競合に関しては、タイプ B 接頭辞動詞において結果が強調され、それと同形のタイプ C1 不変化詞動詞において過程ないし活動（以下「過程」とのみ表記）が強調されるとする先行研究が多数ある。この説は少なくとも Streitberg (1895) の (2) の論述まで遡れる。⁴⁶ 当該箇所は、内容が興味深いだけでなく、その後の言説史を理解する上でも重要と思われるので少し長めに引用する。

(2) Ich kenne eine einzige durativ-perfektive Kategorie im Deutschen, auf die mich vor sechs bis sieben Jahren Prof. Leskien aufmerksam gemacht hat: hier beruht die Differenz der Aktionsart auf einem formalen Unterschied. Es handelt sich dabei um die Zusammensetzung mit Präpositionen, die bald trennbar bald untrennbar sein können. Niemand, der nur einigermaßen gewohnt ist, auf derlei Unterschiede zu achten, wird die Verschiedenheit der Aktionsarten in den drei Sätzen verkennen:

- 1) *Der Tischler bohrt durch das Brett.*
- 2) *Der Tischler bohrt das Brett durch.*
- 3) *Der Soldat durchbohrt den Feind.*

Das Verbum des ersten Satzes ist einfach imperfektiv: der Tischler führt die Handlung des Bohrens inbezug auf das Brett aus, gleichviel ob er zu einem Abschluss kommt oder nicht.

Im zweiten Satz ist das ans Ende gestellte *durch* die notwendige Ergänzung zum Verbum *bohrt*. Während *bohrt* nichts weiter aussagt, als dass der Tischler die Handlung des Bohrens vornimmt, bringt das nachklappende *durch* eine nähere Bestimmung: es bezeichnet, dass die Handlung des Bohrens zu einem gewissen Abschluss gebracht wird. Er *bohrt* – *durch* ist demnach durativ-perfektiv, umfasst gleichzeitig den Hinweis auf die Dauer und auf den Abschluss der Handlung.

Man wird dies am besten empfinden, wenn man versucht das trennbare Kompositum in den dritten Satz einzuführen: wer möchte sagen *der Soldat bohrt den Feind durch*? Ein solcher Satz würde geradezu komisch klingen, weil es nicht darauf ankommt,

⁴⁶ Streitberg (1895) のことは、筆者は Dewell (2011: 288, 307) がきっかけで知ったのだが、Dewell (2011) は、Wilhelm Streitberg (1864-1925) を Karl Brugmann (1849-1919) と取り違えている。

dass bis zum Moment der Vollendung eine bestimmte Zeit verstrichen ist, sondern weil nur der Moment der Vollendung ins Bewusstsein gerufen werden soll.

Die Gegenprobe auf die Richtigkeit des Exempels ist leicht zu machen. Man übertrage die Konstruktion des dritten Satzes auf den zweiten: *der Tischler durchbohrt das Brett*. Auch das klingt uns lächerlich. Wir können uns den Moment der Vollendung in diesem Falle nicht ohne die vorausgegangene Thätigkeit, deren endlichen Abschluss er bildet, vorstellen. Wohl aber werden wir anstandslos sagen dürfen: *die Kugel durchbohrt das Brett*, weil hier der Natur der Dinge nach von der Betonung einer zu Ende geführten kontinuierlichen Thätigkeit, von einem Gegensatz zwischen Dauer und Abschluss keine Rede sein kann. (Streitberg 1895: 81)

私がドイツ語における持続的完了相カテゴリーとして知っているのは 1 つだけである。6 年か 7 年前に Leskien 教授がそのカテゴリーに注意を促してくれたのである。⁴⁷ そこにおいては、動作相の違いが形式の違いに依拠している。そのカテゴリーとは、ある時は分離でき、ある時は非分離でありうる前置詞 [=不変化詞] との合成語である。いくらかでもこの種の区別に気をつけることに慣れている人であれば、次の 3 つの文における動作相の違いを見誤らないであろう。

- 1) Der Tischler bohrt durch das Brett. [その指物師はその板に穴を開けている。]
- 2) Der Tischler bohrt das Brett durch. [その指物師はその板を {掘り貫く／掘り貫いているところだ}]⁴⁸
- 3) Der Soldat durchbohrt den Feind. [その兵士はその敵を貫く。]

第 1 文の動詞は単に不完了相である：その指物師は掘削という行為を板に関して遂行しているのであって、完遂に至るかどうかは関係ない。

第 2 文では末尾に置かれた *durch* が動詞 *bohrt* の必須の補足成分である。*bohrt* が、その指物師が掘削という行為をしている以上のことは表していないのに対し、後続の *durch* がより詳しい規定をもたらす：*durch* は、掘削という行為が特定の完

⁴⁷ Leiss (1992: 54f.) が指摘しているように、Streitberg は Streitberg (1891: 70) においても August Leskien からの影響を註で認めている。

⁴⁸ *der Tischler bohrt das Brett durch*. については Streiberg (1900: 60) では次のように解説されている。Wenn ich sage *der Tischler bohrt das Brett durch*, so fällt allerdings die Handlung des Bohrens in die Gegenwart. der (sic!) Augenblick des Abschlusses, der Moment, wo der Bohrer durchdringt, wird aber erst erfolgen, er schwebt dem Bohrenden nur als Ziel vor Augen, er ist noch nicht erreicht, wenn der Sprechende seine Äußerung thut. (Streitberg 1900: 60; 原文隔字は下線で代替) *der Tischler bohrt das Brett durch* と私が言う場合はもっとも、掘削という行為は現在にあたる。完遂の瞬間、すなわち掘り手が貫通する瞬間はこれから起こりそうなのであり、その瞬間は、掘っている人にはただ目標として眼前にあり、話し手が発話する際には、まだ達成されていない。

結にもたらされることを表す。Er bohrt – durch は従って持続的完了相であり，持続ならびに行為の完了を同時に指し示す。

このことは，第 3 文に分離可能合成語 [=分離動詞] を入れようとすればよく分かる。der Soldat bohrt den Feind durch [その兵士はその敵を刺して行って貫く] と言いたい人はいるだろうか？ そんな文はおかしいであろう。なぜなら，完遂の瞬間まで一定の時間が過ぎたことは問題でなく，完遂の瞬間だけが意識に呼び起こされることが問題だからである。

別の仕方でも文例の正しさは簡単にテストできる。第 3 文の構造を第 2 文に移してみればよい：der Tischler durchbohrt das Brett. [その指物師はその板を貫く] この文もおかしいと感じられる。この場合の完遂の瞬間は，先行する活動があって，それが最終的にその完遂の瞬間に至るといようにしかイメージできない。しかしおそらく次のように言うことは差し支えないであろう：die Kugel durchbohrt das Brett [その弾がその板を貫く]。なぜなら，ここでは事柄の性質上，終結へと続く持続的な活動の強調，すなわち持続と完結の対立は問題になり得ないからである。[原文の膈字体は訳文では下線で代替]

(2) で言われている「持続的完了相カテゴリー (durativ-perfektive Kategorie)」は，Engelberg (2000: 63) も述べているように，後述する Vendler (1967 [1957]) における過程を含意する有界表現である Accomplishment カテゴリーに対応している。完了相 (Perfektiv) という用語は，例えば Grimm (1891: LIIf.) や Behaghel (1924: 112) といった先行研究において，Vendler (1967 [1957]) における過程を含意しない有界表現である Achievement 表現の意味で用いられているが，⁴⁹ Streitberg は，

⁴⁹ 例えば Grimm (1824 [1974]: LIIf.) は，次に引用するように (引用に際し表記は適宜変更し，難読箇所は Streitberg (1891: 77) における当該引用を参照する)，現在指示が問題なく可能か，という基準でドイツ語においても完了相と不完了相を分けられると述べている。詳しくは，3.3.1.2.2 「現在時制における無標のエピソード用法解釈」で述べるが，この基準だと，確かに Achievement 表現のみが完了相ということになる。Es ist nicht unmöglich Spuren eines die slavische Sprache so durchdringenden Unterschiedes auch in der deutschen auszufinden. Composita mit -ver, -be, -hin, -durch u. (wie im Slavischen mit -по, -до, -на etc.) böten etwa Perfectiva dar, unzusammengesetzte dagegen Imperfectiva. Kopitar lehrt S. 310. daß auf die Frage: was machst Du? thust Du? nicht mit dem Präsens eines Perfectivums geantwortet werden könne. Danach prüfe man auch deutsche Verba. Wirklich ist uns fühlbar, daß von einem Sterbenden, Reisenden, Lesenden, Bleibenden nicht gesagt werden dürfe: er verstirbt, verreist, durchliest, verbleibt, sondern nur: er stirbt, reist, liest, bleibt. Wogegen es im Prät. unbedenklich heißt: er verstarb, verreiste, verblieb, durchlas; verstarb aber und starb unterscheiden sich wie im Serbischen umrije und mrije, d. h. man muß sagen: er siechte und starb gleichsam sein Leben lang; er verstarb gestern an seiner Krankheit. Und wiederum spielt das deutsche Präsens in die Bedeutung des Futurums über: ich verreise morgen u. (Grimm 1824 [1974]: LIIf.) スラブ語にこれほどまでに行き渡った 1 つの区別の痕跡をドイツ語

Streitberg (1895) に先立つ Streitberg (1891: 71f.) において, Perfektiva (完了相動詞) に実は *momentane Verben* (瞬間的な動詞) [=Achievement] と *durative-perfektive Verben* (持続的完了相動詞) [=Accomplishment] の 2 つがあることを指摘しているのである。⁵⁰

つまり (2) は, 例えば *das Brett durchbohren* は Accomplishment 表現であるのに対し, *das Brett durchbohren* は Achievement 表現という趣旨の指摘と理解できる。

Streitberg (1895: 81) は, *durchbohren* / *durchbohren* の例しか挙げていないが, 少なくとも *durch-* 接頭辞動詞と *durch-* 不変化詞動詞の (複数の) 競合が念頭にあったと考えられるし, (2) の冒頭の論じ方 (=特に, 「カテゴリー」という言い方をしていること) に鑑みるに, タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化詞動詞の競合一般が念頭にあったという可能性も十分ある。

実際, Streitberg (1895) 以後の文献においては, *durch-* 接頭辞動詞と *durch-* 不変化詞動詞の競合に限定して, Achievement vs. Accomplishment という対立, ないしより弱い形で, 結果強調 vs. 過程強調という対立を認めるものもあれば, タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化詞動詞の競合一般に対して, そうした対立を認めるものもある。

まず, *durch-* 接頭辞動詞と *durch-* 不変化詞動詞の競合に限定して当該対立を認める文献として以下 3 例取り上げる。第 1 に Dunger (⁸1929: 81) は, 次の記述から見て取れるように, タイプ B の *durch-* を持つ動詞は複数の場合において完了相的であ

においても見出すことは不可能ではない。-ver, -be, -hin, -durch との合成語 (スラブ語における -no, -do, -na などの場合のように) は例えば完了相動詞であろうし, 反対に非合成語は完了相動詞であろう。Kopitar は 310 ページで, 君は何をしている? という疑問に対して完了相動詞の現在形では答えられ得ない, と教えている。これに倣ってドイツ語の動詞もテストされたい。死につつある者, 旅行者, 読書している者, 留まっている者について, 彼は死ぬ [er verstirbt], 旅行に行く [verreist], 読み通す [durchliest], 留まる [verbleibt], とは言われえず, 彼は死につつある [er stirbt], 旅行している [reist], 読んでいる [liest], 留まっている [bleibt], としか言われ得ないことが実際に感じられる。それに対し過去形で次のように問題なく言われ得る。彼は死んだ [verstarb], 旅行に行った [verreiste], 留まった [verblieb], 読み通した [durchlas], と。死んだ [verstarb] と死んだ/死につつあった [starb] はしかし, セルビア語の *umrije* と *mrije* と同様に区別される。すなわち, 彼は病苦に苦しんでおり, いわば一生の間死につつあった [starb]; 彼は昨日病気で死んだ [verstarb], と言わなくてはならないのである。そしてこれまた同様に, ドイツ語の現在形は未来形の意味にも変わっていくのである: 私は明日旅行に行く [ich verreise morgen], など。

⁵⁰ この指摘は, ドイツ語に関してしばしば不完了相 (=非有界) が継続相 (durativ) と呼ばれ, 「時間的に続く長さが含まれている」(浜崎/野入/八本木 2008: 45) とされるのに対し, 完了相 (=有界) が非継続相 (nicht-durativ) と呼ばれ, 「時間的に続く長さが含まれていない」(同上) と語られることに鑑みると, 重要な指摘と言える。完了相は必ずしも「時間的に続く長さが含まれていない」わけではなく, したがってそれを「非継続相」と呼ぶことは適切ではない。不完了相 (=非有界) という意味で durativ を, 完了相 (=有界) という意味で nicht-durativ という用語を使う際には, 例えば高橋 (1971: 342) のように, 「永続」および「非永続」という訳語を当てる方が適切と考えられる。

るのに対し、タイプ C1 の *durch-* を持つ動詞は複数の場合において持続的完了相的であるという見解であり、さらにそれを規範としても打ち出している。⁵¹

(3) 52) »Im großen und ganzen ist das geist- und gedankentiefe Buch jedem denkenden Leser, der das Leben durchkostet hat, nur bestens zu empfehlen.« (Aus einer Buchbesprechung in einer Zeitung) | [Verbesserung:] 52) Im großen und ganzen ist das geistvolle und gedankentiefe Buch jedem denkenden Leser, der das Leben durchgekostet hat, nur bestens zu empfehlen.

Nicht *durchkostet*, sondern *durchgekostet* muß es heißen. Denn es bedeutet hier: alles, was das Leben an Leid und Freud, an Widerwärtigkeiten und Erfahrungen jeder Art bringt, der Reihe nach gründlich kennen lernen, »schmecken«, »auskosten«. *Durchkösten* mit unbetontem *durch*, wird, wenn die Form überhaupt üblich ist, nur so viel sein wie: flüchtig kosten, hie und das nippen am Leben. Einen ähnlichen Bedeutungsunterschied finden wir auch bei anderen Zusammensetzungen mit *durch*. (Dunger ⁸1929: 81)⁵²

52) 「概ね、精神的深みと思想的深みのあるこの本は、人生を味わった、あらゆる思索する読者には、唯々心よりお勧めである」(ある新聞の書評より) | [修正:] 52) 概ね、精神に富んだ思想的深みのあるこの本は、人生を味わい尽くした、あらゆる思索する読者には、唯々心よりお勧めである」

durchkostet ではなく *durchgekostet* と言わなくてはならない。というのもここで意味されているのは、人生がもたらす酸いも甘いも、不快な事柄も経験も、順々に徹底的に知ること、「味わう」こと、「十分に味わう」こと、だからである。*durch* に強勢のない *durchkösten* は、そもそもこの形が使われるとすれば、さっと味わう、人生のあれこれを少しだけ味わう、くらいの意味でしかない。同じよう

⁵¹ Dunger (⁸1929) のことも筆者は Dewell (2011) がきっかけで知った。なお、Dewell (2011: 308) が引用しているのは本稿が参照する版よりも古い 1906 年の版であるが、引用部の内容は本稿が参照する 1929 年の版とほぼ同一である。

⁵² この文は次のように続く。Man vergleiche: *durchgebacknes Brot und mit Rosinen durchbackenes Brot, durchgeflochtenes Haar und mit Lorbeer durchflochtenes Haar, ein durchgeblättert Buch und ein durchblättert Buch, er hat die ganze Stadt durchgebettelt (d. h. von Haus zu Haus) und er hat das Land durchbettelt, durchgelebte Tage und durchlebte Tage, durchgeackert und durchhackert, durchgezählt und durchzählt*. ここで挙げられている例のうち、*durchblättern*, *durchbetteln*, *durchleben*, *durchhackern*, *durchzählen* に関しては、*durchkosten* と並行性が認められるかもしれないが、*durchbacken* (十分焼く、具を入れて焼く) と *durchflechten* (通して結ぶ、編み合わせる) において関与的なのは、指摘されているような過程性の有無ではなく、むしろ語義の違いではないかと考えられる。

な意味の差は、他の *durch-* 動詞でも見出せる。[原文の膈字体は訳文では下線で代替]

第 2 に Weinrich (1993: 1069) は、(4) に引用するように、タイプ B 接頭辞の *durch-* に対して「行程の終了」を前面に出すと述べ、タイプ C1 不変化詞の *durch-* に対して「行程自体を強調する」と述べているが、これは、Dewell (2011: 307) もそう解釈しているように、*durch-* 接頭辞動詞と *durch-* 不変化詞動詞の競合において結果強調 vs. 過程強調という対立が見られることを示唆する指摘である。

(4) Das Präfix *durch-* kann auch über die Vollständigkeit einer in der Grundform bezeichneten Handlungsstrecke instruieren; dabei rücken die mit *durch* präfigierten Verben eher das Ende der Strecke in den Vordergrund, während die vergleichbaren zweiteiligen Verben eher die Strecke selber betonen. (Weinrich 1993: 1069; 参照先情報は省略)

「接頭辞 *durch-* は、基礎形 [基盤動詞] に表示された行為が完全に遂行されることを示すこともある。その場合、*durch-* を添加された動詞 [= *durch-* 接頭辞動詞] は、その行程の終了を前面に出すのに対して、対応する 2 成分からなる動詞 [= *durch-* 不変化詞動詞] はむしろその行程自体を強調する。」(脇阪 (編訳) 2003: 1078)

第 3 に Duden (³2018: 294) は、(5) に引用するように *durch-* の項で *durch-* 接頭辞動詞と *durch-* 不変化詞動詞の競合において結果強調 vs. 過程強調という対立があるという趣旨の記述をしている。

(5) wenn betont, dann trennbar, wenn unbetont, dann untrennbar; oft bestehen beide Möglichkeiten nebeneinander, wobei die trennbaren Verben stärker die Tätigkeit o. Ä. der Person hervorheben, während die untrennbaren stärker die Tätigkeit am Objekt, das Ergebnis betonen, z. B. ich bohre das Brett durch (= ich bin bohrend tätig), ich durchbohre das Brett (= das Brett erhält durch mein Bohren ein Loch) (Duden ³2018: 294)

強勢が置かれると分離し、置かれないと分離しない。どちらの可能性も並存することが多い。その際、分離可能動詞 [= 不変化詞動詞] は、人物の活動等をより

強く際立たせ、他方非分離動詞 [=接頭辞動詞] は対象への作用、すなわち結果を強調する。例えば「私はその板に穴を開けている (ich bohre das Brett durch)」 (=掘る活動に従事している), 「私はその板を掘り通す (ich durchbohre das Brett)」 (=その板は私の掘削によって穴が開く)

次に、タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化詞動詞の競合一般に対して *Achievement vs. Accomplishment* という対立、ないしより弱い形で、結果強調 vs. 過程強調という対立を認めている文献を 2 例見る。第 1 に Curme (²1974: 328) は次のように述べている。

(6) There is often only a slight shade of difference between separable and inseparable verbs. The trans. inseparable may have perfective (denoting the outcome or result of an action) force, while the trans. separable compound has both durative (denoting duration) and perfective force: **Der Soldat durchbohrt den Feind** *The soldier is dispatching the enemy*, but **Der Tischler bohrt das Brett durch** *the joiner is boring a hole thru the board*. The first sentence represents only the final point in the action, while the second shows the action as continuing, at the same time, however, intimating that the hoped-for result will be attained. Sometimes there is little or no difference between the trans. inseparable and trans. separable. (Curme ²1974: 328; 強勢記号は省略)

(6) は、*durchbohren / durchbohren* の例を用いている点で (2) と同じである。(2) と異なる点としては、他動詞に限定していること、ならびにタイプ B 接頭辞動詞について完了相とは言い切らず「完了相的な力を持ち得る」という慎重な表現をしていること、それから完了相的 vs 持続的完了相的という対立が見られない場合もあると断っていることが挙げられる。

第 2 に Erben (¹¹1972) は、(7) に引用するように、タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化詞動詞の競合一般に対し、前者の方が後者よりも結果的な表現である旨を述べ、そのことは当該競合における *durch-* 動詞に関して明瞭であると述べている。また、競合例に関する論述からは、(タイプ B の) *durch-* を持つ接頭辞動詞は *Achievement* 表現であり、(タイプ C1 の) *durch-* を持つ不変化詞動詞は

Accomplishment 表現であるという見解が読み取れる。⁵³

(7) in der Vollendungsform aber durch das [...] *ge* abgetrennt wird: *durch-ge-schaut*. Daß dieses perfektivierende *ge* hier erforderlich ist, erweist den relativ geringen Grad der Perfektivierung, der durch diese trennbaren Partikeln erreicht wird. Diese unfesten Zusammensetzungen bezeichnen bestenfalls die Phase der Vollendung, sind also nicht ‚Resultativa‘, sondern ‚Konklusiva‘. Am klarsten zeigen das die Zusammensetzungen mit *durch*, wo zahlreiche Bildungen zum gleichen Verb, doch mit verschiedener Aktionsart nebeneinander stehen: *Er durchsägte das Brett* (Blick auf das Ergebnis, den Punkt der Bewältigung des Objekts), *sägte das Brett durch* (Blick auf Ablauf und Vollendung der Handlung). *Er durchschaute es, schaute es durch; durchdachte es, dachte es durch*. (Erben ¹¹1972: 71f.; 註は省略し, 記号の表記を一部変更)

[不変化詞動詞は] 過去分詞ではしかし, *ge* によって分かれたる: *durch-ge-schaut* [見通した]。完了化のこの *ge* がここで必要であることが, 前綴り [=ここでは, 不変化詞] によって達成される完了化の度合いが相対的に低いことを証している。この [不変化詞動詞] というのは, せいぜい完結の段階を表すだけであり, したがって, 結果相ではなく進止相⁵⁴ である。そのことを最も明瞭に示すのが, *durch-* 動詞である。*durch-* 動詞には, 基盤動詞は同じで動作相が異なるペアが数多くある。*Er durchsägte das Brett* [彼はその板をのこぎりで切断する] (結果, すなわち対象に方がつく瞬間に目を向ける), *sägte das Brett durch* [その板をのこで引いて切断する] (過程と行為の完結に目を向ける) *Er durchschaut es, schaute es durch* [彼はそれを見抜く, それを覗き見る]; *durchdachte es, dachte es durch* [それを検討し切る, じっくり検討する]⁵⁵

⁵³ Erben (¹¹1972: 72) の当該説は, Kühnhold/Wellmann (1973: 323) でも肯定的に引用されているし, 高瀬 (1991) でも支持されている。なお, Benware (1992: 150) は, Erben (¹¹1972: 72) を取り上げて, 当該アスペクト説を Erben 仮説と呼んでいる。

⁵⁴ これは, 高橋 (1971: 348) が *konklusiv* を「進止期」訳していることに依拠した訳語である。参考のために, 高橋 (1971: 351) が「進止期」について述べていることの一部を引用しておく。「活動終結に先立つ段階が強く考慮される。つまり終結前の継続, 経過が特に重要である。継続段階の継続がいわばまだここでも続いている。」(高橋 1971: 351)

⁵⁵ ただし (7) で言われているように, 過去分詞形成における *ge-* の必要性に完了性が低いことの根拠を求めることは, 今日のドイツ語において *ge-* が文法化していることに鑑みて妥当とは言えない。例えば *telefonieren* 「電話で話す」は, 過去分詞で *ge-* を必要としないが, 完了相であるわけではないし, 逆に *schießen* 「撃つ」のような完了相動詞でも, 過去分詞形成においては *ge-* が必要になる。Erben (¹¹1972) は, 完了相化の働きのあった, 文法化以前の *ge-* をイメージしていた可能性がある。

以上, Streitberg (1895) 以後の文献においては, 一方で *durch-* 接頭辞動詞と *durch-* 不変化詞動詞の競合に限定して, *Achivement vs. Accomplishment* という対立, ないし結果強調 vs. 過程強調という対立を認めるものもあれば, 他方でタイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化詞動詞の競合一般を指向して, そうした対立を認めるものもあることを概観した。

2.2.1.2 その他の説

先行研究には, 前項で見た多数の文献とはむしろ反対に, 特に *durch-* 接頭辞動詞において過程が強調され, 競合する *durch-* 不変化詞動詞において結果が強調されるという趣旨を述べる文献もないわけではない。こうした主張には, 音韻的な強調と意味的な強調の間のイコニック的相関 (= 前綴りに強勢: 前綴りの意味が強調される; 基盤動詞に強勢: 基盤動詞の意味が強調される) が理論的根拠として想定できるが, それらの文献の実際の主張には, 以下論じるように, 内的な矛盾ないし問題が含まれているようにも思われる。

当該説は, 少なくとも Helbig/Buscha (⁸1984: 224) の次の記述まで遡れる。⁵⁶ なお, 同様の記述は Hallwass (1991: 72) にも見出せる。⁵⁷

(8) Bei verschiedenen Verben mit konkreter (lokaler) Bedeutung ist *durch-* sowohl betont-trennbar als auch unbetont-untrennbar möglich. Zwischen beiden Varianten besteht ein aktionaler Unterschied: Das Verb mit betontem, trennbarem erstem Teil drückt das bloße Resultat der Handlung aus, das Verb mit unbetontem, untrennbarem erstem Teil hebt dagegen die Art und Weise der Handlung hervor:

Er hat die Platte *durchgebohrt*. (d.h., das Loch ist fertig gebohrt)

Er hat die Platte *durchbohrt*. (und nicht *durchstochen* oder *durchschlagen*)

(Helbig/Buscha ⁸1984: 224)

具体的 (空間的) な意味を持つ様々な動詞においては, *durch-* は強勢を有し分離

⁵⁶ Helbig/Buscha の出版年に注意されたい。同文法書は版によって内容の大きく異なる箇所がある。

⁵⁷ その妥当性についてはこれから論じるが, Dewell (2011: 291: 脚注 22) は, Hallwass (1991: 72) の説 (Helbig/Busch ⁸1984: 224 と同趣旨) を既に次のように批判している。“Things are actually more complicated than that. In a particle verb construction the base verb has more syntactic independence and in that sense its meaning is more prominent. As we have seen, the particle verb constructions actually profile the manner of motion expressed by the base verb more than the prefixed verbs do.”

可能でも、強勢を持たず分離不能でもあり得る。両ヴァリエーションの間には動作相の違いがある：強勢あり・分離可能前綴りを持つ動詞は、行為の単なる結果を表すが、強勢なし・分離不能前綴りを持つ動詞はそれに対し行為の様態を強調する：

Er hat die Platte **durchgebohrt**. (つまり、穴が完全に穿たれている)

Er hat die Platte **durchbohrt**. (刺し通した [durchsto^hchen] のでも叩き通した [durchschl^gen] のでもない)

(8) の問題は、説明部分において「動作相の違いがある」と述べているのに、実際に念頭に置かれているのが、動作相だけには見えないところである。挙げられている第1の例 (Er hat die Platte **durchgebohrt**.) の解説は、動作相の指摘と考えられるが、第2の例 (Er hat die Platte **durchbohren**) の解説は、動作相とは別次元であるように思われる。⁵⁸

Duden 9 (⁷2011: 940) も、タイプ B 接頭辞動詞において過程が強調され、競合するタイプ C1 不変化詞動詞において結果が強調されると説明しているが、他方でそれに先立つ例示の際には、(9) に示すように、不変化詞動詞の **durchbohren** に対して「事情・状況 (Umstand) を強調」するとも述べており、矛盾して見える論述をしている。Umstand が行為の結果に関係し得ることは否定しないが、むしろ普通には、行為の過程に関係すると理解されるからである。

(9) Der Bedeutungsunterschied ist bei manchen Verben so gering, dass die Betonung und damit die Zuweisung zu fester oder unfester Bildung offenbleibt:

ein Brett **durchbohren** (betont den Umstand), ein Brett **durchbohren** (betont die Handlung; entsprechend:) **durchdenken** / **durchdenken**, **durchlüften** / **durchlüften**;
durchscheinen / **durchscheinen**; **durchschwimmen** / **durchschwimmen**;
durchdringen / **durchdringen**

Bei der Betonung des ersten Bestandteils wird das Ergebnis der Verbalhandlung hervorgehoben, bei Betonung des Verbs wird die verbale Bedeutung selbst in Vordergrund gerückt. (Duden 9 ⁷2011: 940: 強勢記号は表記を一部変更)

意味の差がとても小さく、強勢および分離・非分離が定まっていない動詞もある。

⁵⁸ また、挙げられている例文が現在完了形であることの意図も不明である。

[例は訳を省略]

前半部が強調されると動詞で表される行為の結果が際立ち、[基盤]動詞が強調されると動詞の意味が前景化する

なお、先行研究には、タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化詞動詞の競合において、むしろ使用域の差異を認めるものもある。具体的な文献名の言及はないが、Šimečková (1995: 198) によれば、競合する 2 語のうち、タイプ C1 不変化詞動詞の方は口語で、競合するタイプ B 接頭辞動詞の方は文語で典型的に用いられるという趣旨の指摘が存在するという。また、これに関しては Šimečková (1995: 198) でも言及があるが、Eroms (1982) は、タイプ B 接頭辞動詞の方がタイプ C1 不変化詞動詞よりも文体的にも有標であるという見解である。

2.2.1.3 項末まとめ

本項では、タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞の競合の存在目的に関わる先行研究の指摘のうち、より弱い形で代表させて言えば、結果強調 vs. 過程強調という観点の指摘を中心に取上げた。

結果、Streitberg (1895) 以後、多くの文献において当該観点での論述が見られるが、その主張は微妙に異なっていることが分かった。特に、タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞一般をどの程度指向しているかという点、ならびに、どの程度明確なアスペクト上の対立を認めているかという点に関して、文献間で違いのあることが分かった。

また例えば、多くの文献とはむしろ反対に、タイプ B (durch-) 接頭辞動詞に過程強調を、タイプ C1 (durch-) 不変化詞動詞に結果強調を認める文献のあることも見た。なお、当該文献の論述には内的な問題が含まれているように思われることも指摘した。

2.2.2 抽象的・比喩的 vs. 具体的・原義的

接頭辞動詞の比喩性ないし抽象性に関しては、すでに 1.3.3.1 「語義の違いがある場合」で論じたが、それとは異なるレベルにおいて、つまり、同語義下において、接頭辞動詞の抽象性ないし比喩性を記述する文献がある。

例えば Duden (2018: 294) は、(10) に示すように、durch- 接頭辞動詞に対して、durch- 不変化詞動詞との比較をおそらくは念頭に、その比喩性を指摘している。(10)

の *durchbohren* は、本稿の語義の定義によれば (1.3.1), 例えば *die Platte durchbohren* 「板に穴を開ける」と言う時の *durchbohren* と同一語義ということになる (詳しくは 4.1.1.1)。なお, (10) と同様の見解は Helbig/Buscha (2017: 202) にも見られる。

(10) Die untrennbaren Verben werden oft übertragen gebraucht: er hat mich mit Blicken durchbohrt. (Duden ³2018: 294)

非分離の *durch* 動詞は, しばしば比喩的に用いられる。彼は私を視線で貫いた (er hat mich mit Blicken durchbohrt)。

接頭辞動詞が比喩的ないし抽象的な語義を持つ根拠が, 先述のように (1.3.3.1.2) 接頭辞動詞の非分離性に一部でもあるとすれば, 同一語義内においても, つまり接頭辞動詞と不変化詞動詞が競合する場合においても, 接頭辞動詞の方が比喩的ないし抽象的に用いられ易い, という可能性は想定できる。したがって, どの程度関与的なのかはなお問われる必要があるにしても, 競合する場合においてもこの観点を考慮するのが妥当に思われる。

2.3 接頭辞動詞一般と不変化詞動詞一般：総観的 vs. 連続的

接頭辞動詞一般と不変化詞動詞一般の競合に対し, 何らかの規則的な内容的差異を論じている先行研究は極めて少ない。Stiebels/Wunderlich (1994: 960) は, 「[接頭辞と不変化詞] という2つからどちらを選ぶかは, 共時的に見ると, いくらか恣意的である」と述べているが, おそらく多くの文献もまた, そう明言していなくとも, 同様の見解を持っているのではないかと思われる。

そのような中, Dewell (2011) は, すでに 2.2 で見た, タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞の競合に関して指摘されてきた差異を部分的に肯定しつつも, それらは各構造固有の意味へと還元されるとする, 例外的な研究である。Dewell (2011: 16f.) が提起し, その結論 (同書: 312f.) においてほぼそのままの形で肯定される仮説は, 以下の通りである。

(11) – Particle verb constructions consistently prompt us to concentrate our focal

attention on particular parts of a path, most typically on a moving figure or a salient part of a moving figure, and they thus portray the path as a temporal sequence of particular locations (such as the beginning and end). They call for an interpretation in sequential perspectival mode.

- Prefixed verb constructions consistently prompt us to distribute focal attention more evenly over the whole scene and the whole path. They call for an interpretation in synoptic perspectival mode. (Dewell 2011: 16f.)

(11)にある通り、不変化詞動詞構造は、典型的には移動物に着目し、事態をその移動に合わせて連続的に捉えることを促すのに対し、接頭辞動詞構造は、場面ないし経路全体に着目し、事態を総観的に捉えることを促すと Dewell (2011) は主張し、この主張はさらにはタイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞を対象とする Dewell (2015) にも引き継がれていく。⁵⁹ Dewell (2011, 2015) が正しいとすれば、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合は、総観的な事態把握と連続的な事態把握の対立を表現する機能を果たしていることになる。

分離・非分離の前綴り動詞に関する知見を接頭辞動詞と不変化詞動詞一般の問題に敷衍する試みは大変興味深いだが、(11)には十分な裏付けがあるとは言えない。そもそも Dewell (2011: 17ff.) 自身認めているように、(11)は検証が事実上不可能に近い。Dewell (2011, 2015) の主張に反証可能性を持たせるためには、総観的 vs. 連続的を、例えば結果強調 vs. 過程強調と読み替える必要があると考えられる。

2.4 章末まとめ

本章では、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合に関して、先行研究がどのような規則的内容的差異を認めてきたかを、タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞に関する説 (2.1)、タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞に関する説 (2.2)、それから接頭辞動詞一般と不変化詞動詞一般に関する説 (2.3) に分けて論

⁵⁹ (11) では *figure* という用語しか出てこないが、対になるのは参照物という概念である。移動物 (*figure*) に対する参照物は、*ground* と呼ばれるのが一般的であるが、Dewell (2011, 2015) は、後者に対し、*trajector* と対になるはずの *landmark* という用語を一貫して使っている。なお、連続的 vs. 総観的という捉え方は、Dewell (2011) より前に Benware (1992) が分離・非分離の *durch-* 動詞について指摘している。Dewell (2011) は Benware (1992) を参照していないが、(11) の見解は Benware (1992) を敷衍したものに結果的にはなっている。

じた。

先行研究においては第 1 に、規則的な内容的差異がどの範囲の競合で認められるかに関して (12) に示す見解の相違がある。

(12) 規則的な内容的差異が,

- a. durch- 接頭辞動詞と durch- 不変化詞動詞の競合において認められる。
- b. タイプ B 接頭辞を持つ他動詞とタイプ C1 不変化詞を持つ他動詞の競合において認められる。
- c. タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化詞動詞の競合一般において認められる。
- d. 開始を表すタイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合において認められる。
- e. 接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合一般において認められる。

第 2 に、どのような内容的差異が規則的に認められるのかに関しても、先行研究の見解は必ずしも一致していない。動作相ないしアスペクトの差異をあげるものが多いが、その場合でも Achievement 表現 vs. Accomplishment 表現という明確な対立を認めるものもあれば、より弱い形で、結果強調 vs. 過程強調という対立を認めるものもある。また、指摘する文献の数は比較的少ないが、抽象的・比喩的 vs. 具体的・原義的という対立が関与する可能性も十分考えられる。

結論としては、第 1 に過程性と抽象性・比喩性の差異に特に注目して、それがどの範囲の競合で規則的に認められるかを事例研究を通して検討するのが妥当と言える（なお、過程性および抽象性・比喩性の判断基準に関しては 3.3 「判断基準」で論じる）。⁶⁰ また第 2 にそれ以外の観点で規則性が認められるような内容的差異がないかも事例研究において可能な限り検討したい。

(13) 検討課題 1：接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合において、過程性および抽象性・比喩性の差異はどの範囲の競合で規則的に認められるのか。

(14) 検討課題 2：過程性および抽象性・比喩性の差異以外に、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合において規則的に認められる差異はないのか。またそうした差異があるとすれば、それはどの範囲の競合で認められるのか。

⁶⁰ 本稿にとって事例研究は、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合という、ある程度の規模がありかつ構成例に未解明な部分のある現象を扱う上で、事実上唯一の選択肢である。

第3に、上記2つの課題の検討を通じて、1.2.3「本稿における分類」で言及した、分離動詞、非分離動詞、分離・非分離動詞という3分類と、接頭辞動詞と不変化詞動詞という2分類のいずれが現代ドイツ語の複合動詞の分類として適切かという問題に対しても、本稿としての解答を与えたい。

(15) 検討課題3：内容的差異の規則性に鑑みると、現代ドイツ語の複合動詞の分類として3分類と2分類ではどちらが適切か。

3. 事例研究に向けて

本章では事例研究に向けた準備を行う。なお、事例研究という手法、すなわち代表的な事例を選定してデータを集めて分析し、そこから接頭辞動詞と不変化詞動詞全体についての仮説を提示するという手法は、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合という、ある程度の規模がありかつ構成例に未解明な部分のある現象を扱う上では、事実上唯一の選択肢ということになる。

以下 3.1「事例の選定」では、取り扱う事例とその選定理由について述べ、3.2「事例の収集および分析方法」では、事例を収集するために用いるコーパス等の情報と、収集例の分析方法について述べる。3.3「判断基準」では、2章で概観した先行研究の論点を踏まえ、過程性と比喻性・抽象性を判断する基準を論じる。3.4 は本章のまとめである。

3.1 事例の選定

事例研究の有効性は、事例の件数もさることながら、その代表性に大きく依存するので、どの例を代表例として選ぶか以下で説明する。

代表例を選ぶ上でも、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合を 2 つに、すなわち (i) タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞の競合と (ii) タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合に大別するのが有効と考えられる。なぜなら、前章で見た先行研究の実態に鑑みると、内容的規則性に関しては、(i) においてどの程度認められるかという問題と、(ii) に (も) 認められるのかという問題があると言えるからである。したがって (i) と (ii) の両方の代表例を選ぶことにする。

一方の (i) の代表例として、本稿は次の 5 ペアを取り上げる。

- (1) durchbohren, durchbohren 「～を穿つ」；durchblättern, durchblättern 「～を通読する」；übersiedeln, übersiedeln 「移住する」；überführen, überführen 「～を移送する」；unterschieben, unterschieben 「～を…に押し付ける」

まず durchbohren, durchbohren は、多くの先行研究で言及があることから代表例と言える。次に、durchblättern, durchblättern は、基盤動詞が当該語義において自動詞であることから、基盤動詞が他動詞とも自動詞とも解される durchbohren との比較対象として取り上げるに値する。

それから、übersiedeln, übersiedeln; überführen, überführen; unterschieben, unterschieben は、1.3.3.2「競合する場合」で確認したように、(i) の例が durch- 動詞を中心に論じられてきた中で、それとは異なる例として取り上げるに値する。また造語論的に見ても、übersiedeln の基盤動詞 siedeln は自動詞であるのに対し、überführen の基盤動詞 führen は自動詞とも他動詞とも解され、unterschieben の基盤動詞 schieben は他動詞と解されるといった違いもあり、これらを合わせて取り上げることに意義が認められる。⁶¹

他方の (ii) 「タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合」の代表例としては何が挙げられるだろうか。(ii) に関しては、接頭辞と不変化詞が同形ではないので、ある基盤語を共通して持つ動詞群全体を見て競合例を突き止めるのが発見法上有益と考えられる。⁶²

(ii) が観察される可能性が高い「基盤語を共通して持つ動詞群」として、本稿は次を取り上げる。

(2) blühen 群 (abblühen, aufblühen, ausblühen, erblühen, verblühen)

klingen 群 (abklingen, anklingen, aufklingen, ausklingen, erklingen, verklingen)

lügen 群 (anlügen, belügen, durchlügen, erlügen, vorlügen, zusammenlügen)

(2) の選定理由を説明すると、まず blühen 群は、多くの文献が競合と見なす例が複数含まれているので (1.3.2 「タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞」)、取り上げる意義が大きい。次に klingen 群は、開始と終了の意味において前綴りが blühen 群と類似の分布を示すので、比較対象として取り上げるに値する。それから lügen 群は、Erben (⁵2006: 85) が競合として言及している例 (anlügen, belügen) が含まれていることに加え、blühen 群や klingen 群とは異なり、開始や終了に関わらな

⁶¹ 他に例えば um- 動詞も取り挙げられればもちろんよいのだが、競合している可能性の高い um- 動詞というのは、実際には見出し難い。

⁶² 非効率と思われるかもしれないが、本稿の定義する意味での競合を見つけるためには有効な方法と考える。また、例えば 1.3.2 で取り上げた先行研究で挙げられている例にだけ着目するという方法も考えられるが、その場合でも、本稿の定義する意味での競合ではないと判明する場合も多いと予想されるので、どの程度効率的かは不透明である。

い競合が認められる可能性に鑑みても、取り上げる意義があると言える。

3.2 実例の収集および分析方法

事例研究は、先行研究を参照しつつ主にコーパスで収集した実例によって行う。⁶³したがって以下、実例の収集および分析の方法を説明する。

3.2.1 使用コーパスと検索エンジン

使用するコーパスは、ドイツ語の代表的な大規模テキストコーパスである Deutsches Referenzkorpus で、検索にはマンハイムにあるドイツ語研究所 (IDS) の COSMASII (<https://cosmas2.ids-mannheim.de/cosmas2-web/>) を用いる。⁶⁴以下で特に断りなく「コーパス」と呼ぶ際にはこのコーパスを、「検索」と言う際にはこの検索エンジンによる検索を念頭におく。⁶⁵

3.2.2 検索と出力から有効データ収集まで

検索に際しては、語頭以外に大文字の含まれる語形は、データとしてコーパスに取り込まれる際に何らかのエラーが生じている可能性が高いという理由で、また現在分詞形は、語彙化している場合もあるという理由ならびに項構造の分析の段階での作業を徒に増やしかねないという理由で、常に対象から外す。それから、例えば対象外の例が不必要に大量に混入する恐れがあるといった理由で、それ以外の語形も対象から外す場合には、その都度説明する。

出力に際しては、ある語に関してヒットした例から、最大、システムの上限である 10 000 例まで無作為に出力する。それからそれらを、200 例の「有効データ」が集まるまで手作業で分析する（ただし、全件分析しても 200 例集まらない場合もある）。

⁶³ インフォーマントに意見を求める場合も勿論ある。しかし、その場合でもコーパスの実例で裏付けが得られるかどうかを重視する。なぜなら、テストの際の条件のコントロールに筆者が確信を持っていないことに加え、本稿では頻度のそこまで高くない表現も考察するからである。というのも、後述のように、少なくとも頻度の高くない表現においては、人為的なテストの際に母語話者の直感が必ずしも働かない場合のあることが観察されるからである。頻度の低い表現においては、「自分は／普通は、違った言い方をする」という意識が判断を妨げると考えられる。

⁶⁴ COSMAS II 上で選択するコーパスは、W-öffentlich - alle öffentlichen Korpora des Archivs W (mit Neuakquisitionen)。

⁶⁵ ドイツ語のコーパスおよびその使用法については、成田（監修）／カンほか（編）（2009）を参照した。

ここで言う有効データとは、実際に収集したい語のデータ、ないしそうであることが推定できるデータのことである。例えば接頭辞動詞 *durchbohren* の用例を、その変化形を含めコーパスで検索する式は「&durchbohren」であるが、この式でヒットするデータには、統語的な実現環境により、不変化詞動詞と区別のつかない例も含まれることになる（例えば、*Er konnte das Brett nicht durchbohren* のような場合）。⁶⁶ そこで、そうした例を除いたものを有効データと呼ぶ。なお、有効データを集める過程で分析したデータは「分析データ」と呼ぶ。

3.2.3 有効データの分析

有効データの分析においては、最初に語義を抽出する。その際の手順は、語義を定義する際（1.3.1）に示したのと同じく（3）の通りとなる。なお、（3ii）と（3iii）は互いに順番が前後することもあれば繰り返し適用されることがあるというのも、既に述べた通りである。

（3）語義：語に内在する意味。ある動詞 *x* の語義（A, B, C, ...）は、次の一連の操作によって得られる。

- （i）ある動詞 *x* には語義 *a* があると仮定する。語義 *a* を実例によって検証し修正したものを語義 A として認める。
- （ii）ある動詞 *x* が、例えば語義 A を実現する際と項構造および完了の助動詞選択は同じだが、語義 A からは予想できない意味を持つ場合、語義 *b* を仮定する。語義 *b* を実例によって検証し修正したものを語義 B として認める。
- （iii）ある動詞 *x* が、例えば語義 A を実現する際とは項構造あるいは完了の助動詞選択の点で異なる振る舞いをする場合、例えば語義 *c* を仮定する。語義 *c* を実例によって検証・修正したものを語義 C として認める。

（3ii）に「項構造」とあるが、⁶⁷ 以下順に説明するように、本稿の事例研究で登場する主要な意味役割とその定義は（4）の通りである。

⁶⁶ 補足として、不変化詞動詞 *durchbohren* のデータ収集も例に出すと、同語の用例を、その変化形を含めコーパスで検索する式は「&durchbohren or (&bohren /+0s durch)」であるが、この式でヒットするデータには、やはり統語的な実現環境により、接頭辞動詞と区別のつかない例も含まれることになる（例えば同じく、*Er konnte das Brett nicht durchbohren* のような場合）

⁶⁷ 既に述べた通り、述語（＝動詞）がいくつの項を取り、それを統語的にどう実現するかということ「項構造」と呼んでいる。

(4) 動作主 (Agens) : 行為や活動の主体。動作主は、典型的には意志ないし意図を持って、行為を遂行、ないし活動に従事し、かつそれによって必ずしも変化を被らない。意志も意図も持たない存在でも、変化の原因や契機と見なせる限りにおいて「動作主」と分析する。

対象 (Thema) : 行為、活動、知覚を被る存在、または場所や状態を担う存在、ないし場所や状態の変化を担う存在。出来事に参与する対象はさらに、

- (i) 出来事に先立って存在する「被動物 (affiziertes Objekt)」と、
- (ii) 出来事の結果生成する「被成物 (effiziertes Objekt)」に分けられる。

起点 (Quelle) : 移動の出発点。

着点 (Ziel) : 移動の到達点。他の存在の受け取り手 (Rezipient) を含む。

まず動作主に関して説明すると、本稿は例えば (5a) だけではなく、(5b) (5c) において主格で実現している項、すなわち第 1 項も動作主と見なすということである。

(5) a. Emil tötet die Maus. (Welke 2011: 149) エミールはネズミをしとめる。

b. Der Sturm fegte Dächer von den Häusern. (ibid.) その嵐は家々の屋根を吹き払った。

c. Dieser Schlüssel öffnet jede Tür. (Welke 2011: 150) この鍵はどの扉も開ける。

(5b) (5c) の第 1 項は、(5a) のそれとは異なり、意志も意図も持たないが、いずれも変化の原因や契機と見なせることから、本稿では動作主と分析する。

なお (5c) の第 1 項は、「手段 (Instrument)」と分析することもできる。なぜなら (5c) が指示する事態は、次に挙げる (6) が指示する事態と同一だからである。(6) において (Mit) diesem Schlüssel が「手段」と分析されるとすれば、同一事態を表す (5c) の Dieser Schlüssel も同様に「手段」と分析できない理由はない。

(6) Mit diesem Schlüssel öffnet man jede Tür この鍵でどの扉も開けられる。

Welke (2011: 145ff.) によれば、(5c) における第 1 項を (6) との関連で手段と分

析するのは、*denotativ-semantisch* な見方、つまり外延（＝指示対象）に着目する見方であり、動作主と分析するのは、*signifikativ-semantisch* な見方、つまり内包（＝表示の仕方）に着目する見方である。この言い方に従うと、本稿は動作主という意味役割を *signifikativ-semantisch* に捉えるということである。そうすることで、細分化を避け、競合をより広く捉えることが可能になる。

次に「対象」に関して言えば、Motsch (2004) と同様に本稿は (5) (6) において対格で実現している項、すなわち第 2 項のみならず、(7) における第 1 項も対象と分析する。なお、Welke (2011: 145ff.) の先述の区分だと、この分析は *denotativ-semantisch* ということになる。

(7) a. Die Käse stinkt. (Motsch 2004: 34) そのチーズは臭う。

b. Das Flugzeug steigt in den Himmel (Motsch 2004: 37) その飛行機は空へ昇っていく。

c. Er läuft durch den Garten. (Motsch 2004: 38) 彼は {庭を通り抜けて／庭中を} 走る。

d. Die Milch erkaltet. (ibid.) その牛乳は冷たくなる。

もちろん、当該の項を細分化して捉えることも可能である。例えば (5) (6) の第 2 項は「被動作者 (Patiens)」, (7a) の第 1 項は「状態の担い手 (Zustandsträger)」, (7b) (7c) の第 1 項は「移動物」, (7d) のそれは「出来事の担い手 (Vorgangsträger)」とも捉えられる。しかし、このように細分化することには必要性も、本稿にとっての意義も見出し難い、したがって、対象に関しては、理論的一貫性よりも実践的意義を重視し *denotativ-semantisch* な見方を採ることにする。

出来事に参与する「対象」には、出来事に先立って存在し、出来事によって影響ないし変化を被る「被動物 (affiziertes Objekt)」と、出来事によって初めて存在するに至る「被成物 (effiziertes Objekt)」がある。(5) (6) (7) において被動物の例は示されているので、次に被成物の例を挙げる。被動物、被成物の区別は、後述する状況タイプに関わる可能性があるため、確実性のために本稿でも採用しておく。

(8) a. Ulrich baut eine Sandburg. ウルリヒは砂城をつくる。

b. Das Gewitter schuf einen See. その雷雨は湖をつくった。

(Motsch 2004: 37)

先行研究には、Duden 4 (⁸2009: 392) のように出来事の結果に注目して、生成する対象だけでなく消滅する対象も含めて被成物と呼ぶものもあるが、本稿では対象が出来事に先立って存在するか否かに注目し、例えば次にあげる (9) における第 2 項、すなわち結果的に消滅する対象も、やはり被動物として分析する。というのも、対象が出来事によって消滅するかどうかは、出来事に先立って存在するかに比べて明確とは言えないからである。例えば、**die Blume verblüht** 「その花が咲き止む」において **die Blume** が出来事に先立って存在することは明らかだが、それが結果として消滅するか否かは、それほど明らかではない。

(9) a. **Petra zerstört die Sandburg.** (Motsch ²2004: 37) ペトラはその砂城を破壊する。

b. **Der Sturm zertrümmerte den Holzschuppen.** (ibid.) その嵐は木の小屋を粉碎した。

最後に、「起点」は例えば **von** や **aus** の項として実現する移動の出発点のことであり、「着点」は例えば (7b) の **Himmel** のことである。なお、本稿は受け手 (Rezipient) と分析されることもある、授与表現における与格項 (例えば **sie gab ihm das Salz** 「彼女は彼に塩をとってあげた」の **ihm**) も、分化を必要最小限にするために着点と分析する。⁶⁸

語義を抽出し、かつ競合が明らかになったら、当該の各語につき、2 章での先行研究の概観から注目に値すると結論した 2 つの観点、すなわち過程性 (ないし結果性)、ならびに抽象性・比喩性 (ないし具体性・原義性) を考察する。次節では、したがってそれぞれの性質を判断するための基準を論じる。

3.3 判断基準

本節では、3.3.1 で過程性の判断基準を、3.3.2 で抽象性・比喩性の判断基準を論じる。

⁶⁸ 他にも例えば (7c) の **Garten** は「経路」と分析できる項であるが、当該意味役割は本稿の論述にそれほど関与しないので、ここでは取り上げない。

3.3.1 過程性の判断に向けて

本稿は、ある競合においてどちらの動詞がより過程的な表現かを最終的には判断したいのであるが、⁶⁹ その判断に先立っては、語彙項目としての動詞（が指す状況）の素性の1つである持続性（Durativity: *Durativität*）を解明する必要がある。⁷⁰ しかし、語彙項目としての動詞の持続性は、実例において直接には観察できないので、その解明に当たっては、詳しくは以下後述するように、当該動詞が述語として実現した文の観察から、当該文の基底に想定される「事象性記述（eventuality description）」（de Swart 1998a など）が指示する状況へと遡及し、そこからさらに当該動詞が指し示す状況の持続性を割り出す、という方略が必要となる。

以下まず 3.3.1.1 では、そのために本稿が de Swart (1998a, 2012, 2019) と Smith (2019) の枠組みを部分的に融合するアプローチを採ることを説明する。次に 3.3.1.2 では、本稿にとって特に関与的である、ドイツ語における Accomplishment 表現と Achievement 表現の判別基準について詳しく論じる。3.3.1.3 はまとめである。

3.3.1.1 状況のタイプと階層構造

状況を論じるにあたっては、第1にそれをどのようにタイプ分けするかが問題となる。後述のように、状況タイプ⁷¹ に関して先行研究には複数の系統の設定が存在し、かついずれも可能な設定と考えられる（例えば Truswell 2019: 5ff. も同様の見解である）。したがって本稿では、その中から持続性を問題にできる設定を採用することになる。

第2に、ある文の時間的相的（temporal-aspektuell）階層構造をどのように想定するかも問題となる。例えば Heinold (2015: 42ff.) がまとめているように、Vendler (1967 [1957]) 以来多くの先行研究において、動詞句（VP）が指示する状況

⁶⁹ 先行研究において「過程（process, Prozess）」という用語は、いわゆる Vendler 分類の活動（Activity）に対して用いられたい（Filip 2012: 727f.）、Accomplishment に対して用いられたい（Rapp 1997）、本稿の用語としては、あくまでも結果と対立する意味で用いている。例えば A 地点から B 地点への移動で言えば、B における到着という出来事が結果であり、それに先立つ B までの漸次的接近が過程である。

⁷⁰ 本稿は、例えば Engelberg (2000: 67) と同様に、語彙項目としての動詞が指示する状況は、持続性に関する情報を有しているという立場をとる。なお、Leiss (1992: 44) が批判的に言及しているように、ドイツ語学においては *durativ* (*durative*) という用語（しばしば「継続相」と訳される）が非有界的という意味で用いられてしまっていることもあるが（2.2.1.1, 中でも特に註 50 を参照されたい）、本稿が *durativ* (*durative*) という用語を、有界性とは独立した意味で、すなわち純粹に時間的な意味で用いる。また、区別に少しでも資するように、「継続」ではなく「持続」という訳語を用いる。

⁷¹ 本稿が状況タイプと呼ぶ対象には他にも *aspect class*, *Vendler' class*, *Aktionsart* を始め様々な呼び方がある。この点に関して詳しくは例えば Filip (2012) を参照されたい。

(Heinold 2015 の用語だと「時間構造 (Zeitschemata)」)とそのタイプが多かれ少なかれ意識的に論じられてきたが,⁷² 本稿では文を観察するので、その時間的相的階層構造も問題になる。

以上の2点を踏まえて、本目では以下 3.3.1.1.1 で de Swart (1998a, 2012, 2019) を、3.3.1.1.2 で Smith (2019) をそれぞれ取り上げる。⁷⁴ いずれの研究も文を問題にし、かつそれぞれ異なる系統の状況タイプ分類を用いている。

なお、de Swart (1998a, 2012, 2019) も Smith (2019) も Kamp/Reyle (1993) の「談話表示理論 (Discourse Representation Theory)」による形式化まで行っているが、本稿は、その前段の分析を主に参照し、談話表示理論による形式化は行わない。

3.3.1.1 を通じて、3.3.1.1.4 でまとめるように、文の時間的相的構造に関しては、主に de Swart (1998a, 2012, 2019) の想定が、状況タイプの数と規定に関しては、Smith (2019) のアプローチが、本稿にとって適切であることが示される。de Swart (1998a, 2012, 2019) も Smith (2019) も通言語的な応用を目指しているとはいえドイツ語をほとんど考慮していないが、上記の点に関しては、次目 (3.3.1.2 「持続性による弁別: Accomplishment と Achievement」) でも示されるように、ドイツ語の分析にも適用可能と考えられる。

3.3.1.1.1 de Swart (1998a, 2012, 2019)

3.3.1.1.1.1 状況タイプの数と規定

第1に状況タイプの数と規定であるが、de Swart (1998a, 2012, 2019) は、表 3.1 として以下に引用するように、「同質的 (HOMOGENEOUS)」か「量子化されている (QUANTIZED)」かという基準、すなわち当該状況においてそれ全体と等しい部分状況をとれるか、ならびに当該状況に同一の状況を足した場合に同一の状況になるかという基準と、⁷⁵ 「静的 (STATIC)」か「動的 (DYNAMIC)」かという基準の2つ

⁷² Vendler (1967 [1957]) が動詞句のアスペクトをどの程度意識していたかには議論の余地がある。例えば Verkuyl (2005) は、Vendler (1967 [1957]) はあくまでも語彙項目としての動詞のアスペクトを問題にしているを見て、それに対する批判を加えている。なお、多くの先行研究とは異なって Rapp (1997) のように、あえて語彙項目としての動詞のアスペクト (Aktionsart) を問題にしている研究もある。ただし、挙げられた例文および、同書 80 頁以降の状況タイプの変更の論述からは特に、動詞が基本形と言えるような文として実現する際の例えば持続性が、当該動詞の持続性で見なされていると考えられる。そうだとすれば Rapp (1997) もまた語彙項目としての動詞だけを問題にしているわけではないことになる。

⁷⁴ de Swart (1998a) に関しては、山村 (2016) の解説も参照した。また Smith (2019) に関しては、本稿をほぼ書き終わってからではあるが、出水 (2023) の解説を参照し、本稿の Smith (2019) 理解に問題がないか確認した。

⁷⁵ 荻原 (2016: 153ff.) は quantized (Krifka 1989a) を「決まったサイズを持っている」と意識し

を用いて,⁷⁶ 「状態 (state)」「過程 (process)」「生起 (event)⁷⁷」に3分類している。

HOMOGENEOUS		QUANTIZED
state	process	event
STATIVE	DYNAMIC	

表 3.1 状況の3分類 (de Swart 1998a: 351: Fig. 1.)

このような3分類は先行研究にしばしば見られるが,⁷⁸ 本稿は、表 3.1 で生起 (event) と呼ばれているカテゴリーにおける持続性の有無を考慮したいので、またさらには後述するように、一定の限定を設けるならば持続性は動詞 (の指す状況) の性質と見なせることから、本稿ではこの3分類ではなく、Vendler (1957 [1967]) における Accomplishment と Achievement の区別を引き継ぐ後述の Smith (1997) の5分類を用いる。

3.3.1.1.1.2 文の時間的相的階層構造

第2に文の時間的相的階層構造であるが、de Swart (1998a, 2012, 2019) はそれを次のように想定している。⁷⁹

(10) [Tense [Aspect* [eventuality description]]]

(de Swart 1998a: 348; 2012: 765; 2019: 331)

ているが、これはとても分かりやすい訳語に思える。決まったサイズを持つ状況からは、サイズが決まっているが故に、それと等しい部分状況はとれないし、また決まったサイズを持つ状況は、サイズが決まっているが故に、それに同一の状況を足すと、もはや同一の状況ではなくなる。よく知られているように、こうした状況上の性質は、名詞句の指示対象の性質とも共通性がある (この点に関しては Krifka 1989b も参照した)。

⁷⁶ 後者の基準について de Swart (1998a: 350) は詳しく論じていないが、de Swart (2012: 755) は、状態は、何も起こらない状況であるから、諸々の時点において真である (他方、活動は時間をかけた発展を必然的に含意するので、諸々の時間区間を必要とする)、と述べている。

⁷⁷ 状態だけではなく過程とも区別される event, つまり狭い意味での event を、本稿は藤縄康弘先生の提案に基づき「生起」と訳す。なお、広い意味での event, すなわち状態とのみ区別される event を本稿は「出来事」と訳す。

⁷⁸ 主にアリストテレスの複数の著作を参照し、一部 Ryle (2009 [1949]) への言及を含む Kenny (1963: 171ff.) によってなされた Static (Verbs), Performance (Verbs), Activity (Verbs) の3分類がよく知られている。同様の3分類は Verkuyl が複数の著作で取り上げているが (筆者がこれまで参照し得たのは Verkuyl 1993, 2005, 2022), Verkuyl (2022: 124) が明確に述べているように、Verkuyl はその際も Kenny の3分類を Vendler 分類よりも支持しているというわけではない。動詞と項からなるアスペクトの構成性を重視する Verkuyl にとっては、3分類もまた単なる「見かけ」ということになる。

⁷⁹ de Swart (2012: 773ff.) では、否定や頻度表現といった要素を階層のどこに位置付けるかといったことも問題になり得ることが論じられているが、ここでは最も基本的な想定のみを問題とする。

(10) の用語と表記法を確認する。第 1 に **Tense** というのは、現在形や過去形といった時制に関するレベルである。第 2 に **Aspect** というのは、進行形や完了形といったいわゆる文法的アスペクト、および、詳しくは (14) (15) (16) で後述するが、それと同様に状況タイプに関わる時間の副詞規定 (de Swart 1998a の用語では、**Duration Adverbials**) に関するレベルである。なお、**Aspect** に付された「*」は、ある文において当該レベルの演算子がないことも、それが複数あって再帰的に作用する場合もあることを表している。第 3 の「事象性記述 (**eventuality description**)」⁸⁰ というのが、文の時間的相的階層構造の基底で、いずれかの状況タイプを指示対象とする「述語-項構造 (**predicate-argument structure**)」、すなわち、述語と捉えられる動詞とその項からなるまとまりのレベルである。⁸¹

(10) の想定に立つならば、例えば現代英語においては概略 (11) のように定義される演算子と先述の 3 つの状況タイプを用いて、⁸² (12a) は (12b) のように、(13a) は (13b) のように記述される。⁸³

(11) **PRES**: 状態 (という状況タイプ) を時間軸上で発話時に重複させる時制演算子

PAST: 任意の状況タイプを時間軸上で発話時より前に位置付ける時制演算子

PROG: 過程または生起を取って状態を返すアスペクト演算子⁸⁴

PERF: 任意の状況タイプを取って、その状況に時間軸上で隣接する状態 (= 結果状態) を返すアスペクト演算子

⁸⁰ de Swart (2012: 765) は、同様の階層構造を論じる際に、**eventuality description** ではなく、**aspectual class** という用語を使っている。なお **eventuality** という用語を、本稿は事象性と訳すが、de Swart (1998a) を解説しスペイン語の分析に応用した山村 (2016) は「事態」という訳語を当てている。

⁸¹ 詳しくは 3.3.1.1.2.2 で後述するように、Smith (2019) における「動詞布置 (**verb constellation**)」とほぼ同様の概念である。

⁸² あくまで現代英語の話であって現代ドイツ語の記述においては、また別の定義が必要である。例えばドイツ語の完了形は、Löbner (2002), Helbig/Buscha (2017: 135f.), 藤縄 (2023) に鑑みると、アスペクト演算子としてだけではなく時制演算子として (= (11) の **Past** と同様の仕方でも扱う必要があると言える。なお、de Swart (1998a) も依拠する Kamp/Reyle (1993) における英語の完了形の扱いの問題点 (= 結果の用法しか考慮できていないこと) は、von Stechow (2002: 423f.) が指摘している。

⁸³ 演算子は、特定の入力を取って、特定の出力を返す働きをする。あるいは別の言い方では、特定の入力を特定の出力に変換する。例えば **PROG** [x...] は、[x...] が指示する過程または生起という入力を状態という出力に変換する (つまり **PROG** [x...] 自体は状態を指示対象に持つ)。

⁸⁴ つまり **PROG** は状態は取らないと定義されるのだが、状態表現から進行形が形成される際には、後述のように、状態から一度過程または生起へのアスペクト交替が生じているという分析になる。

- (12) a. Mary was reading a book.
 b. [PAST [PROG [Mary read a book]]]
- (13) a. Jane has been writing a letter.
 b. [PRES [PERF [PROG [Jane write a letter]]]]

(de Swart 1998a: 355f.)

(12) の基底は [Mary read a book] という、生起という状況タイプを指示対象とする表現、すなわち生起表現であり、⁸⁵ それが指す生起に進行形が指示する演算子 PROG、すなわち過程または生起を取って状態を返す演算子が作用することで、[PROG [Mary read a book]] という状態表現が形成される。そしてそれが指示する状態がさらに、過去形が指示する演算子 PAST によって時間軸上で発話時よりも前に位置付けられる。⁸⁶

同様に (13) の基底は [Jane write a letter] という生起表現であり、それが指す生起に演算子 PROG が作用することで、[PROG [Jane write a letter]] という状態表現が形成される。次にそれが指す状態に、完了形が指示する演算子 PERF、すなわち任意の状況を取ってそれに時間軸上で右に隣接する状態 (= 結果状態) を返す演算子が作用することで、[PERF [PROG [Jane write a letter]]] という結果状態表現が形成される。そしてそれが指す状態がさらに、現在時制の指示する演算子 PRES によって時間軸上で発話時と重複させられる。なお、PROG が PERF よりも作用域が広いという記述、すなわち [PROG [PERF [Jane write a letter]]] という記述は、PROG の入力状態になってしまうことから除外される。

次に (10) におけるアスペクトというカテゴリーについて補足すると、既に述べたように de Swart (1998a, 2012, 2019) においては、持続時間を表す for 前置詞句や所要時間を表す in 前置詞句の指示対象もまたアスペクト演算子として、概略 (14) に示すように定義され、例えば (15a) は (15b) のように、(16a) は (16b) のよう

⁸⁵ 以下同様に言い表す。なお本稿では簡潔さのために、例えば Mary read a book 「マリーは本を一冊読んだ」という文について「生起表現である」という言い方をすることもあるが、その場合でも常に、より正確には、当該文の基底である事象性記述 [Mary read a book] が、生起表現であるということ（さらに厳密には、{Mary read a book} という概念を介して生起を指示する形式であるということ）を意図している。

⁸⁶ 状態という状況項の存在に関しては様々な立場がある（この点に関しては例えば Engelberg 2000: 102ff. を参照）が、de Swart (1998a) らが依拠する談話表示理論においては、状態の項が想定されている。この想定の理論的妥当性に関しては、本稿では論じない。

に記述される。⁸⁷

(14) FOR *x time*: 状態または過程を取って生起を返すアスペクト演算子

IN *x time*: 生起を取って生起を返すアスペクト演算子

(15) a. Susan lived in Paris for two years.

b. [PAST [FOR two years [Susan live in Paris]]]

(16) a. Susan was writing a book in a month.

b. [PAST [PROG [IN a month [Susan write a book]]]]

(de Swart 1998a: 358f.)

(15) の基底は [Susan live in Paris] という状態表現であり、それが指示する状態に持続時間表現が指示する演算子 FOR *x time*, すなわち状態か過程をとって生起を返す演算子が作用することで [FOR two years [Susan live in Paris]] という生起表現が形成される。そしてそれが指示する生起が演算子 PAST によって時間軸上で発話時よりも前に位置付けられる。

同様に (16) の基底は [Susan write a book] という生起表現であり、それが指示する生起に所要時間表現が指示する演算子 IN *x time*, すなわち生起をとって生起を返す演算子が作用することで、[IN a month [Susan write a book]] という生起表現が形成される。それから、それが指示する生起に演算子 PROG が作用することで、[PROG [IN a month [Susan write a book]]] という状態表現が形成される。それからさらに、それが指示する状態が演算子 PAST によって時間軸上で発話時よりも前に位置付けられる。なお、IN *x time* が PROG よりも作用域が広いという記述、すなわち [IN a month [PROG [Susan write a book]]] という記述は、In *x time* の入力の状態になってしまうことから除外される。

(10) をはじめとする想定は、アスペクトの交替現象を記述する上でも有効である。例えば de Swart (1998a: 360ff.) は、アスペクト交替を、事象性記述のアスペクト的性格と言語的文脈および言語外的文脈 (=世界知) のアスペクト的制約によって引き起こされる強制 (coercion) と捉え、概略 (17) に示すような統語的形態論的には不可視のコアクション演算子を導入し、(18a) (19a) (20a) を (18b) (19b) (20b)

⁸⁷ de Swart (2019) ではさらに、until 前置詞句の指示対象もアスペクト演算子として扱われている。

のように記述している。

(17) C_{eh} : 生起を同質的な状況に変換するコアーション演算子

C_{he} : 同質的な状況 (=状態または過程) を生起 (=非同質的な, 量子化された状況) に変換するコアーション演算子

C_{sd} : 状態を動的な状況 (=過程または生起) に変換するコアーション演算子

(18) a. John played the sonata for eight hours.

b. [PAST [FOR eight hours [C_{eh} [John play the sonata]]]]

(19) a. The program ran in four minutes.

b. [PAST [IN four minutes [C_{he} [the program run]]]]

(20) a. Susan is liking this play.

b. [PRES [PROG [C_{sd} [Susan like this play]]]]

(18) の基底は [John play the sonata] という生起表現である。しかし、それが指示する生起は、(14) の定義上 FOR x time の入力になり得ないので、 C_{eh} 、すなわち生起を同質的な状況 (=状態・過程) に変換するコアーション演算子によって [C_{eh} [John play the sonata]] という同質的な状況表現が形成され、それが指す同質的な状況に FOR x time が作用することで [FOR eight hours [C_{eh} [John play the sonata]]] という生起表現が形成される (時制の扱いについては既に説明した通りなので以下の説明では省略する)。

同様に (19) の基底は [the program run] という過程表現であるが、それが指示する過程は IN x time の入力には定義上なり得ないので、 C_{he} 、すなわち同質的な状況を生起に変換するコアーション演算子によって [C_{he} [the program run]] という生起表現が形成され、それが指す生起に IN x time が作用することで [IN four minutes [C_{he} [the program run]]] という生起表現が形成される。

また、同様に (20) の基底は [Susan like this play] という状態表現であるが、それが指示する状態は PROG の入力には定義上なり得ないので、 C_{sd} 、すなわち状態を動的な状況 (=過程・生起) に変換するコアーション演算子によって [C_{sd} [Susan like this play]] という動的な状況表現が形成され、それが指す動的状況に PROG が作用することで [PROG [C_{sd} [Susan like this play]]] という状態表現が形成される。

なお、de Swart (2019: 337f.) は、(17) の 3 つのコアーション演算子に加えて、

C_{ds}, すなわち過程ないし生起を状態に変換するコーション演算子も導入し, 例えば (21a) を (21b) のように記述している。

(21) a. Julie washes the car.

b. [Present [C_{ds} [Julie wash the car]]]

(de Swart 2019: 338)

(21) の基底は [Julie wash the car] という生起表現である。現在形が指示する Present (de Swart 1998a の表記では PRES) という時制演算子は, 既に見たように現代英語においては状態を取る演算子として定義されるので, ミスマッチを解消するために C_{ds}, すなわち動的状況 (=過程・生起) を状態に変換するコーション演算子によって [C_{ds} [Julie wash the car]] という状態表現 (ここではいわゆる習慣表現) が形成される。

なお, 過去における動的状況の習慣読みは, Past という演算子とのミスマッチではなく, 文脈によって引き起こされるという (de Swart 2019: 338f.)。

アスペクトの交替現象の記述法については以上とし, (10) の階層構造に対する本稿の考えを述べる。本稿は, (10) の想定に賛成し事例研究のためにこれを採用する。

(10) の想定は, ある文の観察から当該文の基底 (=事象性記述) とその状況タイプに遡る上でも, どのレベルの状況タイプをその都度念頭においているか明確にする上でも有効と言える。

ただし, 詳しくは後述するが, ある文の事象性記述が指示する状況は, 当該動詞が指示する状況と必ずしも一致しないので, 当該動詞が指示する状況の性質を明らかにするためには, 次に見る Smith (2019) のように, 一定の限定を導入することが必要と考えられる。

3.3.1.1.2 Smith (2019)

3.3.1.1.2.1 状況タイプの数と規定

Smith (2019: 19f.) は, [静的 (Static) / 動的 (Dynamic)], [持続的 / 瞬間的 (Durative / Instantaneous)], [有界的 / 非有界的 (Telic / Atelic)] という 3 つの時間素性を用いて, 「状態 (State/Stative⁸⁸)」, 「活動 (Activity)」, 「Accomplishment

⁸⁸ Smith (2019: 32) は, 状態 (State) という状況タイプの成員を指す場合は Stative という用語

(達成)], 「Achievement (到達)」, 「Semelfactive (単一相)」という 5 つの状況タイプを規定している。⁸⁹ なお, 包括的なカテゴリー (global categories) としては状態 (state) と出来事 (event) ⁹⁰ の 2 つを設定している。

	静的	持続的	有界的
状態	+	+	-
活動	-	+	-
Accomplishment	-	+	+
Achievement	-	-	+
Semelfactive	-	-	-

表 3.2: Smith (²1997: 20) における状況の 5 タイプ

本稿は, 持続性を問題にするために, 表 3.2 の 5 分類を採用する。なお, 以下 Smith (²1997: 39ff.) が時間素性の言語的な反映について, 英語を主な例にしながら論じていることを概観し, 表 3.2 の説明とする。

3.3.1.1.2.1.1 動性

表 3.2 には「静的」という用語が載っているが, これは「動的」の反対であり ([−静的] = [+動的]; [+静的] = [−動的]), また Smith (²1997) では, むしろ動性 (Dynamism) という観点で多く論述がなされているので, 本稿でも以下動性という呼称を用いる。

動性について Smith (²1997: 39ff.) は大きくは, 第 1 に動作主の存在が, 第 2 に現

を用いるとしているが (I shall use the term *Stative* to refer to members of the situation type [= *State*]), 本稿では両者を用語としては区別せずに単に「状態」と呼ぶ。

⁸⁹ 類似の分類は他の多くの研究でもなされているが, その呼称は必ずしも一致していない。例えば Rapp (1997) は, Achievement を *Zustandswechsel* と Accomplishment を *Prozeß* と呼んでいる。Filip (2012: 727f.) は, 「活動」を「過程 (process)」と呼び, Accomplishment を「生起 (event)」の中の「長引いた (protracted)」もの, Achievement を「瞬間的な (momentaneous)」ものと呼んでいる。Löbner (²2015) は, Achievement を, 動的な初期状況を持つものと, 静的な初期状況を持つもので下位分類し, 前者のみを Achievement と, 後者を *einfacher Wechsel* と呼び分け, また Semelfactive を *einfacher Geschehnisausdruck* と呼んでいる。本稿では, Accomplishment, Achievement, Semelfactive に関しては, 分かり易さを考慮し, 原語のまま用いる。ドイツ語の文献でも Accomplishment, Achievement は原語のまま用いられることが多いが, 例えば Noma (2021) は前者に *Errungenschaft(sverben)* 後者に *Erreichung(sverben)* という用語を当てている。なお先行研究には, Semelfactive を除く他の 4 つのカテゴリーのみを設定するものがある (Vendler 1967 [1957]; Rothstein 2004; Mani/Pustejovsky/Gaizauskas (eds.) 2005: 7) また, 当該 4 つのカテゴリーを 2 つだけの意味素性によって弁別する研究もある (例えば Rothstein 2004 では, [±stages] [±telic] の 2 つ)。

⁹⁰ de Swart (1998a, 2012, 2019) は, 既に述べたように, 状態および過程と区別して, event という用語を使っていた。こうした狭い意味での event を本稿は「生起」と呼んでいる。それに対し, 状態と区別される, 広い意味での event を本稿は「出来事」と呼んでいる。なお, 状態と出来事を区別しない場合には, 文脈に応じて「事象」または「状況」という用語を使っている。

在時制における習慣読みが、すなわち一種のアスペクト交替がそれと相関するとして
いる。⁹¹

第1に動作主の存在に関しては、状態は動作主を持たないが故に、例えば (23)
(25a) は意味的に不適格 (#) であるという。⁹²

(22) Wash your car! (Accomplishment) (Smith ²1997: 40)

(23) #Know Greek! (State) (Smith ²1997: 40)

(24) a. I persuaded Mary to wash her car. (Smith ²1997: 40)

b. [Mary wash her car] (Accomplishment)⁹³

(25) a. #I persuaded Mary to know Greek. (Smith ²1997: 40)

b. [Mary know Greek] (Stative)

Smith (²1997: 39ff.) によれば、Mary knows Greek は状態文であり（より正確には
[Mary know Greek] は状態表現であり）、⁹⁴ Mary は状況を直接コントロールするよう
な動作主ではなく、したがって (23) のように命令文になったり、(25) のように
persuade といった動詞の支配を受けたりすることができない、という。

また同様に、動作主の存在を前提とするような *carefully* といった様態の副詞と状
態文の共起、あるいは *with a key* といった手段の副詞規定と状態文の共起は、統語的
に不適格 (*) であるという。

⁹¹ 先行研究では動性ないし状態について、様々に論じられている。Smith (²1997: 32, 36) は、動的な状況はエネルギーの絶えざる投入がないと存続できないのに対し、静的な状況はそれがなくても外部からの作用がない限り成立し続ける、という特徴づけをし、状態については、その subinterval 性 (When a state holds for an interval it holds for every sub-interval of that interval) を指摘している。他の先行研究の指摘もいくつか見ると、Heinold (2015: 46) は、動的な状況は、短時間の中断の後に再開する、ないし反復することができるが、非動的 (= 静的) な状況ではそれができない、と述べている (類似の指摘は他にも Rapp 1997: 38; Nicolay 2007: 9f. でなされている)。Rapp (1997: 87) は、状態 (動詞) とは異なって活動 (動詞) は内的な構造を持つ、と述べている。

⁹² Smith (²1997: 40) は「意味的に不適格」とはどういうことか説明していないが、提示に際して意図した読みとは異なる読みになるか、特殊な文脈を想定しないと成り立たない、ということだと思われる。なお、ここで言う動作主は、本稿の定義する意味よりも狭い意味での動作主、つまり典型的な動作主のことだと思われる。

⁹³ b. は事象性記述 (= 時間的相的階層構造の基底。Smith (²1997) における動詞布置とおおよそ同じ用語)。Smith (²1997) は例えば、テストしている述語-項構造の状況タイプを、テスト結果の文の後ろに書いているが、それだと、どのレベルを問題にしているか誤解を生じ得る場合があるので、その場合は、このように問題の事象性記述を追記した上で状況タイプを示す。

⁹⁴ Smith (²1997: 17f.) で説明があるように、Smith (²1997) では簡潔さのために、例えば Mary knows Greek (.) という文が、状態という状況タイプである、ないし状態文である、という言い方がなされている。同じような簡潔な表現は本稿も適宜用いるが、厳密に言えば、Mary knows Greek. という文の事象性記述である [Mary know Greek] が状態表現、すなわち {Mary know Greek} という概念を介して状態を指示する形式ということになる。

- (26) John carefully washed his car. (Accomplishment) (Smith ²1997: 40)
- (27) *John carefully knew Greek. (State) (Smith ²1997: 40)
- (28) Mary opened the door with a key. (Accomplishment) (Smith ²1997: 40)
- (29) a. The door was open with a key. (Smith ²1997: 40)
 b. [x open the door] (Accomplishment)
- (30) a. *The door was open with a key. (Smith ²1997: 40)
 b. [the door be open] (Stative)

他にも動性の英語に特有の表れとして、Smith (²1997: 40) は、(31) (32) に示す、不完了相 (= 進行相) での自然な実現可能性との相関、ならびに、(33) (34) に示す、代動詞 do を伴う擬似分裂文に生起する際の容認性との相関も指摘している。

- (31) a. John was washing the car. (Smith ²1997: 40)
 b. [John wash the car] (Accomplishment)
- (32) a. *Kim was knowing the answer. (Smith ²1997: 40)
 b. [Kim know the answer] (Stative)
- (33) a. What John did was wash the car (Smith ²1997: 40)
 b. [John wash the car] (Accomplishment)
- (34) a. #What John did was know Greek. (Smith ²1997: 40)
 b. [Kim know Greek] (Stative)

第2に現在時制における習慣読みに関しては (35a) (36a) を挙げ、(35a) は、「派生的なカテゴリ化」(3.3.1.1.2.2 で後述) が実現し習慣読みとなる例であり、(36b) は「基本レベルでのカテゴリ化」(同じく 3.3.1.1.2.2 で後述) が実現した例であるという。この指摘を de Swart (1998a) のアプローチで言い換えれば、(35a) の習慣読みは、(35c) に示す事象性記述 (= 活動表現) が、(35b) のようにコアーションを経ることで実現しているのに対し、(36a) の習慣読みはコアーションを何ら経ずに実現している、ということになる。

- (35) a. Mary swims in the ocean. (Smith ²1997: 41)
 b. [PRES [C_{ds} [Mary swim in the ocean]]] (Habitual State)

- c. [Mary swim in the ocean] (Activity)
- (36) a. Ellen believes in ghosts. (Smith ²1997: 41)
- b. [PRES [Ellen believe in ghosts]] (Stative)
- c. [Ellen believe in ghosts] (Stative)

なお、同様の交替現象は、ドイツ語においては見られない。後述するようにドイツ語においては、状態だけでなく、活動と **Accomplishment** も現在時制でアスペクト交替なく、すなわち非習慣読みで実現可能と見なせる。⁹⁵

3.3.1.1.2.1.2 持続性

次に持続性について Smith (²1997: 41f.) は、様々な表現との共起可能性および共起する際の解釈の変更がそれと相関するとして、5点指摘している。

第1に、持続時間を表す **for** 前置詞句と所要時間を表す **in** 前置詞句は、(37a) (38a) (39a) におけるように、持続を含意する表現とでないともそもそも共起できないという。⁹⁶ すなわち、持続を含意しない表現とは、(40a) のように意味的に適切に共起できなかつたり、(41a) のように、一見共起できるように見えても、その際は **in** 前置詞句が時点の解釈(「～後(の時点)に」)に限定されたりするという。また(42a) においては、**for** 前置詞句によって反復読みが生じるという。

- (37) a. Mary walked in the park for an hour. (Smith ²1997: 41)
- b. [Mary walk in the park] (Activity)
- (38) a. Mary built the sandcastle in an hour. (Smith ²1997: 41)
- b. [Mary build the sandcastle] (Accomplishment)

⁹⁵ 仮にドイツ語の **PRES** を、状態、活動、**Accomplishment** を入力に取って、入力と同じ出力を返す演算子として定義するならば、例えば *Marie schwimmt im Meer.* というドイツ語文が、(i) 非習慣読みと (ii) 習慣読みを持つのは、**PRES** と文脈によるコアーションの結果として記述できるだろう：

- i. a. *Marie schwimmt im Meer.* マリーは海で泳いでいる。
 b. [PRES [Marie schwimm- im Meer]] (Activity)
 c. [Marie schwimm- im Meer] (Activity)
- ii. a. *Marie schwimmt im Meer.* マリーは海で泳ぐ(習慣である)。
 b. [PRES [C_{as} [Mary schwimm- im Meer]]] (Habitual Stative)
 c. [Marie schwimm- im Meer] (Activity)

⁹⁶ de Swart の概観からも明らかであるし、また後述もするが、持続を含意すれば両前置詞句と必ず共起できるというわけでは勿論ない。なお、Leiss (1992: 44) が批判的に指摘しているように、持続性 (*Durativität*) という用語が非有界の意味で用いられることもあるが、Smith (²1997) は両者を適切に区別している。

- (39) a. Mary was sick for a week. (Smith ²1997: 41)
 b. [Mary be sick] (Stative)
- (40) a. #The bomb exploded for an hour. (Smith ²1997: 41)⁹⁷
 b. [the bomb explode] (Achievement)
- (41) a. The bomb exploded in an hour. (Smith ²1997: 41)⁹⁸
 b. [the bomb explode] (Achievement)
- (42) a. He coughed for an hour. (Smith ²1997: 41)
 b. [he cough] (Semelfactive)

第2に、開始ないし終了を表す動詞の支配を受けられるかどうかとの相関、およびその際の解釈の変更との相関も指摘されている。持続を含意する表現は、(43) (44) (45) に示すように当該動詞の支配を受けられるが、持続を含意しない表現は、(46) (47) (48) (49) に示すようにそれが多かれ少なかれ難しいという。なお、(46a) のほうが (47a) よりも容認性が高いのは、(46a) においては爆発という時点に至る前段階 (preliminary stages) を想定できる可能性があるからだという。

- (43) a. Mary began to build the sandcastle. (Smith ²1997: 41)
 b. [Mary build the sandcastle] (Accomplishment)
- (44) a. Mary stopped building the sandcastle. (Smith ²1997: 41)
 b. [Mary build the sandcastle] (Accomplishment)
- (45) a. Mary finished building the sandcastle. (Smith ²1997: 41)
 b. [Mary build the sandcastle] (Accomplishment)
- (46) a. ?The bomb started to explode. (Smith ²1997: 42)
 b. [The bomb explode] (Achievement)
- (47) a. ??The baloon started to burst. (Smith ²1997: 42)
 b. [The baloon burst] (Achievement)
- (48) a. #The bomb stopped exploding. (Smith ²1997: 42)
 b. [The bomb explode] (Achievement)

⁹⁷ もしも1時間繰り返し爆発できるような爆弾が想定できるのであれば、反復読みが可能と考えられる。

⁹⁸ 後述するように Smith (²1997) は、the bomb started to explode の容認性に疑問符を付す際に、爆発という時点に至る前段階 (preliminary stages) を想定できる可能性に言及しているが、(41) においても、前段階が想定できるのであれば、in 前置詞句を所要時間読みすることは可能かもしれない。

(49) d. #The bomb finished exploding. (Smith ²1997: 42)

b. [The bomb explode] (Achievement)

第3に、持続性は、時点表現との共起可能性およびその際の解釈の変更とも関連するとされる。持続を含意しない *the clock struck* (より正確には [the clock strike]) は、(51a) のように時点表現と問題なく共起できるが、持続を含意する *They ate dinner* (より正確には [they eat dinner]) は、(50a) のように、時点表現と共起すると、起動相へと変更される、つまり (50a) では「正午に正餐を食べ始めた」という意味へと解釈が変更される、という。

(50) a. They ate dinner at noon. (Smith ²1997: 42)

b. [they eat dinner] (Accomplishment)

(51) a. The clock struck at noon. (Smith ²1997: 42)

b. [the clock strike] (Achievement)

なお、3.3.1.2.1.1 で後述するように、ドイツ語においては例えば Accomplishment 表現と時点表現は、進行相への解釈変更をもたらすと言われており、この点も英語とドイツ語の違いと考えられる。

第4に、持続性を含意しない *The balloon burst* ([the balloon burst]) や *The bomb exploded* ([the bomb explode]) は、(52) に示すように、持続を含意する *slowly*, *quickly* といった副詞規定と共起できないとされる。なお (54a) は (46a) と同様に、爆発という時点に至る前段階 (*preliminary stages*) を想定できる可能性があるために容認性が相対的に少し高いとされている。

(52) a. The door opened slowly. (Smith ²1997: 42)

b. [the door open] (Accomplishment)

(53) a. #The balloon burst slowly. (Smith ²1997: 42)

b. [the balloon burst] (Achievement)

(54) a. ?#The bomb exploded slowly. (Smith ²1997: 42)

b. [the bomb explode] (Achievement)

第5に、持続性の有無と、不完了的な見方 (*imperfective viewpoint*) をとった場合、

すなわち英語においては進行形にした際の解釈の差も指摘されている。これは、持続を含意する [The door open] の過去進行形 (55a) は The door opened を、すなわち多かれ少なかれドアが開いたことを含意するが、持続を含意しない [Mary reach the top] の過去進行形 (56a) は Mary reached the top を含意せず、登頂という出来事の前段階にあったことを含意するに過ぎない、ということの指摘と解釈できる。

(55) a. The door was opening. (Smith ²1997: 42)

b. [the door open] (Accomplishment)

(56) a. Mary was reaching the top. (Smith ²1997: 42)

b. [Mary reach the top] (Achievement)

3.3.1.1.2.1.3 非分離可能性

Smith (²1997: 43f.) は、Accomplishment 表現と Achievement 表現を弁別する素性として過程 (process) と結果 (outcome) への「非分離可能性 (Non-detachability)」を挙げ説明しているが、非分離可能性というのは、特定の条件下での持続性に還元可能と考えられる。

Smith (²1997: 28, 44) によれば、almost と Accomplishment 表現が共起する場合 2 つの解釈が可能で、例えば (57a) において almost はドアを閉めるという出来事全体を作用域にとって「John はもう少しでドアを閉め (始め) るところだった」という意味になり得るだけでなく、到達点 (culmination) のみを作用域にとって「John はもう少しでドアを閉め (終わ) るところだった」という意味になり得る。それに対し、almost と Achievement 表現が共起する場合は 1 通りの解釈しかできず、例えば (58a) において、almost はレースに勝つという到達点のみしか作用域にとれず、(58a) は「John はもう少しでレースに勝つところだった」という意味にしかならない、という。⁹⁹

(57) a. John almost closed the door. (Smith ²1997: 44)

⁹⁹ なお、(57) で指摘された現象は、現代ドイツ語においては多少異なる形で現れる可能性がある。almost に対応するドイツ語表現の 1 つは fast であるが、Nicolay (2007: 49) によれば fast は、Accomplishment 表現と接続法で共起する場合には、確かに 2 つの解釈を持つ、すなわち出来事全体も到達点のみも作用域にとれるが (Der Kaktus wäre fast aufgeblüht 「そのサボテンは {もう少しで開花し始めるところだった / 開花し終わるところだった}」)、直説法で共起する場合には、あくまで到達点のみを作用域にとるという (Der Kaktus war fast aufgeblüht 「そのサボテンは開花し終わるところだった」)。

b. [John close the door] (Accomplishment)

(58) a. John almost won the race. (Smith ²1997: 44)

b. [John win the race] (Achievement)

また, Smith (²1997: 44) は, 既に見たような *in x time* の2つの解釈(所要時間表現「～かけて」 vs. 時点表現「～後(の時点)に」)も非分離可能性に関連付けている。すなわち *in x time* は, Accomplishment 表現と共起する場合は, 過程と結果の両方を作用域とする所要時間表現となり, Achievement 表現と共起する場合は結果のみを作用域とする時点表現となる, という。

とはいえ Achievement 表現が非持続的であるならば, すなわちそれが単一時点の表現ならば, almost もそれ全体を作用域に取らざるを得ないし, *in x time* も時点表現と解釈せざるを得ない。つまり, 過程と結果の非分離可能性は, 次に述べる [+有界性] および既に述べた [+動性] な条件下での [-持続性] の帰結であり, 反対にその分離可能性は, 同条件下における [+持続性] の帰結であると考えられる。

3.3.1.1.2.1.4 有界性

Smith (²1997) は有界性を「内在的な終点 (a final natural endpoint)」の有無と結びつけているが(例えば同書 19 頁), 有界性の言語上での実現として同書 42 頁以下では, 完成 (completion) を含意するような動詞(例えば finish)や副詞規定(例えば in an hour)との共起可能性との相関を指摘している。¹⁰⁰

例えば (59) (60) (63) (64) に示すように, Mary walked to school は有界的な表現であり, 所要時間の in an hour とも finish とも問題なく共起するが, for an hour といった完成を含意しない表現との共起は容認度が落ちる, という。また逆に, (61) (62) (65) (66) に示すように, Mary walked in the park は非有界の状況を指し, for an hour や stop といった完成を含意しない表現とは問題なく共起するが, in an hour や finish と共起する際には容認度が落ちる, という。

¹⁰⁰ 下記の例を見ると明らかのように, ここでは Achievement 表現は考慮されておらず, Accomplishment 表現と活動表現の有界性による弁別のみが念頭に置かれている。なお, 有界性は, Smith (²1997) においてそうであるように, 内在的な終点の有無によって定義されることが今日一般的で, したがって Achievement 表現も有界的と呼ばれることが一般的に思われるが, 「3時間かけて」のような所要時間表現との共起を持って有界性を定義している Zifonun/Hoffmann/Strecker (1997: 1864ff.) や過程を含む表現においてのみ有界性を問題にする Comrie (1981: 44, 47) においては, ここでいう Accomplishment 表現のみが「有界的」と呼ばれている。

- (59) a. Mary walked to school in an hour. (Smith ²1997: 43)
 b. [Mary walk to school] (Accomplishment)
- (60) a. Mary finished walking to school. (Smith ²1997: 43)
 b. [Mary walk to school] (Accomplishment)
- (61) a. ?Mary walked in the park in an hour. (Smith ²1997: 43)
 b. [Mary walk in the park] (Activity)
- (62) a. ?Mary finished walking in the park. (Smith ²1997: 43)
 b. [Mary walk in the park] (Activity)
- (63) a. ?Mary walked to school for an hour. (Smith 1997: 43)
 b. [Mary walk to school] (Accomplishment)
- (64) a. Mary stopped walking to school. (Smith ²1997: 43)
 b. [Mary walk to school] (Accomplishment)
- (65) a. Mary walked in the park for an hour. (Smith ²1997: 43)
 b. [Mary walk in the park] (Activity)
- (66) a. Mary stopped walking in the park. (Smith ²1997: 43)
 b. [Mary walk in the park] (Activity)

また、(67) (68) (69) (70) に示すように、特定の用法における *take* や *spent* との共起可能性との相関も指摘している。当該 *take* は有界的な表現を支配し、当該 *spent* は非有界的な表現を支配するという。なお、(69a) は手紙を書き終えていないことを示唆するという。

- (67) a. It took me an hour to write the letter. (Smith ²1997: 43)
 b. [x write the letter] (Accomplishment)
- (68) a. ?It took me an hour to listen to music. (Smith ²1997: 43)
 b. [x listen to music] (Activity)
- (69) a. ?I spent an hour writing the letter. (Smith ²1997: 43)
 b. [x write the letter] (Accomplishment)
- (70) a. I spent an hour listening to music. (Smith ²1997: 43)
 b. [x listen to music] (Activity)

3.3.1.1.2.1.5 曖昧なケース

Smith (20197) は一方で動性 (ないし静性), 持続性, 有界性という 3 つの時間素性によって, 表 3.2 に示したように状況を 5 タイプに分類するのであるが, 他方で, ある文が指示する状況タイプが曖昧なケースというのも論じている。まず, (71) (72) の「動詞布置 (verb constellation)」(≒事象性記述) は活動表現とも Accomplishment 表現とも解されると, すなわち有界性に関して曖昧であるという。その根拠としては (71) (72) が持続時間表現とも所要時間表現とも共起できることが挙げられている。

(71) a. Mary combed her hair. (Smith 20197: 58)

b. [Mary comb her hair] (Activity)

b' [Mary comb her hair] (Accomplishment)

(72) John mowed the lawn. (Smith 20197: 58)

b. [John mow the lawn] (Activity)

b' [John mow the lawn] (Accomplishment)

こうした有界性に関する曖昧さは, her hair や the lawn が集合概念を指し, したがって個体的にも非個体的 (ないし mass 的) にも解釈できることに起因していると考えられる。¹⁰¹ 個体的に解釈すれば, 髪を丸ごと梳かす, 芝を丸ごと刈るという有界の事態解釈, すなわち Accomplishment 解釈が, 非個体的に解釈すれば, 髪をいくらか, つまり不特定の量梳かすという非有界の事態解釈, すなわち Activity 解釈が得られる。

次に Smith (20197: 58) は, (73) (74) の事象性記述は Accomplishment 表現とも Achievement 表現とも解される, すなわち持続性に関して曖昧であるという。

(73) a. Candace solved the problem.

b. [Candace solve the problem] (Accomplishment)

b'. [Candace solve the problem] (Achievement)

(74) Candace solved the problem in an hour.

¹⁰¹ 藤縄康弘先生の指摘である。

Smith (21997: 58) は、「問題が複数の部分からなる場合は持続的、すなわち Accomplishment であろうし、問題が単一時点で解き得るのであれば、当該出来事は瞬間的、すなわち Achievement である (If the problem has several parts the event is probably durative, an Accomplishment. But if the problem can be solved in a single moment, the event is instantaneous, an Achievement)」と述べている。

(73) (74) の曖昧性も、少なくともその一部は、Smith (21997: 58) が指摘するように、項が非個体的にも解釈できることに起因すると考えられる。¹⁰² the problem は個体的な解釈が無標であり、その際は、問題全体への 1 つの解答の発見という事態解釈、すなわち Achievement 解釈が可能と考えられるが、非個体的な解釈もあり得、例えば problem 1 (= the problem) が problem 1a と problem 1b という異なる個体から成り立っている場合、すなわち the problem が「集合 (group)」(Jackendoff 2001: 20) ¹⁰³ と解釈される場合には、problem 1a と problem 1b それぞれに対する解答の発見を経て problem 1 全体に対する解答の発見に至るという事態解釈に、すなわち Accomplishment 解釈になり得ると思われる。

3.3.1.1.2.2 文の時間的相的階層構造

状況タイプの規定については以上とし、Smith (21997) における文の時間的相的階層構造論を見る。その際、Smith (21997) における時制と viewpoint aspect (= 文法的アスペクト) の扱いについては、すでにそれらに関しては本稿では (10) を採用すると述べていることもあり、ひとまず置き、動詞のアスペク的な性質へのアプローチを主に参照する。

Smith (21997: 54) によれば、動詞は、「文のアスペクト中枢 (the aspectual center of a sentence)」であり、「「最単純文」へのアスペク的な貢献に基づく内在的なア

¹⁰² 「問題」が複数の部分からなる場合に限らずとも、すなわち個体的な解釈の場合であっても、それが閃きではなく努力の末に解かれるものであるならば、(73) (74) の事象性記述は Accomplishment 表現と見なせるのではないか、という指摘を藤縄康弘先生からいただいた。こうした意味での曖昧性があるとすれば、それは本稿の枠組みでは solve の多義性として扱いは得る。閃きとしての solve と努力の末の solve があるとすれば、両者における第 1 項の意味役割は同一とは見なし難い。すなわち、前者の solve の第 1 項は動作者と分析できるが、後者の solve の第 1 項は、変化の原因や契機とは見なし難いことから、むしろ経験者といった意味役割を導入して分析する必要がある。つまり、両者は本稿において別義と見なされ、またそれによって脱曖昧化される。

¹⁰³ Jackendoff (2001: 19f.) によれば、存在には、例えば a pig という名詞句によって表される、境界を有し (= [+bounded]) かつ内部構造を必ずしも含意しない (= [-internal structure]) 「個体」のほか、例えば a committee という名詞句によって表される、境界を有しかつ内部構造を含意する「groups」、例えば buses, cattle という名詞句によって表される、境界が非関与的かつ内部構造を含意する「aggregates」、例えば water という名詞句によって表される、境界が非関与的かつ内部構造を必ずしも含意しない「物質 (substances)」がある。

スペクトル値を持つ (Verbs have an intrinsic aspectual value, based on its aspectual contribution to a ‘maximally simple sentence’)」。すなわち、例えば、「最単純文における動詞配置が [+有界的] ならば、当該動詞も [+有界的] (If a verb constellation in a maximally simple sentence is [+Telic], the verb has the intrinsic feature [+Telic])¹⁰⁴」である、という。

「動詞配置」と「最単純文」という用語について説明すると、第1に「動詞配置」というのは、既に見た de Swart (1998a) における事象性記述と基本的には同じ概念である。ただし、de Swart (1998a) では事象性記述とは見なされない述語-項構造が、基本 vs. 派生 (ないし無標 vs. 有標) という非再帰的な階層構造論の制約から、Smith (2019) においては、派生ないし有標の動詞配置として扱われる場合がある。例えば、Mary coughed for an hour. (Smith 2019: 55) という文は、de Swart (1998a) の枠組みであれば、[Past [FOR an hour [Mary cough]]] という記述になると、すなわち [Mary cough] が事象性記述と考えられるが、Smith (2019: 55) では [Mary cough for hour] が派生 (ないし有標) の動詞配置として扱われている。

第2に「最単純文」とは何か説明する。Smith (2019: 54) は「最単純文とは、自動詞文ないし量子化された直接目的語を伴う文のことである (A maximally simple sentence is either intransitive or has a quantized direct object)」と述べているが、直後に挙げられている例文 (Mary walked. / John breathed. / Sam built a house. / Tim drew a picture / Tim [re]drew a picture / Bill untied the knot) にも示されているように、実際にはより狭い条件を満たす文が念頭にあると思われる。すなわち、これは Smith (2019) の章構成上も明らかだが、文法的アスペクト標識を伴わないという条件と、それから、主語も量子化されているという条件が、少なくとも前提とされていると思われる。¹⁰⁵ Smith (2019) においては、こうした最単純文における動詞配置が基本ないし無標であり、最単純文以外の文における動詞配置は派生ないし有標と扱われる。

なお、ここで言う「量子化された」というのは、3.3.1.1.2.1.5「曖昧なケース」において述べたように、個体解釈ということであると考えられる。

Smith (2019) が最単純文という概念を手がかりに基本ないし無標の動詞配置という想定を必要としたのは、構成的なアスペクト論の出発点になる、「アスペクト的な性質が動詞に内在する」という前提を保持するためであると考えられる。動詞配置

¹⁰⁴ [+Telic] の [] は原文のもの。

¹⁰⁵ 他にも、直説法である、能動文である、肯定文である、といった条件も前提とされている可能性がある。なお、Leiss (1992: 49) も unmodifizierte Basissätze という言い方で最単純文と類似のことを意図していたと思われる。

が指示する状況タイプというのは、文法的アスペクト、さらには時制という高次の階層の作用によって上書きされ得るというのみならず、3.3.1.1.2.1.5「曖昧なケース」で見たように、動詞の項が個体的に解釈されるか否かによって変化し得る。したがって、語彙項目としての動詞自体のアスペクト的な性質が直接観察できない以上、必須の項を伴い、かつそれが個体的に解釈される場合の動詞布置を無標とし、その動詞布置のアスペクト的な性質が、すなわち当該動詞のアスペクト的な性質である、とする必要があったと考えられる。¹⁰⁶

本稿は、既に述べたように、de Swart (1998a, 2012, 2019) の文の時間的相的階層構造論に基づき、ある文の基底の状況タイプに遡り、かつその基底を事象性記述と呼ぶが、事象性記述から当該動詞の持続性を明らかにする上では、Smith (2019) の上記のアプローチを取り入れることにしたい。つまり、ある動詞の持続性は、当該動詞の無標の事象性記述、すなわち個体的解釈の項を伴う事象性記述の持続性に一致するという想定に立ち、ある動詞の持続性を、無標の事象性記述に鑑みて判断することにする。

3.3.1.1.3 目末まとめ：本稿のアプローチ

3.1.1.1 ではここまで、de Swart (1998a, 2012, 2019) と Smith (2019) における状況タイプと文の時間的相的階層構造に関する想定を概観した。

これを踏まえ本稿は、既に述べた通り、第 1 に状況タイプの数と規定については Smith (2019) の想定 (=表 3.2, 以下に再掲) に依拠する。すなわち、すでに概観したような言語的実現が認められる 3 つの素性によって弁別される 5 つの状況タイプがあると考えられる。

¹⁰⁶ こうした想定をしないと、持続性は動詞に内在する性質とは見なせない。実際に例えば Klein (1994: 88) は、Clive found a bucket of nuggets. や Clive found a proof of Fermat's Last Theorem. が長い時間をかけての発見という意味にもなり得ることを根拠に、find の語彙内容に [一持続性] といった特徴を認めることに反対している。なお、Smith (2019) のアプローチでは、これらの例においては、a bucket of nuggets や a proof of Fermat's Last Theorem が非個体的解釈になる場合、[Clive find a bucket of nuggets] や [Clive find a proof of Fermat's Last Theorem] は有標の動詞布置ということになる。

	静的	持続的	有界的
状態	+	+	—
活動	—	+	—
Accomplishment	—	+	+
Achievement	—	—	+
Semelfactive	—	—	—

表 3.2: Smith (2019: 20) における状況の 5 タイプ (再掲)

第 2 に文の時間的相的階層構造については、本稿は (75) として再掲する de Swart (1998a, 2012, 2019) の想定に依拠する。

(75)(=10) [Tense [Aspect* [eventuality description]]]

(de Swart 1998a: 348; 2012: 765; 2019: 331)

de Swart (1998a, 2012, 2019) も Smith (2019) もドイツ語についてはほとんど考慮していないことも既に述べた通りだが、少なくとも上述の 2 つの想定についてはドイツ語にも適用可能と考えられる。次項では、ドイツ語においても、一定の基準に基づいて時制や文法的アスペクト標識の影響を見極めることで、基底である事象性記述の状況タイプが、例えば Achievement 表現か Accomplishment 表現かを判断できることが示される。

第 3 に本稿は Smith (2019) を参考に、ある事象性記述を、個体的解釈の項を伴う場合に、無標と判断する。そして、無標の事象性記述が指す状況の持続性を当該動詞の持続性と見なす。つまり、例えば無標の事象性記述が Achievement 表現であれば、当該動詞は [−持続的] と、Accomplishment 表現であれば [+持続的] と見なす。

本稿のアプローチについては以上とし、次の 3.3.1.2 では、本稿が特に注目する Accomplishment 表現と Achievement 表現を区別するテストについて論じ、持続性の判断基準を明確にする。

3.3.1.2 持続性による弁別：Accomplishment と Achievement

以下ドイツ語において Accomplishment 表現と Achievement 表現を区別するテストを大きく 6 種類に分けて論じていく。¹⁰⁷

¹⁰⁷ 例えば Der Luftballon platzte. 「風船が破れた。」のような文においては、世界知から、つまり

3.3.1.2.1 時間の副詞規定との共起

Accomplishment 表現と Achievement 表現の区別には、ドイツ語においても、特定の時間副詞規定との共起状況が手がかりになる。

3.3.1.2.1.1 Accomplishment 表現の場合

まず Accomplishment 表現は、第 1 に *in drei Minuten* 「3 分かけて」のような「所要時間 (Zeitbedarf)」表現とは (76) に示すように問題なく共起することが知られている。¹⁰⁸

(76) a. Das Kaninchen aß die Möhre in zehn Sekunden. (Löbner ²2015: 162)

そのウサギはその人参を 10 秒で食べた。

b. [das Kaninchen ess- die Möhre] (Accomplishment)¹⁰⁹

Accomplishment 表現は第 2 に、*drei Minuten lang* 「3 分間」のような「持続時間 (Zeitdauer)」表現とは、解釈の特定の変更を伴わないと共起できないことが知られている。すなわち、Accomplishment 表現が持続時間表現と共起する場合、(77) に示すように部分的進行 (Konativ) 解釈が生じるか、(78) に示すように結果状況の持続という解釈が生じるか、あるいは反復可能な状況であれば (79) に示すように習慣解釈が生じる。¹¹⁰

風船が破れる際には持続は普通問題にならないことから、事象性記述は Accomplishment 表現ではなく Achievement 表現と推定できる。しかし、これはあくまで「推定」でありテストに基づく判断ではないので以下では扱わない。

¹⁰⁸ *in drei Minuten* が「3 分かけて」という所要時間を表し得ることは、それが「3 分後に」や「3 分以内 (のある時点) に」という意味になり得ることに比べ、見落とされがちである (例えば、成田/中村 2004: 106; 国松ほか (編) ²1998: 1161; 岩崎/小野寺 1969: 322ff.)。しかしながら、例えば Löbner (²2015: 162) や Durrell/Breé (1993: 321ff.) の見解通り、*in* 前置詞句はドイツ語においてもやはり所要時間を表し得ると考えられる。この点に関して詳しくは 3.3.1.2.1.3 「付説：時間の *in* 前置詞句」で述べる。

¹⁰⁹ ドイツ語文における事象性記述とその状況タイプを本稿は、de Sward (1998a) などに依拠して、このように表記する。時制や文法的アスペクトに中立な表記をするため、例えば (76b) では *ess-* という語幹のみを表記している。なお (76b) は [das Kaninchen die Möhre *ess-*] という語順で表記することも可能だが、本稿では、接頭辞動詞と不変化詞動詞の区別に便利なので、本来定形の部分を 2 番目の位置に置く表記法を用いる。

¹¹⁰ de Swart の枠組みを使うと、(77a) (79a) の状況はそれぞれ次のような記述になると考えられる。(78a) については、いかなる記述が適切か筆者には不明なので保留としたい。

i. [PAST [zwei Stunden lang [C_{eh} [Sven trink- seinen Cocktail]]]]

ii. [PAST [drei Jahre lang [C_{eh} [er geh- morgens zur Schule]]]]

(77) a. Sven trank zwei Stunden lang seinen Cocktail. (Löbner ²2015: 162)

Sven は 2 時間の間自分のカクテルを少しずつ飲んだ。

[=カクテルを飲むという活動が 2 時間続いた, ということ]

b. [Sven trink- seinen Cocktail] (Accomplishment)

(78) a. Sie ging zwei Stunden lang in die Sauna (Löbner ²2015: 162)

彼女はサウナに行ってそこで 2 時間過ごした。

[=結果状況としてのサウナ滞在が 2 時間続いた, ということ]

b. [sie geh- in die Sauna] (Accomplishment)

(79) a. Drei Jahre lang ging er morgens zur Schule. (Rapp 1997: 90)

3 年間彼は (毎) 朝学校に通った。

b. [er geh- morgens zur Schule] (Accomplishment)

また Accomplishment 表現は第 3 に, um 12 Uhr のような「時点 (Zeitpunkt)」表現とは, (80) に示すようにドイツ語においては共起し難いか, あるいは (81) に示すように, 共起するとしても進行相として解釈される。¹¹¹ なお, Rapp (1997: 46) は, (81) のような文は, gerade がいない場合, 非文にはならないが容認性が落ちるといふ趣旨のことを述べている。

(80) a. Das Holz verbrannte ?um 12 Uhr/in zwei Stunden. (Rapp 1997: 45)

その材木は {?12 時に/2 時間で} 燃え終わった。

b. [das Holz verbrenn-] (Accomplishment)

(81) a. Um 10 Uhr schob ich gerade den Kinderwagen nach Hause. (Rapp 1997: 45)

10 時には私はベビーカーを家へと押しているところだった。

b. [ich schieb- den Kinderwagen nach Hause] (Accomplishment)

3.3.1.2.1.2 Achievement 表現の場合

次に Achievement 表現は, (82) に示すように時点表現とは問題なく共起するが, 所要時間表現とは共起できないことが知られている。

¹¹¹ 既に述べたように Smith (²1997: 45) によれば, 英語においては, Accomplishment 表現と時点表現の共起は「起動相 (inceptive)」への解釈変更を生む。すなわち例えば Sam walked to school at noon. は「Sam は学校に向かって正午に歩き始めた。」という意味になるという。そうだとすればこの点も英語とドイツ語の違いということになる。

(82) a. Marie erfuhr die Nachricht um 12/*in einer Stunde. (Rapp 1997: 45)

マリーはその知らせを {12 時に/*1 時間かけて} 知った。

b. [Marie erfahr- die Nachricht] (Achievement)

また, Achievement 表現は, 持続時間表現とは解釈の特定の変更を伴わないと共起できないことも知られている。すなわち Achievement 表現が持続時間表現と共起する場合, (83) に示すように, 持続時間表現は結果状況を修飾することになるか, あるいは反復可能な状況であれば, (84) に示すように習慣読みを生む。¹¹²

(83) a. das Licht fünf Minuten anmachen (Löbner ²2015: 165)

その明かりを 5 分間ついた状態にする

[=5 分間の点灯状態を引き起こす, ということ]

b. [x mach- das Licht an] (Achievement)

(84) a. Jahrelang schlug Michael die Haustür zu. (Rapp 1997: 90)

何年もの間 Michael は玄関の扉をボタンと音を立てて閉めることを繰り返した。

b. [Michael schlag- die Haustür zu] (Achievement)

なお Achievement 表現は, (85) に示すように, 確かに in zwei Tagen といった前置詞句と共起するものの, その際当該前置詞句は時点の解釈となるので, Achievement 表現はやはり所要時間表現とは共起できない, ということになる。

(85) a. der Brief kam in zwei Tagen an (Löbner ²2015: 165)¹¹³

その手紙は 2 日後に着いた

[=2 日の配送期間の後に到着という出来事が起きたということ]

[≠到着という出来事が 2 日かけて起きた]

b. [der Brief komm- an] (Achievement)

¹¹² de Swart の枠組みを使うと, (83a) (84a) はそれぞれ例えば次のように記述できる。

i. [PAST [x mach- das Licht fünf Minuten an]]

ii. [PAST [jahrelang [C_{eh} [Michael schlag- die Haustür zu]]]]

¹¹³ この例文は, 後述する Rapp (1997: 178: 註 163) の in 前置詞句と時制に関する見解と矛盾している。なお, 文末に「。」がないのは原文ママで, 例文として番号付きで挙げられているのではなく, 本文の説明中に挙げられていることに起因する。

3.3.1.2.1.3 付説：時間の in 前置詞句

上述のことに鑑みると、時間の in 前置詞句は、例えば Durrell/Breé (1993: 321ff.) 及びその引用を含む Kiss et al. (2016: 103f.) の見解通り、ドイツ語においても英語においてと同様 (Smith 1997: 44, 114f.), Accomplishment 表現と共起すれば所要時間を表せるが, Achievement 表現と共起すると時点を表す, と言える。¹¹⁴

時点の in 前置詞句について以下 2 点補足する。第 1 に, Achievement 表現と時間の in 前置詞句が共起する際に問題となる時点には, 「～以内 (のある時点) に」と 「～後 (の時点) に」という 2 つの解釈が可能な場合がある。

(86) In einer Woche finden zwei Konferenzen statt.

a. Innerhalb einer Woche finden zwei Konferenzen statt.

[1 週間以内に会議が 2 つある。]

b. In einer Woche werden zwei Konferenzen stattfinden.

[1 週間後に会議が 2 つある。]

(Schröder 1990: 129)

第 2 に先行研究には, 「～後 (の時点) に」という意味の in 前置詞句については, 現在時制でしか用いられないと述べるものもある。例えば Rapp (1997: 178: 註 163) は, (87) (88) を挙げてそう述べている。

(87) Ich schreibe den Brief in einer Stunde. → Nachzeitigkeit oder Rahmenadverbiale

[私はその手紙を {1 時間後に / 1 時間かけて} 書く。]

(88) a. Ich schrieb den Brief in einer Stunde. → Rahmenadverbiale

[私はその手紙を 1 時間かけて書いた。]

b. Ich schrieb den Brief nach einer Stunde. → Nachzeitigkeit

[私はその手紙を 1 時間後に書いた。]

(Rapp 1997: 178: 註 163)

¹¹⁴ 他方 Rapp (1997: 178) は, Er fand den Schlüssel [[er find- den Schlüssel] (Achievement)] と Rahmenadverbiale としての, すなわち本稿で言う所要時間表現としての in fünf Minuten との共起を問題ないとしている。しかし, Er fand den Schlüssel in fünf Minuten の in 前置詞句はあくまで時点表現ではないかと思われる。Rapp (1997: 178f.) の言う通り, finden においては確かに先行する「探索 (Suchen)」という行為が考えられる場合もあるが, そうでない場合もある。[er find- den Schlüssel] は「探索」の有無にはあくまで中立な Achievement 表現であり, それと共起する時間の in 前置詞句は, 発見の時点を表すのではないだろうか。

Rapp (1997: 178: 註 163) によれば, in 前置詞句は, (87) に示されているように, 現在時制では「～後 (の時点) に」という意味の時点表現 (=Nachzeitigkeit) とも, 「～かけて」という意味の所要時間表現 (=Rahmenadverbiale) とも (本稿の考えでは, Accomplishment 表現との共起である限りにおいて) 解釈できるが, (88a) に示されているように過去時制では所要時間表現としてしか解釈できず, 「～後 (の時点) に」という意味は, (88b) のように例えば nach 前置詞句によって表される, という。¹¹⁵

しかし Rapp (1997: 178: 註 163) のこうした見解は, 「～後 (の時点) に」という意味の in 前置詞句が過去時制の文で用いられている例えば既出の (85a) に鑑みても, 次に挙げる (89) のような例, すなわちインターネット上のショッピングサイトにおける顧客からの「注文品が x 日後に届いた」というフィードバックが数多く観察されることに鑑みても, 強すぎる主張に思える。¹¹⁶

(89) a. Meine Bestellung kam in zwei Tagen an!! (<https://www.etsy.com/ch/listing/224750678/beeindrucken-sie-art-6mm-vertikale>: 最終アクセス : 2022 年 9 月 23

日) 私の注文品は 2 日後に届きました！！

b. [Meine Bestellung komm- an] (Achievement)

3.3.1.2.1.4 中間まとめ

以上で述べたことは, 表 3.3 の通りまとめられる。

¹¹⁵ 「～後 (の時点) に」という意味の in 前置詞句は発話時を基準とするが nach 前置詞句は過去の一時点を基準とする, という記述は, ドイツ語の学習書においてもしばしば見られる (例えば, 在間 ³2017: 188)。そういった傾向がある可能性は否めないが, 後述するように, 「～後 (の時点) に」という意味の in 前置詞句が過去の一時点を基準とする例も観察される。なお, 本稿に直接関わらないので立ち入らないが, 当該 nach と in の違いについては, Engelberg (2000: 71f.) に詳しい。

¹¹⁶ ポーランド語からドイツ語への翻訳書を出典とするものだが, 筆者がコーパス外で見つけた, 「～後 (の時点) に」という意味の in 前置詞句が過去時制で用いられている文例をさらに挙げておく。Der Bräutigam sollte sich frühestens in einem Monat in Dziewicza Góra vorstellen, mitsamt den amtlichen Nachweisen seiner Heiratsfähigkeit, zwei Ringen und dem Hochzeitanzug. (Martyna Bunda (2019): *Das Glück der kalten Jahre*, aus dem Polnischen von Bernhard Hartmann, Berlin: Suhrkamp Verlag, 267f.) 花婿は早ければ 1 ヶ月後に Dziewicza Góra に挨拶にくることになっていた。結婚可能であることを示す証明書, 2 つの指輪, 婚礼衣装と一緒に。

	Accomplishment 表現	Achievement 表現
所要時間表現	✓	-
持続時間表現	部分的進行, 結果状況の持続; 習慣	結果状況の持続; 習慣
時点表現	進行相	✓

表 3.3: Accomplishment 表現および Achievement 表現と各時間表現との共起可能性と解釈の変更 (「✓」は, 解釈の変更なく共起が可能なこと, 「-」は共起が可能なことを表す。)

表 3.3 に基づいて言えることは 3 つある。第 1 に, 有界かつ動的な表現 (以下, 「表現 A」と呼ぶ) と時点表現が共起する場合, 進行相解釈が得られれば表現 A は Accomplishment 表現ということになり, それができなければ Achievement 表現ということになる。第 2 に, 表現 A が時間の in 前置詞句と共起する場合, 当該前置詞句を所要時間と解釈できれば, 表現 A は Accomplishment 表現ということになる。¹¹⁷ 第 3 に, 表現 A と持続時間表現が共起する場合, 部分的進行解釈が得られれば, 表現 A は Accomplishment 表現ということになる。¹¹⁸ したがって本稿はこの 3 つを Accomplishment 表現と Achievement 表現を区別する基準として採用する。

(90) 表現 A と時点表現が共起する場合 :

- a. 進行相解釈 → 表現 A: Accomplishment 表現
- b. 非進行相解釈 → 表現 A: Achievement 表現

(91) 表現 A と時間の in 前置詞句が共起する場合 :

in 前置詞句が所要時間解釈 → 表現 A: Accomplishment 表現

(92) 表現 A と持続時間表現が共起する場合 :

部分的進行解釈 → 表現 A: Accomplishment 表現

3.3.1.2.2 現在時制における無標のエピソード用法解釈

本稿は, ある表現が Accomplishment 表現か Achievement 表現かを判断するために, 現在時制の特定の用法における解釈も基準とする。

ドイツ語の現在時制は, (93) に示すような, 習慣や真理といった恒常的ないし無時間的な事態を表す総称的な用法と, (94) に示すような, 具体的な場面に関わる

¹¹⁷ 反対に時点表現という解釈になる場合は, 時点と共起する場合について既に述べたことが当てはまる, ということになる。

¹¹⁸ 部分的進行解釈が得られない場合, すなわち結果状況の持続という解釈や習慣解釈になる場合, Accomplishment 表現と Achievement 表現のいずれか判断できない。

「エピソード用法 (episodic)」(Carlson 2012: 829) に大別でき、¹¹⁹ 後者の用法はさらに、Reichenbach (2005 [1947]) に依拠するならば、(94a) のような、事象時および参照時が時間軸上で発話時と重なる用法、(94b) のような、事象時・参照時が発話時の後に位置付けられる用法、(94c) のような、事象時・参照時が発話時の前に位置付けられる用法 (= 歴史的現在) に分けられる。¹²⁰

(93) a. Der Apfel fällt nicht weit vom Stamm. (Helbig/Buscha 2017: 132)

リンゴは幹から遠くには落ちないものだ [= 蛙の子は蛙]。

b. Silber ist ein Edelmetall. (Helbig/Buscha 2017: 132)

銀は貴金属である。

(94) a. Seine Tochter studiert (jetzt) in Berlin. (Helbig/Buscha 2017: 130)

彼の娘は (今) ベルリンの大学で学んでいる。

b. Ich schließe die Arbeit (morgen) ab. (Helbig/Buscha 2017: 131)

私はその仕事を (明日) 終える。

c. 1914 beginnt der erste Weltkrieg. (Helbig/Buscha 2017: 132)

1914 年第一次世界大戦が始まる。

このうち、事象時・参照時が時間軸上で発話時と重なるか発話時の後に位置付けられるかの区別は、以下説明するように、持続性の有無にも関わり、したがって Accomplishment 表現か Achievement 表現かの区別にも関わるということが知られている。なお以下では、事象時・参照時が発話時と重なる用法および解釈を「現在読み」と呼び、事象時・参照時が発話時の後に位置付けられる用法および解釈を「未来読み」と呼ぶ。筆者が付す訳文では、両者が常に対応するわけではないこと (有田 2019 を参照) に留意しつつ、現在読みであることを示すためにシテイル形を、未来読みであることを示すためにスル形を用いる。

現在時制のエピソード用法において、Accomplishment 表現は、(95) に示すよう

¹¹⁹ Carlson (2012: 829) が述べているように、この「総称的な用法」は individual-level に関わり、「エピソード用法」は stage-level に関わる。なお、前者に関して Carlson (2012: 829) は、「gnomic imperfectivity」(Bertinetto/Lenci 2012) という呼称を採用している。

¹²⁰ Duden 4 (82009: 506) のように「発話時が事象時と重なる用法」と「発話時が事象時に先行する用法」の区別は、事象の開始を正確に規定することが難しいことから、容易ではないと述べる文献もあるが、両者は原理的には区別可能である。

に現在読みだけでなく未来読みも許容するのに対し,¹²¹ 他方の **Achievement** 表現は, (97) (98) (99) に挙げるような有標な使用を除くと, (96) に示す通り未来読みになる。¹²²

(95) a. **Accomplishment** Ich schreibe einen Aufsatz (Progressiv mit Gegenwartsbezug oder Nichtprogressiv mit Zukunftsbezug) (Löbner ²⁰¹⁵: 169)

私は作文を {書いている／書く} (現在指示を持つ進行相表現 [=現在読み] か, 未来指示を持つ非進行相表現 [=未来読み])

b. [Ich fahre nach Tübingen.] ist eine Accomplishmentaussage. Als Aussage unterwegs kann man sie progressiv mit Gegenwartsbezug interpretieren; alternativ ist eine perfektive Lesart mit Zukunftsbezug möglich. (Löbner ²⁰¹⁵: 182)

[Ich fahre nach Tübingen. 私はテュービンゲンに {向かっている／向かう}] は **Accomplishment** 表現である。途上にあることを表す表現として, 現在指示を持つ進行相表現と解釈できる。他には, 未来指示を持つ完了相表現という読みも可能である。

(96) einfacher Wechsel [= **Achievement** の一種] Ich mache den Fernseher an. (Zukunftbezug) (Löbner ²⁰¹⁵: 168)

私はテレビをつける。(未来指示)

(97) 遂行動詞である場合 (有標なケース 1) :

a. I promise I will wait for you. (Löbner ²⁰¹⁵: 168)

b. Ich taufe dich auf den Namen Hans, Hiermit erkläre ich Belgien den Krieg (Nicolay 2007: 47)¹²³

¹²¹ Nicolay (2007: 45) は, **Accomplishment** 表現などの持続的な表現は, 現在時制のエピソード用法において, 現在読みが基本であり, 未来読みは文脈からの示唆によってのみ生じる, と述べている。

¹²² ドイツ語の **Accomplishment** 表現のこうした振る舞いは, 英語のそれと異なっている。Löbner (²⁰¹⁵: 168) が述べるように, 英語であれば, 例えば write a paper という **Accomplishment** 表現は, 現在時制におけるエピソード用法において, **Achievement** 表現と同様に基本的に未来読みになり (I write a paper 私は論文をこれから書く), 現在読みになるためには進行形にする必要がある (I am writing a paper 私は論文を書いている)。

¹²³ 文末に「.」がないのは原文ママで, 例文として番号付きで挙げられているのではなく, 本文の説明中に挙げられていることに起因している。

お前をハンスと名付けます，これでもってベルギーに宣戦を布告する

(98) 実況中継，およびそれに類する場合（有標なケース 2）：

- a. Now Khedira passes the ball towards Özil, but ... (Löbner ²2015: 168)
- b. [wenn der Sprecher gerade aus dem Fenster schaut] „Der Kaminfeger kommt“ (Thieroff 1992: 99f.; Nicolay 2007: 47 における引用部分も参照)
[話し手が窓から見ている場合に]「煙突掃除人が来る」

(99) 否定文の場合（有標なケース 3）：

- a. Negation of dynamic predicates can also lead to a temporal characteristic of states.
[i]. They didn't send me a reply for two months
[ii]. #They sent me a reply for two months.
The negative sentence can be true for every moment of the two-month period; the affirmative sentence cannot. (Mittwoch 2019: 34)
- b. Die Präsensia der Perfektiva haben im allgemeinen futurischen Charakter: vgl. *ich komme, ich treffe dich an der Kirche*, aber nicht durchweg [...] insbesondere nicht in der Negation: *ich finde das Buch nicht, er kommt nicht, ich treffe das Ziel nicht* [...] (Behaghel 1924: 112) ¹²⁴

完了相 [=ここでは，Achievement] 動詞の現在形は一般に未来の性格を有する。「来ます (ich komme)」，「君に教会のところで会う (ich treffe dich an der Kirche)」を参照。しかし例外がないわけではない [...] 特に否定文においてはそうではない。「その本が見つからない (ich finde das Buch nicht)」，「彼は来ない (er kommt nicht)」，「的に当たらない (ich treffe das Ziel nicht)」

こうした振る舞いの差は，Nicolay (2007: 45) に依拠すれば，Achievement 表現が内的構造を持たないことに起因する，と説明できるし，Leiss (1992: 48f) に依拠すれば，Achievement 表現は外的パースペクティブを求めると，つまり Achievement 表現において発話者は状況を内側から眺めることができない，と説明できる。

以上のことから本稿は，表現 A が現在時制のエピソード用法で実現し，かつ (97)

¹²⁴ Mittwoch (2019: 34) の，動的な述語の否定は「状態」への変更を引き起こすという指摘はドイツ語にも当てはまり，Behaghel (1924: 112) が挙げるこれらの文は，有標な状態表現となっていて，それ故に現在読みが可能と考えられる。

(98) (99) に示した有標な使用以外で現在読みになるのであれば、その表現を Accomplishment 表現と判断する。¹²⁵

(100) 表現 A が現在時制でかつ無標のエピソード用法の場合：

現在読み → 表現 A: Accomplishment 表現

3.3.1.2.3 gerade との共起

先行研究には、Accomplishment 表現と Achievement 表現で「今まさに、その時まさに」という語義の gerade (以下「同時性の gerade」と呼ぶ) との共起可能性に違いが見られるとするものがある。

例えば Nicolay (2007: 42) は、現在ないし過去時制において、(101) (102) (105) (106) に示すように、内的構造を持つ、すなわち本稿の言い方だと [+持続性] である Accomplishment 表現と同時性の gerade の共起は問題ないとしているが、内的構造を持たない、すなわち本稿の言い方だと [-持続的] な Achievement 表現と当該 gerade の共起に関しては、(103) (104) に示すように、その際の容認性の低下を指摘している。なお、同様の指摘は Heinold (2015: 46) でもなされている。

(101) a. Er repariert gerade das Radio. (Nicolay 2007: 42)

彼は今まさにラジオを修理しているところだ。

b. [er reparier- das Radio] (Accomplishment)

(102) a. Das Haus brennt gerade ab. (Nicolay 2007: 42)

その家は今まさに焼け落ちているところだ。

b. [Das Haus brenn- ab] (Accomplishment)

(103) a. ?Petra erkennt den Täter gerade wieder. (Nicolay 2007: 42)

?ペトラは犯人を今まさに再認しているところだ。

b. [Petra erkenn- den Täter wieder] (Achievement)

(104) a. ?Hans findet gerade den Schlüssel. (Nicolay 2007: 42)

?ハンスは今まさに鍵をみついているところだ。

b. [Hans find- den Schlüssel] (Achievement)

¹²⁵ 他方で、ある表現が現在時制のエピソード用法で実現し、かつ未来読みになる場合は、既に見たように Accomplishment 表現も Achievement 表現も未来読みを実現し得ることから、状況タイプは一義的に判断できない。

(105) a. Das Kind wacht gerade auf. (Nicolay 2007: 42)

その子供は今まさに目を覚ましているところだ。

b. [Das Kind wach- auf] (Accomplishment)

(106) a. Der Student schläft gerade ein. (Nicolay 2007: 42)

その学生は今まさに寝入るところだ。

b. [Der Student schlaf- ein] (Accomplishment)

しかし他方で, Leiss (1992: 49) は *ich finde gerade die Lösung* 「私は今答えを見つけているところだ」という表現を容認し, 当該 *gerade* は二次的に内的パースペクティブ (=ここでは, 現在読み) を生み出すと述べている。*gerade* が二次的に内的パースペクティブを生み出すとすれば, *gerade* は (103b) (104b) と同, すなわち本来外的パースペクティブ (=ここでは, 未来読み) となる *Achievement* 表現とも問題なく共起できるはずである。

この矛盾は, *ich finde gerade die Lösung* が内的パースペクティブである, すなわち「私は今答えを見つけているところだ」という意味なのは, *gerade* に起因するのではなく, (98) の「実況中継, およびそれに類する場合」であることに起因する, と考えれば解消できる。¹²⁶

それはこういうことである。1 人称単数, つまり「私」が「答えを見つける」という出来事は, 「私」自身によって, 内観に基づいて「見つけているところだ (=分かっている)」と実況中継的に描写できる。また, その意味であれば, 3.3.1.2.2 「現在時制における無標のエピソード用法解釈」の論述に鑑みて, *ich finde die Lösung* ([*ich find- die Lösung*] (*Achievement*)) は, *gerade* がなくても, 有標な現在読みが可能と考えられる。しかし, 非 1 人称単数が, つまり「私」以外が「犯人を再認する」や「鍵を見つける」という出来事を, 話し手たる「私」がそのように実況中継的に描写することは通常不可能である。そしてこのことは *gerade* が共起しても変わらないので, (103a) (104a) は容認性が落ちると考えられる。

そうであるとすれば, 同時性の *gerade* との共起可能性は, *Accomplishment* 表現か *Achievement* 表現かの区別に直接関与するわけではなく, したがって両者を区別する基準としてはあまり適していないということになる。

¹²⁶ 同時性の *gerade* の働きが, 内的パースペクティブ化ではなく内的パースペクティブの明示と考えられることについては, Mair 2012: 805 も参照した。

3.3.1.2.4 否定の作用域

否定の作用域の観察も Accomplishment 表現か Achievement 表現かの判断に資する可能性がある。例えば Jürgen fuhr zum Kindergarten 「Jürgen は幼稚園に行った」(の事象性記述) は乗り物での移動という過程と到着という結果を含意する Accomplishment 表現だが, Löbner (2015: 164) によれば, そのことは (107) に示すように, 対応する否定文が過程と到着をすべて否定することに表れている。

(107) Jürgen fuhr nicht zum Kindergarten. (Löbner 2015: 164)

Jürgen は幼稚園に行かなかった。

それに対し, Jürgen kam beim Kindergarten an. 「Jürgen は幼稚園に到着した」(の事象性記述) は, 移動という過程の結果である到着しか含意しない Achievement 表現だが, そのことは (108) に示すように, 対応する否定文が移動という過程を否定しないことに表れているという。そうだとすれば, 否定の作用域の観察は, Achievement 表現か Accomplishment 表現かの判断に資することになる。

(108) Jürgen kam nicht beim Kindergarten an. (ibid.)

Jürgen は幼稚園に到着しなかった。

[=幼稚園に向かったことは前提 (Präsupposition) となっている]

ただし, 例えば過程が否定されなければ, つまりそれが前提であれば Achievement 表現であり, 反対に過程が否定されれば, つまりそれが含意であれば Accomplishment 表現であると判断できるわけでは必ずしもない。なぜなら, 実際には (109) の場合のように, 前提であっても否定の作用域に入る場合のあることが知られているからである (Horn 2001 [1989] における meta-linguistic negation. なお, これに関しては de Swart 1998b: 36 も参照した¹²⁷)。

(109) David hat NICHT Ehebruch begangen: er ist nicht einmal verheiratet! (Seuren 1991: 292)

¹²⁷ de Swart (1998b: 36) が挙げるのは次の例である。Paul didn't stop smoking. この文は, 普通であれば Paul が喫煙習慣を有していたことを前提とする。しかし, その前提まで否定されているという解釈も, すなわち, そもそも喫煙習慣がなかったから禁煙することもなかった, という解釈も成り立つという。

David は浮気していない、彼は結婚してさえいないのだから！

[=「浮気をする (Ehebruch begehen)」は通常、「結婚している (verheiratet sein)」を前提とするにも関わらず、前者の否定によって後者も否定されている例]

Seuren (1991: 292) によれば、(109) におけるような否定の用法は、有標であるとはいえ、否定による前提のテスト (=いわゆる Strowson テスト) が発見法上の価値しかなく、確実なものではないことを示している。したがって本稿も、否定の作用域の観察を適宜判断の参考とはするが、判断基準としては用いないことにする。

3.3.1.2.5 開始や終了を表す動詞による支配

Accomplishment 表現と Achievement 表現は、特定の動詞の支配を許容するかどうかという点でも区別できるとされる。例えば、既に見た通り Smith (²1997: 41f.) は、英語を例に Accomplishment 表現は stop の支配を許容するが、Achievement 表現はそれを許容しないことを指摘している。このことは、Accomplishment とは異なって Achievement が「出来事の開始、過程、終了を除外する」(Nicolay 2007: 41ff.)、「内的構造を持たない」(ibid.)、「外的パースペクティブである」(Leiss 1992) ことに起因すると考えられるが、そうだとすれば、ドイツ語においても同様のことが成り立つと予想される。

実際 Nicolay (2007: 44) は、ドイツ語において Accomplishment 表現は、anfangen や beginnen といった開始表現の支配を受けられるが、Achievement 表現はその支配を受け難いことを観察している。¹²⁸

(110) a. Er fing an, das Radio zu reparieren. (Nicolay 2007: 44)

彼はラジオを修理し始めた。

b. [er reparier- das Radio] (Accomplishment)

¹²⁸ 例えば、コーパスで検索すると、Achievement 表現を形成する典型的な動詞 finden 「見つける」と beginnen が共起する次のような例が見つかるが、この例においては mich が内部構造をもつ集合体として解釈されることによって分配読みが生じているか、後述のように見つけることの反復の開始が表されていると考えられる。Plötzlich hörte ich auf zu suchen und begann zu finden: mich selbst. (<https://peterjanki.com/peter-janki/>, 最終アクセス: 2020年1月24日) また、[+持続的] であることは開始や終了の表現の支配の必要条件であって十分条件ではないと考えられる。したがって後述するように、判断基準としては、「当該表現の支配を受けるならば、表現 A は Accomplishment 表現」という定式化になる (なお、「Accomplishment 表現ならば当該表現の支配を受けられる」ということではもちろんない)。

- (111) a. Der Kaktus fängt an zu verblühen. (Nicolay 2007: 44)
そのサボテンの花は咲き止み始める。
b. [der Kaktus verblüh-] (Accomplishment)
- (112) a. ??Petra begann den Täter wiederzuerkennen. (Nicolay 2007: 44)
??ペトラは犯人を再認し始めた。
b. [Petra erkenn- den Täter wieder] (Achievement)
- (113) a. ??Hans fängt an, den Schlüssel zu finden. (Nicolay 2007: 44)
??ハンスは鍵を見つけ始める。
b. [Hans find- den Schlüssel] (Achievement)
- (114) a. Der Student beginnt einzuschlafen. (Nicolay 2007: 44)
その学生は眠り込み始める。
b. [der Student schlaf- ein] (Accomplishment)
- (115) a. Das Baby fing langsam an aufzuwachen. (Nicolay 2007: 44)
その赤ちゃんはゆっくりと目覚め始めた。
b. [das Baby wach- langsam auf] (Accomplishment)

当該開始表現の支配状況に鑑みて Accomplishment 表現と Achievement 表現を判別する論述は、少なくとも次に引用する Streitberg (1900: 61f.) まで遡れる。

- (116) Man vergleiche nur einmal zwei Sätze wie *Er begann das Brett durchzubohren* und *Er begann den Feind zu durchbohren*. An dem ersten Beispiel wird niemand Anstoss nehmen, denn es besagt nichts anders als: ‘Er begann die (durative) Handlung des Bohrens mit der Absicht sie bis zum Moment der Vollendung fortzusetzen.’ Der zweite Satz aber verletzt unser Sprachgefühl, da wir einen Widerspruch zwischen der thatsächlichen Aktionsart des Zeitworts und der nach beginnen erwarteten deutlich empfinden. Wiederum werden wir uns eine solche Fügung nur dann gefallen lassen, wenn der Sinn des Satzes durch den Zusammenhang iterativ wird (Streitberg 1900: 61f.: 原文隔字は下線で代替)
- 「彼はその板を掘り貫き始めた (Er begann das Brett durchzubohren) と「Er begann den Feind zu durchbohren (彼は敵を貫き始めた)」という 2 つの文をぜひ比べてみてほしい。前者の例に違和感を持つ人はいないだろう。というのもその意味するところは「彼は掘削という (持続的) 行為を、完遂の瞬間まで続

ける意図をもって開始した」ということに他ならないからである。しかし第 2 文は私たちの語感に反する。動詞の実際の動作相と **beginnen** の後に期待される動作相との矛盾がはっきり感じられるのである。この場合も、こうした結合は、結合によって文の意味が反復相になる場合にだけ許容できる。

(116) では、*Er begann den Feind zu durchbohren.* も反復の開始という解釈ならば許容できる旨が述べられているが、¹²⁹ これは、本稿のアプローチだと **Achievement** 表現である事象性記述 [*er durchbohr- den Feind*] ではなく非 **Achievement** 表現 (=ここでは、反復相) である [*C_{eh} [er durchbohr- den Feind]*] であれば **beginnen** の支配を受けられるという指摘に読み替えられる。したがって **Achievement** 表現は **beginnen** の支配を受け難いという見解自体は保持できる。

他方で、ドイツ語においても **Accomplishment** 表現は、終了表現 (例えば *aufhören*) の支配を受けられるが、**Achievement** 表現はそれが難しいという予想も正しいと考えられる。なぜなら、あるインフォーマントから、次に示す (117a) (118a) は正しいが、(119a) は適切でないし (120a) も普通は適切ではないという趣旨の回答が得られたからである (「*」と「??」は筆者による表記)。

(117) a. *Der Kaktus hört auf zu verblühen.*

b. [*der Kaktus verblüh-*] (**Accomplishment**)

(118) a. *Der Student hört auf einzuschlafen.*

b. [*der Student schlaf- ein*] (**Accomplishment**)

(119) a. **Hans hört auf den Schlüssel zu finden.*

b. [*Hans find- den Schlüssel*] (**Achievement**)

(120) a. ??*Petra hört auf, den Täter wiederzuerkennen.*

b. [*Petra erkenn- den Täter wieder*] (**Achievement**)

したがって、表現 A が開始または終了を表す動詞の支配を受ける例が確認でき、かつ反復の開始や終了が問題でないならば、当該表現を **Accomplishment** 表現と判断できる、ということになる。¹³⁰

¹²⁹ 原文では「文の意味が反復相になる」という言い方がなされているが、ここで問題にされているのは「開始の反復」ではなく「反復の開始」であると考えられる。

¹³⁰ 繰り返しになるが「**Accomplishment** 表現であれば、開始または終了を表す動詞の支配を受けられる」というわけではもちろんない。

(121) 表現 A が開始または終了を表す動詞の支配を受け、かつ反復の開始や終了が問題でない → 表現 A: Accomplishment 表現

3.3.1.2.6 内部構造を前提とする表現との共起

Nicolay (2007: 44) によれば、内部構造を有する Accomplishment 表現は (122a) (123a) (124a) (125a) に示すように、内部構造を前提とする表現である *zur Hälfte*, *nach und nach* と問題なく共起するが、Achievement 表現は、内部構造を有しないことから、(126a) (127a) に示すように、そうした表現とは共起し難い場合があるという。

(122) a. Er reparierte das Radio zur Hälfte (Nicolay 2007: 44)

彼はラジオを半分まで直した。

b. [er reparier- das Radio] (Accomplishment)

(123) a. Das Haus brannte zum Teil ab (Nicolay 2007: 44)

その家は一部焼け落ちた。

b. [das Haus brenn- ab] (Accomplishment)

(124) a. Der Student ist schon halb eingeschlafen (Nicolay 2007: 44)

その学生はすでに半分寝てしまっている。

b. [der Student schlaf- ein] (Accomplishment)

(125) a. Nach und nach wachte das Baby auf (Nicolay 2007: 44)

徐々にその赤ちゃんは目を覚ました。

b. [das Baby wach- auf] (Accomplishment)

(126) a. ??Petra erkannte den Täter zur Hälfte wieder (Nicolay 2007: 44)

??ペトラは犯人を半分まで再認した。

b. [Petra erkenn- den Täter wieder] (Achievement)

(127) a. *Hans fand den Schlüssel zum Teil (Nicolay 2007: 44)

*ハンスは鍵を部分的に見つけた。

b. [Hans find- den Schlüssel] (Achievement)

例外的に Achievement 表現と内部構造を前提とする表現が共起する例として Nicolay (2007: 44) が挙げているのは、次に引用する (128) と (129) である。

(128a) において **halb** が共起できるのは、それが意味的には動詞句ではなく「家 (das Haus)」という名詞句を修飾するからであり、すなわち「家」が爆破という出来事を繰り返し被り得る対象と解釈されるからであり、(129a) において **nach und nach** が共起できるのは、「[食事 (Essen) を構成する] いくつかの料理を順にテーブルに乗せる」という反復解釈となるからである、すなわち「食事」がテーブルに乗せるという出来事を繰り返し被り得る対象と解釈されるからであると述べている。

(128) a. Man hat das Haus schon halb gesprengt (Nicolay 2007: 44)

その家はすでに半分爆破された。

b. [Man spreng- das Haus] (Achievement)

(129) a. Nach und nach stellte sie das Essen auf den Tisch (Nicolay 2007: 44)

彼女は食事を徐々にテーブルに乗せた。

b. [sie stell- das Essen auf den Tisch] (Achievement)

以上のことを踏まえると、内部構造を前提とする表現との共起から事象性記述を判別するのは困難と言える。例えば (128) に関しても、[Man spreng- das Haus] が Achievement 表現であるとの前提においては、(128a) において **halb** は家を修飾している (=その家の半分を爆破した) という解釈になるとはいえ、もしその前提がなければ、**halb** が動詞句を修飾している (=その家の爆破を半分行った) という解釈も可能であり、つまりは [Man spreng- das Haus] が内部構造を持つという可能性を、すなわちそれが Accomplishment 表現であるという可能性を排除できない。したがって、内部構造を前提とする表現との共起は、Achievement 表現と Accomplishment 表現の判別基準としてはあまり有効ではないと考えられる。

3.3.1.2.7 その他の基準

ある有界表現が Accomplishment 表現か Achievement 表現かを判断するための基準は他にも存在する。しかし、本稿の手法や扱う事例に鑑みて有効な基準は現時点では他に見出せていない。

例えば、Accomplishment 表現とは異なって Achievement 表現は、(130a) (131a) (132a) に示すように、いわゆる **am** 進行形 (別名、ラインラント進行形) で実現し難いと言われることがある。しかし (133a) (134a) に示すように、解釈の特定の変更によって例外が生じることも知られている。また、4「事例研究 I」で扱う事例を

コーパスで見ると際には、それらが不定詞およびその名詞化においては接頭辞動詞か不変化詞動詞か判断できないことから、本稿が *am* 進行形に着目するメリットは少ないと言える。

(130) a. ??Petra ist den Täter am Erkennen (Nicolay 2007: 43)

??ペトラは犯人を認識しているところだ。

b. [Petra erkenn- den Täter] (Achievement)

(131) a. ??Hans ist den Schlüssel am Finden (Nicolay 2007: 43)

??ハンスは鍵を見つけているところだ。

b. [Hans find- den Schlüssel] (Achievement)

(132) a. ??Der Ballon ist am Platzen (ibid.)

??その風船は破れているところだ。

b. [der Ballon platz-] (Achievement)

(133) a. Rebecca war (das Spiel) am Gewinnen (Engelberg 2000: 74)

レベッカは（そのゲームに）勝つところだ。

[=勝利を目前にしている, ということ]

b. [Rebecca gewinn- (das Spiel)] (Achievement)

(134) a. Die Männer sind (das Haus) am Sprengen. (Nicolay 2007: 43)

その男たちは（家を）爆破するところだ。

[=爆破を目前にしている, ということ]

b. [die Männer spreng- das Haus] (Achievement)

また、Accomplishment 表現と Achievement 表現は、例えば接続法や受動態での実現において、あるいは *seit* 句との共起において、異なった振る舞いをする可能性もあり、そうした観点で区別の基準を立てられる可能性もある。¹³¹ しかし、この点に関しては先行研究の調査を未だ十分成し得ていないので、今後の課題としたい。

3.3.1.2.8 目末まとめ：本稿の基準

本稿が Accomplishment 表現と Achievement 表現を区別するために用いる基準は、次のようにまとめられる。

¹³¹ 藤縄康弘先生の指摘に基づく。なお、ドイツ語の *seit* 句に関しては von Stechow (2002) を、ドイツ語における態とアスペクトについては藤縄 (2010: 92ff.) を参照した。

- (135) a. 有界かつ動的な表現 A が（以下では繰り返さない）、時点表現と共起する場合：
- i. 進行相解釈 → 表現 A（以下では繰り返さない）：Accomplishment 表現
 - ii. 非進行相解釈 → Achievement 表現
- b. 時間の in 前置詞句と共起する場合：
- in 前置詞句が所要時間解釈 → Accomplishment 表現
- c. 持続時間表現と共起する場合：
- 部分的進行解釈 → Accomplishment 表現
- d. 現在時制における無標のエピソード用法の場合：
- 現在読み → Accomplishment 表現
- e. 開始または終了を表す動詞の支配を受け、かつ反復の開始や終了が問題でない → Accomplishment 表現

3.3.1.3 項末まとめ

(135) の諸基準によって、ある文の事象性記述の状況タイプが Accomplishment 表現か Achievement 表現か判断できたなら、次に問題となるのは、その事象性記述が、当該動詞の無標の事象性記述と言えるかどうかである。3.3.1.1.3 で述べたように、本稿は、ある事象性記述を、生起する項が個体解釈の場合に無標であると見なす。そして無標の事象性記述の持続性を当該動詞の持続性で見なす。

当該動詞の持続性が解明できたら、競合においてどちらがより過程的な表現かを問う。その際の基準ないし方針を (136) に示しておく。なお、(136) は [+動的] かつ [+有界的] であることが前提となっている。

- (136) a. 一方の動詞が [+持続的] で他方が [-持続的] の場合、前者の方が過程性が強いと判断する。
- b. 両方が [+持続的] の場合、どちらの過程性が強いかは、実例分析の際に明らかになった特徴（例えば、過程に目を向ける副詞規定との共起頻度）に鑑みて個別に判断する。なお、有意な差異が認められない場合は、過程性判断を保留する。
- c. 両方が [-持続的] の場合は、過程性は非関与的と判断する。

(136b) に「有意な差異」とあるが、本稿は有意性検定のために石川／前田／山崎（編）（2010）付属の統計ソフト「多変量解析システム Seagull-Stat」2010 版を用いる。

3.3.2 比喩性・抽象性の判断に向けて

比喩性・抽象性も直接観察することはできないので、本稿は、ある表現が比喩的ないし抽象的な意味で実現する頻度を、その表現の比喩的ないし抽象性で見なす。

以下そのことを順に説明するが、まず、ある動詞はどのような場合において、あくまでも語義としては同一でありながら、比喩的ないし抽象的な意味で実現していると判断できるかを考えたい。そう判断できるのは、Skirl/Schwarz-Friesel（2007: 52）も述べているように、「選択制限（Selektionsbeschränkungen）」から逸脱する場合であると考えられる。¹³²

選択制限とは、Löbner（²2015: 141）によれば、「項に対する論理的な諸条件（die logischen Bedingungen für Argumente）」のことであり、そこから逸脱すると、「意味推移（Bedeutungsverschiebungen）」が生じる。選択制限の逸脱による意味推移の例を次に挙げる。

(137) a. Moskau hat die Rebellen für besiegt erklärt. (Löbner ²2015: 145)

モスクワ [=ロシア政府] は反乱者たちが制圧されたと宣言した。

b. Sein Zorn verpuffte. (ibid.)

彼の忿懣はポンと爆発した [=突然跡形もなく消え去った]。

(137) が示すように、選択制限の逸脱による意味推移には 2 種類ある。Löbner（²2015: 145）によれば、「宣言する（erklären）」は動作主（＝第 1 項）として人や人的組織を選択するのに対し、(137a) の第 1 項である「Moskau」は都市の名前であり、この逸脱を解消するために、「Moskau」という項に意味推移が生じている。それに対し、(137b) では、項ではなく動詞の意味に推移が起きているという。「ポンと爆発する（verpuffen）」は字義通りには、ガスといった気体を対象（＝第 1 項）として選択するのに対し、「忿懣（Zorn）」は感情である。この逸脱を解消するために、

¹³² ここで問題にする比喩（性）は、あくまでも表現内のことであり、世界と表現の間に成り立つようなものではない点に注意されたい。つまり、ある状況ないし事態を、本来その状況ないし事態を指すのではない表現で表すという意味での比喩、例えば、太郎が亡くなった時に「太郎は眠りについた」というような比喩は問題としない。

「ポンと爆発する (verpuffen)」は、「突然跡形もなく消える」という比喩的（ないし抽象的）な意味に推移しているという。

本稿が問題にするのは、語彙項目としての動詞の比喩性ないし抽象性であるから、本稿は、上記2つの意味推移のうちの后者、すなわち動詞の意味推移に着目し、ある動詞が述語として被る意味推移の頻度をもって、ある動詞の比喩性・抽象性を測ることにする。

(138) ある動詞の比喩性・抽象性：選択制限からの逸脱に起因する当該動詞の意味推移の頻度

次に、2.2.2「抽象的・比喩的 vs. 具体的・原義的」の引用(10)を(139)として再掲し、(138)に示した測定基準が妥当か確認しておく。

(139)(=10) Die untrennbaren Verben werden oft übertragen gebraucht: er hat mich mit Blicken durchbohrt. (Duden ³2018: 294)

非分離の durch 動詞は、しばしば比喩的に用いられる。彼は私を視線で貫いた。

(139)の「彼は私を視線で貫いた (er hat mich mit Blicken durchbohrt)」において、Blicke(n)「視線」という項は durchbohren の選択制限から逸脱していると考えられる。なぜなら、durchbohren は、道具 (Instrument) として例えば錐などの穴を開け得る存在を選択すると言える。この逸脱は durchbohren が、「穴を開ける」という字義通りの具体的な意味から、「精神的に圧迫する」といった比喩的・抽象的な意味に推移することで解消されていると考えられる。¹³³

そうだとすれば、(138)の測定基準は妥当と言える。(139) (=10)の「しばしば比喩的に用いられる」という箇所は、当該動詞において、選択制限からの逸脱に起因する動詞の意味推移頻度が高いというのと同じであると考えられる。

以上で、ある動詞の比喩性・抽象性をどのように測定するかが明確になった。ここでは最後に、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合において、どちらが比喩的・抽象的かを判断する基準ないし方針について述べる。今回の事例研究においては、ある語義に

¹³³ 既に述べたように本稿は、本稿における語義の定義に照らして durchbohren に「精神的に圧迫する」という他義を認めることはしない。語義の定義によってはこれを他義として記述することも勿論可能であるが、競合の範囲をできるだけ広く取るという本稿の方針にとってはそのような語義を細分化していくことは有意義ではない。

において複数の種類の意味推移が観察されることはなかったので、そうした場合を想定から外すならば、(140)の基準ないし方針が立てられる。

- (140) a. 動詞 A において、競合する動詞 B におけるよりも意味推移の頻度が高い場合、動詞 A をより比喩的・抽象的と判断する。
- b. 動詞 A においても競合する動詞 B においても意味推移が見られない場合、ならびに、意味推移は見られるがその頻度に両語で有意差がない場合、比喩性・抽象性の関与は否定される。

3.4 章末まとめ

本章では、まず 3.1 で、事例研究において *durchbohren*, *durchblättern*; *übersiedeln*, *überführen*; *unterschieben*; *blühen* 群, *klingen* 群, *lügen* 群を取り上げることを述べた。

次に 3.2 で、事例の収集には、コーパスとして *Deutsches Referenzkorpus* を、検索エンジンとして *COSMASII* を利用する旨を述べた。また、検索から出力、有効データの収集とその分析を通じて語義抽出へと至る具体的な方法・手順を説明した。

それから 3.3 では、事例の観察において過程性と比喩性・抽象性を判断する基準を論じた。第 1 に過程性に関しては、(135)の諸基準を用いながら文の時間的相的階層構造の基底、すなわち事象性記述の指す状況タイプを解明し、そこから当該動詞の持続性を明らかにする。なお、ある動詞の持続性を本稿はその動詞の無標の(= 個体解釈の項を伴う場合の)事象性記述の持続性に等しいと見なす。そして、競合する 2 つの動詞のどちらがより過程に注目する表現かを判断する。

第 2 に抽象性・比喩性に関しては、選択制限からの逸脱に起因する動詞の意味推移の頻度に着目し、競合する 2 つの動詞のどちらがより抽象的ないし比喩的な表現かを判断する。

本章で、事例研究の準備は整った。以下で取り組む事例研究は 2 つの章からなる。4. 「事例研究 I : タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞の競合」では、既に選定した当該競合の代表例 (= *durchbohren*, *durchblättern*; *übersiedeln*, *überführen*, *unterschieben*) を、5. 「事例研究 II : タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合」では、当該競合が含まれると予想される動詞群のうち、動作相

（具体的には，開始相と終了相）の関与が大きい例（=**blühen** 群，**klingen** 群）と，小さい例（=**lügen** 群）を取り上げる。

4. 事例研究 I : タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1

不変化詞動詞の競合

本章では、タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞の競合（＝いわゆる分離・非分離動詞の分離可能な場合と分離しない場合の競合）を取り上げる。その際特に注目するのは、2.4 で述べたように、過程性と抽象性・比喩性に関わるような差異である。

以下 1 節では、**durch-** 動詞を、2 節では **über-** 動詞を、3 節では **unter-** 動詞（**unterschieben**）を扱う。4 節はまとめである。

4.1 **durch-** 動詞

本節では、いわゆる分離・非分離の **durch-** 動詞のうち、**durchbohren** と **durchblättern** をそれぞれ取り上げる。

4.1.1 **durchbohren**

本項では、4.1.1.1 において接頭辞動詞としての **durchbohren** を、4.1.1.2 において不変化詞動詞としての **durchbohren** を個別に分析する。その結果を 4.1.1.3 で一度まとめ、4.1.1.4 で両語の競合について考察する。¹³⁴

4.1.1.1 接頭辞動詞

検索日：2020年7月18日；ヒット件数：7638件
分析データ：251件；有効データ：200件

durchbohren は、(1) に示すように、ほとんどの場合他動詞として〈～を穿つ：～に穴を開ける〉という語義で用いられる。

(1) Die Berliner Bankräuber haben sogar eine Betonmauer **durchbohrt**. (Süddeutsche

¹³⁴ 各事例において、これとほぼ同じように分析と考察を進めることになるので、本段落のような説明は以下では適宜省略する。

Zeitung, 21.01.2013)

そのベルリンの銀行強盗らは、コンクリート壁にまで穴を開けた [< durchbohren]。

項の意味役割について言えば、durchbohren は第 1 項として動作主を伴う。(1) に示したように、意志や意図を持った「典型的な動作主」(Primus 2012: 23ff.) と共起するだけでなく、次に挙げる (2) におけるように、意志や意図を持たない存在と共起することも多いが (200 例中 86 件 : 43%)、その場合でも、変化の原因や契機と考えられることから、当該存在を本稿は動作主と分析する (本稿における意味役割については 3.2.3 を参照されたい)。なお、この分析は、durchbohren の動作受動 (Vorgangspassiv, werden-Passiv) 文において能動文の主語にあたる名詞句表示がある場合、それがほぼ全ての例において、(3) に示すように、von 前置詞句という、動作受動文における動作主の典型的な実現形式で実現していたことに鑑みても適切と言える。¹³⁵

(2) Eine der Kugeln **durchbohrte** ein Bein des auf dem Fahrersitz Schlafenden, eine andere verletzte den auf dem Rücksitz liegenden Mitfahrer am Fuß. (Süddeutsche Zeitung, 10.09.1997)

銃弾の 1 つは運転席で寝ていた人の片脚を貫通し [< durchbohren]、もう 1 つは後部座席で横になっていた同乗者の足に怪我を負わせた。

(3) Ich beginne bewusst mit einer Vision - der meines palästinensischen Freundes Issam Sartawi, der von neun Kugeln der Hamas **durchbohrt** wurde, weil er für Frieden mit Israel eintrat. (profil, 28.08.2006)

私は意識的に、あるヴィジョンに取り組み始めた。— パレスチナの私の友人 Issam Sartawi, イスラエルとの和平を支持したためにハマスの 9 発の銃弾に穴を開けられた [< durchbohren] 人物のヴィジョンである。

次に durchbohren の第 2 項に関して言えば、(1) (2) (3) に示されているように、

¹³⁵ 例外は、次の 1 例のみで、この例では第 1 項が durch 句で実現している。George fällt ins Wasser und wird durch einen herabstürzenden Teil der Gartenlaube durchbohrt. (Wikipedia, 2011) [George は水の中に落ち、落下してきた園亭の一部によって穴を開けられる。] なお、durchbohren の第 1 項が動作受動文において mit 句で実現する例は確認できなかったので、それが例えば道具といった意味役割ではないことが分かる。

それは「対象」であり、さらに言えば、ほとんどの場合被動物である。また、先行研究には **durchbohren** と被成目的語の共起を不可とする文献がある。

(4) *Er durchbohrt ein Loch. (Klofáč 2014: 34; Šimečková 1995: 197)

*彼は穴を開ける。

今回の収集例においては、被成物を伴うように見える例も (5) の 1 例確認されたが、(4) に鑑みると、(5) のみをもって **durchbohren** に対して〈～を穿つ〉という語義の他に「穴を開けて～をつくる」といった語義を認める必要があるとまでは言えない。¹³⁶ また (5) の「トンネル (Tunnel)」は、被成物と解釈できるにしても、少なくとも (4) の「穴 (Loch)」のように典型的な被成物ではなく、「2008 年 10 月 16 日」以前に既に大部分が完成していた (= ほぼ存在していた) という意味では、むしろ被動物に近いと考えられる。¹³⁷

(5) Am 16. Oktober 2008 wurde der 270 m lange Tunnel Ostrík **durchbohrt**. (Wikipedia, 2011)

2008 年 10 月 16 日に、270 メートルの Ostrík トンネルが開通した [**durchbohren**]。

なお、**durchbohren** が自動詞的な振る舞いを見せる例も (6) の 1 件確認されたが、(6) においては、行為自体に焦点が当たる文脈での実現に際して、第 2 項が省略されていると考えられるので、新たに自動詞としての語義を認めるには及ばないと考えられる。

(6) Lucio Muñoz arbeitete mit verschieden [sic!] Materialien, wie verbranntes Papier, Holz, usw. Er **durchbohrte**, zerriss, machte Schnitte in die Leinwand, wie ein informalistischer Künstler. (Wikipedia, 2011)

Lucio Muñoz は、様々な素材、例えば焦げた紙、木材等で作品を作っていた。彼は穴を開け [**durchbohren**]、引き裂き、キャンバスに切り込みを入れた。アンフォルメルของ芸術家のように。

¹³⁶ 4.1.1.2 で述べるように、当該語義は **durchbohren** に対しては認める必要がある。

¹³⁷ 成田節先生の指摘に基づく。

4.1.1.2 不変化詞動詞

検索日：2019年12月29日；ヒット件数：2241件
 分析データ：2241件；有効データ：74件

durchbohren は、durchbohren に比べ多義性の高い表現で、(7) に示すような〈(穴を) 掘る〉という語義の自動詞用法、(8) に示すような典型的には〈～を穿つ：～に穴を開ける〉という語義の他動詞用法、それから (9) に示すような〈穴を開けて通る〉という語義の再帰用法を有する。

(7) Wegen geologischen Schwierigkeiten konnten wir die damals geplante Technik nicht anwenden. Jetzt **bohren** wir mit einem hochtechnologischen Verfahren unter der Thur **durch**. (St. Galler Tagblatt, 07.11.2000)

地質学的な困難故に、当時予定していた技術を適用することができませんでした。私たちは今、ハイテク技術によって Thur 川の下を {掘っています／掘ります} [durchbohren]。

(8) „Zwar haben einige Autos wie unser Colt noch einen Metalltank. Aber das Blech ist ebenso leicht anzubohren wie Plastik. Und was brächte es, noch ein weiteres Blech zum Schutz anzubringen. Dann **bohrt** der Dieb eben zwei Bleche **durch**“ (Nordkurier, 11.11.2015)

「確かに我々の Colt のようにまだ金属製のタンクを有する車もいくつかあるとはいえ、ブリキはプラスチックと同じくらい穴を開けるのが簡単です。ブリキをもう 1 枚防御のために取り付けたとしてどうなるでしょう。そうしたら泥棒はまさにその 2 枚のブリキに穴を開ける [durchbohren] だけです」

(9) Die Kugel **bohrte** sich in den Brustkorb unter der Lunge **durch** und blieb unter dem Schulterblatt stecken. (Tages-Anzeiger, 11.10.2013)

銃弾は、肺下部の胸郭の中へと穴を開けて通り [durchbohren]、肩甲骨の下に嵌りこんだ。

有効データ 74 例中におけるそれぞれの用法の頻度分布は、表 4.1 に示す通りである。

用法	語義	件数 (割合)
自動詞	〈穴を掘る〉	14 (19%)
他動詞	〈～を穿つ〉など	27 (36%)
再帰	〈穴を開けて通る〉	33 (45%)

表 4.1: durchbohren の用法・語義の頻度分布

4.1.1.1 で見たように、接頭辞動詞 durchbohren には他動詞用法のみが認められるので、durchbohren に関して以下では自動詞用法と再帰用法に関しては立ち入らず、durchbohren と競合する可能性のある他動詞用法 (27 例) のみを論じる。¹³⁸

まず、他動詞用法の durchbohren の第 1 項は、例えば既出の (8) においてそうであるように、基本的には典型的な動作主である。当該データ 27 例のうち、第 1 項が意思や意図を持たない非典型的な動作主であったのは 2 例のみ (7%) であった。ただし、2 例とも出典は異なるとはいえ同じ文であるから、タイプとしては 1 例ということになる。次に当該例を示す。

(10) Einstein nimmt es mit der Hygiene nicht so genau: „Wenn ich anfangen, mich körperlich zu pflegen, dann bin ich nicht mehr ich selber“, sagt er. Daher versetzt er „seine Zahnbürste aus wissenschaftlichen Erwägungen in den Ruhezustand“, denn „Schweineborste **bohrt** Diamanten **durch**: Wie sollten also meine Zähne ihr widerstehen?“ (Rhein-Zeitung, 28.06.2005)

Einstein は、衛生のことをあまり厳密には考えていなかった。「身体の手入れを怠らなければ、私はもはや自分自身ではない」と彼は言った。それ故に彼は「歯磨きブラシを使うのを、科学的な考察から」止めることになる。「ブラシの毛 (豚の剛毛) はダイヤモンドに穴を開ける [durchbohren]。であれば私の歯がどうしてブラシに抵抗できようか」というのだ。

次に、durchbohren の第 2 項は「対象」であり、中でも、既出の (8) (10) においてそうであるように、被動物である例が 20 例と多いが、(11) に示すように被成物である例も 7 例と比較的多く確認された。(11) におけるような durchbohren には〈穴を開けて～をつくる〉という語義が認められる。

¹³⁸ こうした件数に鑑みると「～を穿つ」という意味では、durchbohren よりも durchbohren の方が一般的と言える。なお、同見解は Kjellman (1945: 38) にも見出せる。

(11) 1977 zogen die Amerikaner aus der Gutleutkaserne aus, und etwa zur gleichen Zeit **bohrte** die Stadt auch noch einen S-Bahn-Tunnel unter dem Viertel **durch**, sodass kaum noch einer durchlaufen musste, um vom Hauptbahnhof zu den Banken zu kommen. (Die Zeit (Online-Ausgabe), 17.10.2013)

1977年、アメリカ人たちは Gutleut 営舎から出て行ったのだが、おおよそ時を同じくして市はその地区の地下に都市鉄道のトンネルを作りもした [< durchbohren] ので、フランクフルト駅から銀行の多い地区に行くのに、その地区を通り抜けなくてはならないという人はほとんどいなくなった。

また、第 2 項が被動物ではあるものの、〈～を穿つ：～に穴を開ける〉という語義では捉えられない例も少なくとも 2 件確認された。(12) はそのうちの 1 例だが、durchbohren の第 2 項は、例えば既出の (8) の「ブリキ」とは異なって、穴を開けられる対象ではない。このような例に鑑みると、durchbohren に〈～を埋め込む〉といった語義を認める必要があると言える。

(12) So leistete er mir erste Assistenz, zeigte mir die Stellen oberhalb und unterhalb der Bruchlinie, wo die Nägel sitzen sollten, und dann **bohrte** ich die Extensionsnägel **durch**. (Der Spiegel, 20.06.1966)

そこで彼は私の第 1 助手を務め、ひびの上下の、釘をすげなくてはならない箇所を指し示してくれた。それから私は拡張骨釘 [手術器具の一種?] を埋め込んだ [< durchbohren]。

4.1.1.3 中間まとめ

両語の語義をまとめたのが次の表 4.2 である。

語義	durchbohren	<u>d</u> urchbohren
〈～を穿つ〉	✓	✓
〈穴を開けて～をつくる〉	-	✓
〈(穴を) 掘る〉 (自動詞用法)	-	✓
〈穴を開けて通る〉 (再帰用法)	-	✓
〈～を埋め込む〉	-	✓

表 4.2 : durchbohren と durchbohren における語義の分布

4.1.1.4 競合の考察

これまでの分析からは、両語は〈～を穿つ〉という語義において競合していると言えるので、以下、当該競合を特に過程性と比喩性・抽象性に注目して考察する。

とはいえ、**durchbohren** が〈～を穿つ〉という語義で実現する頻度は、それが確認できる例はコーパス全体で 17 例しかなかったことに鑑みると、非常に低いと言え、したがって当該語義における **durchbohren** と **durchbohren** の競合の度合いはそこまで高くないことにも留意する必要がある。

4.1.1.4.1 過程性

〈～を穿つ〉という語義の **durchbohren** の持続性は、当該例がコーパス上で少ないこともあり、本稿の基準では不明と言わざるを得ないが、¹³⁹ 同語義の **durchbohren** は、(13) (14) の観察を根拠に [－持続的] と判断できる。

(13) a. Dabei kam er gegen 15 Uhr mit der linken Hand zu nahe an die Maschine und **durchbohrte** sich die Handfläche. (Tiroler Tageszeitung, 13.08.1998)

{その際／とはいえ} 15 時頃、彼は機械に左手を近づけすぎ、手のひらに穴を開けた [**durchbohren**]。

b. [dabei komm- er mit der linken Hand zu nahe an die Maschine und **durchbohr**- sich die Handfläche] (Achievement)

c. **durchbohren** [－持続的]

(14) a. Als er aufstehen will, reißt ihn Guggiari zu Boden. In diesem Moment **durchbohrt** eine Kugel Morenzonis linke Schulter und Guggiaris Hand. (Tages-Anzeiger, 17.05.2008)

彼が起きあがろうとした時、Guggiari が彼を地面へと引きずり倒す。その瞬間一発の銃弾が Morenzoni の左肩と Guggiari の手を穿つ。

¹³⁹ 次の例では、**durchbohren** が時点表現 **jetzt** と共起し、かつ進行相解釈となるが、この文は実況中継的な描写とも考えられるので、事象性記述が Accomplishment 表現か Achievement 表現か判断できない。Es gibt Experten im Bohren von Fensterrahmen, ganz gleich welcher Größenordnung. Vielfach sitzt die Familie noch vor dem Fernseher – der Täter kann sie somit kontrollieren. Er **bohrt** bereits jetzt mit einem feinen Bohrstahl den Rahmen **durch**. Durch den Wechsel auf stärkere Bohrer vergrößert er das Loch nach Belieben. (Die Zeit, 12.04.1985) 窓枠にどんな大きさの穴でも開けるプロがいる。よくあるのは家族がまだテレビの前に座っているケースである。犯人は彼らをそうやって確認できるのである。犯人はもう細いドリルで窓枠に穴を開け [**durchbohren**]、より太いドリルに交換することで穴を思うままに拡大する。

- b. 下線部 < [eine Kugel durchbohr- Morenzonis linke Schulter und Guggiaris Hand]
(Achievement)
- c. durchbohren [-持続的]

(13a) の基底に想定される事象性記述 (13b) は、時点表現 (gegen 15 Uhr) と共起しかつ非進行相解釈となることから、Achievement 表現と判断できる。また、(13b) は無標の事象性記述 (=生起する項が個体解釈) と考えられるので、durchbohren は [-持続的] ということになる。これと同様のことは、時点表現 (in diesem Moment) との共起が見られる (14) に関しても言える。

4.1.1.4.2 比喩性・抽象性

〈～を穿つ〉という語義の durchbohren では、選択制限からの逸脱による意味推移が、当該語義と判断できた 192 例中 8 件 (4%) で確認された。(15) は一例である。

(15) Ich bin doch selbst ein Stück Umwelt, denke ich noch; auch mein Wohl ist wichtig.

Im Halbschlaf erscheint mir Greta Thunberg. Ihre Augen durchbohren mich. (Die ZEIT, 27.06.2019)

私自身だって環境の一部ではないか、と私はまだ考えていた；私の幸せも大切だ。夢うつつの私に Greta Thunberg が現れる。彼女は刺すような眼差しで私を見る [彼女の目が私を刺す < durchbohren]。

durchbohren は動作主として、意志や意図を持たない存在も選択できるが、いずれにしても、例えば銃弾のような、物理的に穴を開けることができる存在であることが論理的条件と、すなわち選択制限と考えられる。そうだとすれば (15) の「目 (Augen)」は、こうした選択制限から逸脱しており、したがって、(15) において当該 durchbohren には「～を心理的に圧迫する」といった意味への推移が生じていることになる。

他方で 〈～を穿つ〉という語義の durchbohren においては、選択制限からの逸脱による意味推移は、当該語義と判断できた 17 例中 1 件も見出せなかった。¹⁴⁰ これはコ

¹⁴⁰ Brett(er) を目的語として伴って、「障壁をくぐり抜ける」という比喩で用いられていた例は 2 件あったが、これは本稿が、動詞の比喩性・抽象性を測るために問題にしている選択制限の逸脱による動詞の意味推移ではない (詳しくは 3.3.2 を参照されたい) : Insofern begrüße ich natürlich,

一パスでのヒット件数 2241 件全件を分析した結果であるから、当該語義の **durchbohren** には選択制限からの逸脱による意味推移の例がないという結論になる。

よって **durchbohren** における方が選択制限からの逸脱による意味推移の頻度が高いということになる。

4.1.1.4.3 その他の観点：第 1 項の典型性

両語の当該競合においてはさらに、第 1 項の典型性の差も認められる。当該 **durchbohren** の第 1 項は、ほとんどの場合（＝特定可能な 12 例中 10 例、すなわち 83% において）、(16) として再掲する (8) におけるように、人およびそれに類する存在であり、例外は (17) として再掲する (10) の 1 タイプ 2 トークンのみであった（＝17%）。

(16)(=8) „Zwar haben einige Autos wie unser Colt noch einen Metalltank. Aber das Blech ist ebenso leicht anzubohren wie Plastik. Und was brächte es, noch ein weiteres Blech zum Schutz anzubringen. Dann **bohrt** der Dieb eben zwei Bleche **durch**“ (Nordkurier, 11.11.2015)

「確かに我々の Colt のようにまだ金属製のタンクを有する車もいくつかあるとはいえ、ブリキはプラスチックと同じくらい穴を開けるのが簡単です。ブリキをもう 1 枚防御のために取り付けたとしてどうなるでしょう。そうしたら泥棒はまさにその 2 枚のブリキに穴を開ける [**durchbohren**] だけです」

(17)(=10) Einstein nimmt es mit der Hygiene nicht so genau: „Wenn ich anfangs, mich körperlich zu pflegen, dann bin ich nicht mehr ich selber“, sagt er. Daher versetzt er „seine Zahnbürste aus wissenschaftlichen Erwägungen in den Ruhestand“, denn „Schweineborste **bohrt** Diamanten **durch**: Wie sollten also meine Zähne ihr widerstehen?“ (Rhein-Zeitung, 28.06.2005)

Einstein は、衛生のことをあまり厳密には考えていなかった。「身体の世話をしだすならば、私はもはや自分自身ではない」と彼は言った。それ故に彼は「歯磨きブラシを使うのを、科学的な考察から」止めることになる。「ブラシの毛（豚

dass die Ministerin es geschafft hat, dieses dicke Brett **durchzubohren**, und dass es zumindest eine Entscheidung auf dieser Konferenz gegeben hat, in einer bestimmten Phase bundeseinheitliche Basisfallwerte einzuführen. (Protokoll der Sitzung des Parlaments Landtag Schleswig-Holstein am 17.07.2008) その限りにおいては、私は無論、大臣がこの分厚い障壁に穴を開けたこと [**durchbohren**]、それから、特定の時期に州共通の基準率を導入するという決定だけでもこの会議で行ったことを歓迎しています。

の剛毛)はダイヤモンドに穴を開ける [< durchbohren]。であれば私の歯がどうしてブラシに抵抗できようか」というのだ。

それに対し、当該 durchbohren の第1項は、(18)として再掲する(2)のように、むしろ人(およびそれに類する存在)ではなく物であることの方が多い(=特定可能な141例中86例、すなわち61%においてそうである)。

(18)(=2) Eine der Kugeln **durchbohrte** ein Bein des auf dem Fahrersitz Schlafenden, eine andere verletzte den auf dem Rücksitz liegenden Mitfahrer am Fuß. (Süddeutsche Zeitung, 10.09.1997)

銃弾の1つは運転席で寝ていた人の片脚を貫通し [< durchbohren]、もう1つは後部座席で横になっていた同乗者の足に怪我を負わせた。

こうした第1項の典型性の差、すなわち durchboren の第1項は、durchbohren のそれとは異なり、典型的には人(およびそれに類する存在)であるということも、2.2.1.1「Streitberg (1895) 説以後」で概観した先行研究が述べる、durchbohren において「終結へと続く持続的な活動の強調」(Streitberg 1895: 81)が見られる、あるいは durchbohren が「人物の活動等をより強く際立たせ」(Duden ³2018: 294) といった印象に寄与してる可能性もあるように思える。

もちろん、こうした第1項の典型の差自体が、例えば当該競合における両語の過程性の違いに起因する可能性もある。したがって、〈～を穿つ〉という語義の durchbohren の持続性を解明することが今後の課題として残る。

4.1.1.4.4 目末まとめ

〈～を穿つ〉という語義においては、durchbohren が無標の表現であると考えられる。durchbohren が、当該語義で実現することは稀であり、当該語義における両者の競合の度合いはそれほど高くない。

当該語義の durchbohren の持続性は解明できなかったが、durchbohren は[一持続性]であり、両者の競合において、durchbohren の方が過程的である、という可能性は否定されなかった。また、当該語義においては durchbohren の方が比喩的・抽象的な表現である。なお、過程性の差の表れであるという可能性も、つまり副次的な差という可能性も否めないが、durchbohren の第1項は物であることの方が多く、

durchbohren の第 1 項は人（およびそれに類する存在）が典型的であることも分かった。

4.1.2 durchblättern

4.1.2.1 接頭辞動詞

検索日：2020年8月11日；ヒット件数：8237件
分析データ：3179件；有効データ：200件¹⁴¹

durchblättern は他動詞であり，第 1 に〈～を通覧する：（本，紙片など）を一通りめくる〉という語義で用いられる。（19）は 1 例である。

(19) Im Grunde ist das Lesen eine Form der Verzauberung, und ein Leser, der ein Buch zu **durchblättern** beginnt, muss die Welt vergessen können und von den Seiten eines Autors regelrecht verschlungen werden. (Tages-Anzeiger, 16.12.1997)

基本的に読書は一種の魔法にかかる状態であり，本をめくり [**durchblättern**] 始めた読者は，世界を忘れられなくてはならないし，作者側からしつかりのみ込まれなくてはならない。

（19）に見て取れるように，この語義の **durchblättern** の第 1 項は動作主，¹⁴² 第 2 項は「対象」で，さらに言えば被動物である。

durchblättern は第 2 に〈～をページ大に切り分ける〉という語義で用いられる場合もある。¹⁴³ そうした例は今回の収集例では，（20）の 1 例のみ見られた。

(20) Doch selbst im Paläontologen-Paradies Messel sind Säugerfunde rar. Ehe die Wissenschaftler auf ein Pferdchen oder einen Tapir stoßen, **durchblättern** sie mit ihren Schlachtermessern durchschnittlich 300 bis 500 Kubikmeter Ölschiefer. (Der

¹⁴¹ **durchblättern** を含む **durch-** 動詞のグループについて Kjellman (1945: 63) は，不変化詞動詞として用いられる場合の方が優勢であると述べているが，これらの数値からは **durchblättern** も少なからず用いられていることが分かる。

¹⁴² 第 1 項が身体部位の場合もあるが，その際は動作主の提喻と見なす。例えば次の文における「生徒の手（Schülerhände）」：Das Argument von Glaß, dass die wertvollen Bücher darunter leiden würden, wenn sie von vielen Schülerhänden **durchblättert** werden, versteht sie nicht. (Nordkurier, 08.06.2006) 多くの生徒の手によってめくられたら，これら貴重な本が損なわれるという Glaß の論拠を，彼女は理解できない。

¹⁴³ 当該語義は，**durchblättern** の上述の〈～を通覧する〉という語義からは予想できない慣用的な意味であることから，3.2.3 で述べた通り，本稿はこれを別義とする。

Spiegel, 21.01.2002)

古生物学者の楽園 Messel においてもやはり、哺乳類の化石は珍しい。小馬かバクに遭遇する前に、科学者たちは所持する肉包丁で、平均 300 から 500 立方メートルのオイルシェールを切り分ける [durchblättern]。

(20) に鑑みると、この語義においても第 1 項は動作主、第 2 項は「対象」で、さらに言えば被動物と言える。

4.1.2.2 不変化詞動詞

検索日：2020 年 8 月 11 日；ヒット件数：1 万 3832 件
分析データ：728 件；有効データ：200 件

durchblättern は、(21) に示すように自動詞として〈(ページを) 一通りめくる〉という語義で用いられる場合もあるが、より頻繁に見られるのは (22) に示すように、他動詞として〈～を通覧する〉という語義で用いられる場合である。

(21) 15 Millionen Bücher will Google auf diese Weise in den kommenden zehn Jahren digitalisieren; Maschinen **blättern** dazu durch die Bücher **durch** und scannen Seiten ein. (Süddeutsche Zeitung, 27.12.2005)

1500 万冊の本を Google はこの方法で次の 10 年をかけて電子化しようと目論んでいる。機械がそのために本を一通りめくっていき [durchblättern]、ページをスキャンする。

(22) Warnung: **Blättern** Sie dieses spannende Buch nicht **durch**, wenn Sie hungrig sind; angesichts von Rezepten wie Rauchigen Rotweinspirerln, Süßkartoffel-Cottage-Pie oder Lachs in Ahornsirup-Soja-Marinade oder Maisbrot mit Chorizo könnten Sie sonst zum Mörder werden. (Die Presse, 25.11.2016)

警告：お腹が空いている時は、この刺激的な本をめくってはいけない [durchblättern] ¹⁴⁴；燻製スペアリブ赤ワインソースや、サツマイモのコテージパイや、ニシンのメープルシロップ大豆マリネや、コーンパンチョリソ添えといったレシピを目にしたら、あなたは大変なことになってしまいかねません。

¹⁴⁴ 後述するように、durchblättern は (durchblättern と同様に) [+持続的] な表現であり、(22) の事象性記述は Accomplishment 表現であると考えられる。既に述べたように Accomplishment 表現を否定すると、結果に至るまでの過程も否定されるので、(22) のような訳になる。

各用法の頻度分布は、表 4.3 の通りである。

用法	語義	件数
自動詞	〈(ページを) めくる〉	3
他動詞	〈～を通覧する〉	196
不明 ¹⁴⁵		1

表 4.3: *durchblättern* の用法・語義の頻度分布

(ただし「他動詞」には当該例がデータとして不完全な例 5 件を含む)

比較対象の *durchblättern* には自動詞用法はないので、他動詞用法に限定して述べると、(22) に見て取れるように、*durchblättern* の第 1 項は動作主であり、第 2 項は「対象」、中でも被動物である。

4.1.2.3 中間まとめ

両語の語義をまとめたのが次の表 4.4 である。

	<i>durchblättern</i>	<i>durchblättern</i>
〈～を通覧する〉	✓	✓
〈(ページを) めくる〉 (自動詞)	-	✓
〈～をページ大に切り分ける〉	✓	-

表 4.4 : *durchblättern* と *durchblättern* における語義の分布

4.1.2.4 競合の考察

durchblättern と *durchblättern* は、〈～を通覧する〉という語義で競合していることが分かったので、以下では、当該競合を特に過程性と比喻性・抽象性に注目して考察する。

4.1.2.4.1 過程性

実例の観察からは *durchblättern* も *durchblättern* も [+持続的] であると言える。

¹⁴⁵ 不明と見なしたのは、再帰代名詞と共に起している次の 1 例。Durch Rätsel, Sprüche, Schulnews und das Horoskop *blättert* man sich *durch* bis zur letzten Seite, auf der die Grüße stehen. (Nordkurier, 02.03.2002) [クイズ, 格言, 学校ニュースそれから星占いのページを通して, 挨拶が書かれた最終ページまでめくって進む [< *durchblättern*] ことになる。] *durch-* 動詞には、例えば先述の *sich durchbohren* 「穴を開けて通る」のように、再帰用法を有する例があるので (詳しくは Kjellman 1945: 48ff.), これも *durchblättern* の再帰用法という可能性があるが、各種辞書には記述がないこともあり、この例だけで判断することは難しい。

第1に、durchblättern が [+持続的] であるという判断は、(19) の再掲である (23) の観察を根拠の1つにしている (下線は引用者)。

(23)(=19) a. Im Grunde ist das Lesen eine Form der Verzauberung, und ein Leser, der ein Buch zu durchblättern beginnt, muss die Welt vergessen können und von den Seiten eines Autors regelrecht verschlungen werden. (Tages-Anzeiger, 16.12.1997)

基本的に読書は一種の魔法にかかる状態であり、本をめくり [durchblättern] 始めた読者は、世界を忘れられなくてはならないし、作者側からしっかりとみ込まれなくてはならない。

b. 下線部 < [der Leser durchblätter- ein Buch] (Accomplishment)

c. durchblättern [+持続的]

(23) においては、beginnen という開始表現の支配を受け、かつ反復の開始が表されているわけではないことから、下線部で beginnen の支配を受けていると想定される文の事象性記述 [der Leser durchblätter- ein Buch] は、Accomplishment 表現と判断できる。また、[der Leser durchblätter- ein Buch] は無標の事象性記述と考えられるので、durchblättern は [+持続的] と言える。

また、次の (24) の観察からも、durchblättern は [+持続的] と判断できるように思える。(24) においては、それ自体は持続時間表現ではないが、少なくとも持続を含意する bis 「～ (の時点) まで」に導かれる副文 (「テキストのページにぶつかるまで」) が共起しており、かつ部分的進行解釈が自然である (下線は引用者)。

(24) a. Er durchblättert das Skript, bis er auf eine Seite mit Text stößt, in leuchtendem Orange markiert. (Mannheimer Morgen, 30.08.2014)

彼はその原稿を、蛍光オレンジで印をつけられたテキストのページにぶつかるまで (少しずつ) めくっていく [durchblättern]。

b. 下線部: [er durchblätter- das Skript] (Accomplishment)

c. durchblättern [+持続的]

第2に、durchblättern が [+持続的] であるという判断は、(25) (26) といった観察を根拠にしている (下線は引用者)。なお、その根拠は (23) について述べたのと

同様である。

- (25) a. Wild begann er daraufhin, das Heft **durchzublätern**, und triumphierend wies er meine Behauptung zurück, sooft er auf eine Anzeigenparodie stieß. (Süddeutsche Zeitung, 17.08.2002)

乱暴に彼はその後その冊子を通覧し [< durchblättern] 始め, 広告のパロディに出くわす度に, 勝ち誇りながら私の主張を退けた。

- b. 下線部 < [er blätter- das Heft durch] (Accomplishment)
c. durchblättern [+持続的]

- (26) a. "Ah, meine Schulkunden!", sagte ich erfreut. Im selben Moment bemerkte ich den Fehler. "Ja, deine Schulkunden", sagte mein Sohn langsam und mit spürbarer Vorfreude und fang an, den Hefter demonstrativ **durchzublätern**. (Spiegel-Online, 07.07.2017)

「あ, 私の学校証書!」と私は嬉しくなって言ったが, 同時に間違いをしかしたことに気づいた。「そう, お父さんの学校証書」と息子はゆっくり, ありありとした期待に満ちて言い, ファイルをこれ見よがしにめぐり [< durchblättern] 始めた。

- b. 下線部 < [mein Sohn blätter- den Hefter demonstrativ durch] (Accomplishment)
c. durchblättern [+持続的]

このように durchblättern と durchblättern の双方が [+持続的] であるとするならば, どちらがより過程的な表現と言えるだろうか。本稿は, durchblättern の方が相対的に過程性が強いと考える。そう考える根拠は, durchblättern の方が過程に注目する表現と共起しやすいという観察である。有効データ 200 例において durchblättern は, 例えば (27) (28) に一例を示すように (下線は引用者), Seite um Seite 「1 ページ 1 ページ」とは 3 回, nach und nach 「徐々に, ゆっくり」とは 2 回共起していたが, durchblättern が過程に注目するこれらの表現と共起する例は, 有効データ 200 例中に見られなかったのみならず, 全 8237 件においても 1 例も見られなかった。¹⁴⁶ このことに鑑みると durchblättern において過程への注目がより起こりやすいと, すな

¹⁴⁶ 例えば次のような例は確認されたが, この例においては不変化詞動詞 durchblättern の実現である可能性が排除できない。Wenn man die Bilder in der Serie anschaut, Seite um Seite **durchblättert**, kommt aber bald einmal Langeweile auf. (Tages-Anzeiger, 19.05.2016)

わち durchblättern の方がより過程的な表現であると言える。¹⁴⁷

(27) Sie nimmt das Buch in ihre Hände, **blättert** es ganz langsam Seite um Seite **durch** und staunt wie ein kleines Mädchen. (Tages-Anzeiger, 13.11.1999)

彼女はその本を手に取り，とてもゆっくりと 1 ページ 1 ページ 通覧し [durchblättern]，小さな女の子のように驚く。

(28) Siegfried Rehfeld mag keine großen Erklärungen. Nach und nach **blättert** er die zahlreichen Bilder **durch**. Nur ab und zu gibt es für den Betrachter einen kleinen Hinweis. (Spiegel-Online, 21.03.2013)

Siegfried Rehfeld は大げさな説明は好まない。ゆっくりと彼は数多くの絵をめくっていく [durchblättern]。時折鑑賞者にちょっとした示唆があるだけだ。

4.1.2.4.2 比喩性・抽象性

両語ともに〈～を通覧する〉という語義においては，典型的には本や雑誌がそうであるように，めくって閲覧する対象を第2項として選択すると考えられるが，こうした選択制限を逸脱することによる意味推移は，今回の調査では，いずれの語に関しても見出せなかった。

とはいえ，辞書では第1に Duden (2014: 524) が durchblättern に対して比喩的な用例 (29) を挙げている。

(29) Man durchblättere die Weltgeschichte nach Beispielen freiwilligen Entsagens (St Zweig, Fouché 119) (Duden 2014: 524)

自発的な断念の例を探して世界史を通覧されたし [durchblättern]

確かに (29) は比喩的であるが，それが die Weltgeschichte 「世界史」における意味推移であるか，durchblättern における意味推移であるかは判然としない。前者であるとすれば，「世界史」という表現が，書籍ないし（通覧できる）資料を指示していると考えられる。また，後者であるとすれば，durchblättern が例えば「くまなく

¹⁴⁷ あるインフォーマントの次の容認性判断には実例による反駁が可能だが，この判断の背後に，持続が問題になる場合 durchblättern よりも durchblättern の方がふさわしいといった感覚があるのだとすれば，その感覚には賛同できる。

a. *Petra fängt an, die Zeitschrift zu durchblättern.

b. ^{OK}Petra fängt an, die Zeitschrift durchzublätern.

探す」といった意味に推移していると考えられる。

第 2 に、²DWB は比喩的な用例として durchblättern に対しては (30) (31) を、durchblättern に対しては (32) を挙げている (引用に際し表記を適宜変更する)。

(30) **durchblättert** man die geschichte der luftschiffahrt, so wird man schon im grauen altertume sagen von fliegenden menschen finden (Hoernes 1659: *luftschiffahrt* 182).

(²DWB, <https://www.dwds.de/wb/dwb2/durchblättern>, 最終アクセス: 2023 年 1 月 9 日)

飛行船旅行の歴史を通覧する [durchblättern] と、すでに太古の昔において飛行人間の伝説を見出すだろう

(31) ich würde auch das buch der unhöflichkeit gar **durchblättert** haben, wann einigem fräulein ich meine gutwilligkeit .. entziehen würde (Buchholtz 1903: *Herkules* 1,69.) (ibid.)

もしお嬢さん方から不興を買わんとするなら、無礼さの本を全部通読する [durchblättern] こともしただろう

(32) zu hause zu bleiben und die vergangenheit und zukunft zu genießen und **durchzublätern** (Jean Paul 1795 I 4,78 ak.) (ibid.)

家に留まって、過去と未来を楽しみ、通読する [durchblättern] こと

(30) においては、(29) の場合と同様に、項の意味推移か動詞の意味推移か判断が難しい。また、(31) における比喩性は、本稿が問題にしている選択制限の逸脱に起因する意味推移かどうか不明である。というのも (31) においては、「無礼さの本を全部通読する」という表現で、「無礼な振る舞いをする」といった事態が比喩的に表されている可能性も否めないからである。さらに (32) においては、(29) (30) と同様に項の意味推移か動詞の意味推移か判断が難しいことに加え、durchblättern に自動詞用法があることに鑑みると、他動詞の durchblättern の意味推移かどうかはなおもって断言できない。

以上の辞書記述に鑑みると当該 durchblättern と durchblättern が意味推移するケースがないとは言い切れないが、そうした例が稀である以上、当該競合において比喩性・抽象性はほとんど関与しないと考えるのが妥当だろう。

4.1.2.4.3 目末まとめ

durchblättern と durchblättern は、どちらも〈～を通覧する〉という語義で頻繁に用いられる。その意味で両語は、例えば先に論じた durchbohren と durchbohren に比べて、競合の度合いが高いと言える。

当該語義においては両語とも〔＋持続的〕であるが、どちらかと言えば durchblättern の方が、より過程に注目する表現、すなわち過程的な表現である。

なお、当該競合においては、比喩性・抽象性の差異はほとんど関与的ではない。

4.2 über- 動詞

本節では、いわゆる分離・非分離の über- 動詞のうち、übersiedeln と überführen を 4.2.1 と 4.2.2 でそれぞれ取り上げる。

4.2.1 übersiedeln

4.2.1.1 接頭辞動詞

検索日：2020年9月10日；ヒット件数：4万7305件
分析データ：356件；有効データ：200件

übersiedeln は、「対象」（被動物）のみを伴う自動詞として〈拠点を移す：移住する〉という語義で、あるいは「動作主」と「対象」（被動物）を伴う他動詞として〈～の拠点を移す：～を移住させる〉という語義で用いられる。有効データ200例においては、前者の例は191件、後者の例は9件であり、自動詞として用いられる方が一般的と言える。

まず、〈拠点を移す〉という自動詞の語義について述べる。当該語義の übersiedeln は、ほとんどの場合において起点や着点と共起する。191例中、(33)に示すように起点とのみ共起する例は2件(1%)、(34)に示すように着点とのみ共起する例は141件(74%)、(35)に示すように両方と共起する例は41件(21%)であり、(36)に示すようにどちらとも共起しない例というのは7件(4%)しか確認されなかった(例文の下線は引用者による)。¹⁴⁸

¹⁴⁸ 池上 (102000: 126ff.) の指摘する「起点と到達点の非対称性」、さらには到達点への心理的傾斜は übersiedeln においても、また後述するように他の事例においても、広く認められる。

(33) Das Geschäft **übersiedelt vom Jugendzentrum**. Kommenden Samstag wird die offizielle Eröffnung stattfinden. (Burgenländische Volkszeitung, 13.09.2012)

その店は、青少年センターから移動する [< übersiedeln]. 今後の土曜日が正式開店だ。¹⁴⁹

(34) So **übersiedelte** sie im Juni 1992 ins Pflegeheim Altstätten, wo sie liebevoll betreut wurde. (Tiroler Tageszeitung, 04.10.1997)

かくして彼女は1992年の6月に、愛情を持って世話をしてくれる Altstätten 福祉施設へと移住した [< übersiedeln].

(35) "Das Leben im Studentenheim ist am Beginn recht fein und hilfreich, aber irgendwann wird's öd und zu eng", erklären Silvia, Sabine und Franz, die zum Studieren von Oberösterreich in die Mozartstadt übersiedelt sind. (Salzburger Nachrichten, 10.03.1998)

「学生寮での生活は、はじめはかなりありがたいが、そのうち味気なく窮屈になる」と Silvia, Sabine, Franz は説明する。彼らは大学で学ぶために 上部オーストリアから、このモーツァルトゆかりの市に越してきた [< übersiedeln] のである。

(36) Erfolgsrodlerin Angelika Neuner ist derzeit auch privat mit viel Schwung unterwegs: erst **übersiedelte** sie, dann übernahm sie ein neues Auto. (Tiroler Tageszeitung, 13.07.1996)

実績あるリージュ選手である Angelika Neuner は、このところ私生活でも精力的に飛び回っている。まず移住し [< übersiedeln], それから彼女は新しい車を引き取った。

次に〈～を移住させる〉という他動詞の übersiedeln を論じる。当該 übersiedeln については、起点とのみ共起する例は確認できず、(37) に示すように着点とのみ共起する例が 3 件 (33%)、(38) に示すように起点と着点の両方と共起する例が 4 件 (44%)、(39) に示すようにどちらとも共起しない例が 2 件 (22%) 確認された (例文の下線は引用者)。

(37) Nun hat man sich entschlossen, von einem großzügigen Angebot von Helga Rabl-

¹⁴⁹ この例においては、この文章のタイトル (引用外) から Michael Koch-Straße が着点と特定できる。逆に言えばそれ故に、本来注目され易い着点が省略されていると考えられる。

Stadler Gebrauch zu machen und die ersten drei Aufführungen ins Große Festspielhaus zu **übersiedeln**. (Salzburger Nachrichten, 15.06.1999)

かくして Helga Rabl-Stadler の気前の良い申し出を受けて、はじめの 3 公演を祝祭大劇場に移す [übersiedeln] ことに決められたのであった。

- (38) In drei Wochen **übersiedelten** sie einen kompletten Haushalt von Wien nach Baden, debattierten intensiv darüber, was kommt ins neue Leben mit, was bleibt in Wien. (Niederösterreichische Nachrichten, 28.01.2008)

3 週間かけて彼らは生活拠点を完全に ウィーンからバーデンへと移し [übersiedeln], その際何を新しい生活に受け継ぐか、何をウィーンに残すか集中的に議論した。¹⁵⁰

- (39) Der Aufwand, Küche und Personal stets nur für einen Tag zu "**übersiedeln**", war den jeweiligen Veranstaltern wohl doch zu groß. (Burgenländische Volkszeitung, 30.12.2009)

キッチンと人員を 1 日だけのために毎回「移住させる」[übersiedeln] ことのコストは、その時々主催者にとって、やはり大き過ぎたのであろう。

4.2.1.2 不変化詞動詞

検索日：2020 年 9 月 10 日；ヒット件数：8877 件¹⁵¹

分析データ：213 件；有効データ：200 件

übersiedeln は、自動詞として〈拠点を移す：移住する〉という語義で、ないし他動詞として〈～の拠点を移す：～を移住させる〉という語義で用いられる。

まず他動詞として語義の実現について先に述べると、その頻度は非常に稀である。今回の 200 例中では次に挙げる 1 件のみであったし、各種辞書でも当該用法は通例記載がない。

- (40) Die Landesregierung überlegt, die neurochirurgische Abteilung der Medizinischen Hochschule vollständig in den Glasbau **überzusiedeln**, um das INI zu retten. (Süddeutsche Zeitung, 06.02.2001)

¹⁵⁰ この in drei Wochen は、「その際何を新しい生活に受け継ぐか、何をウィーンに残すか集中的に議論した」という後続部にも作用していると考えられるので、「3 週間後に」という解釈よりも「3 週間かけて」という解釈が適切と考える。

¹⁵¹ 「übersiedeln」「Übersiedeln」という語形は、分析時に接頭辞動詞から区別できず、übersiedeln の有効データには成り得ないので、検索時に対象から外している。

州政府は、INI を救うために、医科大学の神経外科部門をガラス張りの建物に完全に移す [übersiedeln] ことを検討している。

次に自動詞の語義での実現について言えば、当該 übersiedeln も先述の自動詞の übersiedeln と同様に、ほとんどの場合において特に着点と共起する。199 例中、起点とのみ共起する例は 0 件、(41) に示すように着点とのみ共起する例は 174 件 (87%)、(42) に示すように両方と共起する例は 22 件であり (11%)、(43) に示すようにどちらとも共起しない例は 3 件 (2%) しか確認されなかった (例文の下線は引用者による)。

(41) 1928 trennt sich Heinrich Mann von seiner Frau und **siedelt nach Berlin über**.
(Nordkurier, 16.12.2003)

1928 年, Heinrich Mann は妻と別れ, ベルリンへと移り住む [übersiedeln]。

(42) Denn die 28-Jährige **siedelte** vor drei Jahren von Kasachstan nach Deutschland über und kennt die Sorgen und Probleme von Migrantinnen aus eigener Erfahrung.
(Rhein-Zeitung, 23.12.2004)

というのも, この 28 歳の女性は, 3 年前に カザフスタンからドイツへ移り住んだ [übersiedeln] のであり, 移民の苦勞と困難を, 身をもって知っているからである。

(43) Für den Umzug nach Berlin steht noch kein genauer Termin fest. Dies verlautete am Freitag aus dem Bundespräsidialamt in Bonn. Mit der Entscheidung, im nächsten Winter **überzusiedeln**, sei ein Zeitraum von Dezember dieses Jahres bis März 1994 vorgegeben. (Süddeutsche Zeitung, 20.03.1993)

ベルリンへの引っ越しの正確な日時はまだ決まっていない。金曜日にボンの大統領府からはそう漏れ聞こえてきた。来冬に移る [übersiedeln] という決定で定められている期間は, 今年の 12 月から 1994 年の 3 月までだという。

4.2.1.3 中間まとめ

まず両語の語義分布は, 次の表 4.5 の通りまとめられる。既に述べたように, übersiedeln が他動詞として実現する頻度は, そうした例が今回 1 件しか確認されていないこと, 並びに当該用法は各種の辞書でも記載がないことに鑑みると, 非常に稀と言える。したがって以下では, 〈拠点を移す〉という自動詞の語義だけを考慮する。

語義	übersiedeln	übersiedeln
拠点を移す (自動詞)	✓	✓
～の拠点を移す (他動詞)	✓	(✓)

表 4.5 : übersiedeln と übersiedeln における語義の分布

(「(✓)」は実現頻度が著しく低いことを表す)

次に〈拠点を移す〉という語義において両語が起点・着点と共起する頻度は、次の表 4.6 の通りまとめられる。これを見ると、übersiedeln において着点のみと共起する頻度が若干低く (-13 ポイント)、逆に起点および着点と共起する頻度が若干高い (+10 ポイント) ことが分かる。なお、これらの差異は、カイ二乗検定 (イエーツ補正あり) によれば、有意水準 1% で共に有意 ($\chi^2=10.77$, $df=1$, $p=.001$; $\chi^2=7.05$, $df=1$, $p=.008$) である。

	übersiedeln	übersiedeln
起点のみ	2 (1%)	0 (0%)
着点のみ	141 (74%)	174 (87%)
起点および着点	41 (21%)	22 (11%)
共起なし	7 (4%)	3 (2%)
	191 (100%)	199 (100%)

表 4.6 : 〈拠点を移す〉という語義の übersiedeln, übersiedeln における

起点・着点との共起頻度

4.2.1.4 競合の考察

〈拠点を移す〉という自動詞の語義での競合について、以下次の順序で論述する。まず 4.2.1.4.1 で過程性について、4.2.1.4.2 で比喩性・抽象性について論じる。それから、4.2.1.4.3 で、いくつかの先行研究で指摘されている übersiedeln と übersiedeln の使用に関する地域差について論じ、¹⁵² 4.2.1.4.4 で、Dewell (2011) の übersiedeln に関する説を論じる。

4.2.1.4.1 過程性

今回の有効データにおいては、〈拠点を移す〉という語義の übersiedeln に関しても、

¹⁵² 地域差という観点を本稿はここで初めて取り上げており、多少唐突に思われる向きもあるかもしれない。この観点を 2 章で取り上げなかったのは、個別の競合に対して地域差を指摘する先行研究は存在するとはいえ、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合を多かれ少なかれ指向して規則的な地域差を指摘するものは見出し難かったからである。

同語義の übersiedeln に関しても、その持続性が判断できる例は見出せなかった。

übersiedeln について言えば、例えば (44) においては、現在読みも不可能ではないが未来読みも必ずしも排除されないことから、事象性記述が Accomplishment 表現か Achievement 表現か、そもそも判断できない。¹⁵³

- (44) a. Die längerfristige Zukunft des Mattersburger Einkaufszentrums ist immer noch ungeklärt, die kurzfristige spricht jedoch eine deutliche Sprache: Vergangenen Freitag hatte die Sozialeinrichtung „Mein Laden“ zum letzten Mal im MEZ geöffnet, im Inneren des Untergeschoßes gibt es nun keinen einzigen Raum mehr, der besetzt ist. „Wir übersiedeln in das Fachmarktzentrum (Anm.: Im unteren Bereich beim Dänischen Bettenlager). Wir benötigen noch eine Woche Vorbereitungszeit, am Montag, dem 21. Oktober werden wir wieder unsere Dienste anbieten“, berichtet Mein Laden-Geschäftsführerin Vera Vlassits. (Burgenländische Volkszeitung, 17.10.2013)

Mattersburg ショッピングセンターの長期的な未来はまだ見通せないままであるが、短期的にはしかし明らかな状況である。去る金曜日、社会施設である「私の店」は MEZ での営業を最後としたので、地下階の内側には、店が出ているスペースは今や 1 つもない。「私たちは専門市場センター（註：デンマーク寝具倉庫傍の下の領域）に {移っているところだ／移ります} [< übersiedeln]。まだ準備期間が 1 週間必要で、月曜日、つまり 10 月 21 日にまた営業を再開します」と「私の店」の店長 Vera Vlassits は言う。

- b. [Wir übersiedel- in das Fachmarktzentrum] (?)

同様に übersiedeln についても本稿の判断基準を満たすような例は見出せなかった。

4.2.1.4.2 比喩性・抽象性

今回の調査では、〈拠点を移す〉という語義での競合において、übersiedeln の方が übersiedeln よりも意味推移の頻度は高かったが、その差が有意であるかは確かめられなかった。

まず übersiedeln に関しては、選択制限の逸脱による意味推移が 191 件中少なくとも

¹⁵³ wir 「私たち」が集合読みか分配読みかという問題もある（藤縄康弘先生の指摘）。

も 6 件確認された。次にそのうちの 2 例を示す。

(45) Kehrt die kalte Jahreszeit jedoch ins Lande und wandern die Temperaturen in Richtung Gefrierpunkt, so **übersiedelt** der Zitronenbaum in das Haus. (Burgenländische Volkszeitung, 03.12.2008)

寒い季節がその地に戻り、気温が零度に向かうと、レモンの木は室内に移される [**übersiedeln**]。

(46) Mit Johann Weihen, General Manager für Emerging Markets, **übersiedelt** am 1. September auch die Verantwortung für das überregionale Management für 87 Länder in Europa, Nahost und Afrika von der Pariser Europazentrale nach Wien. (Salzburger Nachrichten, 12.09.1998)

Emerging Markets のゼネラルマネージャーである Johann Weihen と共に、9 月 1 日にヨーロッパ、中東、アフリカの 87 か国への責任もパリのヨーロッパセンターからウィーンに移る [**übersiedeln**]。

(45) における **übersiedeln** も、「拠点の移動」を表しているには違いないが、その第 1 項が自ら移動できない存在であるという点で既出の例と異なる。**übersiedeln** の第 1 項はたいていの場合、自ら移動できる存在であることに鑑みると、(45) の「レモンの木」の指示対象は選択制限から本来逸脱しており、**übersiedeln** が主体性の低い移動の意味に推移することで、その逸脱が解消されていると言える。¹⁵⁴ 同様の意味推移は **übersiedeln** の他の複数例でも確認され、例えば「38 トンの雪」、「古い照明」、「芸術作品」、「Schafelner の伝統料理」の移動が表されている例が確認された。なお (46) においても同じような意味推移が生じていると考えられるが、(45) と違った場合と異なるのは、(46) の第 1 項が抽象物であるという点である。¹⁵⁵

次に **übersiedeln** においては、上述の意味推移を起こしていると考えられる例は見出せなかった。ただし、Duden (2014: 2068) が **übersiedeln** の比喩的用法の例として挙げる次の文においては、当該意味推移が想定できる。したがって、**übersiedeln**

¹⁵⁴ **übersiedeln** は、例えば (44) の「その店 (das Geschäft)」のような表現を主語とすることもあがるが、そうした場合には、「その店」ということで、従業員等の「人」も含意されていると考えられることから、主体的な移動という解釈は保持可能である。

¹⁵⁵ 抽象的な存在の移動と解釈できそうな例は他にも複数見られる。例えば次の文。Das griechische Drama, geschrieben für große Bühnen und eine chorverstärkte Inszenierung, **übersiedelt** auf eine Bühne in Wohnzimmergröße. (Tiroler Tageszeitung, 29.07.2000) 大舞台およびコロスによって強められる演出用に書かれたギリシャ悲劇が、リビングサイズの舞台に移る [**übersiedeln**]。

が意味推移をおこさないというわけではないと考えられる。

(47) *der Tourismus siedelt von Wien nach Budapest über (er verlagert sich von Wien nach Budapest)* (Duden 2014: 2068) 観光客の往来はウィーンからブダペストに移る

以上のことをまとめたのが次の表 4.7 である。übersiedeln の方が意味推移の頻度は高いように見えるが、übersiedeln において意味推移の実測値が 5 未満であり、石川／前田／山崎（編）（2010: 64）によれば有意性検定が確実な仕方では行えない。頻度差が有意か確かめるためには、したがってデータの追加収集が必要であるが、これについては時間的制約により今後の課題としたい。

	übersiedeln	übersiedeln
選択制限の逸脱による意味推移	(191 件中) 6 件以上	(199 件中) 0 件

表 4.7 : übersiedeln と übersiedeln における当該意味推移の頻度

4.2.1.4.3 その他の観点 1 : 地域差

両語の使用に関しては、地域差を記述する先行研究が複数ある。¹⁵⁶ 例えば Variantengrammatik des Standarddeutschen (2018) の当該項目や Ammon/Bickel/Lenz (2018: 764) には次のようにある。¹⁵⁷

(48) Das Verb *übersiedeln* wird in [Österreich] fast ausschließlich und in [der Schweiz] mehrheitlich untrennbar gebraucht. Die ungetrennte Variante kommt außerdem in D[utschland] vor, besonders in D-SÜDOST: *Im Jahr 2000 übersiedelte es von Bamberg nach Breitengüßbach.* (inFranken.de). So ist in D[utschland] - SÜDOST die ungetrennte Variante etwa genauso häufig wie die getrennte Variante. In den übrigen Arealen von D[utschland] ist demgegenüber die Trennung üblicher: *Krößner siedelte im Juli 1985 nach mehreren Ausreiseanträgen nach Westberlin*

¹⁵⁶ すでに述べた通り、この観点を 2 章で取り上げなかったのは、個別の競合に対して地域差を指摘する先行研究は存在するとはいえ、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合を多かれ少なかれ指向して規則的な地域差を指摘するものは見出せなかったからである。

¹⁵⁷ 他には Meyer (2006: 267) にも、スイスドイツ語において *übersiedeln* は *übersiedeln* に比べはるかに普通でない、との記述がある。

über. (Thüringer Allgemeine). (Variantengrammatik des Standarddeutschen 2018: [http://mediawiki.ids-mannheim.de/VarGra/index.php/Übersiedeln_\(Trennbarkeit\)](http://mediawiki.ids-mannheim.de/VarGra/index.php/Übersiedeln_(Trennbarkeit)), letzter Zugriff: 18. 10. 2022)

übersiedeln はオーストリアではほとんど常に、スイスでは大半の場合、非分離で用いられる。非分離動詞としての *übersiedeln* は、加えてドイツでも、特に南東ドイツで見られる。2000年にそれは *Bamberg* から *Breitengüßbach* へ移った [*übersiedeln*]。(*inFranken.de*)。このように南東ドイツでは、非分離動詞としての *übersiedeln* が分離としてのそれとほとんど同じくらいの頻度で見られる。ドイツの他の地域ではそれに対し、分離動詞であることの方が普通である。*Krößner* は1985年7月に外国旅行を何度も申請した後で西ベルリンに移った [*übersiedeln*] (Thüringer Allgemeine)。

(49) **übersiedeln** [...] [w]ird in [Österreich] auf der dritten Silbe betont mit Langvokal, in D[utschland] meist auf der ersten Silbe mit Langvokal. In [Österreich] kann das Verb nicht getrennt werden. (Ammon/Bickel/Lenz ²2018: 764)

übersiedeln はオーストリアでは3番目の長母音の音節に強勢が置かれ、ドイツでは1番目の長母音にたいして強勢が置かれる。オーストリアでは *übersiedeln* は分離し得ない。

特に(49)の記述は、今回の収集結果とも整合するように思われるので、これを支持するのが妥当と考えられる。まず〈拠点を移す〉という語義の *übersiedeln* 191例に関して言えば、その中で出典地域が確認できる新聞等からの189件のうち、ドイツを出典地域とするのは4件のみで、それ以外の地域を出典地域とするのが185件(オーストリア170件、スイス15件)となる。それに対し、当該語義の *übersiedeln* 199例に関して言えば、その中で出典地域が確認できる新聞等からの112件のうち、ドイツを出典地域とするのは87件で、それ以外の地域を出典とするのは25件(オーストリア15件、スイス9件、ルクセンブルク1件)となる。以上をまとめたのが次の表4.8である。この分布は、例えば、*übersiedeln* はオーストリア(といった南部)で、*übersiedeln* はドイツで頻繁に用いられるという(49)の指摘におおよそ一致するように見える。

	<u>übersiedeln</u>	<u>übersiedeln</u>
ドイツ	4 件 (2%)	87 件 (78%)
ドイツ以外	185 件 (98%)	25 件 (22%)
	189 件 (100%)	112 件 (100%)

表 4.8: übersiedeln と übersiedeln の文例の出典地域分布

以上を踏まえると、übersiedeln と übersiedeln が、〈拠点を移す〉という語義において競合している程度は低く、両語にはかなりの程度地域的な「棲み分け」があると考えられる。

ドイツで不変化詞動詞 übersiedeln の方が〈拠点を移す〉という語義において一般的なのは、それが自動詞であることに起因すると考えられる。既に確認したように、タイプ B 接頭辞動詞には前置詞の抱合と解釈できる他動詞が多い。したがってドイツでは自動詞である übersiedeln は接頭辞動詞としてではなく不変化詞動詞として用いられる傾向にあると思われる。

他方オーストリアなどにおいて übersiedeln の方が一般的なのは何故だろうか。それを考える上では、aberkennen や vorenthalten のような、本来不変化詞動詞として用いられるべき特定の動詞が、オーストリアやスイスを中心とするドイツ語圏の南部において（かつ特に書き言葉において）、接頭辞動詞として用いられる傾向がある、という Duden 9 (2011: 940) の記述が参考にできる。übersiedeln もまた、意味的には本来不変化詞動詞であるのに、オーストリアなどにおいては、接頭辞動詞として用いられているという可能性がある。¹⁵⁸

4.2.1.4.4 その他の観点 2 : Dewell (2011) 説

先行研究では Dewell (2011: 253f.) が、übersiedeln と übersiedeln に関してもやはり「総観的 vs. 連続的」という線で論じている。次に当該箇所を引用する（下線は引用者、原文註は省略）。なお、Dewell (2011: 253f.) は先述の地域差を考慮していない。

(50) Beyond the effects of transitivity, übersiedeln is like überführen in that the prefixed

¹⁵⁸ なぜ本来不変化詞動詞であるものが接頭辞動詞として用いられるのかという疑問は残る。ここからは推測の域を出ないが、歴史的に見ると、ドイツ語の複合動詞としては接頭辞動詞の方が不変化詞動詞よりも古い造語形式であるため (Horlitz 1982: 259; 中高ドイツ語において接頭辞動詞が不変化詞動詞よりも優勢であったことについては Klein/Solms/Wegera 2009: 549), 周縁地域において（かつ書き言葉において）、接頭辞動詞というより古い形式が選好される場合があるのかもしれない。

form is more likely to occur when the destination is routine and predictable as in (2b)[150 Patienten müssen *übersiedelt* werden] – or, as in (9b)[Und ca. zur selben Zeit sind wir dann in unsere jetzige große Wohnung *übersiedelt!*], already known. The prefixed verb is also more likely when the whole event takes place within a given system. In the case of *übersiedeln* that tends to mean a routine change of residence within the same city, as opposed to completely resettling in a new city or country. The particle verb *ÜBERSiedeln* on the other hand becomes more likely when the communicative focus is on where the FG resettles to, as in (2a)[Und diese 200000 Menschen sollten, so forderte die tschechoslowakische Regierung, nach Ungarn *übergesiedelt* werden.], especially when there is a major relocation to a new city or country. The particle verb is also more apt to call attention to the details of the process, such as moving furniture and possessions (the manner of relocating). That is obviously the case in sentences like (2a), and it is also a subtle factor in choosing the particle verb in (9a)[Nach dem Tod von Kringel bin ich dann langsam in die Wohnung *übergesiedelt*.]. (9b), unlike (9a), portrays the event as relatively simple and holistic, without calling attention to its “internal” details.

(50) の論点は、具体的には 2 点に大別できる。第 1 に *übersiedeln* においては所与 (= 既知) のセッティング内での移動が表され易いのに対し、*übersiedeln* においては、その外への、新しい場所への移動が表され易いという論点と、第 2 に、*übersiedeln* における方が、移動の様態へ注目が喚起され易いという論点がある。

本稿としては先述のように、両語の使用には地域差が決定的と考えるが、もしそうでないとするならば、*übersiedeln* において「新しい場所への移動が表され易い」という可能性 (= (50) の第 1 の論点) は否定できない。4.2.1.3 で述べたように、地域差を考慮しない場合、両語に関しては、着点のみと共起する頻度、ならびに起点および着点と共起する頻度に有意差が見られる。そして、そのことに鑑みると、相対的に *übersiedeln* において、起点への注目の度合いが低く、またそれに応じて着点への注目の度合いが高いと言える。*übersiedeln* において着点への注目の度合いが高いのは、*übersiedeln* において「新しい場所への移動が表され易い」ことに起因する可能性がある。なお、第 2 の論点については判断の手がかりを見出せていない。

4.2.1.4.5 目末まとめ

übersiedeln と übersiedeln は〈拠点を移す〉という語義で競合しているように見えるが、実際には競合の度合いは低く、両者の使用には地域差の関与が決定的と考えられる。すなわち、当該語義の übersiedeln はドイツで、übersiedeln はそれ以外の地域で、とりわけオーストリアでよく用いられると考えられる。

もし地域差の関与を考慮しないならば、第 1 に着点への注目の度合いの差（= übersiedeln において着点への注目度合いが相対的に高い）が、第 2 に抽象性・比喩性の差（= übersiedeln の方が比喩的・抽象的）が認められる可能性が高い。¹⁵⁹

4.2.2 überführen

4.2.2.1 接頭辞動詞

検索日：2020年11月2日；ヒット件数：9万4397件
分析データ：240件；有効データ：200件

überführen は他動詞として、第 1 に〈～を移す〉という語義で、第 2 に〈～を有罪認定する〉という語義で用いられる。¹⁶⁰ 次に両者の例を挙げる（下線は引用者、以下同様）。前者の語義においては第 1 項として動作主が、第 2 項として「対象」（被動物）が共起するのみならず、起点ないし着点も共起するのに対し、後者の語義においては起点も着点も共起しない。

(51) Laut Polizei werden die Kennzeichen teilweise genutzt, um gestohlene Fahrzeuge ins Ausland zu überführen. (Braunschweiger Zeitung, 28.07.2011)

警察によると [盗まれた] ナンバープレートは、盗難車を海外に移す [< überführen] ためにも利用されているという。

(52) Ein Bahnerpresser, der Millionenforderungen gestellt und Gegenstände auf Eisenbahnstrecken in Ostfriesland gelegt hat, ist von der Polizei in Aurich überführt worden (Nürnberger Nachrichten, 20.07.1996)

億単位の要求をし、オストフリースランドの線路に物をおいた恐喝犯は、アウリ

¹⁵⁹ 他にも、文体差が候補として挙げられるかもしれない。〈拠点を移す〉という語義の übersiedeln の有効データ 199 例には、完了形での実現が 1 件も見られなかったが、これは、当該 übersiedeln の有効データ 191 例には、当該例が 34 件（=約 18%）確認されたことに鑑みると、注目に値し、übersiedeln の何らかの文体的特徴の反映ではないかと思われる。

¹⁶⁰ 佐藤（1961: 1301）によれば、überführen の当該第 2 義は、「加害者を屍体の箇所連れて行って犯行を自白させる意」に由来している。

ッヒ警察によって有罪認定された [überführen]。

(51) のような〈～を移す〉という語義の実現例は 98 例，(52) のような〈～を有罪認定する〉という語義の実現例は 102 例であったが，比較対象となる後述の不変化詞動詞 überführen には前者の語義しか確認できないので，以下では〈～を移す〉という語義の 98 例のみを取り上げる。

なお，国松ほか（編）（²1998: 2388）は überführen に「（他の交通路の上に橋などをかけて）またいで道を通す」という語義も記述しているが，今回の収集例においてはこの語義の実現は確認できなかった。DWDS (<https://www.dwds.de/>, 最終アクセス 2020 年 12 月 14 日)¹⁶¹ や Duden (2014: 2060) に記述がないことに鑑みても，頻度が著しく低いと考えられるので，本稿ではこの語義を考慮しない。

〈～を移す〉という語義の überführen においても最も頻度が高いのは，既出の (51) におけるように，着点とのみ共起する場合であり，98 例中 82 件 (84%) がそうした例であった。それに対し次に挙げる (53) におけるように起点と着点の両方と共起する例は 14 件 (14%)，起点とのみ共起する例は (54) の 1 件だけであった (1%)。¹⁶²

(53) Letzte große Ehre für Portugals Fußball-Legende Eusebio: In einem Trauermarsch durch Lissabon **überführten** Fans des Anfang 2014 mit 71 Jahren verstorbenen Idols den Sarg mit seinem Leichnam vom bisherigen Grab zur letzten Ruhestätte des „Schwarzen Panthers“ ins nationale Pantheon. (Nürnberger Nachrichten 04.07.2015)

ポルトガルのサッカーのレジェンド Eusebio への最後の大きな敬意：リスボンを通る葬送行進の中で，2014 年のはじめに 71 歳で亡くなった彼のファン達は，彼の遺体が入った棺をそれまでの墓から，「黒豹」の最後の安息地，すなわち国のパンテオンへと移した [überführen]。

(54) Kadirs Leiche war per Hubschrauber aus Kabul überführt worden, wo am Morgen in der Hauptmoschee islamische Trauergebete gesprochen worden waren. (Nürnberger Zeitung, 08.07.2002)

¹⁶¹ 同 URL は以下繰り返さず，最終アクセスの日付のみ表示する。

¹⁶² なお，どちらとも共起していない例も次の 1 例あったが，データ自体の十全性が疑わしい例であった。überführt werden sollte: Seit Anfang der achtziger Jahre war das FBI in (Weltwoche, 16.02.2006)

Kadir の遺体はヘリコプターで、朝メインモスクでイスラムの葬儀の祈りが捧げられたカブールから移されてしまっていた [überführen]。

4.2.2.2 不変化詞動詞

検索日：2020年11月2日；ヒット件数：20万3918件¹⁶³

分析データ：7269件；有効データ：200件

überführen に対しても第1に〈～を移す〉という他動詞の語義が認められる。この語義においては第1項として動作主が、第2項として対象（被動物）が共起するのみならず、起点ないし着点が共起する。なお、有効データにおいて当該語義の実現は196例確認された。

(55) Als der spanische Maler Francisco Goya 1888 exhumiert wurde, damit seine Überreste in seine Heimat übergeführt werden könnten, fehlte der Kopf. (Neue Zürcher Zeitung, 03.07.2003)

スペインの画家フランシスコ・ゴヤが1888年に、亡骸を故郷に移せる [überführen] ようにと墓から掘り起こされた時には、頭部が欠けていた。

第2に収集例には他にも、(56)に挙げるように自動詞として用いられている例が3例含まれていた。überführen に自動詞用法を記述している辞書類は見出し難いが、こうした例に鑑みると、überführen には〈(～へ) 導く〉という語義も想定できる。

(56) Köstlich auch die Ansage. Jeweils ein Chormitglied führt auf sehr persönliche Art und Weise zum nächsten Lied über. (Mannheimer Morgen, 30.09.1998)

アナウンスも素晴らしかった。その都度合唱団員が一人、とても個性的に次の曲へ導く [überführen]。

第3に収集例には1例だけ überführen の例とは考え難い例 (57) が含まれていた。(57) に関しては、この über は不変化詞ではなく「～の間中」という意味の副詞と考えられるので、以下考慮しない。

¹⁶³ 検索時に、überführen と確定し得ない語形 (überführen, überführte, ...) は省いてある。

(57) Gegen die erschreckend schwachen Sportfreunde, bei denen in keiner Phase des Spiels der unbedingte Wille zum Sieg zu erkennen war, **führten** die robusten Gäste fast das ganze Spiel **über**.

この恐ろしく弱いスポーツ愛好家たちには、試合のどの段階においても絶対に勝とうという意志は感じられない。彼らに対して、この屈強なゲストチームは試合を、ほぼ全体を通して有利に進めた [< führen]。

〈～を移す〉という語義の überführen においても最も頻度が高いのは、既出の (55) におけるように、着点とのみ共起する場合であり、196 例中 171 件 (87%) がそうした例であった。それに対し、次に挙げる (58) におけるように、起点と着点両方と共起する例は 23 件 (12%)、起点とのみ共起する例は (59) の 1 件 (1%)、どちらとも共起しない例は (60) の 1 件 (1%) であった (例文の下線は引用者による)。

(58) Greenpeace mobilisiert meistens an mehreren Fronten gleichzeitig gegen Areva. Derzeit zum Beispiel gegen die Aufbereitung von 140 Kilo militärischem Plutonium-Pulver, das jüngst aus den USA nach Frankreich übergeführt wurde. (NZZ am Sonntag, 17.10.2004)

グリーンピースはアレヴァに対して、たいいてい複数の戦線を同時に張るようにしている。目下例えば、アメリカ合衆国からフランスに先日移された [< überführen] 軍事目的のプルトニウム粉末 140 キロの再処理に反対している。

(59) Professor Brauns Asche war am 3. Juni 1921 - nachdem sie aus Amerika übergeführt worden war - sang- und klanglos auf dem Grab seiner Eltern placiert worden. (Der Spiegel, 23.05.1956)

ブラウン教授の遺灰は 1921 年 6 月 3 日に、アメリカから移された [< überführen] 後で、粛々と彼の両親の墓上に置かれた。

(60) Von Mittwochmorgen bis Donnerstag früh mussten aber mit 1000 Lastwagen nochmals 1,8 Mio. "Teile" **übergeführt** werden, darunter Gepäcktransport-Fahrzeuge, schwere Traktoren und grosse Mengen Werkzeug. (Neue Zürcher Zeitung, 29.09.2006)

水曜の朝から木曜日早朝にかけて、1000 台のトラックで再度 180 万の「部品」が移され [< überführen] なくてはならなかったが、その中には、荷物車、重牽引車や大量の工具が含まれていた。

4.2.2.3 中間まとめ

まず両語の語義をまとめると次の表 4.9 の通りとなる。

語義	überführen	überführen
〈～を移す〉	✓	✓
〈(～へ) 導く〉	-	✓
〈～を有罪認定する〉	✓	-

表 4.9: überführen と überführen における語義の分布.

次に、起点ないし着点との共起頻度をまとめると次の表 4.10 の通りとなる。この表からは、überführen と überführen における起点と着点の共起状況にはほとんど差異は見られない（＝最大 3 ポイント差）ことが分かる。したがって、以下では起点と着点との共起状況・頻度の差は考慮しないことにする。¹⁶⁴

	überführen	überführen
起点とのみ共起	1 (1%)	1 (1%)
着点とのみ共起	82 (84%)	171 (87%)
起点および着点と共起	14 (14%)	23 (12%)
どちらとも共起しない	1 (1%)	1 (1%)
	98 (100%)	196 (101%)

表 4.10: überführen, überführen と起点・着点との共起頻度.

4.2.2.4 競合の考察

〈～を移す〉という語義における überführen と überführen の競合を取り上げて、以下まず 4.2.2.4.1 で過程性について、4.2.2.4.2 で比喩性・抽象性について論じる。それから 4.2.2.4.3 で、広い意味での先行研究で指摘されている、両語の使用に関する地域差について論じ、4.2.2.4.4 で Dewell (2011: 249ff.) の überführen に関する説を論じる。

4.2.2.4.1 過程性

〈～を移す〉という語義における überführen と überführen の持続性は、今回の調査では共に不明であった。

第 1 に überführen については、持続性に関する本稿の判断基準を満たす例がそも

¹⁶⁴ なお、4.2.2.4.3 で後述する地域差を考慮したとしても、差がほとんどないことに変わりはない。

そも見出せなかった。例えば現在時制における無標のエピソード用法解釈に着目しても、(61)のように未来読みと考えられる例しか確認できず、事象性記述の状況タイプを判断することはできなかった。

(61) Swisscom **überführt** laut einer Mitteilung Teile der Logistik in andere Einheiten der Gruppe und lagert die Auslieferlogistik grösstenteils aus. (Neue Zürcher Zeitung, 09.03.200)

Swisscom は、通知によると、流通の諸部門をグループの他のユニットに移し [**< überführen**], 発送の大部分を外注するという。

第2に **überführen** についても同様で、例えば、(62)に示すように時間の **in** 前置詞句との共起 („in sechs Wochen“) は観察されたものの、当該 **in** 前置詞句は所要時間の解釈とは見なし難いことから、事象性記述の状況タイプは判断できなかった。¹⁶⁵

(62) Vor der Kathedrale von Rotterdam, in der Fortuyns Sarg aufgebahrt wurde, nahmen Tausende Niederländer Abschied von dem ermordeten Politiker. Im Rathaus trugen sich Trauernde in Kondolenzlisten ein. Fortuyn wird heute nach einem Trauerzug durch Rotterdam und einer Totenmesse in der Kathedrale beim Familiengrab in Ijmuiden beigesetzt. In sechs Wochen soll die Leiche dann in eine italienische Gemeinde **übergeführt** werden, wo Fortuyn ein Haus hatte. (Süddeutsche Zeitung, 10.05.2002)

Fortuyn の棺が安置されたロッテルダム大聖堂の前では、数千のオランダの人々が、この殺害された政治家に別れを告げた。市役所では、弔問客が弔問リストに記帳していました。Fortuyn は本日、ロッテルダムを葬送行進と大聖堂での鎮魂ミサの後、Ijmuiden の家族墓に埋葬されます。それから {6 週間後 / *6 週間かけて} に遺体は、Fortuyn が家をもっていたイタリアのある共同体へ移される [**< überführen**] そうだ。

¹⁶⁵ **in sechs Wochen** は、「6 週間以内に」とも解釈できるかもしれないが、移葬が実際に約「6 週間後」である 41 日後の 2002 年 6 月 20 日に行われた事実 (https://en.wikipedia.org/wiki/Pim_Fortuyn, 最終アクセス: 2021 年 9 月 22 日) に鑑みると、「6 週間後」という訳が適切と言える。もちろん、6 週間以内に移葬するという事だけ決まっていれば、41 日後にようやく移葬できたという解釈も不可能ではないが、6 週間という具体的な数字を出す以上は、やはり (約) 6 週間後の具体的な日における移葬が念頭にあったと考える方が自然に思える。

4.2.2.4.2 比喩性・抽象性

〈～を移す〉という語義においては **überführen** の方が **überführen** よりも比喩性・抽象性が高いように見える。以下その根拠を順に述べる。

まず **überführen** について言えば、「対象」ないし「着点」における選択制限の逸脱に起因する意味推移が観察される。**überführen** は、「対象」および「着点」として、例えば既出の (51) (53) (54) におけるように、具体物を選択すると考えられるが、そこから逸脱して、例えば既出の (61) の「流通の諸部門 (Teile der Logistik)」がそうであるように、抽象物を伴う場合がある。その場合 **überführen** の意味は、運搬という物理的な場所移動から、属性の変化へと推移していると考えられる。¹⁶⁷ こうした意味推移は、〈～を移す〉という語義の **überführen** の用例 98 件から不明 1 例を除く 97 例中、50 件 (52%) を占めていた。

なお、国松ほか (編) (²1998: 2388), DWDS (最終アクセス: 2022年6月29日), Duden (2014: 2060) では、**überführen** において、ならびに後述の **überführen** においても、運搬の意味と属性の変化の意味を別義として記述しているが、本稿は両者を〈～を移す〉という単義と捉えた上で、後者を当該語義が推移した意味で実現したものと捉えている。¹⁶⁸

次に **überführen** に関しても、**überführen** に観察されたのと同様の意味推移が、すなわち (63) に示すように、「対象」ないし「着点」における選択制限からの逸脱に起因して、属性の変化の意味に推移する場合は観察される。当該意味推移は、196 例中 71 件 (36%) を占めていた。

(63) Auf Dauer werden wir nur zusammenleben können, wenn diese Steueroasen in eine transparente Form **übergeführt** werden. (Weltwoche, 28.06.2007)

こうしたタックスヘイブンが透明な形態に移され [**überführen**] なければ、私たちが長く共生していくことはできないだろう。

当該意味推移の実現頻度は、**überführen** において有意に高いと言える。次の表 4.11

¹⁶⁷ 属性の変化が場所の変化であるかのように表され得るのは、「一般的に言って、ある物の「場所の変化」は、その物自体の変化ではな [く]」(成田 1982: 31), あくまでも位置という「属性の変化」であるからだと考えられる。

¹⁶⁸ 既に述べたように後者 (=属性の変化の意味) の方が実現頻度は高いが、本稿が想定しているのは (3.3.2), 原義・具体から比喩・抽象へ向かう意味推移であるから、あくまで前者 (=運搬の意味) から後者が派生している、という解釈になる。なお、前者から後者が派生しているという事は歴史的にも言える (Paul ¹⁰2002: 1039)。

にまとめる実測値を用いてカイ二乗検定（イエーツ補正あり）を行うと、有意水準5%で有意差あり（ $\chi^2=5.67$, $df=1$, $p=.017$ ）という結果になるからである。

	<u>überführen</u>	<u>überführen</u>
意味推移	97 例中 50 件 (52%)	196 例中 71 件 (36%)

表 4.11 : 〈～を移す〉という語義の überführen と überführen の意味推移頻度

4.2.2.4.3 その他の観点 1 : 地域差

先行研究では、überführen の競合に関しても地域差を記述するものがやはり存在する。例えば Ammon/Bickel/Lenz (2018: 762) は、接頭辞動詞 überführen の見出し下において、それがスイスやドイツに比べてオーストリアでは稀な表現であるという記述をし、さらにドイツでは不変化詞動詞としても用いられると指摘している。また他にも Meyer (2006: 265) は、接頭辞動詞 überführen の見出し下において、不変化詞動詞 überführen は、スイスにおいてはドイツにおけるよりも顕著に頻度が低いという記述をしている。

実態はどうだろうか。以下 〈～を移す〉という語義について述べるが、まず überführen の 97 例中で出典地域が確認できる 69 例のうち、ドイツを出典地域とするものは 46 件、ドイツ以外を出典地域とするものは 23 件（オーストリア 7 件、スイス 16 件）であった。次に überführen の 196 例中、出典地域が確認できる 187 例のうち、ドイツを出典地域とするものは 38 件、ドイツ以外を出典とするものは 149 件（オーストリア 35 件、スイス 113 件、ルクセンブルク 1 件）であった。以上をまとめたのが次の表 4.12 である。

	<u>überführen</u>	<u>überführen</u>
ドイツ	46 件 (67%)	38 件 (20%)
ドイツ以外	23 件 (33%)	149 件 (80%)
	69 件 (100%)	187 件 (100%)

表 4.12: überführen と überführen の文例の出典分布

表 4.12 からは、überführen はドイツでより頻繁に用いられる傾向にあり、überführen はドイツ以外の地域でより頻繁に用いられる傾向にあると言える。とはいえ、überführen はドイツ以外の地域でも、überführen はドイツでもある程度は用いられているように見えるので、両語に地域的な「棲み分け」があるとまでは言えないと思われる。当該競合において地域差は関与するかもしれないが、それを両者の選択を

動機づける決定的な差と見なすことは妥当ではない、と考えられる。

4.2.2.4.4 その他の観点 2 : Dewell (2011) 説

先行研究ではやはり Dewell (2011: 249ff.) が, (64) に引用するように (下線は引用者), *überführen* についても地域差は考慮せず, *überführen* は「予測可能な (predictable)」目的地への「ルーティン (routine)」としての移送を表すのに対し, *überführen* は予測不可能な目的地への移送を表すという趣旨を述べている。

(64) The prefixed verbs in (7a)[1963 wurde er in eine andere Klinik *überführt*, wo er bis 1974 blieb ‘In 1963 he was *transferred* to a different clinic, where he remains until 1974’] and (8a)[Jede Leiche ist innerhalb von 36 Stunden in eine Leichenhalle zu *überführen* ‘Every corpse is to be *conveyed* to a mortuary within 36 hours’] describe routine acts of delivering the patient or the body to the proper responsible authority within the normal system. In that sense these variants are similar to the very strongly lexicalized use of prefixed *überführen* for convincing someone of a crime; they involve routinely transferring an accusative [figure] to a predictable authority that will assume responsibility for it. When the particle verb is chosen as in (7b)[Wegen Suizidgefahr wurde der Tatverdächtige in eine psychiatrische Klinik *übergeführt* ‘Because of the danger of suicide the suspect was *transferred* to a psychiatric clinic’] and (8b)[Im Juli 1867 erhielt er den Befehl, die Leiche des erschossenen Kaisers Maximilian von Mexico nach Europa *überzuführen* ‘In July 1867 he received the order to transport the executed body of Emperor Maximilian of Mexico to Europe’] on the other hand, the destination is typically not as predictable and routine (i.e., not as lexically implied by the *über-*verb construction), and the construction seems to focus more on reporting the specific destination where the [figure] is being transported. (Dewell 2011: 250)

しかし (64) を裏付けるような振る舞いは, 实例の観察においては見出し難い。*überführen* の方がルーティンとしての移送を表す, つまりより語彙化していることの根拠として Dewell (2011: 250: 註 3) は, Google 検索において Leiche「死体」や Patienten「患者」と共起する件数が *überführen* において桁違いに多いことに言及しているが, そういった傾向は少なくとも今回のコーパス調査においては読み取れない。

なぜなら、Leiche(n) および Leichnam(e) は überführen と 98 例中 7 件 (7%) 共起していたが、überführen と 196 例中 12 件 (6%) 共起していたし、他方 Patient(en) は überführen と überführen と共起していなかったからである。

4.2.2.4.5 目末まとめ

überführen と überführen は〈～を移す〉という意味で競合している。当該語義における両語の使用には地域差がある程度は関与するにしても、少なくとも地域差が両者の決定的な差異というわけではないと思われる。

当該競合においては、überführen の方が überführen よりも比喩的・抽象的な表現である。前者の方が、物理的な場所移動ではなく属性の変化の意味で用いられやすい。

4.3 unter- 動詞 : unterschieben

4.3.1 接頭辞動詞

検索日 : 2021 年 5 月 19 日 ; ヒット件数 : 2 994 件¹⁶⁹

分析データ : 688 件 ; 有効データ : 200 件

unterschieben には、与格目的語と対格目的語を伴う〈～に…をこっそり押し付ける〉という語義がひとまず想定できる。¹⁷⁰

その上で第 1 に、与格目的語表示について述べると、不明 3 例を除く 197 例中 190 例でその表示が見られる。(65) は一例である。

(65) Inzwischen weiss ich, dass das Bild eine seit dem 12. Jahrhundert weitverbreitete Legende erzählt, die eng mit dem Jakobsweg und dem nach ihm benannten Heiligen verbunden ist: Ein Pilger kehrt in einer Gaststätte ein. Die Tochter des Wirts verliebt

¹⁶⁹ 相良 (251978: 1539) は、unterschieben の語義に関して unterschieben の 1 語義 (= 「下に」という意味を伴わない語義) と同一とした上で「unterschieben を使う方がよい」としている。確かに unterschieben は、コーパスでのヒット件数に鑑みると unterschieben よりも使用頻度が低いと言えるが、unterschieben には、後述するように、unterschieben には見られない特徴があることにも留意したい。なお、相良 (251978: 1539) と同趣旨の見解は、Sanders (81924: 752) にも見出せる。

¹⁷⁰ 「こっそり」という意味合いが常にあるのかに関しては議論の余地があるが、主に Pons (2018: 1471) の「誰かに何かを、当該人物がそれに気づくことなく、与える (jmdm. etwas geben, ohne dass der Betreffende es merkt)」という記述に依拠して、ひとまずこのように語義を記述しておくことにする。

sich auf den ersten Blick in ihn. Er aber bleibt keusch und wehrt ihre Avancen ab. Das kränkt die Schöne zutiefst. Sie sinnt auf Rache und **unterschiebt** ihm einen silbernen Becher.

Als vermeintlicher Dieb wird der Pilger ertappt, verurteilt und gehenkt. (NZZ am Sonntag, 06.01.2019)

この間に私は、この図像が、聖ヤコブの道とも同名の聖人とも結びつきの強い、12世紀来広く知られている伝説を語り伝えていることを知った。ある巡礼者が宿に立ち寄る。宿主の娘は一目で彼に恋をするが、彼は操を守り彼女の好意を拒む。そのことに美しい彼女は深く傷つき、復讐を思い巡らせ、彼に銀の杯をこっそり押し付ける [**unterschieben**]。

その巡礼者は泥棒と間違われて現行で捉えられ、有罪とされ絞首刑になる。

(65) に鑑みると、与格目的語には着点 (Goal) の意味役割が想定できる。¹⁷¹ また、着点にあたる存在は、その表示のない7例においても、基本的には文脈から特定できる。例えば次の(66)では、捜査に関わる人物がそれにあたると考えられる。したがって、**unterschieben** における与格目的語表示は必須の可能性が高いと言える。

(66) Bei der DNA-Analyse kommt ja nichts anderes heraus, außer ob jemand der Spurenverursacher ist oder nicht. Das schützt Unschuldige und kann Verdächtige überführen, ein Missbrauch ist eigentlich ausgeschlossen: Es sei denn, jemand **unterschiebt** böswillig falsches Material. (Falter, 23.01.2002)

DNA 分析においては当然、誰かが痕跡の原因であるか否かしか明らかになりません。それは無実の者を守りますし、容疑者を立証することもでき、悪用といったことはそもそも問題になりません。誰かが悪意を持って偽の素材をこっそり押し付ける [**unterschieben**] 場合を除いては。

第2に、対格目的語 (= 第2項) について述べる。**unterschieben** の第2項は「対象」と考えられるが、既に提示した(65)や(66)におけるように、出来事に先立って存在する被動物であることが明らかな場合もあれば、そうではなくむしろ出来事によって存在するに至る被成物と考えられるような場合もある。以下それぞれの場合

¹⁷¹ 受け手 (Reziepent) という分析もあり得るが、本稿では 3.2.3 で述べたように、分化を最小限にするため当該項も着点として分析する。

について 4.3.1.1 と 4.3.1.2 で順に論じる。

4.3.1.1 〈～に…をこっそり押し付ける〉

第 2 項が被動物と考えられる場合、本稿は *unterschieben* に〈～に…をこっそり押し付ける〉という語義を認めるが、この語義は、少なくとも原義的には、例えば既出の (65) や (66) におけるように、物理的な移動を表すと考える。

4.3.1.2 で論じるように、非物理的な移動の意味が *unterschieben* にあることは広く認められているが、(65) や (66) におけるような物理的な移動の意味については、通常 *unterschieben* に関してだけ認められている。例えば国松ほか (編) (2019: 2465) は、*unterschieben* に対して「(…にありもしない事柄を) なすりつける」(下線は引用者) という語義しか記述していないし、次に引用する非物理的な移動の例文しか挙げていない。

- (67) a. Diese Äußerung habe ich nie getan, man hat sie mir *unterschoben*. そんなことを言った覚えは決してないが 言ったことにされてしまったのだ [.]
- b. Warum *unterschiebst* du mir diese Absicht? なぜ君は私にそんな意図があるなどと言うのか.

(国松ほか (編) 2019: 2465)

同様に Dewell (2011: 256ff.) も *unterschieben* に非物理的な移動の意味しか想定していない。確かに、例えば次の (68b) を挙げていることから、*unterschieben* が具体物を目的語として伴う場合を考慮していることは明らかだが、Dewell (2011: 256ff.) は、*unterschieben* が具体物を目的語として伴う場合においても物理的な移動が表されるとは見なしていない。Dewell (2011: 257) によれば、(68a) の *unterschieben* は「物理的な対象を誰かの個人的空間に (こっそりと) 置くという全く通常の例 (a perfectly normal instance of (surreptitiously) putting a physical object in someone's personal space)」であるが、(68b) の *unterschieben* は、「その手紙を Garfield に物理的にこっそり押し付けることを表すのではなく、彼がその手紙を書いたと主張することを表す。(the construction does not describe physically planting the letter on Garfield. It describes alleging that he wrote the letter.)」(下線は引用者)

- (68) a. Hast du deinem Süßen denn schon mal einen Brief *untergeschoben*, in die

Arbeitstasche oder so.

‘Have you ever secretly *slipped* your sweetheart a letter, in his briefcase, say’

- b. James Garfield wurde ein gefälschter Brief *unterschoben*, in dem er die chinesische Einwanderung befürwortete.

‘A forged letter was *attributed* to James Garfield in which he endorsed the Chinese immigration’

(Dewell 2011: 257)

しかし、*unterschieben* が物理的に押し付けられ得る存在（＝具体物）を伴う場合において物理的な移動が表され得ることは、(65) (66) が示している通りであるし、同じく物理的な移動が表されている例は他に 12 例確認されている。したがって、*unterschieben* に関しては、それが物理的な移動を表す場合も考慮する必要がある。

なお、この点に関して本稿と近い見解の文献としては Duden 9 (2011: 931) が挙げられる。Duden 9 (2011: 931) は、「具体的（場所的）な意味では不変化詞動詞 [*unterschieben*] が用いられる」のに対し「比喩的な意味においては両方の形 [*unterschieben*, *unterschieben*] が現れ得る」が、「具体的な意味が手近になればなるほど、不変化動詞 [*unterschieben*] がむしろ用いられる」（下線部引用者）と述べている。この記述は、*unterschieben* に対しても物理的な移動の意味を完全には排除していないという意味で、本稿の見解とも矛盾しない。

最後に (65) と (66) はそれぞれ、スイスとオーストリアの新聞雑誌を出典としているので、次にドイツを出典地域とする例も挙げておく。¹⁷²

(69) Im Gehege um die gestreifte Henne trolt sich ein kleiner Trupp zerzauster Küken.

Als das Huhn kluckte, wurden ihr gleich noch einige Eier ihrer andersfarbigen Verwandtschaft *unterschoben*, so dass es nunmehr einer bunt gemixten Familie vorsteht. (Nordkurier, 11.05.2000)

ゲージの中、縞柄のメンドリの周りでは、ぼさぼさのヒヨコの小隊がぶらぶら歩いている。コッコと鳴いた時、メンドリにはすぐに、色違いの親戚の卵がいくつ

¹⁷² 12 例から出典地域情報が不明な 3 件を除いた 9 件中では、ドイツの新聞雑誌の用例が (69) の 1 件なのに対し、オーストリアのそれが 6 件、スイスのそれが 2 件となるが、Variantengrammatik des Deutschen (2018 ; 最終アクセス : 2021 年 7 月 28 日) , Ammon/Bickel/Lenz (2018) , Meyer (2006) において該当するような記載がないことに鑑みて、この点での地域差は考慮しないこととする。

かさらに押し付けられた [< **unterschieben**] のであり，結果として，それは色とりどりの混合家族を率いているのである。¹⁷³

4.3.1.2 〈～に対して…と誣（し）いる〉

第2項がむしろ被成物と考えられる場合に鑑みて，本稿は **unterschieben** に 〈～に対して…と誣（し）いる〉 という語義も認める。当該事例としては (70) が挙げられる。

(70) Den Bürgern zu **unterschieben**, sie sässen einigen Panikmachern und Ideologen auf, ist nicht recht. (Neue Zürcher Zeitung, 10.11.2005)

市民に対して，何人かの騒乱者やイデオログに騙されていると誣いる [< **unterschieben**] のは正しくない。

(70) の定形動詞第二位 (=V2) 補文は，発言内容ないし思考内容と考えられる。したがってそれは，Dewell (2011: 257) が述べているように，**unterschieben** という出来事に依存して存在する対象と考えられ，¹⁷⁴ 被動物よりはむしろ被成物と見なすのが妥当に思える。なお，(70) のように V2 文を伴う例は，計 25 例見られた。¹⁷⁵

〈～に対して…と誣いる〉 という語義を認める根拠は，このように V2 補文の観察に存するが，当該語義は V2 補文を伴う場合だけに認められるというわけではない。例えば次の (71) においては，「車 (ein Auto)」が物理的に押し付けられたわけではないのはもちろんのこと，「車」の帰属が押しつけられたということでもなく，むしろ「(バイクで走っていたのに) 車で走った」と誣いられたという文意と推察される。そうだとすれば，「車」は，V2 文と同様に命題を表していると考えられ，この例も 〈～に対して…と誣いる〉 という語義の **unterschieben** の実現と見なせる。¹⁷⁶

¹⁷³ (69) の **unterschieben** は「～の下に…を押し込む」という意味にも解釈できるが，そうする必要があるわけではない。また，この例だけをもって「～の下に…を押し込む」という他義を **unterschieben** に認めるのは，各種辞書記述に鑑みても妥当ではないように思われる。

¹⁷⁴ The accusative FGs with *unter-* verbs are less tangible things such as allegations or claims that typically do not really exist independently of the event described by the verb – in any event they do not attract concentrated focal attention. (Dewell 2011: 257; 下線は引用者)

¹⁷⁵ 参考のために他の類似の形式の分布について述べると，**unterschieben** が zu 不定詞句を伴う例は 4 例，dass 文を伴う例は 1 例見られた。

¹⁷⁶ 他方で例えば既出の (65) においては，後続文で **ertappen** 「現行で捕らえる」が用いられていることから，**unterschieben** によってやはり物理的な移動が表されていると言える。

(71) Manche machen aus einer Mücke einen Elefanten, die Gemeinde Pasching bei der Verfolgung von Lenkern, die boshafterweise die Fahrverbote in Langholzfeld ignorieren, aus einem Mofa einen Wagen. So wunderte sich eine 34jährige Zeitungszustellerin, daß ihr ein Auto **unterschoben** wurde. (Neue Kronen-Zeitung, 05.03.1997)

蚊から象をつくる [= 針小棒大に言う] 人もいるが, Pasing 地域では, Langholzfeld での車禁止を悪意を持って無視するドライバーを追放する中で, バイクから車をつくることになる。34 歳の新聞配達員の女性は, 彼女に { *車が押し付けられた / 車で走ったと誣いられた } [**unterschieben**] ことを訝しんだ。

4.3.1.3 どの語義?

本稿はこのように, **unterschieben** に 2 語義を認めるのであるが,¹⁷⁷ そうすると **unterschieben** が V2 補文ではなく通常の対格目的語を伴って非物理的移動を表す大多数の場合において, これを 〈〜に…をこっそり押し付ける〉 という語義の比喩的・抽象的な実現と見なすべきか, あるいは 〈〜に対して…と誣いる〉 という語義の実現と見なすべきかという問題が生じてくる。そして, この問題には多くの場合解がないように思える。それは例えば (72) や (73) のような場合である。

(72) Kann eine Ehe annulliert werden, wenn eine Schwangerschaft vorgetäuscht bzw. ein fremdes Kind **unterschoben** wird und der einzige Grund für die Heirat das Kind war? (Salzburger Nachrichten, 23.09.1995)

結婚というものは, 妊娠を装われたり, 他人の子供を { 押し付けられ / 自分の子供と誣いられた } [**unterschieben**], かつ結婚の唯一の理由がその子供だからといって, 解消しうるものなのでしょうか?

(73) Diese Rezension ist genau das, was sie dem Buch selber vorhält: eine rasend einseitige Polemik, politisch motiviert, für die FAZ verständlich. Der Rezensent **unterschiebt** Naomi Klein irrtümlich einen Gedanken von Machiavelli, den sie nur zitiert hat. (Wikipedia, 2011)

この書評は, それがこの本に対して非難することそのものである。ものすごく一面的な論争であり, 政治的な動機がある。FAZ には無理からぬことだ。書評子

¹⁷⁷ なお, 本稿と同じように, 与格目的語と対格目的語を伴う **unterschieben** に対して 2 つの語義を認めている辞書としては, DWDS (最終アクセス: 2021 年 7 月 10 日) が挙げられる。

は、Naomi Klein に、彼女がただ引用しているだけのマキャベリの思想を {誤って押し付けている／、それを持っていると誣めている} [unterschieben]。

(72) においては、「子供」の帰属が「押し付けられる」という非物理的移動の解釈も、「自分の子供である」ことにされるという命題解釈も同様に可能と考えられる。また (73) においても同様に非物理的解釈 (= 当該思想の帰属を押し付ける) も命題解釈 (= 当該思想を持っていると誣める) も成り立つと考えられる。

このような事情があるので、例えば有効データにおける〈～に…をこっそり押し付ける〉と〈～に対して…と誣める〉という語義それぞれの実現件数を挙げるといったことは困難である。

4.3.2 不変化詞動詞

検索日：2021年5月19日；ヒット件数：1万2391件
分析データ：497件；有効データ：200件

unterschieben には第1に、〈～の下に…を押し込む〉という語義が認められる。当該語義の例は、今回の有効データに少なくとも9件確認された。(74)はその一例であるが、(74)においてそうであるように、unterschieben の第2項は「対象」、中でも被動物であり、与格目的語は着点と考えられる。¹⁷⁸

(74) Eine neue Trinkwasserleitung in leuchtendem Blau wird der Straße derzeit **untergeschoben** (Braunschweiger Zeitung, 28.05.2009)
鮮やかな青色をした新しい水道管が目下、その通りの下に押し込まれている [unterschieben]。

unterschieben には第2に、「下に」という意味が欠如している場合があり、その場合には〈～に…をこっそり押し付ける〉という、先述の unterschieben に対しても記述した語義が認められる。(75)はその一例である。(75)に見て取れるように、当該語義の unterschieben は、第2項として「対象」を、中でも被動物を伴い、与格目的語として着点を伴う。

¹⁷⁸ 与格目的語の表示がなかったのは、9例中1例のみであった。総数が少なすぎるが、与格目的語表示は必須の可能性はある。

(75) Als die Beamten seine Schuhe sicherstellten, behauptete er, die Polizei hätte ihm das Heroin **untergeschoben**. (Rhein-Zeitung, 13.03.2003)

警官たちが彼の靴を押収した時，警察がそのヘロインをこっそり自分に押し付けたのだ [unterschieben] と主張した。

当該語義の unterschieben における与格目的語表示は，それが今回，当該語義と判断した 180 例中少なくとも 171 例で確認されたこと，ならびに，表示がない例においても着点は基本的に文脈から特定される場合が多いことに鑑みて，必須の可能性が高いと言える。例えば次の (76) では，文脈から VW 社が着点と特定される。

(76) VW-Chef Ferdinand Piech "schließt nicht aus", daß bei der Durchsuchung in Wiesbaden die geheimen Opel-Daten **untergeschoben** worden seien. (Der Spiegel, 27.12.1993)

VW の社長 Ferdinand Piech は，Wiesbaden での捜索の際に Opel の秘密のデータがこっそり押し付けられた [unterschieben] という事態も「排除していない」。

ここでは最後に，unterschieben にも先述の unterschieben に認めた〈～に対して…と誣める〉という語義を認める必要があるかどうか論じておく。結論から言えば，本稿は当該語義を unterschieben に認める必要性に対して否定的である。unterschieben に当該語義を認める必要性があるというのは，unterschieben と V2 補文との 25 件の共起例の観察に基づく見解であった。ところが unterschieben と V2 補文の共起は，Wikipedia の記事編纂上の議論を出典とする次に挙げる (77) の 1 例しか今回は確認できていない。しかも，あるインフォーマントによると，(77) ではむしろ (77') のように unterschieben を用いるのが正しいという。したがって，当該語義を unterschieben に認める必要性は，現時点では見出せないということになる。

(77) Es geht auch gar nicht darum[,] Arendt **unterzuschoben**, sie hätte ausgesagt, Lenin sei bereits totalitär gewesen. (Wikipedia, 2011)

Arendt に対し，彼女は Lenin がすでに全体主義的であったと発言した，と誣める [unterschieben] ことが問題なのでもない。

(77') Es geht auch gar nicht darum, Arendt zu unterschoben, sie hätte ausgesagt, Lenin sei bereits totalitär gewesen.

4.3.3 中間まとめ

unterschieben と unterschieben における語義の分布をまとめたのが、表 4.13 である。

語義	<u>unterschieben</u>	<u>unterschieben</u>
〈～に…をこっそり押し付ける〉	✓	✓
〈～に対して…と誣いる〉	✓	-
〈～の下に…を押し込む〉	-	✓

表 4.13 : unterschieben と unterschieben における語義の分布

4.3.4 競合の考察

表 4.13 に示されているように、unterschieben と unterschieben は、〈～に…をこっそり押し付ける〉という語義において競合している。以下当該競合を取り上げて、4.3.4.1 で過程性について、4.3.4.2 で比喩性・抽象性について論じる。

4.3.4.1. 過程性

〈～に…をこっそり押し付ける〉という語義においては、unterschieben の持続性は解明できなかったが、unterschieben は〔-持続性〕と考えられる。

第 1 に、当該語義の unterschieben の持続性が解明できなかったのは、unterschieben において当該語義の実現と〈～に対して…と誣いる〉という語義の実現が峻別し難いことに起因している。例えば (78a) として再掲する既出の (73) においては、現在時制の無標のエピソード用法解釈において現在読みが得られることから、事象性記述は Accomplishment 表現（ないし非有界的だとしたら活動表現）と判断でき、したがって unterschieben は〔+持続性〕と判断できるのであるが、すでに述べたように (78a) (=73) は、〈～に対して…と誣いる〉という語義の実現とも見なし得る例であり、こうした例を手掛かりに〈～に…をこっそり押し付ける〉という語義における持続性を判断することはできない。

(78)(=73) a. Diese Rezension ist genau das, was sie dem Buch selber vorhält: eine rasend einseitige Polemik, politisch motiviert, für die FAZ verständlich. Der Rezensent unterschiebt Naomi Klein irrtümllich einen Gedanken von Machiavelli, den sie nur zitiert hat. (Wikipedia, 2011 ; 下線は引用者)

この書評は、それがこの本に対して非難していることそのものである。ものすごく一面的な論争であり、政治的な動機がある。FAZ には無理からぬことだ。書評子は、Naomi Klein に、彼女がただ引用しているだけのマキャベリの思想を誤って押し付けている [< unterschieben]。

- b. 下線部：[der Rezensent unterschieb- N. K. irrtümlich einem Gedanken von M., den sie nur zitiert hat] (Accomplishment / 活動)
- c. unterschieben [+持続性]

第2に、当該語義の unterschieben は、それが次の (79) におけるように「好都合な瞬間に (in einem günstigen Augenblick)」という時点表現と共に共起し、かつ非進行相解釈となる例の存在に鑑みると、[-持続的] と言える。

- (79) a. In einem günstigen Augenblick schiebt das Weibchen seine Eier einfach fremden Paaren unter und überlässt ihnen die mühsame Aufzucht der Jungen. (spektrumdirekt, 05.08.2004)

好都合な瞬間に [=タイミングを見計らって] メスは卵を易々と見知らぬペアにこっそり押し付け [< unterschieben], ヒナたちの手間のかかる養育を委ねるのである。

- b. 下線部 < [das Weibchen schieb- seine Eier einfach fremden Paaren unter] (Achievement)
- c. unterschieben [-持続性]

なお、今回の収集例においては、当該 unterschieben が anfangen という開始表現の支配を受けている次に挙げる (80) も観察されたが、この例においては、少なくとも与えられた文脈からは、反復の開始読みであるといった可能性も排除されないので、unterschieben が [-持続性] であるという判断は保持可能と考える。¹⁷⁹

- (80) Ein Krippenknie, Frau Veit, erhält man auch, wenn man nur mit drei Kindern immer auf dem Boden herumrutscht, das hat überhaupt nichts mit der Gruppengröße zu tun. Obgleich, Sie haben natürlich recht, das ist ein wichtiger Punkt der

¹⁷⁹ 〈～に…をこっそり押し付ける〉においては、「誰かに何かをこっそり押し付ける」という現実の出来事に鑑みると、そもそも過程が問題にならないのではないかとも考えられる。

Gesundheitsschutz, um den geht es letztendlich in der Diskussion. Das Zweite, warum es mir manchmal schwer fällt, ruhig zu bleiben, ist, warum reden Sie unter dem Deckmantel von Gesundheitsschutz, was eigentlich angemeldet ist? Schon Herr Yildiz hat als anmeldende Partei sein Thema verfehlt, auch Sie haben es verfehlt. Sie fangen an, uns die frühkindliche Bildung unterzuschieben. (Plenarprotokoll, Hamburg, 2009 ; 下線は引用者)

託児所ヒザは、Veit さん、たった 3 人の子供といつも床の上で動き回っていてもできるのですよ。集団の大きさとは何の関係もないんです。もちろんそれは、議論の結局的テーマである健康保護の重要な観点ではありますが。私が落ち着いていられない 2 つ目の理由ですが、なぜあなたは健康の保護という、もともと申告されたテーマを隠れ蓑にして、語っているのですか？ Yildiz 氏も申告政党として、自分のテーマから逸脱しましたし、あなたも逸脱しているのです。あなたは私たちに就学前教育 [というテーマ?] をこっそり押しつけ [< unterschieben] 始めています。

b. 下線部 : [Sie unterschieb- uns die frühkindliche Bildung] (?)

4.3.4.2 比喩性・抽象性

〈～に…をこっそり押し付ける〉という語義において unterschieben と unterschieben のどちらが比喩的・抽象的な表現であるかについても、unterschieben において 〈～に…をこっそり押し付ける〉という語義と 〈～に…と誣いる〉という語義の区別が困難であるという事情により明確なことは言えない。

しかし、unterschieben における意味推移の頻度は、unterschieben におけるよりも遥かに高いので、〈～に…をこっそり押し付ける〉という語義に限定してもなお unterschieben の方がより比喩的・抽象的であるという可能性は高いように思われる。unterschieben においては、対格目的語に物理的に押し付けることができる存在を伴う例は、既に述べた通り 200 例中 12 件 (6%) しかないが、unterschieben においては、そうした例は 200 例中 105 件 (53%) 確認された。

4.3.4.3 項末まとめ

unterschieben と unterschieben は 〈～に…をこっそり押し付ける〉という語義で競合している。当該競合における内容的差異は、unterschieben において 〈～に…をこっそり押し付ける〉という語義と 〈～に対して…と誣いる〉という語義の区別が難し

いという事情により明確にはできなかったが、それでも当該競合において unterschieben の方がより比喩的・抽象的であるという可能性は高いと考えられる。

また当該競合においては、unterschieben が [-持続性] であることから、接頭辞動詞の方が過程的という可能性は否定される (=過程性は関与的でない、もしくは不変化詞動詞の方が過程的という、いずれかの可能性しかない)。

4.4 章末まとめ

本章での分析と考察の結果は表 4.14 の通りまとめられる。

事例	語義	接頭辞動詞	不変化詞動詞
durchbohren	～を穿つ	[-持続的] より比喩的・抽象的	[?持続的] より原義的・具体的
durchblättern	～を通覧する	より結果的 ([+持続的])	より過程的 ([+持続的])
übersiedeln	拠点を移す	オーストリア中心	ドイツ中心
überführen	～を移す	より比喩的・抽象的	より原義的・具体的
unterschieben	～に…をこっそり押し付ける	[?持続的] より比喩的・抽象的?	[-持続的] より原義的・具体的?

表 4.14: タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化動詞の 5 つの競合における差異

表 4.14 に示されているように、タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化詞動詞の競合には、比喩性・抽象性の違い、過程性の違い、ならびに地域差という論点がある。この 3 点について以下順に述べる。

第 1 に比喩性・抽象性の違いについて言えば、2 つの競合、すなわち「～を穿つ」という語義における durchbohren と durchbohren の競合、ならびに「～を移す」という語義における überführen と überführen の競合において、接頭辞動詞の方が不変化詞動詞よりも比喩的・抽象的である。また、「～に…をこっそり押し付ける」という語義における unterschieben と unterschieben の競合においても、同様の比喩性・抽象性の差が存在する可能性が高い。

他方で 2 つの競合、すなわち「～を通覧する」という語義における durchblättern と durchblättern の競合、ならびに「拠点を移す」という語義における übersiedeln と übersiedeln の競合においては、比喩性・抽象性の差は (ほとんど) 関与的ではない。とはいえ、少なくとも不変化詞動詞の方が接頭辞動詞よりも比喩的・抽象的であるような競合は、今回取り上げた 5 例にはなかったもので、比喩性・抽象性が関与する限り

においては、つまり少なくとも傾向としては、接頭辞動詞の方が不変化詞動詞よりも比喩的・抽象的と言うことができる。よって以下の仮説を提示したい。

(81) タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化動詞の競合に関する仮説：

前者の方が後者よりも比喩的・抽象的な傾向がある。

2.2.2 「抽象的・比喩的 vs. 具体的・原義的」で見たように、Duden (³2018: 294) や Helbig/Buscha (2017: 202) は、durch- 接頭辞動詞と durch- 不変化詞動詞の競合について前者が後者より比喩的・抽象的な場合のあることを記述ないし指摘していたが、この傾向はタイプ B 接頭辞とタイプ C1 不変化詞動詞の競合に広く認められる可能性があるかと本稿は考える。

第 2 に過程性の違いについて言えば、durchblättern と durchblättern の競合において、接頭辞動詞の方が不変化詞動詞よりも結果的である。また、durchbohren と durchbohren の競合においても、接頭辞動詞の方が [－持続的] であることから、過程性に関して同様の違いがある可能性は否定できない。

しかし、unterschieben と unterschieben の競合においては、unterschieben が [－持続的] であることから、不変化詞動詞の方が過程的である（＝接頭辞動詞の方が結果的である）とは言えない。また、übersiedeln と übersiedeln の競合、ならびに überführen と überführen の競合においては、当該動詞の持続性を明らかにできず過程性の判断に至らなかったが、そのこと自体がどちらの競合においても過程性（の差）がそれほど関与的ではないことを示唆しているようにも思われる。

以上のことを踏まえると、接頭辞動詞の方が不変化詞動詞よりも結果的である（＝不変化詞動詞の方が接頭辞動詞よりも過程的である）という差異は、それがあっても、タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化動詞の競合一般に認められるものではなく、（タイプ B）durch- 接頭辞動詞と（タイプ C1）durch- 不変化詞動詞の競合に限られるのではないかと考えられる。したがって仮説としては（82）が立てられる。

(82) durch- 接頭辞動詞と durch- 不変化動詞の競合に関する仮説：

前者の方が後者よりも結果的である（＝後者の方が前者よりも過程的である）。

2.2.1.1 「Streitberg (1895) 説以後」で見たように、過程性の差異を論述ないし記述している先行研究では、そもそも Dunger (⁸1929: 81), Weinrich (1993: 1069),

Duden (³2018: 294) のように、*durch-* 接頭辞動詞と *durch-* 不変化詞動詞の競合だけを念頭においているものもあることに鑑みても、Curme (²1974: 328) や Erben (¹¹1972: 71f.) のように、タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化動詞の競合を念頭においている文献でも、Streitberg (1895) のように、念頭においている範囲が明確でない文献でも、少なくとも例としては、*durch-* 接頭辞動詞と *durch-* 不変化詞動詞の競合しか挙げていないことに鑑みても、(82) は妥当な仮説と言える。

第 3 に地域差について言えば、「拠点を移す」という語義における *übersiedeln* と *übersiedeln* の間で、接頭辞動詞の方は主にオーストリアで、不変化詞動詞の方は主にドイツで用いられる、という地域差がある（その意味で、当該両語は競合しているというより、地域的に「棲み分け」していると言った方が適切である）。なお、他の 4 件の競合では、「～を移す」という語義における *überführen* と *überführen* の競合でも、地域差が関与する可能性があるが、いずれにせよ関与の程度はそこまで高くない。

こうした地域的な差は、本稿が 2. 「先行研究の見解」で取り上げた先行研究では取り上げられていなかったこともあり、それがどの範囲の競合で、こういった規則性を示すのか、現時点では予想が難しい。今後の課題ということになるが、手がかりの一つであると思われる自動詞と他動詞の区別を考慮しつつ、地域差も観察していきたい。

5. 事例研究Ⅱ：タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変

化詞動詞の競合

本章では、タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合を取り上げる。その際、前章と同様に、過程性と抽象性・比喩性に関わるような差異に特に注目する。

以下 1 節では、blühen 群を、2 節では klingen 群を、3 節では lügen 群を扱う。4 節はまとめである。

3.1. 「事例の選定」で述べたように、本章各節では、発見法上の有益性から、ある基盤語を共通して持つ動詞群全体を見るところから始める。

5.1 blühen 群

本節は、blühen を基盤語とする前綴り動詞として、abblühen, aufblühen, ausblühen, erblühen, verblühen の 5 動詞を取り上げる。¹⁸⁰

これら以外の blühen を基盤語とする前綴り動詞は、現代ドイツ語の語彙項目とは言い難いので、本稿では取り上げない。第 1 に anblühen は、DWB (1984: 298) や Sanders (1968 [1876] : Bd. 1, 173) には記載があるが、より最近の一般的な辞書には記載がない。¹⁸¹ これとほぼ同様のことは、umblühen にも当てはまる。¹⁸² 第 2 に entblühen は、例えば Duden (2014: 597) では「18, 19 世紀の古典作家の語彙」と

¹⁸⁰ これら動詞群における意味分化について、筆者は佐藤 (2021) でも論じているが、以下は異なる関心に基づく新しい論述である。また、内容が結果的に重複する部分についても、その根拠となる事例分析は本稿のために新たに組み込んだものである (佐藤 2021 では分析データを 200 例にしているが、本稿では有効データを 200 例とするべく全例新たに収集し直している)。

¹⁸¹ 念のためコーパスで検索し (検索日: 2019 年 9 月 19 日; 検索式: &anblühen oder (&blühen /+s0 an); ヒット数: 3482 件) 200 例無作為抽出しても、有効データは検出されなかった (つまり、200 例が前置詞の an が共起する例などで占められ、anblühen の例が含まれない)。

¹⁸² 記載が確認できたのは DWB (1984: 824) と Sanders (1968 [1876] : Bd. 3, 174)。参考のために筆者がコーパス外で見つけた実例を次に挙げておく: Er [Goethe] hat gezeigt, was einer werden kann, den das Schicksal inmitten der Flut auf einen umblühten Stein gehoben hat. (Kerr, Alfred (1899): *Zum achtundzwanzigsten August*. In: Rühle, Margret / Victor-Engländer, Deborah (Hgg.) (2009): *Alfred Kerr: Sucher und Selige, Moralisten und Büßer: Literarische Ermittlungen*, Frankfurt am Main: S. Fischer, 82.) 彼は、運命が洪水の最中に花で囲まれた石の上に持ち上げたような人物が何者になりうるかを示した。

されている。¹⁸³ 第3に *heranblühen*, *wiederaufblühen*, *emporblühen* (Mater 1967: 13) のような「副詞的な動詞不変化詞」(Fleischer/Barz ⁴2012: 419ff.) を持つ動詞は、不変化詞自体の意味の独立性・独自性が強く、競合に関わる可能性が非常に低いため本稿では取り上げない。

以下、5.1.1. では *abblühen*, *aufblühen*, *ausblühen*, *erblühen*, *verblühen* の5動詞を個別に論じ、競合の実態を明らかにする。それから5.1.2. では、明らかになった競合を考察する。5.1.3. は節末のまとめである。

5.1.1 個別の考察

5.1.1.1 *abblühen*

検索日：2020年1月3日；ヒット数：1000件
分析データ：1000件；有効データ：175件

上記のヒット数・有効データ数からは、*abblühen* の出現頻度があまり高くないことが分かる。DWDS (最終アクセス：2022年7月30日) の頻度表示でも、7段階中最も低い評価となっている。また、Duden (2014: 95) のように、*abblühen* を高尚な (*gehoben*) 表現とする辞書もある。確かに *abblühen* は、(1) のような実例に鑑みると、少なくとも比喩的な用法においては、例えば後述の *verblühen* とは異なる文体的特徴を有する可能性がある。

- (1) Die Geschichte folgt den Empfindungen Judiths, die zwischen Resignation und Aufbegehren schwankt, grundiert von einer beständigen Müdigkeit, erzählt hier von einer Nebenperson und deutet dort eine Katastrophe an und bleibt immer auch etwas schweigsam und geheimnisvoll. Und witzig: Die Damen in der Kundschaft einer Detektei sind nicht *verblüht*, sondern „**abgeblüht**“, und wenn es regnete, dann weinte nicht der Himmel, sondern: „Gott heulte.“ (Hannoversche Allgemeine, 08.04.2008)
- この話は、倦怠感を下地とし、あきらめと反抗の間を揺れ動く Judith の内面を追い、ある箇所ではある脇役のことを語り、また他の箇所ではある破局を示唆するが、口数はいつも少なめで謎めいたものであり続けている。そして愉快である。
- ある探偵事務所のクライアントの婦人たちは衰えている [*verblühen*] のではな

¹⁸³ コーパスで検索しても (検索日：2019年8月23日) 有効データはコーパス全体で2件のみと極めて少数である。見つかった2例は以下の通り：Einst, o Wunder! **entblüht** auf meinem Grabe (Wikipedia, 2011) かつて、奇跡よ、私の墓の上で咲き始めたのだ; Zwischen Norma und Michael **entblüht** eine Romanze. (Wikipedia, 2011) Norma と Michael の間にはロマンスが咲き始めた。

く凋落している [< abgeblüht] と、雨が降ったら、天が泣いたのではなく、「神が号泣した」と語られるのが。

abblühen は、第 1 項として「対象」を、さらに言えば被動物を伴う。また、sein 支配の場合も haben 支配の場合もある。

sein 支配の abblühen には、それが「変化 (Transformation)」を表すと考えられることから (Zifonun/Hoffmann/Strecker 1997: 1865f. を参照¹⁸⁴)、〈(花が) 咲き止む〉という語義が想定できる。(2) は一例である。同様の例は 115 件確認された。

(2) "Wenn die Bäume **abgeblüht** sind und die Frucht entsteht, ist ein Grad minus schon gefährlich", sagt Ernst Raith. (Burgenländische Volkszeitung, 26.03.2008)

「木々 (の花) が咲き止み [< abblühen] 実がなった状況での氷点下 1 度というのはかなり危うい」と Ernst Raith は言う。

他方で haben 支配の abblühen には、それが変化ではなく「終局 (Endphase)」という状態にあることを表すと文法上は考えられることから (Zifonun/Hoffmann/Strecker 1997: 1865f. を参照)、〈(花が) 咲き止むところだ〉という語義が想定できる。(3) に一例を挙げる。同様の例は 13 件確認された。

(3) Der Kirschbaum hat **abgeblüht**, im Biotop haben die Kaulquappen Beinchen angesetzt [...] (Muschg, Adolf: Sutters Glück, 2003[2001])

桜の木は { 咲き止むところだった / (咲き止むところだったことの結果として今) 咲き止んでいる } し [< abblühen], ビオトープではオタマジャクシに足が生えた。

ドイツ語の現在完了形には、過去読みと現在完了読みの両方があることから (Löbner 2002; Helbig/Buscha 2017: 135f.; 藤縄 2023)、(3) の訳においては両方の可能性を考慮している。

5.1.1.2 aufblühen

検索日：2020年1月9日；ヒット数：2万1456件

¹⁸⁴ Zifonun/Hoffmann/Strecker (1997: 1865f.) は、sein 支配と haben 支配の両方を持つ aus- 動詞を主に論じているが、ab- にも当てはまる場合があるとも述べている。

分析データ：270 件；有効データ：200 例

sein 支配のみである **aufblühen** には、〈(花が) 咲き始める〉という語義が認められる。¹⁸⁶ 次に一例を挙げる。

(4) Da plagt man sich ein halbes Jahr lang um einen Kaktus, dann **blüht** dieser mit der beachtlichen Zahl von 41 Blüten **auf**, doch die ganze Pracht währt nur einen Tag lang (Kleine Zeitung, 31.07.1999)

そこでは半年間あるサボテンをめぐって懸命の努力がなされる。それからそのサボテンは 41 という著しい数の花を伴って咲き始めるが [**aufblühen**], この壮観は一日しか続かない。

aufblühen の第 1 項は「対象」ということになるが、それは (4) においてそうであるように、基本的には被成物というよりは被動物と考えられる。しかし、**aufblühen** の個別の例において両者を区別することはしばしば困難であり、被成物の例がないとまでは言えない。¹⁸⁷

5.1.1.3 ausblühen

検索日：2020 年 1 月 19 日；ヒット数：3 085 件

分析データ：3 085 件；有効データ：172 件

上記のヒット数・有効データ数から、**ausblühen** は今日稀な表現と言える。DWDS (最終アクセス：2022 年 7 月 31 日) の頻度表示でも 7 段階中最も低く評価されている。

Zifonun/Hoffmann/Strecker (1997: 1865f.) に依拠すると、**ausblühen** にも **abblühen** と同様に、sein 支配で変化を表す場合も、haben 支配で終局にあることを表す場合もあると考えられる。前者の用法には、(5) に示すように〈花を咲かせ尽く

¹⁸⁶ DWDS (最終アクセス：2022 年 7 月 31 日) では、**aufblühen** の語義を、**erblühen** という言い換えと並んで、**sich langsam öffnen** という言い換えを用いて記述している。詳しくは後述するが、**aufblühen** が **erblühen** で常に言い換えられるかには疑問の余地がある。

¹⁸⁷ あるインフォーマントは、次の文において **erblühen** を **aufblühen** に変えると、**neue Städte** の解釈が被成物から被動物に変わるという趣旨のことを述べている。このことを実例で確かめるのは困難であるが、もしそうであるとすれば、**aufblühen** の第 1 項は被動物ということになる。Das Transportmittel, das einst Amerika bewegte und neue Städte entlang seiner Gleise **erblühen** liess, hat seit der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts einen stetigen Niedergang erlebt, ohne dass es seine nostalgisch verklärte Beliebtheit eingebüsst hätte. (NZZ am Sonntag, 13.09.2009) かつてアメリカを動かし、その線路に沿って新しい都市を開花させた交通手段である鉄道は、20 世紀前半以降常に衰退していったが、懐古趣味的に美化された人気を失うことはなかった。

す：(花が) 咲き尽くす」という語義が、後者の用法には、(6) に示すように〈花を咲かせ尽くすところだ：(花が) 咲き尽くすところだ〉という語義が想定できる。今回の有効データには、前者の例が 24 件、後者の例が 34 件含まれていた。なお、いずれの語義においても第 1 項は「対象」、中でも被動物と考えられる。

(5) Die Lorraine-Begonie strahlt jetzt mit rosafarbenen Blüten. [...] Ist die Exotin im Februar **ausgeblüht**, ist sie jedoch ein Fall für den Kompost. (Nordkurier, 07.01.2012)

フユベコニアは今ピンクの花を咲かせている。この異国の植物が 2 月に咲き尽くしてしまっても [< ausblühen], たい肥作りに役立つ。

(6) Das schöne Wetter lässt Allergiker in Berlin und Brandenburg besonders stark leiden. So stieg die Konzentration von Birkenpollen pro Kubikmeter Luft in Steglitz von 940 Ende März auf 1331 am 2. April. Nur Schauer könnten den starken Pollenflug der Birke kurzzeitig bremsen, teilten Meteorologen der Freien Universität mit. Aber danach sieht es in den kommenden Tagen nicht aus. Die einzig gute Nachricht: Die Erle hat in diesem Frühjahr **ausgeblüht**. (Berliner Morgenpost, 04.04.2014)

この好天がベルリンおよびブランデンブルクのアレルギー患者たちをことのほか苦しませている。例えば Steglitz の大気中 1 立方メートルあたりのシラカバの花粉の濃度は 3 月終わりの 940 から 4 月 2 日の 1331 に上がった。シラカバの強力な花粉飛散を一時的にゆるめられるのはにわか雨しかない、と自由大学の気象学者たちは報告した。よい知らせは、ハンノキがこの春は咲き尽くしている [< ausblühen] ことしかない。¹⁸⁹

ausblühen には他にも、〈白華する〉および〈白華している〉という化学用語としての語義が認められる。¹⁹⁰ 両語義とも競合の考察に関与しないことが明らかなので細分化せず 2 つまとめて論じるが、そうした例は 44 件確認された。例として (7) (8) を次に挙げる。

¹⁸⁹ 「(咲き尽くすところだったことの結果として今) 咲き尽くしている」 (= 現在完了読み) ということ。この例においては、「(過去の時点で) 咲き終わるところだった」 (= 過去読み) と解釈することは困難である (藤縄康弘先生の指摘)。

¹⁹⁰ 「白華する」ないし「白華に覆われている」という意味は、〈咲き尽くす〉ないし〈咲き尽くすところだ〉という語義からは予想が難しく、慣用性が高いと考えられるので他義として扱う (3.2.3 を参照されたい)。

(7) Die Kristalle **blühen** oft in faserigen Aggregaten **aus** und bilden Stalaktiten.
(Wikipedia, 2011)

水晶はよく繊維質の集合体において白華し [**< ausblühen**], 鍾乳石を形成する。

(8) Kundig führt er durch die Katakomben, an deren Wänden Schimmel wuchert und Salpeter **ausblüht**. (FOCUS, 07.05.2007)

精通した仕方で彼はカタコンベの中を案内する。壁にはカビが繁茂し、硝石が白華している [**< ausblühen**].

以上自動詞の **ausblühen** について述べてきたが、有効データには、再帰用法も 13 件見られた。**ausblühen** の再帰用法は辞書では通常記述されていないが、文脈に鑑みると当該用法にも、(9) に示すように、〈咲き尽くす〉という語義が想定できる（以下では自動詞の場合と区別して「〈咲き尽くす〉再帰用法」と表記する）。¹⁹¹

(9) Zum Glück war das Unheil vorübergehend und jetzt schon wieder fast vergessen. Bis der Raps anfang zu blühen und nach einem schönen ausgiebigen Frühlingslauf... Na ja, hat sich ja bald **ausgeblüht**, der Raps. Mal sehen, was dann umherfliegt. (Nordkurier, 23.05.2015)

幸い災いは一時的なもので今はもうまたほとんど忘れられている。ナタネが咲き始めて、美しい豊かな春が経過し終わるまでは。まあよい、ナタネはすぐに咲き尽くす [**< sich ausblühen**] のだから。それから何が飛び回るか見てみましょう。

ausblühen のこうした再帰用法の特徴を考える上では、**es** との共起および完了形での実現という観点が注目に値すると思われる。今回見つかった当該例は、すでに述べたように 13 例であるが、トークンではなくタイプで数えると 8 例となる。そして、この 8 例のうち 7 例において主語は **es** であり、かつ 8 例すべてにおいて **ausblühen** は完了形で用いられていた。(10) は一例である。

(10) In vielen Vorgärten hat es sich **ausgeblüht**. Blumen, Gräser, Kräuter und Unkräuter

¹⁹¹ Sanders (⁸1924: 57) や相良 (²⁵1978: 137) では、**ausblühen** の他動詞用法も言及されているが、その際認められているのは「(植物を) 花を咲かせて弱らす」という語義である。なお、Kühnhold/Wellmann (1973: 318) によれば、このように完遂タイプの **aus-** 派生において基盤動詞の再帰化が生じる割合は、8% である (er rast > er rast sich aus; ich ruhe > ich ruhe mich aus; ich schlafe > ich schlafe mich aus)。

sind von «pflegeleichten» Steinwüsten verdrängt worden. (St. Galler Tagblatt, 03.10.2017)

多くの前庭では花が咲き終わっている [< sich ausblühen]。花、草、ハーブ、それから雑草も「お手入れ簡単」な敷石によって駆逐された。

したがって、それが何を意味するかは現時点では不明であるとはいえ、ausblühenにおける再帰用法は完了形で、かつ es を主語とする述語として現れる傾向にあると言える。¹⁹²

ここでは最後に、ausblühen の語義記述に関して 2 点補足する。第 1 に、ausblühen の〈咲き尽くす (／咲き尽くすところだ)〉という語義は、先述の abblühen および後述の verblühen に認められる〈咲き止む (／咲き止むところだ)〉という語義と若干似ているが、両者は満開状態の経過を含意するかどうかという点で異なり、ausblühen においてのみ、それが含意されると本稿は考える。例えば abblühen と verblühen には、(11) と (12) に示すように、満開状態の経過を含意すると考えられる場合も、(13) と (14) に示すように、それを含意しないと考えられる場合も両方あるのに対し、ausblühen は、(14') に鑑みると、満開状態の経過を常に含意すると考えられる。¹⁹⁵

(11) Die Eiben-Pollen werden die Allergiker als nächstes plagen, dann folgen Weiden, Pappeln und Birken. Sind diese Bäume **abgeblüht**, sind die Sorgen für viele Betroffene noch nicht vorbei. Auch die blühenden Gräser sorgen später für entzündete Augen und laufende Nasen. (Nordkurier, 15.04.2013)

イチイの花粉が次にアレルギー患者を苦しめることになるが、それからヤナギ、ポプラ、シラカバと続く。これらの木々が花を咲かせることを止めても [< abblühen ; 満開の経過を含意]、多くの患者はまだ安心できない。花を咲かせる草も、後から目の炎症と鼻水を引き起こすのである。

¹⁹² 「Es arbeitet sich nicht gut bei Lampenlicht. ランプのあかりでは作業がしづらい」「Es sitzt sich bequem in diesem Stuhl. このいすは座り心地がいい」(両例とも国松ほか (編) ²1998: 2119 からの引用。ただし表記は一部変更) といった、sich を伴う非人称構文との共通性も示唆されるが、sich ausblühen には、様態表示を伴う例が少ないこと、ならびに可能の意味が読み取り難いことに鑑みると、当該構文とは異質な部分がある。

¹⁹⁵ Hundsnurscher (1997 [1968]: 190) は、当該 aus- に対して、当該 ab- と比較して「終結的 [terminativ] なニュアンスを強く有する」と指摘しているが、aus- が中断ではなく満開の経過を含意することを念頭においていた可能性がある。なお、ausblühen が abblühen, verblühen とどう違うかに関する本稿の見解は、後述の Eberhard (¹⁷1982 [1910]: 3ff.) にも見出せる。

(12) Bis Mitte Juli blühen im Unterland die Rapsfelder in leuchtendem Gelb. Dann **verblühen** sie, und die Rapssamen können geerntet werden. (Tages-Anzeiger, 08.05.2008)

7 月の中頃まで低地ではナタネ畑が明るい黄色の花を咲かせる。それから花が咲き止み [**< verblühen ; 満開の経過を含意**], 種が収穫できるようになる。

(13) Heftiger Wind und sehr sonniges Wetter ließen die Bäume zum großen Teil schon wieder **abblühen**. (Niederösterreichische Nachrichten, 12.04.2011)

激しい風と日照りで木々の大部分ではもうまた花が咲き止んだ [**< abblühen ; 満開の経過を含意**するとは考え難い]。

(14) Es sind Pflanzen mit meist starkem Knospen- und Blütenbesatz. Und sie müssen sich schlagartig vom kühlen, feuchten Klima des Glashauses auf einen trockenen Platz im Haus einstellen. Häufig werden sie sogar direkt ins geheizte Wohnzimmer gestellt. Eine enorme Stresssituation! Kommt dann auch noch eine direkte Besonnung hinzu, **verblühen** die Azaleen in kürzester Zeit (Nürnberger Nachrichten, 25.11.2000 ; 下線は引用者)

それらは、とてもしっかりとしたつぼみと花株のある植物である。それらが、涼しく湿気のある温室の気候から急に、家の中の乾燥した場所に順応しなくてはならないのである。それどころか直に暖房のきいたリビングに置かれてしまうことも多い。非常にストレスがかかる状況だ！加えて直射日光にさらされようものなら、アザレアは極めて短期間に咲き止んでしまう [**< verblühen ; 満開の経過を含意**するとは考え難い]。

(14') ??Kommt dann auch noch eine direkte Besonnung hinzu, **blühen** die Azaleen in kürzester Zeit **aus**.

[[「??」は、あるインフォーマントの判断。(14) 下線部の **verblühen** を **ausblühen** で言い換えることは、**ausblühen** が稀な表現であることを差し引いても、やはり意味的に困難であるという。アザレアがこうした状況において途中で咲き止んでしまう (= **verblühen**) ことはあっても、満開を経過する、つまり咲き尽くす (= **ausblühen**) ことはないからだと考えられる。]

補足として第 2 に、**ausblühen** に対して〈満開になる〉という語義を記述している辞書もあるが(例えば、国松ほか(編)²1998: 226)、本稿は、当該の意味はあくまでも〈咲き尽くす〉という語義の 1 つの現れと考える。なぜなら、繰り返しになるが、

〈咲き尽くす〉という語義記述で本稿は、〈咲き止む〉という語義記述の場合とは異なり、満開の経過という含意を意図しているからである。また、国松ほか（編）²1998: 226) の記述する, *haben* 支配だと〈咲き終わる〉で, *sein* 支配だと〈満開になる〉という区別も, 実例の観察においては確認し難い。さらに, Duden (2014), DWDS (最終アクセス 2022 年 8 月 2 日), 相良²⁵1978) など, 〈満開になる〉という語義をそもそも記述していない辞書も多い。

5.1.1.4 erblühen

検索日：2020 年 2 月 9 日；ヒット数：1 万 1297 件

分析データ：230 件；有効データ：200 件

erblühen (*sein* 支配のみ) は, しばしば高尚な語ないし雅語とされるが (Duden 2014: 612; 国松ほか (編)²1998: 684 など), 頻度や出典に鑑みる限り, 例えば一般的な語とされる先述の *aufblühen* と著しく異なる使用域にあるようには見えない。実際 (15) に示すように, 両語が同一文中に共起する例も見つかる。よって本稿では *erblühen* が特殊な使用域にあるという可能性は考慮しないものとする。

(15) Mitten im Raum **erblüht** mannshoch Löwenzahn, fünf grüne Stengel samt Blättern, die gelben Blüten **aufgeblüht** oder noch als Knospe. (Salzburger Nachrichten, 18.11.1998)

中央では人の背丈もあるタンポポが咲き始める [*< erblühen*]。葉っぱ付きの緑の茎が 5 本あり, 黄色い花々は開花している [*< aufblühen*] か, まだつぼみである。

erblühen にも *aufblühen* の場合と同様に 〈(花が) 咲き始める〉という語義が認められる (Langenscheidt²2008: 338: „*etw. fängt an zu blühen*“ という記述も参照)。(16) は一例である。

(16) Bald wird auf deutschen Feldern genetisch veränderter Raps **erblühen**. (FOCUS, 11.07.2015)

じきにドイツの畑にも, 遺伝子組み換えナタネが咲き始める [*< erblühen*] だろう。

DWDS（最終アクセス：2022年8月5日）は *erblühen* の語義を *voll aufblühen* と記述しているが、*erblühen* には、例えば *voll* との共起を妨げるほど、*voll* という意味合いがあるわけではないことから、¹⁹⁶ 本稿にとっては〈(花が) 咲き始める〉という語義記述で十分と考える。

erblühen の第1項は「対象」であるが、個別の例において被動物／被成物を区別することは困難であったので、この点に関しては立ち入らないことにする。

5.1.1.5 *verblühen*

検索日：2020年2月13日；ヒット数：4198件
分析データ：379件；有効データ：200件

verblühen (*sein* 支配のみ) には、〈(花が) 咲き止む〉という語義が認められる。

(17) は一例である。*verblühen* の第1項は「対象」、中でも被動物と考えられる。

(17) "Duftende Rosen sind oft krank und sie **verblühen** schneller." (Hamburger Morgenpost, 18.05.2013)

匂うバラは病んでいることが多く、比較的すぐに咲き止む [*<verblühen>*]。

語義に関して2点補足すると。第1に、*verblühen* の語義記述に際し「しぼむ」ないし「しおれる」という表現を添える辞書も多いが（国松ほか（編）²1998: 2496; Duden 2014: 2139）、本稿は、「しぼむ、しおれる」という意味をあくまでも〈咲き止む〉という語義の1つの現れと捉える。なぜなら *verblühen* は、例えば *verwelkten* とは異なり常に「しぼむ、しおれる」という意味を実現するわけではないと考えられるからである。実際、*verblühen* と *verwelken* の共起例をコーパスで検索すると（検索日：2019年12月25日；ヒット数：28件）、例えば次のような例が見つかる。

(18) Mit einem Hauch von zarter Poesie zeigte er den verblüfften Zuschauern, wie die Blütenblätter einer Blume zusammenspielen können, wie die Blume wuchs, sich die Blüte öffneten, **verblühten** und **verwelkten**. (Rhein-Zeitung, 16.10.2001)

繊細な詩情で、彼は、啞然とする観客たちに、花の花弁はどのように相互作用し

¹⁹⁶ 有効データ中には、いずれも比喩的な用法であったが、*voll* と *erblühen* の共起例が5件含まれていた。次に一例を挙げる：Der Frühling ist voll erblüht in den Boutiquen (Neue Kronen-Zeitung, 26.02.2000) 春がブティックで完全に花開いた

得るか、花はどのように成長し、すなわちどのように花が開き、咲き止み [**verblühen**], しおれるか [**verwelken**] を示した。

(18) においては、**verblühen** は「咲き止む」ことだけを表し、後続の **verwelken** が「しおれる、しぼむ」ことを表していると考えられる。同様のことは次のような意味推移の例にも当てはまる。

(19) An einem Tisch drei Leute, ein Rocker, langes Haar, und ein Paar. Die beiden waren offensichtlich einmal hübsch, nun sind sie nicht nur **verblüht**, sie sind regelrecht **verwelkt**. (die tageszeitung, 27.07.2004)

あるテーブルには 3 人がいる。長髪の若者と、カップルである。2 人は昔は見た目がよかったようだが、今は咲き止んでいる [**verblühen**] のみならず、まさしくしおれている [**verwelken**]。

こうした例に鑑みると、**verblühen** の語義としては〈咲き止む〉というのが適切で、それが「しおれる、しぼむ」ことなのかどうかは文脈次第と言える。¹⁹⁷

補足として第 2 に、Duden (2014: 2139) や国松ほか (編) (²1998: 2496) のように、**verblühen** に対して他にも、有標な使用域に属する「密かに逃げる、ずらかる」という語義を記述している辞書もあるが、今回の収集例にはこの語義の実現であることが明らかな例というものは見られず、やはり特殊な使用域の語義と考えられるので、本稿では以下この語義を考慮しない。

5.1.1.6 中間まとめ

各語における語義の実現状況をまとめると、次のようになる。

¹⁹⁷ Klimonow (1989: 27) は、**verblühen** および **abblühen** という過程の結果としての **nicht blühen** という状態は、再度 **aufblühen** および **erblühen** という過程によって **blühen** という結果状況に至り得るが、**verwelken** の結果としての **verwelkt sein** という状態は、**blühen** という状態へと至る過程に復帰することはない、という趣旨の論述をしている。そうだとすれば、この点にも **verblühen** と **verwelken** の違いが求められる。

	ab.	auf.	aus.	er.	ver.
〈咲き始める〉	-	✓	-	✓	-
〈咲き止む〉	✓	-	-	-	✓
〈咲き止むところだ〉	✓	-	-	-	-
〈咲き尽くす〉	-	-	✓	-	-
〈咲き尽くす _{再帰用法} 〉	-	-	✓	-	-
〈白華する〉	-	-	✓	-	-
〈白華している〉	-	-	✓	-	-

表 5.1: blühen 群における語義の実現状況

5.1.2 競合の考察

表 5.1 に示したように、一方では〈咲き始める〉という語義において *aufblühen* と *erblühen* が競合し、他方では〈咲き止む〉という語義において *abblühen* と *verblühen* が競合していることが分かった。以下それぞれの競合を取り上げて考察する。

5.1.2.1 〈咲き始める〉

以下では、5.1.2.1.1 と 5.1.2.1.2 で、〈咲き始める〉という語義での競合における両語の過程性と比喩性・抽象性のそれぞれについて述べ、5.1.2.1.3 では、先行研究における他の観点を取り上げる。5.1.2.1.4 はまとめである。

5.1.2.1.1 過程性

〈咲き始める〉という語義においては、*aufblühen* も *erblühen* も共に [+持続的] な表現と考えられる。

第 1 に *aufblühen* に関しては、(20) や (21) の観察が [+持続的] という判断の根拠の 1 つになる。(20) (21) の引用者による下線部では、「今 (*jetzt*)」という時点表現と共起し、かつ進行相解釈が自然なことから、また実況中継のような有標な使用でもないことから、事象性記述は *Accomplishment* 表現と言え、さらに当該事象性記述が個体的な解釈の項を伴う無標形であることから、*aufblühen* は [+持続性] と言える。

(20) a. Verona hat die Nase voll von Schmuddeltalk. Die 31jährige hatte keine Lust mehr auf die Erotik-Show "Peep" bei RTL. Jetzt blüht Verona Feldbuschs Interesse

am Fußball auf: Sie könne sich durchaus vorstellen, die Fußballspiele der Champions League zu moderieren, sagte sie der Programmzeitschrift TV-Movie. (Rhein-Zeitung, 06.07.1999 ; 下線は引用者)

Verona は不潔なお喋りにはうんざりしている。31歳の彼女は、RTLのエロティックショー「Peep」にはもう出たくなかった。今 Verona Feldbusch のサッカーへの興味が開花し始めている [< aufblühen]。チャンピオンズリーグの中継の司会をすることだって十分想像できる、と彼女は番組雑誌 TV-Movie に語ったのである。

- b. 下線部 < [Verona Feldbuschs Interesse am Fußball blüh- auf] (Accomplishment)
c. aufblühen [+持続的]

(21) a. Das Messewesen war außerhalb der Bundesrepublik unterentwickelt. Es blüht überall erst jetzt so richtig auf und lockt dadurch auch potente Außenseiter an, die in diesem Business mitmischen wollen. (Süddeutsche Zeitung, 01.08.2000)
見本市という仕組みは、ドイツ以外では未発達だった。それは、あらゆるところで今になってようやく真に開花し始めている [< aufblühen]、そのことによってこのビジネスへの参入を希望する有力なアウトサイダーも惹きつけている。

- b. 下線部 < [es blüh- überall so richtig auf] (Accomplishment)
c. aufblühen [+持続的]

(20) (21) はともに aufblühen の比喩的な用法であるが、先行研究では、原義的な aufblühen に関して所要時間表現と共起する (=Accomplishment 表現を事象性記述とする) という (22) に示す観察もなされている。¹⁹⁸ (22) の mein Ritterstern 「私のアマリリス」は個体解釈と考えられるので、Klimonow (1989: 28) は aufblühen を事実上 [+持続的] と見なしていると言える。

(22) *Mein Ritterstern wird in drei Tagen aufblühen* (Das heißt: es wird drei Tage brauchen, bis er aufgeblüht ist.) (Klimonow 1989: 28)

私のアマリリスは3日かけて開花する [< aufblühen] だろう (つまり、それが咲

¹⁹⁸ ただし Zifonun/Hoffmann/Strecker (1997: 1869) は所要時間表現と共起できない動詞の例として aufblühen を挙げている。また、浜崎/野入/八本木 (2008: 45) は「時間的に続く長さが含まれていない場合」の例として aufblühen に言及している。本稿はしかし、本文で述べている複数の根拠から aufblühen を [+持続的] と判断する。

いた状態になるまで3日かかるだろう)

他にも, *aufblühen* の *auf-* が「徐々に進む発展 (*allmähliche Entwicklung*)」を表すという指摘 (Georgen 1994: 44) や *Die Rose blühte auf* 「その薔薇が咲き始める」が複数の時点からなる持続的な状態変化を表すという趣旨の指摘 (Storch 1978: 217) もある。¹⁹⁹

aufblühen が [+持続的] であると考えられる根拠については以上とし, 次に *erblühen* が同じく [+持続的] と考えられる根拠を述べる。*erblühen* については, 例えば (23) の観察が [+持続的] と判断する根拠の1つになる (下線は引用者)。

(23) a. Seitdem Angela Merkel ihren Verzicht auf den Vorsitz erklärte, erblüht die CDU in einem demokratischen Frühling. (Stern, 06.12.2018)

Angela Merkel が代表職を断念することを宣言して以来, CDU は民主主義の春のなかで花を咲かせ始めている [*< erblühen*]

b. 下線部 < [die CDU erblüh- in einem demokratischen Frühling] (Accomplishment)

c. *erblühen* [+持続的]

(23) においては第1に, 現在時制における無標のエピソード用法でかつ現在読みであることから, 下線部の基底に想定される事象性記述は Accomplishment 表現と判断できる。第2に, 第1項である *die CDU* 「CDU (キリスト教民主同盟)」は個体的に捉えられていると考えられるので, 当該事象性記述は無標と言える。そうだとすれば, *erblühen* は [+持続的] ということになる。

(23) は比喩的な用法であるが, 先行研究においては原義的な *erblühen* に関して, それを [+持続性] と見なしているものがある。例えば Heinold (2015: 174) は, (24) に示すように, 時間の *während* (「～の間」) に導かれる副文の述語になり得ることを根拠に,²⁰⁰ *die Blume erblüht* を Accomplishment 表現としている。あえて非個体的な解釈の *die Blume* を念頭に置いているとは考え難いので, Heinold (2015: 174)

¹⁹⁹ 先行研究には *aufblühen* の *auf-* に対して, *erblühen* の *er-* に対してと同様に, *plötzlich* を用いた言い換え (*aufblühen* = *plötzlich blühen* = *erblühen*) が可能とする文献もあるが (Kühnhold 1969: 331), 例えば *aufblühen* が *allmählich* と問題なく共起する以上, この見解には賛同できない部分がある。*auf-* は, 瞬間的な開始のマーカースとして機能する場合も確かにあるが, そうでない場合もあると言える。例えば Lechler/Roßdeutscher (2009: 463) も, *auf-* は「(緩やかな, ないし急な) 開始も, 出来事ないし状態の短い持続も共に示しうる」と述べている。

²⁰⁰ 同様の観察は Storch (1978: 127ff.) でもなされている。。

は実質的に *erblühen* を [+持続性] と見なしていると言える。

(24) *Die Blume erblüht*: Accomplishment. Sicher ein kürzerer Moment als *verblühen*, welches sich über mehrere Tage ziehen kann, aber dennoch nicht nur ein Moment; Test: *Während die Blume erblühte, schaute ihr Maria gespannt zu.* (Heinold 2015: 174)

「その花が咲き始める (*Die Blume erblüht*)」は Accomplishment 表現である。もちろん、何日も続き得る「咲き止む (*verblühen*)」よりは短いにしても、単に瞬間を表すというわけではない。テスト:「その花が咲き始めている間、マリアはそれを期待して見つめていた」。

また Stiebels (1996: 73) は、(25) に示すように *erblühen* と所要時間表現との共起を容認している。Stiebels (1996: 73) は (25) の判断が「非反復読み」におけるものであるという趣旨のことを述べているので、「バラたち (*die Rosen*)」は分配読みではなく集合読み (= 個体的な解釈) である。したがって Stiebels (1996: 73) は実質的に *erblühen* を [+持続的] と見なしていると言える。なお (25) の「§」は「意味的に逸脱した構造/文」(Stiebels 1996: 16) であること示している。

(25) *Die Rosen erblühen in einer Stunde/ § eine Stunde lang.* (Stiebels 1996: 73)

そのバラたちは {1 時間かけて / § 1 時間} 開花する。

さらに, Storch (1978: 7) も, *erblühen* と *beginnen* の共起 (*Der Kaktus beginnt zu erblühen*) を容認していることから, 上述の文献について述べたのと同様に, *erblühen* を [+持続的] と見なしていると言える。

以上 *aufblühen* も *erblühen* も [+持続的] と考えられることを述べたが, それではどちらがより一層過程的な表現なのだろうか。今回の調査では, 例えば過程に注目する副詞規定との共起に注目しても, 例えば *langsam* 「徐々に」と共起する例は両語ともに 1 件のみであるなど, 両語において目立った頻度差は確認できなかった。よってどちらがより過程的とも言えない。²⁰¹

²⁰¹ 今回の 200 例の分析では目立った差とならなかったことから本文では取り上げていないが, *erblühen* は *aufblühen* と比べて *allmählich* 「徐々に」といった過程に注目する表現と共起し難い可能性がある (これに関しては, 佐藤 2021 を参照されたい)。なお, 今回の調査で目立ったのは,

5.1.2.1.2 比喩性・抽象性

当該競合では *erblühen* におけるよりも *aufblühen* において、項の選択制限の逸脱による動詞の意味推移がより頻繁に確認された。以下そのことを順に述べる。

aufblühen においては、推移の有無が不明な8例を除く192例中161件(84%)で、当該意味推移が確認された。(26)は1例である。*aufblühen* は第1項として花や植物を選択するが、(26)の第1項はSFという文学のジャンルである。この逸脱は、*aufblühen* が「栄え始める、盛んになる」という、より一般的・抽象的な意味に推移することで解消されていると考えられる。

(26) So **blühte** die Mars-Science-Fiction **auf**, bei der man die Betonung anfangs ruhig genau so sehr auf die Wissenschaft legen darf wie auf die Fiktion. (Süddeutsche Zeitung, 19.10.2016)

かくして火星を舞台とするSFが栄え始めた[< *aufblühen*]。火星SFでは、はじめは架空性と同じくらい科学に重点をおいて構わなかった。

他方の *erblühen* においては、当該意味推移は194例中138例(71%)で確認された。(27)は一例である。なお、意味推移の成り立ちは、*aufblühen* について上述したものと同様と考えられる。

(27) Er hat Armeen ernährt und Sklavenheere am Leben erhalten, hat Kriege provoziert und Städte **erblühen** und wieder veröden lassen: "Gadus morhua", der Kabeljau, hat Weltgeschichte geschrieben. (Frankfurter Rundschau, 03.07.1999)

それは、軍隊を養い大勢の奴隷の命をつなぎ、戦争を引き起こし町を栄え始め[< *erblühen*]させ、そしてまた荒廃させた。その名は「Gadus morhua」、つま

結果を表す *zu* 前置詞句との共起状況の差である。当該 *zu* 前置詞句との共起は、*aufblühen* に関しては200件中2件(1%)であったのに対し、*erblühen* に関しては200件中14件(7%)であった。*aufblühen* における実測値が5未満であり、このままではカイ二乗検定を適切に行えないので、コーパスで有効データを600例取り直したところ(検索日:2020年1月9日;ヒット数:2万1456件;分析データ:800件)、結果の *zu* 句との共起は7件確認された。この実測値を用いてカイ二乗検定(イェーツ補正あり)を行うと、有意水準0.1%で「有意差あり」($\chi^2=17.75$, $df=1$, $p=.000$)という結果が出る。したがって、*erblühen* における方が結果を表す *zu* 前置詞句と共起する頻度が有意に高いと言える。ただし、この差の存在から、例えば「*erblühen* の方が結果的である」ということはできない。なぜなら、例えば *aufblühen* においては、*auf* によって「開いている」という結果が明瞭に規定されているが、*erblühen* においてはそうではないので、結果の *zu* 前置詞句と共起しやすいといった可能性もあるからである。

りタラである。それが世界史をつくった。

aufblühen と erblühen の意味推移の上記の頻度差 (161/192 (84%) vs 138/194 (71%)) は、カイ二乗検定 (イエーツ補正あり) では有意水準 1% で有意である ($\chi^2=8.23$, $df=1$, $p=.004$)。したがって、aufblühen の方が erblühen よりも比喩的・抽象的な表現ということになる。

5.1.2.1.3 その他の観点：選択制限

aufblühen と erblühen に関しては、Storch (1978: 141) や Stiebels (1996: 74f.) が、選択制限の違いを指摘している。Stiebels (1996: 74f.) によれば、(28) において不変化詞 auf は、花が開くという空間的な (lokal) 意味合いを加えることに貢献しているという。

(28) a. Die Rose erblüht/blüht auf. (Stiebels 1996: 74) そのバラが咲き始める。

b. Die Knospe ?erblüht/blüht auf. (ibid.) そのつぼみが咲き始める。

しかしこの指摘は、(28b) のうち、Die Knospe blüht auf が容認されることの説明にはなるが、それだけでは Die Knospe erblüht の容認性が低いことの説明にはならないように思われる。Die Knospe erblüht の容認性が低いとしたら、それは一体なぜだろうか。²⁰²

1つの説明は、er- は空間的ではなく、したがって空間的な意味も持ちうる auf- と比べ抽象的である、という線で与えられる。開花という出来事を具体的に見れば、つぼみが徐々に開き、開ききった状態になるという展開が典型的と考えられる。つまり、開くのは具体的に言えばつぼみである。その意味で、erblühen が非空間的であるとすれば、その抽象性が「つぼみ」と言う際の具体的な事態把握と齟齬をきたすということが考えられる。

このような見解をとる文献も実際にあり、第 1 に Dewell (2015: 150f.) は、

²⁰² もちろん、この選択制限の存在自体も問題になり得る。コーパスで検索すると (検索日: 2019年7月19日), Die Knospen (pl.) を主語として伴い、かつ創造的な用法とは思えない例も見つかる。Jetzt erblühen die Knospen in voller Pracht. (Hamburger Morgenpost, 03.03.2017) [今やつぼみ [pl.] が満開に咲く (<erblühen)] 先行研究でも Goergen (1994: 78) において, Eine Knospe [sg.] erblüht. という文が特に問題とされることなく引用されている。しかし、選択制限かどうかはさて置き、(28b) の容認性が低いことは、あるインフォーマントも認めており、確からしいと言える。

aufblühen と erblühen の差は基本的には使用域に関わるとしながらも、Stiebels (1996: 74f.) の指摘に触れ、不変化詞動詞である aufblühen が「個々の花やつぼみに対する、より高い注意を引き起こす」のに対し、接頭辞動詞である erblühen は、「[焦点の] 拡散したプロセス」を表す、と述べている。

第 2 に Benoist (2011: 148) は、「aufblühen は目で見えるプロセスを表すのに対し、erblühen ではプロセスが「より知的」に把握されるようである (Es scheint, dass aufblühen einen sichtbaren Prozess bezeichnet, während mit er- der Prozess „intellektueller“ aufgefasst wird)」と述べ、両語の違いを視覚という感覚知覚と非感覚的認識という対立で説明しているが、この説明も具体的事態把握 vs. 抽象的事態把握という対立の一種と考えられる。²⁰³

5.1.2.1.4 目末まとめ

aufblühen と erblühen は〈咲き始める〉という語義で競合している。両語はどちらも [+持続的] であり、かつどちらがより過程的とも言い難い。また、aufblühen は erblühen よりも意味推移を起こす頻度が高く、その意味で aufblühen は erblühen よりも抽象的・比喩的な表現である。ただし、erblühen は、Knospe「つぼみ」を項に選択し難く、そうした意味においては、erblühen の方が抽象的事態把握の表現と言える可能性もある。

5.1.2.2 〈咲き止む〉

以下では、5.1.2.2.1 と 5.1.2.2.2 で、〈咲き止む〉という語義での競合における両語の過程性と比喩性・抽象性のそれぞれについて述べ、5.1.2.2.3 では、両語の差異に関する先行研究におけるその他の観点を取り上げる。5.1.2.2.4 はまとめである。

5.1.2.2.1 過程性

〈咲き止む〉という語義においては、abblühen も verblühen も共に [+持続的] な表現と考えられる。第 1 に abblühen に関しては例えば (29) の観察が [+持続的] ということの根拠となる (下線は引用者)。

²⁰³ 佐藤 (2021) が提示した、開花にはつぼみといった花の原型からの「発展」としての捉え方と、原型を想定することのない「発生」としての捉え方があり、前者は aufblühen によって、後者は erblühen によって表される傾向がある、という説も、前者の捉え方が具体的 (=現実的) 事態把握であり、後者の捉え方が抽象的 (=非現実的) 事態把握であることから分かるように、これらの説の延長線上にある。

(29) a. Der Raps beginnt abzublühen. Unter normalen Witterungsbedingungen wäre dieser Prozess Ende Mai längst abgeschlossen, würden die Imker jetzt bereits zum zweiten Honigschleudergang ansetzen. (Nordkurier, 01.06.2010)

ナタネは咲き止み [< verblühen] 始める。通常の天候条件であればこのプロセスは5月終わりにとうに完了していただろうし、養蜂家たちは今すでに2回目の蜂蜜精製を開始しているだろう。

b. 下線部 < [der Raps blüh- ab] (Accomplishment)

c. abblühen [+持続的]

(29a) 下線部で *beginnen* の支配を受けていると想定される文の事象性記述は、*beginnen* と共起しかつ反復の開始が問題ではないことから、*Accomplishment* 表現と言える。また、*der Raps* 「ナタネ」は個体的に捉えられていると考えられるので、当該事象性記述が *Accomplishment* 表現になるのは、*abblühen* が [+持続的] であることに起因すると考えられる。

また、(29) の *abblühen* は、*sein* 支配の〈咲き止む〉という語義の実現であり、*haben* 支配の〈咲き止むところだ〉という語義の実現ではないと考えられる。なぜなら後文で *dieser Prozess* 「このプロセス」という言い方がなされていることから、*der Raps beginnt abzublühen* は、「咲き止み始める」こと、すなわち「咲き止む」ことの開始であって、「咲き止むところだ」ということの開始ではない、と考えられるからである。

第2に *verblühen* に関しては、例えば (30) (31) の観察が [+持続的] ということの根拠になる。

(30) a. Es macht daher Sinn, die Pflanzen abzuschneiden, wenn die Dolden anfangen zu verblühen. (Rhein-Zeitung, 12.08.2004)

植物を、花序が咲き止み始めた時に切るというのは理にかなっているのです。

b. 下線部 < [die Dolden verblüh-] (Accomplishment)

c. *verblühen* [+持続的]

(31) Der vorzeitige Tod ersparte ihr das Schicksal, im gleissenden Scheinwerferlicht der globalen Medienindustrie langsam, aber unaufhaltsam zu verblühen. (SonntagsZeitung (Tages-Anzeiger), 25.08.2002)

早すぎる死によって彼女は、グローバルなメディア産業のまぶしいスポットライトを浴びながら、ゆっくりと、しかしとめどなく咲き止んでいく [< verblühen] という運命を免れた。

(30a) 下線部の観察からは、*anfangen* という開始表現の支配を受け、かつ反復の開始が問題ではないこと、ならびに *die Dolden* 「花序」(複数形) は個体的な解釈 (=集合読み) と考えられることから、*verblühen* は Accomplishment 表現を無標の事象性記述とする [+持続的] な表現と言える。また、比喩的な用法の例ではあるが (31) 下線部も、同様のことの示唆として参考になる。

先行研究では例えば Heinold (2015: 174) も、(32) の論述に鑑みると、*verblühen* を、無標の事象性記述が Accomplishment 表現である [+持続的] な表現と見なしていると言える。なお、他にも例えば *verblühen* が *anfangen* と共起することを観察している Nicolay (2007: 44ff.) も、*verblühen* を [+持続的] な表現と見なしていると言える。

(32) *Die Blume verblüht: Accomplishment. Während die Blume verblühte, pflanzte Maria im anderen Beet schon wieder Tomaten. Es gibt einen natürlichen Endpunkt, aber der Vorgang dauert länger an. Während dieses Vorganges kann in jedem Stadium gesagt werden: Die Blume verblüht gerade.* (Heinold 2015: 174)²⁰⁴

「その花は {咲き止んでいっている / 咲き止む} (*Die Blume verblüht*)」: Accomplishment 表現。「その花が咲き止んでいっている間に、マリアはもう一つの花壇にもうまたトマトを植えた (*Während die Blume verblühte, pflanzte Maria im anderen Beet schon wieder Tomaten*)」[と言える。] 自然な終点はあるが、出

²⁰⁴ 引用部は次のように続く。Würde man Dowtys Kriterium der Agentivität hinzunehmen, würde dieses Beispiel (ebenso wie das folgende [*Die Blume erblüht*]) eher als Achievement klassifiziert werden. Seiner Ansicht nach unterscheiden sich diese zwei Klassen v.a. darin, dass Accomplishments einen Agens aufweisen können, Achievements nicht. Die Blume in diesem Beispiel ist eher ein passives Element, dem das Verblühen widerfährt. (Heinold 2015: 174) [Dowty の動作主性という基準をもし受け入れるとすれば、この例は (次の例 [その花が咲き始める (*Die Blume erblüht*))] もむしろ Achievement 表現と分類されるだろう。Dowty の見解によればこれら2つの状況タイプは特に、Accomplishment 表現が動作主を示しうるのに対し Achievement 表現はそうではない、という点で区別される。この例における花は、咲き止むことを被る、むしろ受動的な要素である。] 既に述べたように本稿は Dowty (1979) における動作主性に基づく Accomplishment と Achievement の区別に従っているわけではないので、*verblühen* も *erblühen* も Accomplishment と呼んで差し支えない。なお Mittwoch (2019: 48) も次のように述べて、動作主性はアスペクトに直接的には関与しないという見解が今日一般的としている。“Today most linguists do not find agentivity relevant for research on aspect, though it remains true that with few exceptions states and achievements are nonagentive.” (Mittwoch 2019: 48)

来事は比較的長く続く。この出来事の間であればどの段階でも「その花は今咲き止んでいつている (Die Blume verblüht gerade)」と言い得る。

以上 abblühen と verblühen が共に [+持続的] と考えられることを述べたが、それではどちらの語がより過程的な表現なのだろうか。今回の事例分析では、いずれかの語の過程性がより強いことの示唆は得られなかった。例えば、既出の (31) におけるように verblühen と過程に注目する副詞である langsam 「徐々に」が共起する例は、200 件中 3 件確認されたが、当該共起は abblühen においても同様に 200 例中 3 件確認された。

5.1.2.2.2 比喩性・抽象性

〈咲き止む〉という語義では、abblühen よりも verblühen において、選択制限の逸脱による動詞の意味推移がより頻繁に観察される。そのことを以下順に述べる。

まず、両語とも第 1 項として花および植物を選択すると考えられるが、事例ではそれ以外の存在を指示する名詞句を伴う場合がある。この逸脱は当該動詞が「盛りを過ぎる、凋落する」といった、より一般的・抽象的な意味に推移することで解消されると考えられる。²⁰⁵ 既出の (1) の再掲であるが (33) では verblühen, abblühen 双方において当該意味推移が生じていると考えられる。

(33)(=1) Die Geschichte folgt den Empfindungen Judiths, die zwischen Resignation und Aufbegehren schwankt, grundiert von einer beständigen Müdigkeit, erzählt hier von einer Nebenperson und deutet dort eine Katastrophe an und bleibt immer auch etwas schweigsam und geheimnisvoll. Und witzig: Die Damen in der Kundschaft einer Detektei sind nicht verblüht, sondern „**abgeblüht**“, und wenn es regnete, dann weinte nicht der Himmel, sondern: „Gott heulte.“ (Hannoversche Allgemeine, 08.04.2008)

この話は、倦怠感を下地とし、あきらめと反抗の間を揺れ動く Judith の内面を追い、ある箇所ではある脇役のことを語り、また他の箇所ではある破局を示唆

²⁰⁵ なお既出の (2) のような例においても意味推移は起きていると考えられるが、それは本稿が問題としている動詞における意味推移ではなく、あくまでも項における意味推移である。つまり、

(2) では場所を表す第 1 項が、その場所に付く花を指している：(2) "Wenn die Bäume **abgeblüht** sind und die Frucht entsteht, ist ein Grad minus schon gefährlich", sagt Ernst Raith. (Burgenländische Volkszeitung, 26.03.2008) 「木々(の花)が咲き止み [< abblühen] 実がなった状況での氷点下 1 度というのはかなり危うい」と Ernst Raith は言う。

するが、口数はいつも少なめで謎めいたものであり続けている。そして愉快である。ある探偵事務所のクライアントの婦人たちは衰えている [< verblühen] のではなく凋落している [< abgeblüht] と、雨が降ったら、天が泣いたのではなく、「神が号泣した」と語られるのが。

なお、(33) は第 1 項が人の例であるが、当該意味推移は第 1 項が物の場合でも同様に生じ得る。次に verblühen の当該例を示す。

(34) Nur wenn er im Garten ist, geht es ihm gut. Dann schwelgt er in Wein und Wurzeln, in Mohn und Rittersporn, aber seine Bücher sind **verblüht**. (Stern, 25.07.2002)
 彼 [Hermann Hesse] は、庭にいる時だけ調子がよい。その時彼はブドウや根、ケシやヒエンソウに熱中する。しかし彼の本は盛りを過ぎた [< verblühen]。

次に当該意味推移の頻度について述べると、当該意味推移は第 1 に verblühen においては、不明を除く 197 例中 52 例 (26%) で確認された。

第 2 に abblühen (〈咲き止む〉) における当該意味推移の頻度であるが、これに関しては、非完了形においては haben 支配の別義 (咲き止むところだ) という可能性を排除できないので、その扱いによって異なる数値が得られる。仮に、別義の入り込む可能性を完全に排除するならば、すなわち完了形でかつ助動詞が sein の例のみを考慮するならば、意味推移は不明 1 例を除く 114 件中 5 件 (4%) ということになる。しかしこれは、あくまでも完了形における意味推移の頻度であり、当該語義の abblühne の比喩性・抽象性を適切に反映しているか不明である。

他方で、確実に haben 支配の別義の例のみを排除するならば、abblühen の意味推移は不明 7 件を除く 180 例中 15 件 (8%) ということになる。これは意味推移の頻度の最大値として有効な値と考えられるので、abblühen の当該意味推移の頻度は最大で 8% (180 例中 15 例) ということで考察を進める。

両語における当該意味推移の頻度をまとめたのが次の表 5.2 である。表にあるように、当該意味推移の頻度は verblühen における方が高く、かつその差はカイ二乗検定 (イェーツ補正あり) において有意水準 0.1% で有意差あり ($\chi^2=19.78$, $df=1$, $p=.000$) となる。したがって、verblühen の方が比喩的・抽象的な表現と言える。

	abblühen	verblühen
件数/全体数 (割合)	最大 15/180 (最大 8%)	52/197 (26%)

表 5.2 : 当該競合における *abblühen* と *verblühen* の意味推移頻度

5.1.2.2.3 その他の観点 : Erberhard (171982 [1910]) 説

abblühen と *verblühen* の競合に関しては, Eberhard (171982 [1910] : 3ff.) が, (35) に引用するように興味深い指摘をしている。

(35) *verblühen* bezeichnet mehr das Welken, *abblühen* mehr das Abfallen der Blütenblätter; *ausblühen* bedeutet, daß die Zeit der Blüte für eine Pflanze völlig vorüber ist, oder daß die Blüte zu vollständiger Entfaltung gekommen ist. So hat ein Rosenstock, der für den Augenblick *abgeblüht* hat, doch noch nicht *ausgeblüht*, wenn er nach kurzer Zeit noch einige verspätete Blüten treibt, und eine Rose kann *abblühen*, ohne *ausgeblüht* zu haben (wenn sie z.B. durch ungünstige Witterung geschädigt wird). (Eberhard 171982 [1910] 5f.)

verblühen はしおれることを, *abblühen* は花びらの落花をむしろ表し, *ausblühen* は, ある植物の花期が完全に過ぎたこと, ないし, 花が完全に花開くに至ったことを表す。例えば, 一時花を咲き落とした [=花を咲かせるのを止めた ; < *abblühen*] バラの株であっても, すぐにまた遅咲きの花をつけるならば, まだ咲き尽くして [< *ausblühen*] いないことになる。バラは咲き尽くさずに [< *ausblühen*] 花を咲き落とし [=花を咲かせるのを止め ; < *abblühen*] うることである (例えば悪天候の被害によって)。

第1に, *verblühen* は「しおれること」を表すという指摘であるが, 既に述べたように本稿は, *verblühen* は確かにそのことを表し得るが, 常に表すわけではないと考える。

第2に, *abblühen* が「花びらの落花」を表すという見解に関しては, 部分的には賛同できる。例えば今回の有効データ中には次のような文例があったが, この例においては, 分離および落下の意味合いが窺われる。なぜなら, 花が普通の仕方で咲き終われば「さや (Schote)」が付くのであるから, ここでは分離・落下が表されていると考えられるからである。

(36) In Niedersachsen wuchs der Raps in vielen Gebieten so rasant in die Länge, dass die Pflanzen insgesamt zu wenig Nährstoffe abbekamen. Die Folge: der Raps verkümmerte und **blühte** ohne Schote **ab**. (Hamburger Morgenpost, 22.05.2018)
 ニーダーザクセンではナタネが多くの場所で、全体として栄養がいきわたらなくなるほどの勢いで背を伸ばしている。その結果、ナタネは育ちが悪くなり、さやを付けずに花を落とした [**abblühen**]。

しかし、同有効データ中の (37) のような例では、分離・落下の意味合いは希薄と考えられる（下線は引用者）。(37) においては、**abwerfen** 「落とす」が後続することに鑑みて、**abblühen** は「咲き止む」ことだけを表していると、つまり「花びらを落とす」ことは表していないと言える。²⁰⁶ Rich (2003: 162) も述べているように、**ab-** の具体的な意味合いの実現はあくまでも文脈依存と考えられる。

(37) Die Rosen sollen auch bei ungünstiger Witterung ihre Knospen entfalten und sie nicht zu lederartigen Mumien schrumpfen lassen, und sie sollen, wenn sie abgeblüht sind, ihre Blütenblätter abwerfen. (Die Zeit, 09.11.1962)

バラは不都合な天候においてもつぼみを開かせなくてはならないのであって、つぼみを革状のミイラへと萎ませるようなことがあってはならないし、咲き終わった [**abblühen**] 際には、花びらを落とさ [**abwerfen**] なくてはならない。

以上をまとめると、**abblühen** と **verblühen** は確かに〈咲き止む〉という語義で競合しているが、文脈の支えによって前者は分離・落下の意味を実現し得るのに対し、後者はしおれるという意味を実現し得るといふ差異があると考えられる。

5.1.2.2.4 目末まとめ

verblühen と **abblühen** は〈咲き止む〉という語義で競合している。ただし、**abblühen** の使用頻度は高くなく、特に比喩的な用法においては **abblühen** が特殊な使用域にあることを示唆する例が見られるなど、両語の競合の度合いは低いと考えるの

²⁰⁶ 文例の出典年が多少古いので、念の為より新しい類例も次に挙げておく。この例においても、**abfallen** 「落ちる」が後続することから、**abblühen** は「咲き止む」ことだけを表していると言える。Beim Kauf sollte man auf die unscheinbaren Blütenstände im Zentrum der Hochblätter achten: Diese sollten noch nicht abgeblüht oder gar abgefallen sein. (Nordkurier, 28.11.2005) 購入の際には、総苞片の中心にある、目立たない花序に注目するのがよい。それは、まだ咲き止んで [**abblühen**] いてはならないし、ましてや落ちて [**abfallen**] いてはならない。

が妥当である。

当該競合においては、意味推移の頻度が高いと言う意味で、*verblühen*の方が*abblühen*より比喩的・抽象的な表現である。また、文脈依存と考えられるが、*abblühen*は分離・落下の意味を実現し得るのに対し、*verblühen*はしおれるという意味を実現し得るという違いもある。なお、当該語義においては両語ともに[+持続的]であり、どちらがより過程的とも言い難い。

5.2 klingen 群

本節では、*klingen*を基盤語とする前綴り動詞として、*abklingen*, *anklingen*, *aufklingen*, *ausklingen*, *erklingen*, *verklungen*の6語を取り上げる。

*klingen*を基盤語とする前綴り動詞は他にも存在するが、何らかの競合に関わるような、今日一般的な例というのは見出し難い。例えばMater (1967: 36)が挙げる例のうち、第1に、*heraufklingen*「鳴り響いて来る」、*herausklingen*「鳴り出て来る」、*hinausklingen*「鳴り出て行く」、*weiterklingen*「鳴り続ける」、*widerklingen*「反響する」、*mitklingen*「共鳴する」「響きが混じる」、*zusammenklingen*「共鳴する」といった「副詞的な動詞不変化詞」(Fleischer/Barz 2012: 419ff.)を持つ動詞は、不変化詞自体の意味の独自性が強く、接頭辞動詞との競合が想定し難い。第2に、*durchklingen*「響き通る」、*durchklängen*「～にくまなく響き渡る」や*umklingen*「周りで鳴る」に関しても同様の理由により、競合に関わるとは考え難い。第3に、*entklingen*「鳴り始める」は、DWB (1984: 560)やSanders (1968 [1876]: Bd. 1, 939)には記載があるものの、今日一般的な語とは言えない。

5.2.1 個別の考察

5.2.1.1 abklingen

検索日：2020年3月8日；ヒット数：1万9961件 分析データ：344件；有効データ：200件

sein 支配のみである *abklingen* には、²⁰⁷〈(音が) 静まる〉という語義が認められる。(38)は一例である。

²⁰⁷ *abklingen* は、先述の同じく *ab-* を持つ自動詞の *abblühen* とは異なって、*haben* 支配のことはなく、したがって常に変化 (Transformation) を含意すると考えられる。

(38) Noch schweigen die Waffen nicht, aber in manchen Kampfgebieten **klingt** der Gefechtslärm **ab**. (Die Zeit, 06.12.1991)

まだ武器は沈黙しているわけではないが、戦闘の騒音が静まりつつある [< abklingen] 戦闘地域もある。²⁰⁸

(38) においてもそうであるように、**abklingen** の第 1 項は「対象」、中でも被動物と考えられる。

この点は後述の **verklingen** との差異として重要であるが、**abklingen** の語義はあくまで〈(音が) 静まる〉、すなわち「音量が小さくなる (in der Lautstärke abnehmen)」(Duden 2014: 107) であり、さらには意味推移の結果として音以外の現象の強度が「弱くなる (etw. wird schwächer, weniger intensiv)」(Langenscheidt ²2008: 37) ことを表し得るにしても、²⁰⁹ その結果音やその他の現象が消えることまでを積極的に表すわけではないと考えられる。それに対して、詳しくは後述するが、**verklingen** は音やその他の現象が消えることを含意すると考えられる。なお、**abklingen** と **verklingen** のこうした差異は、既に Beaton (1996: 222) が次の通り記述している。

(39) For sounds which die away, there are two v[erb]s, *abklingen* and *verklingen*.

Abklingen denotes the interval between very loud and barely perceptible, and **verklingen** is applied to the transition from soft to nothing. (Beaton 1996: 222)

5.2.1.2 anklingen

検索日：2020年3月11日；ヒット数：10万5733件

分析データ：881件；有効データ：200件

anklingen には第 1 に〈暗示的に鳴る：仄めかすように鳴る〉という語義が想定できる。(40) (41) は当該語義の実現が認められる例である。これらの例においても

²⁰⁸ 「静まりつつある」という訳にも表れているように、**abklingen** は [+持続的] と本稿は考える。その根拠としては例えば **abklingen** が **beginnen** と共起する例の観察があげられる。Erst gegen Ende der sechziger Jahre begann jene Mode **abzuklingen**. (Die Zeit, 22.09.1967) 60年代の終わりになってようやく、かの流行は静まり始めた。

²⁰⁹ 当該意味推移は、不明 1 件を除く 199 件中 196 件 (98%) で確認された。**abklingen** が原義で、つまり音響に関して用いられることは今日稀と言える。とはいえ、本稿が想定しているのは (3.3.2), 原義・具体から比喩・抽象へ向かう意味推移であるから、あくまで「鳴り止む：音量が小さくなる」から「(音以外の現象一般の強度が) 弱くなる」が派生している、という解釈になる。

そうであるように、当該語義の **anklingen** の第 1 項は対象、中でも被成物と考えられる。なお、(41) の第 1 項においては意味推移が生じており、「バルトーク (Bartók)」と「初期シェーンベルク (der frühe Schönberg)」は作曲家自身を指すのではなく、彼らの作品を指している。

(40) Gelegentlich **klingen** Jazz und Bossa zwar noch **an**, aber inspiriert von einer US-Reise werden nun Americana-Ideen integriert, eine Surf-Gitarre darf sich in der [sic!] Vordergrund drängeln, Wüstenrock knarzt und Gold singt wie eine sehr kühle Soul-Diva. (die tageszeitung, 22.01.2015)

時折ジャズやボッサの響きもまだ確かに暗示的に鳴り [**< anklingen**] はするのだが、合衆国旅行にインスパイアされてアメリカナのアイディアが統合されたことで、サーフギターが全面に出ることが許され、**Wüstenrock** が鳴り、**Gold** はとてもクールなソウルの歌姫のように歌う。

(41) In seiner technisch äußerst fordernden „Musik für Streicher“ entwickelt er eine Tonsprache, in der etwa Bartók oder auch der frühe Schönberg **anklingen**. (Mannheimer Morgen, 26.10.2015)

技術的に大変難しい「弦楽器奏者のための楽曲」で彼は、例えばバルトークあるいは初期シェーンベルクも暗示的に鳴る [**< anklingen**] ような音言語を展開した。

anklingen は次に挙げる (42) においてそうであるように、むしろ単に「示唆すること」を表す場合もあるが、その場合でも本稿は〈暗示的に鳴る〉という語義の **anklingen** の現れと捉える。つまり例えば (42) では **anklingen** の第 1 項は定形動詞第二位の文で示された命題であり、(40) におけるようにそれ自体として、ないし (41) におけるように、項における意味推移の結果として音響を指示する、というわけではないという意味で、選択制限から本来逸脱しており、その逸脱は、**anklingen** がより一般的・抽象的な「示唆する」という意味に推移することで解消されていると考える。²¹⁰

(42) Ein anderes Mal ließ der Angeklagte über seinen Anwalt **anklingen**, er habe die Waffe seiner Frau nur zeigen wollen, dabei habe sich der Schuss versehentlich

²¹⁰ 選択制限の逸脱を解消するために起きる意味推移に、項における意味推移と動詞における意味推移の 2 種類があることについては、3.3.2 を参照されたい。

gelöst. (Berliner Morgenpost, 06.08.2013)

他の回で被告は、自分は銃を妻に見せたかっただけなのだが、その際誤って銃弾が放たれてしまったと、弁護士を通して示唆した [< anklingen]。

anklingen には第 2 に〈暗示的に鳴っている〉という語義も想定できる。その根拠を実例によって直接に示すのは困難だが、以下順に述べるように、辞書の語義記述および完了の助動詞選択に鑑みると当該語義も認める必要があると言える。

まず、辞書には、anklingen に対して変化の語義だけでなく非変化の語義を記述しているものが複数ある。例えば Duden (32018: 93f.) は anklingen に対し、„andeutungsweise zum Ausdruck kommen“ 「示唆的に表現される」という変化の語義だけでなく、„hörbar, sichtbar, spürbar sein“ 「聞こえたり、見えたり、感じられたりする状態である」という非変化の語義も記述している。また DWDS (最終アクセス: 2022 年 8 月 18 日) も同じような非変化の語義を記述している。²¹¹

次に、anklingen には sein 支配と haben 支配の両方があり (Duden 32018: 93f.; 相良²⁵1978: 77)、この区別の存在から、Zifonun/Hoffmann/Strecker (1997: 1865f.) に依拠して、〈暗示的に鳴る〉という変化を含意する語義のみならず、haben 支配の〈暗示的に鳴っている〉という変化を含意しない語義の存在が予想される。今回の収集例では、(43) にあげるような haben 支配の例が 1 例、(44) にあげるような sein 支配の例が 15 例確認されたが、²¹² これらの例を観察しても上記予想との矛盾点は見出せない。

(43) Bei der Vielfalt - das hat ja auch bei Ihnen eben ein wenig **angeklungen** - ist dann demnächst wohl eine Kommissionskoordinierungskommission erforderlich. (Protokoll der Sitzung des Parlaments Deutscher Bundestag am 10.04.2003.)

こう様々な委員会があるのでは、このことはあなたの演説でも先ほど少し示唆されていた [< anklingen] のではありますが、これから差しあたっては委員会調整委員会のようなものが必要でしょう。

(44) Toleranz, und auch das ist schon **angeklungen**, ist notwendig in der Familie, in der

²¹¹ それに対し例えば Duden (2014: 179: andeutungsweise zum Ausdruck kommen, spürbar, hörbar werden; 下線部引用者) は非変化の語義を記述していない。

²¹² haben 支配の例はこのように実際には少ないのであるが、国松ほか (編) (21998: 129) や Duden (2014: 179) のように anklingen に対して haben 支配とのみ記述する辞書があることから、(43) は特殊な例というわけではないと言える。

kleinsten Einheit, zu Behinderten, zwischen den Generationen. (Sitzungsbericht der 26. Sitzung der Tagung 1994/95 der XIV. Gesetzgebungsperiode des Landtages von Niederösterreich.)

寛容さは、このこともすでに示唆された [< anklingen] 通りですが、家族という最小単位においても、障がい者に対しても、世代間でも、なくてはならないものです。

以上2つの根拠に基づき、本稿は **anklingen** に対し〈暗示的に鳴っている〉という語義も想定する。

anklingen には第3に、〈鳴り始める〉という語義を想定することも必要である。実際には〈鳴り始める〉という語義は例えば〈暗示的に鳴る〉という語義と区別し難い場合が多いが、例えば次に挙げる(45)(46)(47)においては、〈暗示的に鳴る〉ではなく〈鳴り始める〉という語義が実現していると言える。

(45) Die fast magische Wirkung von Nationalhymnen ist erstaunlich. In den grossen Stadien stehen 80 000 Leute auf, wenn vor dem Fussball-Länderspiel die Hymnen **anklingen**, kalte Schauer laufen über so manche Rücken, und Tränen der Ergriffenheit quellen aus den Augen. (Tages-Anzeiger, 03.05.1997)

国歌のほとんど魔法のような作用は驚嘆に値する。大きなスタジアムでは、サッカーの国際試合の前に国歌が鳴り始める [??暗示的に鳴る; < anklingen] と、8万人が起立し、とても多く人の背筋がぞくつとし、感動の涙が溢れ出る。

(46) Das Motiv "Freude schöner Götterfunken" **klingt an** und die Freude wurde von den Ausführenden auf ein hochgestimmtes Neujahrspublikum im vollen Saal übertragen. (Rhein-Zeitung, 03.01.2000)

「歓喜よ神々の麗しき靈感よ」のモチーフが鳴り始め [??暗示的に鳴り; < anklingen], 歓喜が演奏者たちから満員のホールの高揚したニューイヤー聴衆に伝達された。

(47) Lieder zu Advent und Weihnachten **klangen an**, Geschichten rund um die Krippe wurden vorgelesen. (Rhein-Zeitung, 07.12.2001)

アドベントとクリスマスの歌が鳴り始め [??暗示的に鳴り; < anklingen], 馬小屋に関する様々なお話が朗読された。

なお、〈鳴り始める〉という語義は辞書では記述されていない場合もあるが（例えば Duden 2014: 179）、国松ほか（編）（²1998: 129）では、1a) という「小区分」のレベルにおいて独立で記述されている。

anklingen には第 4 に、an 前置詞格目的語を伴って〈～を思わせる〉という語義で用いられる場合がある。次に挙げる（48）は、今回の有効データに含まれていた唯一の当該例である。anklingen が〈～を思わせる〉という語義で用いられるのは稀と言える。

(48) Der Name der Band sagt da schon alles, und in der deutschen Entsprechung zu Lounge Lizards (Salon-Eidechsen) steckt natürlich nichts von dem, was schon im Klang des amerikanischen Originals an Wollust **anklingt**. (Süddeutsche Zeitung, 20.10.1992)

バンド名がすでに全てを語っているのだが、Lounge Lizards に対応するドイツ語（社交界のトカゲ）には、原語にあって好色を思わせる [anklingen] もの、もちろん何もない。

anklingen には第 5 に、〈杯を打ち合わせる、乾杯する〉という語義で用いられる場合がある。この語義は古風とされるのが通例で、今回確認された唯一の当該例である（49）も『ハムレット』第 1 幕第 2 場からの独訳引用と推定されるので、以下ではこの語義を考慮しない。

(49) Und wenn der König **anklingt**, soll der Himmel Nachdröhnen ird'schem Donner. (Hannoversche Allgemeine, 05.04.2014)

And the King's rouse the heaven schall bruit again, Respeaking earthly thunder. (<https://www.gutenberg.org/cache/epub/1787/pg1787.html> ; 最終アクセス : 2022 年 8 月 18 日)

5.2.1.3 aufklingen

検索日 : 2020 年 3 月 17 日 ; ヒット数 : 4 万 5448 件 分析データ : 8375 件 ; 有効データ : 200 件

上記の各種件数からは、aufklingen が今日比較的稀な表現であることが分かる。DWDS（最終アクセス : 2022 年 8 月 18 日）の頻度表示でも、aufklingen は 7 段階中

低い方から 2 番目の評価となっている。

aufklingen には、第 1 に (50) に示すように〈短く鳴る〉という語義と、第 2 に (51) に示すように〈鳴り始める〉という語義が想定できる。前者は「鳴り、すぐに鳴り終わる」ことを、後者は「鳴り始め、その後も（一定の間）鳴り続ける」ことを表す語義である。

(50) Fünf, sechs Schüsse **klingen dumpf auf** wie Knallfrösche bei einem Feuerwerk, George Wallace bricht zusammen, schwer getroffen in Brust und Bauch, seine Frau Cornelia wirft sich schützend über ihn. (Die Zeit, 19.05.1972, S. 2)

5 発か 6 発、ネズミ花火のような鈍い音が短く鳴り [**< aufklingen**], George Wallace は、胸と腹部に重傷を負って倒れ、妻の Cornelia は庇うように彼に被さった。

(51) Seine 5. Sinfonie **klang** mit einem Ungestüm **auf**. Dem Meister hätte das zweifellos sehr gefallen, obwohl es immer wieder **klang**, als wolle Beethoven vor sich selber weglaufen, getrieben von seinem Eigenelan. (Berliner Morgenpost, 13.08.2007)

彼の交響曲第 5 番は、ある種の熱烈さとともに鳴り始めた [**< aufklingen**]. きつと巨匠も気に入ったことだろう。それは、Beethoven が、力余って自分から逃げてしまいたいかのように何度も響いたにせよ。

語義のこうした 2 区分は辞書記述にも見出せる。例えば Duden (2014: 234) においては「突然短時間だけ鳴り始める, 鳴り始める (**plötzlich für kurze Zeit erklingen, zu klingen beginnen**)」という記述がなされており、項目として分けられているわけではないとはいえ、少なくとも両語義が併記されている。²¹³

ただし、(50) に示したような **aufklingen** に、多くの辞書記述に見られる「突然」という意味合いがあるのかという点については、直接観察によって確かめることが難しく、現時点ではその有無が不明なので、〈短く鳴る〉という記述に留めておく。²¹⁴

〈鳴り始める〉という語義と〈短く鳴る〉という 2 つの語義は実例においては区別し難いことが多いが、いずれの語義においても第 1 項は典型的には「対象」であり被

²¹³ それに対し、例えば国松ほか (編) (1998: 202) の「(突然) 響き始める, 鳴り出す」という記述においては、この区分はあまり明確ではない。

²¹⁴ とはいえ例えば **allmählich** 「徐々に」という副詞との共起状況は、「突然」という含意があることと矛盾しない。**aufklingen** と **allmählich** の共起例をコーパスで検索すると (検索日: 2019 年 10 月 14 日), ヒット数は 33 件となるものの, 分析してみると **allmählich** が **aufklingen** を修飾する例は確認できない。

成物であると考えられる。例えば既出の (50) において、「5 発か 6 発」というのは、発砲ないし銃声を指しているので、被成物と考えられる。

aufklingen の第 1 項が被成物であるというのは、*aufklingen* が実質的に *sein* 支配であるという次に述べる観察とも一致する。*aufklingen* に対しては、国松ほか (編) (2019: 202) のように、*sein* 支配のみならず *haben* 支配も記述している辞書があるが、コーパスで過去分詞形 *aufgeklungen* の含まれる例を検索し (検索日: 2019 年 12 月 3 日; 検索語「*aufgeklungen*」; ヒット数 16 件) 分析した結果、収集例 16 例全てにおいて完了の助動詞は *sein* であった。したがって、例えば *Duden* (2014: 235) の記述のように、*aufklingen* は *sein* 支配と見なして差し支えない。なお、今回の有効データには完了時制の例は次の 1 例のみ含まれていたが、その際の助動詞はやはり *sein* であった。

(52) 'Wie isses denn nur möglich', und der Tonfall von Mutter Kempowski, der unvergessenen Edda Seippel, ist in seinem inneren Ohr **aufgeklungen**. (Süddeutsche Zeitung, 28.05.1993)

「どうしてそんなことがあり得るの」という言葉、母 Kempowski を演じる忘れがたい Edda Seippel の口調が、彼の頭の中で短く鳴った [*< aufklingen*]。

5.2.1.4 *ausklingen*

検索日: 2020 年 4 月 1 日; ヒット数: 16 万 201 件

分析データ: 455 件; 有効データ: 200 件

ausklingen には第 1 に〈鳴り尽くす〉という語義が想定できる。(53) は一例である。当該 *ausklingen* の第 1 項は「対象」、中でも被動物と言える。

(53) Als das Lied sich dem Höhepunkt näherte, hatte Cooper bereits an Gagas Seite Platz genommen, Wange an Wange ließen sie es mit geschlossenen Augen **ausklingen**. Anschließend: Jubel, stehende Ovationen. (FOCUS, 02.03.2019)

歌がクライマックスに近づいた時、Cooper はすでに Gaga の脇に陣取っており、2 人は歌を、頬を合わせて目を閉じ鳴り尽くす [*< ausklingen*] させた。それに続く、歓声とスタンディング・オベーション。

〈鳴り尽くす〉という語義の *ausklingen* は、ほとんどの場合で、すなわち今回の

有効データのうち不明 4 件を除く 196 例中 192 例 (98%) で、次に挙げる (54) におけるように、動詞における意味推移を伴って実現する。当該語義の *ausklingen* は第 1 項として音響を選択すると考えられるが、(54) における *ausklingen* の第 1 項は 1 日という時間である。この逸脱は、*ausklingen* が「終わる」といった、より一般的で抽象的な意味に推移することで解消されていると考えられる。²¹⁵

(54) Die Damen treffen sich offensichtlich gern zum Mittagstisch, zum Kaffee mit Kuchen oder lassen beim Abendessen den Tag mit einem Glas Sekt **ausklingen**.
(Nordkurier, 08.03.2005)

このご婦人方は、昼食や、コーヒーとケーキを共にしたり、夕食の時にスパークリングワインを飲みながら一日を終わらせ [*ausklingen*] たりするのが好きらしい。

ausklingen には第 2 に、〈鳴り尽くすところだ〉という語義も想定できる。その前提となるのは、*ausklingen* に *haben* 支配の場合があるという観察である。有効データ 200 例中には、*sein* 支配の例が 2 件確認できただけであるが (下に挙げる (55) はその一例)、*ausklingen* に関しては、各種の辞書に記載のある通り (Duden 2014: 264; 国松ほか (編) ²1998: 238 など)、*haben* 支配の例も見出せる。例えばコーパスで「*ausgeklungen*」の含まれる文例を検索し分析すると (検索日: 2021 年 4 月 11 日; ヒット数: 577)、*sein* 支配の例が 514 件と大多数を占めるとはいえ、*haben* 支配の例も 6 件確認される。(56) はそのうちの一例である。Zifonun/Hoffmann/Strecker (1997: 1865f.) に依拠するならば、*haben* 支配の *ausklingen* には、終局状態を表す〈終わりまで鳴り尽くすところだ〉という語義が認められる。²¹⁶ なお、(56) におい

²¹⁵ 頻度としては「鳴り尽くす」よりも「(音以外を含めた物事が) 終わる」という意味の方がはるかに典型的であるが、繰り返し述べているように、本稿が想定しているのは (3.3.2)、原義・具体から比喩・抽象へ向かう意味推移であるから、あくまで「鳴り尽くす」から「(音以外を含めた物事が) 終わる」が派生している、という解釈になる。

²¹⁶ Duden (2014: 264) および国松ほか (編) (²1998: 239) では原義の *ausklingen* に対してのみ *sein* 支配と *haben* 支配の両方を記述し、推移した意味の *ausklingen* に対しては *sein* 支配のみを記述している。それが正しいとすれば、*ausklingen* のデータにおいて *sein* 支配が大多数であるのは、*ausklingen* が推移した意味で用いられる場合が大多数であることと相関していると考えられる。また、Duden (2014: 264) は原義の *ausklingen* を、*sein* 支配において „*verklungen*“ と、*haben* 支配において „*aufhören zu klingen*“ と異なる仕方で記述しているが、どのような意味的な差異を念頭においているかは不明である。他方で国松ほか (編) (²1998: 239) は字義通りの意味の *ausklingen* を、*sein* 支配において「響きがしだいに消えていく」と、*haben* 支配において「響き〈鳴り〉やむ」と記述しているが、「やむ」という表現の是非は置くとしても、むしろ反対の記述が適切ではないかと思われる。

ては、過去読み（＝「鳴り尽くすところだった」）と現在完了読み（＝「（鳴り尽くすところだったことの結果として今）鳴り尽くしている」）の両方の可能性を考慮している。

(55) **Ausgeklungen** ist das Ganze bei einem zünftigen Fondueplausch im Restaurant Rheinfels. (St. Galler Tagblatt, 02.11.2015)

全体が終わったのは [< ausklingen], レストラン Rheinfels の愉快的なフォンデュ会食において, である

(56) Als die Freiheitsglocke längst **ausgeklungen** hat und Willy Brandt zum Festessen an der silberbeladenen Rathaustafel bittet, steht der Präsident der Vereinigten Staaten noch immer wie in Trance. (Der Spiegel, 03.07.1963)

自由の鐘がとっくに { 鳴り尽くすところであり / 鳴り尽くし } [< ausklingen] Willy Brandt が銀食器を盛られた市庁舎テーブルでの宴会へと招いても, 合衆国大統領 [J.F. Kennedy] はまだ陶酔状態にあるかのように立っている。

以上 **ausklingen** に〈鳴り尽くす〉と〈鳴り尽くすところだ〉という2つの語義を想定することを述べた。²¹⁷次にこれらの語義について2点補足する。

第1に, 〈鳴り尽くす〉という語義と後述の **verklungen** に認めることになる〈鳴り止む〉という語義との差異について説明する。両者の差異は, 既に論じた **ausblühen** 〈咲き尽くす〉と **verblühen** 〈咲き止む〉 (および **abblühen**) の場合と同様で, 前者は常に全うすることとしての終了を含意するが, 後者は中断としての終了を表せる, という点にある。そのことを実例の観察から示すのは困難だが,²¹⁸次に挙げる作例 (57) に対する, あるインフォーマントの意見, すなわち (57) においては **verklungen** が適切であり, **ausgeklungen** による言い換えは, 大地震のために上演は中止されざるを得なかったという当該文脈と齟齬が生じるために困難であるという意見は, 本見解と一致する。

²¹⁷ 有効データには **werden** と共起し動作受動 (**Vorgangspassiv**) が形成されていた例が15件あり, こうした例においては **ausklingen** が他動詞として振る舞っているように見える。Der Abend wurde in verschiedenen Bars mit irischer Livemusik **ausgeklungen**. (St. Galler Tagblatt, 08.11.2017) とはいえ, こうした用法は辞書に記述がなく, また文例の出典はすべてスイスやオーストリアの新聞であることから, Ammon/Bickel/Lenz (2018) や Meyer (2006) に記載があるわけではないにしても, 地域的な用法の可能性はある。いずれにせよ, 著者には不明の現象であり, また競合に関わる可能性もないので, 本文では取り上げない。

²¹⁸ 花の場合であれば, 例えば満開後の成実という観点から, 中断か否かを判断できたが, 音 (響) の場合は, その展開が多様であり得る故にそれが難しいという事情がある。

(57) Wegen des großen Erdbebens musste die Aufführung unterbrochen werden. Das Konzert ist vor dem Ende ^{OK}verklungen/*ausgeklungen.

その大地震のために上演は中断せざるを得なかった。コンサートは終了前に {^{OK}鳴り止んだ/*鳴り尽くした}。

第2に、(58) (59) に挙げる、ausklingen は「余韻」を含意するという言説を取り上げる。²¹⁹

(58) **ausklingen**, etwas klingt [mit etwas] aus (geh.): feierlich zu Ende gehen; so zu Ende gehen, daß ein nachhaltiger [angenehmer] Eindruck zurückbleiben (Duden 8 1964: 208f. unter *enden*)

ausklingen, 何か [何かを伴って] 鳴り尽くす (高尚) : 厳かに終わる ; 後に残る [心地よい] 印象を残して終わる。

(59) **ausklingen** (R3a) *finish, end* (in a particular way, often leaving a pleasant memory) (Durrell 2000: 21)

「余韻」という意味合いの存在を確かめようと、ausklingen と verklingen が同一文中に共起する例を新たに収集し分析した結果 (検索式 : 「(&ausklingen oder (&klingen /+s0 aus) /s0 &verklingen」 ; 検索日 : 2020 年 4 月 9 日 ; ヒット数・分析データ : 38 件), 次の興味深い例が見つかった。

(60) Nachdem der letzte Ton **verklungen** war, ließ das Publikum das Konzert in einer gespannten Stille **ausklingen**, bevor es sich für ein gelungenes Konzert bedankte. (Braunschweiger Zeitung, 09.10.2010)

最後の音が鳴り止んだ [< verklingen] 後, 聴衆はコンサートを, その成功に感謝する [=拍手する] 前に, 張りつめた静寂のうちに終わらせた [< ausklingen]。

²¹⁹ 両引用には、ausklingen が高尚な文体に属するとの指摘が含まれているが (geh. = gehoben; R3a ≙ 文語), いずれも verklingen との比較においてではなく, 他の「終わる」という意味の表現との比較における指摘と考えられる。なぜならば verklingen はどちらの文献でも当該項で言及されていないからである。また仮に ausklingen が高尚な表現だったとしても verklingen も同様に高尚な可能性があるので, 文体差がどの程度関与的かは不明である。なお, 引用中の [] は原文のものである。

(60)においては、ausklingenにおいてのみ余韻の意味を読み込むことが可能で、他方の verklingen に対してはそれを読み込み難い。なぜならそれを読み込んでしまうと、「最後の音が」verklingen した後に、さらに「コンサートを張りつめた静寂のうちに」ausklingen させる必要はなくなると考えられるからである。

しかし、ausklingen が「余韻」という意味合いを伴う場合があるとしても、それはausklingen が全うすることを含意すること、および余韻は通常（それが「心地よい」ものであれば尚のこと）何か全うされた後に生じるものであるという世界知から説明できるであろう。そうであれば、それを ausklingen の語義記述に含める必要があるとは言えないことになる。

なお、ausklingen と verklingen の違いに関しては Egging (1961: 51) にも記述があるが、Egging (1961: 51) は、ausklingen は実例ではたいていの場合 sein 支配であるという本稿の観察とは異なる前提、すなわち aus- 音響動詞は通常 haben 支配という前提に立っているため、ここではその詳細に立ち入らない。²²⁰

5.2.1.5 erklingen

検索日: 2020年3月30日; ヒット数: 14万2790件

分析データ: 有効データ: 200例

erklingen には〈鳴り始める〉という語義が想定できる。²²¹ (61) は一例である。

²²⁰ 参考のために当該箇所を引用しておく。aushallen: 1. Verbs denoting a sound, when compounded with aus- and ver-, refer to the moment when the sound ceases, yet they differ somewhat. In the first place, those with aus- properly take the aux[iliary verb] haben in a comp[ound] tense, while those with ver- nearly always take sein. In the second place, those with aus- really refer to the final sound, which may be—and generally is—a loud one, whereas those with ver- suggest the gradual dying away of the sound: as Sanders puts it, **Das Aushallende breitet sich aus, entfaltet sich schwellend, bis es so zu Ende gelangt, das Verhallende nimmt an Stärke ab, bis es allmählich verschwindet und unhörbar wird; etwas hat mächtig, brausend ausgehallt, ist leise verhallt.** So also **Der Donner hallt mächtig aus** (Schwab)—**Gottes Gnade hallt in vollem Jubel aus** (Voss). It is true that the difference is not always strictly observed, but an example like **In leisen, dumpfen Schlägen ist das Wetter ausgehallt** (Geibel) is unusual. 2. The same really applies to other verbs of sound so compounded, notably klingen (cf. sound 2 c and verschallen 2): e.g. on the one hand, **Sein Lied hat ausgeklungen** (Freiligrath)—**Als die Glocken ausgeklungen hatten, griff er nach dem Krug** (Heyse)—**Die widerwärtigen Töne** ([namely] eines Leierkastens ‘of a hurdy-gurdy’) **klangen pfeifend und heulend aus** (Immermann); and on the other hand, **Töne verklingen in den Wellen der Luft, bis endlich alles ruhig ist** (Fr. Schlegel)—**Als die Glocken allmählich verklungen waren, fing der Gottesdienst an** (R. Herzog). (Egging 1961: 51)

²²¹ DWDS (最終アクセス: 2020年4月6日) は、erklingen の語義を「{はっきり/高い音で} 鳴り始める (hell ertönen)」と記述しているが、この hell という部分には議論の余地がある。というのも、例えば hell の反義語の1つである dunkel (Agricola/Agricola 1982: 134) との共起例をコーパスで検索すると (検索日: 2020年4月6日)、次のような例が複数見つかるからである。Der Bittruf "Kyrie eleison" (Herr, erbarme dich) **erklingt** in dem Stück des 1960 verstorbenen Raphael so **dunkel** und hoffnungslos, als habe der Komponist selbst nicht an ein göttliches Erbarmen geglaubt. (Rhein-Zeitung, 22.12.2004) [Kyrie eleison 「主よ、あわれみたまえ」という祈願の叫びは、1960

(61) Der Abend beginnt ruhig. Eine Frau legt eine Cassette in den Recorder, Musik **erklingt**. (die tageszeitung, 13.10.2000)

その夕べは静かに始まる。一人の女性がカセットをレコーダーにセットし、音楽が鳴り始める [**< erklingen**]。

(61) においてもそうであるように、**erklingen** の第 1 項は「対象」、さらに言えば被成物と考えられる。例えば Duden (2014: 621) における「[旋律的な響きとして] 聞こえるようになる ; 音を出す ([als melodischer Klang] hörbar werden; Töne von sich geben)」 ([] は原文, 下線部は引用者) という **erklingen** の語義記述に鑑みると, **erklingen** の第 1 項が動作主 (3.2.3 を参照されたい) のこともあるかのように思えるが, 実際にはそうではないと考えられる。²²² なぜなら第 1 に, 各種の辞書で記述されているように **erklingen** は **sein** 支配であり, 第 1 項は変化を必然的に被る存在, すなわち本稿の定義によれば「動作主」ではなく「対象」ということになるからである。200 例中には完了形の例は 2 例のみであったが, いずれの例でも助動詞はやはり **sein** であった。(62) は一例である。

(62) Bislang sei dieses opulente Mahler-Werk, das etwa eineinhalb Stunden währt, noch nie in der Viertorestadt und ihrer Umgebung **erklungen**. (Nordkurier, 22.10.2019)

約 1 時間半続くマーラーのこの豪勢な作品は, この 4 つの門の町およびその周辺では, これまでまだ一度も鳴り始めた [**< erklingen**] ことがないという。

また, 過去分詞形「**erklungen**」を検索語に用いコーパスで検索し (検索日: 2022 年 8 月 20 日) 200 例分析しても, 不明の 10 例を除く 190 例全てにおいて完了の助動詞は **sein** であり, **haben** 支配の例は 1 件も見られなかった。**erklingen** にもし「音を出す (Töne von sich geben)」という語義があるとしたら, 意味的に **haben** 支配の存

年に亡くなった Raphael の作品においては, あまりに {曖昧に/暗く} 絶望的に鳴り始めるので, 作曲家自身神の慈悲を信じていなかったかのように感じられる。] こうした例に鑑みると, **erklingen** に **hell** という意味が明確にあるわけではない可能性がある。

²²² なお Duden (2014: 235) における **aufklingen** の語釈には, この「音を出す」**Töne von sich geben** に類似の記述はない。ただし, **erklingen** と **klingen** の言い換えを用いて記述していることもあり (**plötzlich für kurze Zeit erklingen, zu klingen beginnen**), **aufklingen** に「音を出す」という語義がないことが明示されているといったわけではない。

在が予測されるが、この予測は事実上否定される。²²³ したがって **erklingen** の語義記述としては〈鳴り始める〉が適切であり、その第1項は「対象」と言える。²²⁴

5.2.1.6 verklingen

検索日: 2020年4月6日; ヒット数: 9956件
分析データ: 212例; 有効データ: 200例

sein 支配のみである **verklingen** には、〈鳴り止む〉という語義が認められる。(63) に一例を挙げる。 **verklingen** の第1項は「対象」、中でも被動物と考えられる。

(63) Meistens beginnt jemand zu applaudieren, sobald der letzte Ton **verklungen** ist.
(St. Galler Tagblatt, 17.11.2017)

たいていは、最後の音が鳴り止む [**< verklingen**] とすぐに誰かが拍手を始める。

多くの辞書は、「しだいに」という意味も **verklingen** に内在するかのよう記述しているが(国松ほか(編)²1998: 2520: 「(音・響きなどが) しだいに弱まって消え去る(鳴り止む)」; Duden 2014: 2162: „als klanglicher Eindruck allmählich aufhören“ 「音響上の印象としてしだいに終わる」; DWDS: 最終アクセス 2022年8月21日; „immer leiser werden und allmählich aufhören zu klingen“ 「どんどん小さくなっていき、しだいに鳴り終わる」), 「しだいに」という意味合いは、むしろ文脈依存という可能性がある。例えば **verklingen** が **plötzlich** と共起する例をコーパスで検索すると(検索日: 2020年4月8日; 検索式「&verklingen /s0 plötzlich」; ヒット数: 57件)次に挙げる(64)のような当該例が7件見つかる。**verklingen** に「しだいに」という意味があるとしても、それは例えば **plötzlich** との共起が不可能になるほど明確なものではないと考えられる。

²²³ **erklingen** と **haben** の共起をコーパスで検索すると(検索日: 2022年8月20日; 検索式: 「&haben /s0 erklingen」; ヒット数・分析データ: 202例), **haben** 支配の例は2例だけ見つかりはするが、この2例は、著しく低い頻度に鑑みて例外と、すなわち本来 **sein** を使うべきところでは何かの理由により逸脱が起こっていると見なしうる。Leider **habe** in der jüngsten Zeit sehr oft das Lied zum Leid **erklungen**, um so froher sei er, dass an diesem Abend zur Freude Lieder erschallten. (Mannheimer Morgen, 15.05.2000) 残念ながら最近では歌が苦しみを産む [= 歌が鳴って苦しみになる; < erklingen] ことが多いので、一層この晩ひとを喜ばず歌が鳴り響いたことにほっとしている、と彼は言う。; Es sollen, wie Eingeweihte berichten, zum Abschied die Pfannen **erklungen haben**. (Süddeutsche Zeitung, 01.08.2011) 事情通によると、お別れにフライパンが鳴らされた [= 鳴り始めた; < erklingen] という。

²²⁴ この点に関しては 5.2.2.3 「その他の観点: 選択制限?」も参照されたい。

(64) Beispielsweise gibt es in vielen Orchesterwerken sehr laute Passagen, die **plötzlich** wieder **verklingen**. (Nordkurier, 10.01.2018)

例えば、多くのオーケストラ作品には、非常に大きな音ではあるが、すぐにまた鳴り止む [< verklingen] パッセージが存在する。

5.2.1.7 中間まとめ

各語における語義の実現状況をまとめると、次のようになる。

	ab.	an.	auf.	aus.	er.	ver.
〈鳴り始める〉	-	✓	✓	-	✓	-
〈暗示的に鳴り始める〉	-	✓	-	-	-	-
〈暗示的に鳴っている〉	-	-	-	-	-	-
〈短く鳴る〉	-	-	✓	-	-	-
〈静まる〉	✓	-	-	-	-	-
〈鳴り止む〉	-	-	-	-	-	✓
〈鳴り終わる〉	-	-	-	✓	-	-
〈鳴り終わるところだ〉	-	-	-	✓	-	-
〈～を思わせる〉	-	✓	-	-	-	-

表 5.3: klingen 群における語義の実現状況

5.2.2 競合の考察：〈鳴り始める〉

表 5.3 に示したように klingen 群においては〈鳴り始める〉という語義において *anklingen*, *aufklingen*, *erklingen* の 3 例が競合していることが分かった。しかし〈鳴り始める〉という語義の *anklingen* に関しては、〈暗示的に鳴り始める〉および〈暗示的に鳴っている〉という語義の *anklingen* との区別が、非完了形においては既に述べたようにたいていの場合困難であり、当該語義と判断できる例が数例しかないことから取り上げないこととし、*aufklingen* と *erklingen* の競合のみを論じる。

以下では、5.2.2.1 と 5.2.2.2 で、当該競合における両語の過程性と比喻性・抽象性を論じる。5.2.2.3 ではさらに先行研究における他の観点を取り上げ考察を進める。5.2.2.4 はまとめである。

5.2.2.1 過程性

〈鳴り始める〉という語義においては *aufklingen* も *erklingen* も [- 持続的] であると考えられる。第 1 に当該 *aufklingen* が [- 持続的] であることに対しては、次の例 (下線は引用者) の観察が根拠になる。

(65) a. Das alte Amerika der Indianer und Buschbewohner klingt am 5. April auf (11, 12, 15 Uhr). Vier virtuose Schlagzeuger werden "Urwaldmythen", also von den Zeiten der Vögel und sprechenden Schlangen und dem Leben im Dschungel erzählen. (Tiroler Tageszeitung, 14.10.2000)

先住民の古きアメリカが 4 月 5 日 (11 時, 12 時, 15 時) に鳴り始めます [< aufklingen]. 打楽器の名手 4 人が「原生林の神話」を、すなわち鳥や話ができる蛇の時代とジャングルの生活を語るでしょう。

b. 下線部 < [das alte Amerika der Indianer und Buschbewohner kling- auf] (Achievement)

c. aufklingen [-持続的]

(65) の下線部に想定される事象性記述は、括弧付きであるとはいえ時点表現と共起しかつ進行相読みにならないことから、Achievement 表現と言える。また当該事象性記述の項は個体的な解釈と考えられるので、aufklingen は [-持続的] と言える。

先行研究でも Storch (1978: 142) が、aufklingen に対して本稿と同じく持続を含まない変化の意味を認めている。

第 2 に当該 erklingen が [-持続的] であることに対しては、(66) や (67) の観察が根拠になる。

(66) a. Zu diesem Anlass sind alle Musikvereine aufgefordert worden, ein Platzkonzert durchzuführen, und punkt 20 Uhr soll der Festmarsch «Mels 99», komponiert von Guido Tresp, im ganzen Kanton erklingen. (St. Galler Tagblatt, 02.09.1999)

この機会に音楽協会はみな、野外コンサートを催すよう、そして 20 時ちょうどに, Guido Tresp 作曲の祝祭行進曲「Mels 99」が州中で鳴り始め [< erklingen] なくてはならないと言われていた。

b. 下線部 < [der Festmarsch «Mels 99» erkling- im ganzen Kanton] (Achievement)

c. erklingen [-持続的]

(67) a. Am Sonntag, 27. Dezember, 17 Uhr, erklingt in der ehemaligen Abteikirche St. Maximin Trier die berühmte Symphonie Nr. 9 d-Moll Op.125 von Ludwig van Beethoven. (Rhein-Zeitung, 22.12.2009)

12 月 27 日の日曜日, 17 時に, 前 St. Maximin Trier 大修道院教会で, Ludwig van Beethoven の有名な交響曲 9 番ニ短調 Op. 125 が鳴り始めます [<

erklingen]。

- b. [in der ehemaligen Abteikirche St. Maximin Trier erkling- die berühmte
Symphonie Nr. 9 d-Moll Op.125 von Ludwig van Beethoven.] (Achievement)
c. erklingen [ー持続的]

(66a) (67a) の基底に想定される事象性記述も、時点表現と共起しかつ進行相読みにならないことから、Achievement 表現と言える。また当該事象性記述の項は個体的な解釈と考えられるので、erklingen は [ー持続的] と言える。

先行研究ではやはり Storch (1978: 218f.) が、erklingen に対して持続を含まない変化の意味を認めている。なお、Storch (1978: 218f.) はさらに、Hell erklang eine Stimme 「声が {はっきり / 高く} 響き始めた」において hell が「開始段階 (Anfangsphase)」を特徴づけられることを根拠に、erklingen は非持続的な変化だけではなく、結果状況 (の一部) の開始段階も表すと主張しているが、本稿の枠組みにおいては、これは当該共起が引き起こす解釈変更であり、erklingen はあくまで非持続的变化のみを表すと捉えられる。つまり、例えば、次に挙げる (68) におけるように持続時間表現が erklingen と共起する場合、それは erklingen の結果状況 (= klingen が指す状況) を修飾すると捉えられるが、上述の hell との共起においても、これと同様に、hell は erklingen の結果状況 (= klingen が指す状況) を修飾していると考えられる。²²⁵

- (68) Die Turm- und Kirchenglocken im Vereinigten Königreich **erklangen** von 8.12 Uhr bis 8.15 Uhr drei Minuten ohne Unterbrechung. (Nürnberger Zeitung, 28.07.2012)
イギリス連邦の塔と教会の鐘は鳴り始めて、8時12分から8時15分まで3分間絶え間無く鳴った [< erklingen]

以上、aufblühen も erblühen も [ー持続的] と考えられることを述べた。「鳴り始める」という出来事において、それに至る過程というのは、定義上少なくとも聴覚によっては知覚できず、したがってそもそも問題になり難いとも考えられる。

²²⁵ 同様の現象は、もちろん erklingen だけに観察されるわけではなく、例えば aufklingen においても観察される。

5.2.2.2 比喩性・抽象性

〈鳴り始める〉という語義の *aufklingen* と *erklingen* では、*aufklingen* においてのみ選択制限の逸脱に起因する意味推移が観察された。(69) は一例である。*aufklingen* は第 1 項として音響を選択すると考えられるが、(69) においては特定の場所を伴っている。この逸脱は、*aufklingen* が「現れる、登場する」といった、より一般的な意味に推移することで解消されていると考えられる。こうした意味推移は計 7 件確認された。

(69) Seine Beschreibung des damaligen Herzogtums, einem kleinen Bundesstaat, der sich nach der napoleonischen Zeit aus einer Vielzahl kleiner Territorialsplitter zusammensetzte, lässt ahnen, wie innig Henninger mit der Heimat verwachsen war. In seiner umfangreichen dreibändigen „Sagensammlung“ **klingen** alle vertrauten Orte der Heimat **auf**. (Rhein-Zeitung, 30.06.2012)

彼 [Aloys Henninger] による当時の公国の記述、すなわち、ナポレオン時代後に多数の小さな領邦諸国がより集まってできた小さな連邦州の記述は、Henninger が故郷とどれほど緊密に結ばれていたかを感じさせる。彼の 3 巻本の名著「伝説集」には、彼が知悉する、故郷のあらゆる場所が登場する [< *aufklingen*]。

erklingen において意味推移の件数が 0 件なので、カイ二乗検定によって有意性を測ることは現時点ではできていないが、両語の意味推移の頻度の観察は *aufklingen* の方が比喩性・抽象性の高い表現であることを示唆しているように思われる。

先行研究では Benoist (2011: 150) が、*er-* 音響動詞と *auf-* 音響動詞の差異について次のように述べ、*aufklingen* の方が比喩的であるという見解を示している（引用者による下線部に注目されたい）。²²⁶ このことから、*aufklingen* の方が比喩性・抽象性の高い表現である可能性は高いと言える。

(70) Im Gegensatz zur vorigen Verbgruppe [Lichterscheinungsverben] bilden die

²²⁶ Benoist (2011: 150) は当該 *auf-* に対して「*er-* が基盤動詞に対する本来的な開始相を表し、特に知覚の成立を表すように見える。*auf-* 動詞は主観的であり、事態を意識することを表す (Es scheint, dass *er-* im Vergleich zum Grundverb die eigentliche inchoative Aktionsart ausdrückt und insbesondere das Auftauchen einer sinnlichen Wahrnehmung; die *auf-* Verben sind subjektiver und bezeichnen das Bewusstwerden eines Sachverhalts.)」とも述べているが、主観性について判断するための基準を見出せていないので、この点には立ち入らない。

Verbpaare *auf-/erdröhnen*, *auf-/erklingen*, *auf-/ertönen* ein homogenes Mikrosystem. Jedesmal trägt das mit er- gebildete Verb den eigentlichen Sinn – d.h. es bezeichnet die wirkliche Wahrnehmung eines Schalls – und sein Konkurrent den bildlichen (d.h. es gibt keine wirkliche Schallwahrnehmung). Außerdem ist das mit *auf-* abgeleitete Verb seltener. (Benoist ²2011: 150)

先の動詞グループ [=光放出動詞] とは反対に, *auf-/erdröhnen* 「轟き始める」, *auf-/erklingen* 「鳴り始める」, *auf-/ertönen* 「響き始める」という動詞ペアは, 同質的な小体系を成している。いずれにおいても er- 動詞が本来的な意味を持ち, すなわち音響の実際の知覚を表し, 競合する auf- 動詞が比喩的な意味を持つ (すなわち, 実際の音響知覚はない)。 さらに言うと, *auf-* 動詞の方が頻度の低い表現である。

5.2.2.3 その他の観点：選択制限？

Dewell (2015: 152) は, *er-* 放出動詞と *auf-* 放出動詞について次の (71a) のようにある程度一般的な指摘をした上で, *aufklingen* と *erklingen* の差異に関しては (71b) のように述べている。特に引用者による下線部に注目されたい。²²⁷

(71) a. *Er-* verbs are also better suited than *auf-* verbs to describe beginning to emit sound or light. Verbs such as *ertönen* and *erklingen* or *erglühen* and *erstrahlen* describe a diffuse process that develops within the subject and then emerges to become manifest and characterize it. The corresponding *auf-* verbs are rare. They come into consideration only when the subject itself perceptible by virtue of its emission. (Dewell 2015: 152)

Er- 動詞はしたがって, *auf-* 動詞よりも音や光の放出を表すのに適している。*ertönen* や *erklingen* ないし *erglühen* や *erstrahlen* といった動詞は, 主語の内部で発展し, それから表にはっきりと現れて主語を特徴づける, [焦点の] 拡散したプロセスを表す。対応する *auf-* 動詞は稀である。*auf-* 動詞は主語自体がその放出により知覚可能になる場合にだけ問題になり得る。

b. In [Und wenn dazwischen einmal dezente Walzerrhythmen *aufzuklingen* schienen,

²²⁷ (71b) では, 結果状況の持続の長短も問題にされている。確かに *aufklingen* は〈短く鳴る〉という語義も有するが, それを本稿は別義として扱っているため, ここではあくまでも〈鳴り始める〉という語義の *aufklingen* に関する論述のみに注目したい。

so hatte sich eben Verona für ein paar Minuten an die Donau verirrt], the waltz rhythms become apparent as they begin to sound, but their new state is not necessarily lasting. [Die 25 Porzellanglocken waren 1969 zum erstmalig *erklungen*] describes the emergence of an activity that characterizes the bells, and it implies a more lasting achievement with a run-up process followed by public emergence. (Dewell 2015: 152)

[その間に急に控えめなワルツのリズムが鳴り出す (< *aufklingen*) ように思われたなら、それはまさしく Verona が数分の予定でドナウ河畔を彷徨っていたということだ] という文において、ワルツのリズムは、それが鳴り始めた時に明らかになるのだが、その新しい状態は長続きするとは限らない。[その 25 の陶器の鐘は、1969 年に初めて鳴り出していた (< *erklingen*)] という文は、鐘を特徴づけるような活動の出現を表し、到達後の状態はもっと長続きする。また助走プロセスの後に、公共の場への出現という到達が生じることを表す。

(71) は、特に下線部に鑑みると、*aufklingen* の第 1 項は音響に限られるが、*erklingen* の第 1 項は音響だけではなく音源も選択できるという趣旨の指摘と考えられる。

このような差異は実際に確認できるのだろうか。結論から言うと、こうした選択制限の存在は認め難い。なぜなら、語義記述の際に述べたように、*aufklingen* も *erklingen* も *sein* 支配であり、いずれの語においても第 1 項は出来事によって必然的に変化する存在、つまりは音響という、出来事によって存在するに至る対象と考えられるからである。

例えば (71b) にある、*Die 25 Porzellanglocken* 「その 25 の陶器の鐘」という名詞句を単独で見れば、それは確かに音源を指示しているとも解釈できるが、*Die 25 Porzellanglocken waren 1969 zum erstmalig erklungen* 「その 25 の陶器の鐘は、1969 年に初めて鳴り出していた (< *erklingen*)」という文においては、それは音源としての鐘を指すのではなく、むしろ鐘の音、すなわち音響を、項における意味推移の結果として指していると考えられる。なぜなら、仮に音源としての鐘を指すのであれば、鐘は通常音を出すことによって変化する必要がないので、むしろ *haben* 支配の方が自然だからである。

5.2.2.4 項末まとめ

aufklingen と erklingen は〈鳴り始める〉という語義で競合している。両語はどちらも〔一持续的〕であり、過程性は両語の違いに関与しない。また、aufklingen の方が、意味推移の頻度が高いと言う意味で、より比喩的・抽象的な表現である可能性が高い。

5.3 lügen 群

本節は、lügen を基盤語とする動詞として、anlügen, belügen, (sich) durchlügen, erlügen, vorlügen, zusammenlügen の 6 動詞を取り上げる。

Mater (1967: 44) は、lügen を基盤語とする動詞として他にも herauslügen と ablügen を挙げているが、本稿では両語とも取り上げない。herauslügen 「嘘によって逃れさせる」を取り上げないのは、こうした「副詞的な動詞不変化詞」(Fleischer/Barz ⁴2012: 419ff.) は意味の独自性が強く、接頭辞動詞と競合する可能性が低いと考えるからである。²²⁸ 他方 ablügen 「騙し取る」は、DWB (1984: 75) や Sanders (1968 [1876]: Bd.2, 178) には確かに記載があるが、より最近の辞書には記載がないこと、またコーパスで検索しても(検索日: 2020年5月10日; ヒット数: 949件) 当該事例は検出されないことから取り上げない。

5.3.1 個別の考察

5.3.1.1 anlügen

検索日: 2020年5月1日; ヒット件数: 8381件
分析データ: 610件; 有効データ: 200件

anlügen は、動作主と対象(被動物)を伴う他動詞で、〈～に嘘をつく〉という語義を有する。(72) は一例である。

(72) Weil sie sich unbedingt ein Baby wünschte, **log** eine Kalifornierin die Ärzte **an** (Oberösterreichische Nachrichten, 25.04.1997)

どうしても赤ちゃんが欲しかったので、あるカリフォルニア出身の女性は医師た

²²⁸ 同様の理由により、DWDS (最終アクセス: 2022年8月26日) に記載が確認される umlügen 「嘘をついて変える」や、Storrer (1996: 242f.), Harras et al. (2004) に記述のある rumlügen 「嘘をついてまわる」も取り上げない。

ちに嘘をついた [**< anlügen**]

対象（被動物）表示に加えてさらに，次の（73）に挙げるように，虚偽の発言内容が引用表示される場合もある。²²⁹ 同様の例は今回の収集例には4件含まれていた。この件数に鑑みると，発言内容の表示は任意と言える。

(73) Sie sitzen zusammen an der Bar, schauen sich tief in die Augen, im selben Augenblick klingeln ihre Handys, beide **lügen** ihre Partner **an**: "Ich bin allein". (Frankfurter Rundschau, 14.12.1999)

彼らはバーと一緒に座り，目を深く見つめ合う。同時に互いの携帯が鳴るが，2人とも自分のパートナーに「1人だ」と嘘をつく [**< anlügen**]

5.3.1.2 belügen

検索日：2020年5月5日；ヒット件数：1万7936件

分析データ：201件；有効データ：200件

belügen も，**anlügen** と同様に，動作主と対象（被動物）を伴う他動詞で，〈～に嘘をつく〉という語義を有する。（74）は一例である。なお，**anlügen** の場合とは異なり，虚偽の発言内容が引用表示される例は有効データには見られなかった。²³⁰

(74) Ich hab dann also mit fünf angefangen, die Leute zu **belügen**. (Der Spiegel, 21.12.2002)

私は5歳で人々に嘘をつき [**< belügen**] 始めたのです。

5.3.1.3 (sich) durchlügen

検索日：2020年5月10日；ヒット件数：2057件

分析データ：2057件；有効データ：42件

上記の諸件数から，**durchlügen**（＝不変化詞動詞）は稀な表現と言える。DWDSの頻度表示でも（最終アクセス：2022年8月27日），7段階中最も低い評価となっている

²²⁹ Storrer (1996: 239) も次の例を挙げ，**anlügen** における発言内容の引用表示を容認している：„Die Hausaufgaben sind schon fertig“, log Peter die Mutter an.

²³⁰ Storrer (1996: 239) も **belügen** における発言内容の引用表示については容認性を次のように低く評価している：? „Die Hausaufgaben sind schon fertig“, belog Peter die Mutter.

る。**durchlügen** は辞書において一般に「口語的」とされているが、コーパスでの用例の少なさはそうした文体的な特殊性に由来する可能性がある。

durchlügen は、各種辞書記述に鑑みると、〈嘘をついて切り抜ける〉という語義の再帰動詞と考えられるが、今回の収集例では、例えば(75)のように、実際に再帰代名詞を伴う例は33件で、残りの8件では、例えば(76)(77)に示すように、再帰代名詞の共起は見られなかった。

(75) 1952 war der US-Amerikaner mit einem Stipendium nach Europa gekommen, er forschte in Kopenhagen an Viren, **log** sich gegenüber dem Stipendiengeber **durch**, und war so schlecht ausgebildet und faul, dass er damit kokettierte, er hoffe, "den Genen auf die Spur zu kommen, ohne Chemie lernen zu müssen". (Die Presse, 27.12.2012)

1952年、このアメリカ人は奨学金を得てヨーロッパに来た。彼はコペンハーゲンでウィルスの研究をしていたが、奨学金の支給者に対しては嘘をついて切り抜けていて[< sich **durchlügen**>]、「遺伝子の手がかりを、化学を学ぶはめにはならずに掴めたらと思う」と甘えたことを言うほど、不勉強の怠けものだった。

(76) Wir haben die letzten eineinhalb, zwei Jahre **durchgelogen**. (Falter, 27.10.2016)
私たちはこの1年半、2年の間ずっと嘘をついてきた[< **durchlügen**>]。

(77) So konnten die staunenden Magyaren direkt aus dem Munde ihres Premiers erfahren, dass er und dessen Parteifreunde nicht nur "alles verschissen", sondern "in den letzten eineinhalb bis zwei Jahren **durchgelogen**" haben. (Die Presse, 20.09.2006)
驚き呆れるマジャル人たちは、そうして自分たちの首相の口から直接に次のことを知ることができたのだった。首相と党の仲間は「全てを台無しにした」だけでなく、この1年半から2年間の間、ずっと嘘をついてきた[< **durchlügen**>]、ということ。

(76)(77)のような例は、再帰代名詞の欠落というよりは、期間の表示を伴うこと、および他の **durch-** 派生の趨勢に鑑みると、²³¹ 自動詞用法で〈嘘をつき続ける〉という語義と考えるのが自然に思える。よって本稿では **sich durchlügen** と **durchlügen** を区別し、前者には〈嘘をついて切り抜ける〉という語義を、後者には

²³¹ Takahashi (2019) が詳しく論じている不変化詞動詞 **durchfahren** のように、持続の意味の付加を伴う **durch-** 派生は多く存在する。

〈嘘をつき続ける〉という語義を記述する。

5.3.1.4 erlügen

検索日：2020年5月17日；ヒット件数：2685件
分析データ：203件；有効データ：200件

erlügenには第1に〈～をでっち上げる〉という語義がある。(78)は一例である。

(78) Um Himmelswillen, die Einladungen! Man hatte sie vergessen. Mutter stürzte ans Telephon, entschuldigte sich, **erlog** grippebedingte Bettlägrigkeit, brauchte jeden Schwung auf. (Süddeutsche Zeitung, 24.12.1993)

しまった，招待があった。それを忘れてしまっていた。ママは電話へと直行し，謝り，感冒による寝たきり状態をでっちあげ [< erlügen], 元氣を使い果たした。

〈～をでっち上げる〉という語義の erlügen は第1項として動作主を，第2項として「対象」を，中でも被成物を伴うと考えられる。

erlügenには第2に，〈～を騙しとる〉という語義も想定できる。(79)は当該語義が確認できた今回唯一の例である。²³²

(79) Was stellt man mit Freiheit an, wenn man eigentlich nichts als nach Hause will? Nachdem Hannah sich eine ganznächtlige Ausgeherlaubnis **erlogen** hatte, erkannte sie, dass der Spaß daran schwindet, sobald die Party vorbei ist. (Berliner Zeitung, 07.11.2011)

自由が何になろう，そもそも家に帰るより他にしたいことがなかったなら。一晩中の外出許可を騙し取った [< erlügen] 後になって Hannah は，パーティーが終わるや否や，その楽しさは消えていくことに気づいた。

国松ほか(編)(²1998: 699)の記述によれば，(79)におけるような3格の再帰代名詞は表示が任意である。なお，(79)において第2項の「一晩中の外出許可(eine ganznächtlige Ausgeherlaubnis)」は被成物と考えられるが，当該語義の erlügen が

²³² 〈～を騙しとる〉という語義の実現頻度はこのように稀であり，国松ほか(編)(²1998: 699)や Sanders (⁸1924: 188)には記述があるが，他方 Duden (2014: 623)や DWDS (最終アクセス：2022年8月27日)には記述がない。

被動物も伴い得るかは不明である。

erlügen が (78) (79) のように能動態で用いられる例は比較的少なく (今回の 200 例中では 18 件 (9%)), 多くの辞書記述にあるように, たいていの場合状態受動で用いられ, 過去分詞で形容詞的ないし副詞的に用いられる。中でも次の (80) におけるように **erstunken und erlogen** 「まったくのでっちあげ」という慣用的な組み合わせで用いられる場合が多く, そうした例は, 今回の 200 例中には 102 件 (51%) 含まれていた。

(80) Generalsekretär Klaus Uwe Benneter bezeichnete den Bericht als "erstunken und **erlogen**". (Berliner Morgenpost, 08.06.2005)

Klaus Uwe Benneter 書記長は, その報告書を「まったくのでっちあげ」と評した。

先行研究では Harras (1995: 111) が, **erlügen** は定形では用いられないと指摘している (*Er erlog diese Geschichte)。また同様に, Harras et al. (2004: 44) にも, **erlügen** は過去分詞以外では用いられないという記述がある。これらは, **erlügen** が定形で実現している例が有効データには (78) を含め計 4 例含まれていたことに鑑みると強すぎる主張ということになるが, **erlügen** が相当程度慣用化しており, 形容詞に近い振る舞いをするということは確かに言える。

5.3.1.5 vorlügen

検索日 : 2020 年 5 月 21 日 ; ヒット件数 : 5471 件 分析データ : 1236 件 ; 有効データ : 200 件
--

vorlügen には, 〈～に...をでっち上げる : ～に...と嘘をつく〉という語義が認められる。(81) は一例である。

(81) Die Rentnerin wurde am letzten Freitag von einem angeblichen Verwandten angerufen. Er brauche dringend Geld, **log** er der alten Dame **vor**. (Nürnberger Zeitung, 29.09.2008)

その年金受給者の女性は去る金曜日に, 親戚を名乗る男から電話を受けた。お金が至急必要だ, と彼はその女性に嘘をついた [**vorlügen**]。

vorlügen の第 2 項 (=対格項) は, (81) におけるように, 定形動詞第二位文であ

る例が最も多く（70例）、次いで、*etwas* およびその口語形である *was* の例（65例）、それから *dass* 文の例と続く（23例）。その意味役割は対象であり、中でも被成物と考えられる。

vorlügen の与格項は、今回の200例中189例で表示があり、基本的に必須と考えられる。なぜなら、次に挙げる（82）のように与格項の表示がない例においても、嘘をつかれる存在（意味役割としては着点）は、文脈から補うことができるからである。例えば（82）では、電話の相手が補える。

(82) Bei jedem Anruf dramatisierten sie die Verletzungen des angeblichen Unfallopfers und **logen** hohe Behandlungskosten **vor**. (Nürnberger Zeitung, 16.10.2013)

電話の度に彼らは、自称事故被害者の怪我を誇張し、高額な治療費をでっち上げた [*vorlügen*]。

5.3.1.6 *zusammenlügen*

検索日：2020年5月26日；ヒット件数：548件

分析データ：548件；有効データ：184件

上記の諸件数からは、*zusammenlügen* は頻度の非常に低い表現と言える。DWDS（最終アクセス：2022年8月27日）でも、7段階中最も低い頻度表示になっている。また、辞書記述においては *zusammenlügen* は口語的とされることが多い。

zusammenlügen には第1に、相良（²⁵1978: 1768）の表現に依拠して〈嘘八百で～をでっち上げる〉という他動詞の語義が記述できる。²³³（83）は一例である。

(83) Gefährlich ist derjenige dran, der einem anderen etwas vorlügt und, um gleichzeitig sein Gewissen zu beruhigen, versucht, selber das zu glauben, was er **zusammenlügt**. (Der Spiegel, 13.09.1971)

危ないのはその点、他人に何かをでっち上げ、同時に自分の良心をしずめるために、自分が嘘八百ででっちあげた [*zusammenlügen*] ことを信じようとする人

²³³ Duden（2014: 2382）や DWDS（最終アクセス：2022年8月27日）における *zusammenlügen* の語義記述においては、「あつかましくも (*dreist*)」というのがキーワードになっている。詳しくは後述するが、当該の意味合いは〈嘘八百で～をでっち上げる〉という語義記述の中にも既に多かれ少なかれ表されているので、本稿はひとまずこの語義記述で考察を進める。なお、国松ほか（編）（²1998: 2801）においては「でっち上げる」と並んで「うそで固める」という訳語も挙げている。

である。

当該語義記述は、先述の *erlügen* に認めた〈～をでっち上げる〉という語義記述に似ているが、その違いが意図するところは、*zusammenlügen* においては、多数の嘘 (= 「嘘八百」) による大掛かりな「でっちあげ」が表される、という点にある。例えば Storrer (1996: 241f.) も *zusammenlügen* について (84) の指摘をしている (下線は引用者)。

(84) Das Präfix „zusammen-“ vermittelt die Perspektive einer akkumulierenden Wiederholung der im Simplexverb ausgedrückten Tätigkeit, das heißt im Falle von „zusammenlügen“ der Aufbau eines Lügengebäudes aus mehreren Lügen.²³⁴

「zusammen-」という前綴り [= 不変化詞] は基盤動詞で表される行為の集積的反復というパースペクティブ [= 見方] を伝達する。つまり「*zusammenlügen*」の場合は、複数の嘘からなる嘘の構造物の組み立てが伝達される。

意味役割について言えば、当該語義の *zusammenlügen* の第 1 項は動作主、第 2 項は対象 (被成物) と考えられる。

また、当該語義の *zusammenlügen* は与格項を伴う場合もあるが、その頻度は今回の 184 例中では 73 例であり、必須と言えるほど高いわけではない。また、*zusammenlügen* における与格項は、(85) に挙げるように、ほとんどの場合において再帰代名詞であり、例外と言えるのは (86) の「彼の支持基盤 (seiner Basis)」のみであった。

(85) Der Präsident hatte sich Besucherzahlen für die Vereidigungsfeier **zusammengelogen**, die selbst Kabarettisten sprachlos machten. (Berliner Morgenpost, 22.07.2017)

大統領は、宣誓式の来訪者の数を都合よく嘘八百ででっちあげていたが [<

²³⁴ 当該引用部の後には „Die Hausaufgaben sind fertig“, log Peter zusammen と直接引用を伴えないのは、*zusammenlügen* においては「複数の嘘からなる嘘の構造物の組み立てが伝達される」が故に驚くべきことではない、という趣旨のことが述べられているが、例えば *belügen* も直接引用を伴わないことに鑑みると、直接引用の伴えないことと *zusammen* に当該の意味合いがあることにどの程度関連があるのかは定かではない。

zusammenlügen], その数はカバレティストをも呆れさせた。

(86) Trump **lügt** sich selbst und seiner Basis eine Erfolgsmeldung **zusammen**. (die tageszeitung, 13.07.2018)

トランプは、自分自身と彼の支持基盤に成功の知らせを嘘八百ででっちあげた [**zusammenlügen**]。

(85) や (86) のような例において再帰代名詞は、嘘をつく相手（着点）とも受益者とも考えられる。何かを「でっち上げる」場合は、通常自分の利益が絡むのだろうが、詳しくは後述するように、**zusammenlügen** においてはその意味が特に強いと考えられる。

zusammenlügen には第2に、有効データに次の (87) のような例が、すなわち第2項が被成物ではなく被動物で、かつ「一緒にする」という、**zusammen** に由来する意味合いが認められる例が複数含まれていたことから、〈～と…を偽って一緒にする〉という他義も認める必要がある。

(87) Also wieder das alte Spiel: Jene traditionelle demagogische Falschmünzerei, die den kleinen Bergbauern mit den Agrarmanagern in den weiten Getreideebenen zur Schicksalsgemeinschaft **zusammenlügt**. (die tageszeitung, 12.01.2001)

つまり、古いたくらみが繰り返されているのだ。山間部の小規模農家と平野部の農業経営者を偽って運命共同体とする [**zusammenlügen**]、かの伝統的で扇動的な偽金作りが。

zusammenlügen には第3に、有効データに次の (88) のような例が、すなわち第2項が被成物ではなく被動物であり、かつ上述の語義とは異なり、「一緒にする」という意味合いの欠如した例が含まれていたことから、〈嘘八百で～に…をでっちあげる〉という他義も認める必要がある。

(88) in der Praxis hielt der ein Leben lang Parteilose, der noch vor dem Committee for Un-American Activities in radebrechendem Englisch aalglatt sich zum Nichtkommunisten **zusammenlog**, es eher mit dem "Ich nehme" seiner Azdak-Figur (Die Zeit, 05.02.1998)

実践においては、非アメリカ的活動に関する委員会の前で途切れがちな英語で自

分を非共産主義者に巧みに嘘八百ででっちあげた [**zusammenlügen**] 生涯無党派の彼 [B. Brecht] は、むしろ彼の作中人物である Azdak の「私はもらう」のシンパだった。

以上 **zusammenlügen** に対して 3つの語義を認めることを述べた。最後に 2点補足する。第 1に **zusammenlügen** の項目における Duden (2014: 2382) や DWDS (最終アクセス: 2022年8月31日) の記述においては、「あつかましくも (**dreist**)」という表現がキーワードになっているが、そうした意味合いは、例えば **zusammenlügen** と **dreist** の共起を冗長なものとするほど明確なわけではない。**zusammenlügen** と **dreist** は、(89) に一例を示すように今回の有効データでは 184件中4件で共起していた。したがって、本稿にとっては上述した語義記述で十分と言える。

(89) "Alles, was im 'Postillon' steht, ist Satire und somit **dreist zusammengelogen**", warnt er auf seiner Webseite vorsorglich. (Spiegel-Online, 05.10.2013)

「[Postillon] に書いてあることは全部風刺であり、したがってあつかましく嘘八百ででっちあげられて [**zusammenlügen**] います」と彼は自身のウェブサイトであらかじめ警告している。

第 2に、辞書には **zusammenlügen** に対して、**zusammen-** に由来する拙劣さの含意を記述するものがある。²³⁵

(90) 8. [=zusammen- bei z.B. **etwas zusammenlügen**] umgangssprachlich, meist pejorativ; **zusammen-** drückt aus, dass etwas schnell und meist nicht sehr genau oder gewissenhaft gemacht wird und von schlechter Qualität ist (Langenscheidt ²2008: 1274)

8. [=etwas **zusammenlügen** 等の **zusammen**] 口語的, たいてい軽蔑的; **zusammen-** は, 素早く, たいていあまり正確でないか良心的でない形で何かを作られ, それが質の面で劣っていることを表す。

(91) 6. [=zusammen- bei z.B. **zusammenlügen**] drückt aus, dass etwas oberflächlich,

²³⁵ **zusammen-** の表す「拙劣さ」は、「一緒に」という **zusammen** の原義とどう関係するのかという点に関しては、DWB (1984: 735) の「個々で、ばらばらなものの集合から、とりどりの、無秩序なもののイメージが生まれ、さらに、性急でぞんざいな仕事のイメージが生まれ」、それが語ったり考えたり書いたりすることに転用されたという説がある。

stümperhaft zustande gebracht wird. (DWDS: 最終アクセス 2022 年 8 月 31 日)

6. [=zusammenlügen 等の zusammen] は、何かが表層的に、拙劣に成立されられることを表す。

こういった拙劣さの意味合いは、本稿の〈嘘八百で～をでっち上げる〉等の語義記述には十分反映されていないかもしれない。とはいえ、少なくとも類似する *erlügen* の〈～をでっち上げる〉という語義との区別は、これによって成し得ており、その意味では妥当な記述と考えられる。

5.3.1.7 中間まとめ

各語における語義の実現状況をまとめると、次のようになる。

	an.	be.	durch.	er.	vor.	zusammen.
〈～に嘘をつく〉	✓	✓	-	-	-	-
〈嘘をついて切り抜ける〉	-	-	✓	-	-	-
〈嘘をつき続ける〉	-	-	✓	-	-	-
〈～をでっちあげる〉	-	-	-	✓	-	-
〈嘘八百で～をでっちあげる〉	-	-	-	-	-	✓
〈～をだまし取る〉	-	-	-	✓	-	-
〈～に...をでっち上げる〉	-	-	-	-	✓	-
〈偽って～と...を一緒にする〉	-	-	-	-	-	✓
〈嘘八百で～に...を でっち上げる〉	-	-	-	-	-	✓

表 5.4: *lügen* 群における語義の実現状況

5.3.2 競合の考察：〈～に嘘をつく〉

表 5.4 に示されているように、*lügen* 群においては〈～に嘘をつく〉という語義において *anlügen* と *belügen* が競合している。以下 5.3.2.1 と 5.3.2.2 で、当該競合における両語の過程性と比喩性・抽象性を論じる。5.3.2.3 ではさらに先行研究におけるその他の観点を取り上げる。5.3.2.4 はまとめである。

5.3.2.1. 過程性

〈～に嘘をつく〉という語義においては、以下説明するように *anlügen* も *belügen* も共に活動表現 (Activity; 当状況タイプ (表現) に関しては、3.3.1.1.2.1 を参照されたい) を無標の事象性記述とする [+持続的] な表現と考えられるが、これとは異なる見解の先行研究もある。

第1に *anlügen* は、その意味に鑑みるならば、動的でかつ内在的な終点がない表現、すなわち活動表現を無標の事象性記述とすると考えられる。事例の観察においてもこの見解と矛盾する例は見出せていない。例えば次に挙げる (92) におけるように、*anlügen* の無標の事象性記述は持続時間表現と問題なく共起する。²³⁶

(92) a. Mit der Zeit wurden immer mehr Lügen nötig: Wenn Manuela im Kindergarten
Formulare ausfüllen musste, gab sie vor, ihre Brille vergessen zu haben und nahm
die Papiere mit nach Hause. Auch plötzliche Übelkeit täuschte sie in ähnlichen
Situationen vor: "Das war ja nicht mal gelogen, mir wurde wirklich ganz schlecht
bei den ganzen Formularen, die ich nicht lesen konnte." Auch ihre Kinder - sie
bekam in den nächsten Jahren noch drei weitere - log Manuela viele Jahre an.
Sie lenkte ab, wenn sie etwas lesen musste, erzählte von der verlegten Brille,
schob die Aufgaben an ihren Mann weiter. (Spiegel-Online, 23.06.2010)

時が経つにつれ、より多くの嘘が必要になった。幼稚園で書類を埋めなくてはならない時にはいつも、Manuela は眼鏡を忘れてきてしまったと嘘をつき、書類を家に持ち帰った。似たような状況で、突然の吐き気を催したふりをしたこともあった。「それは嘘ですらなかったのです。読めない書類ばかりで本当に気分が悪くなったのです。」自分の子供達にも (彼女はその後の数年でさらに3人の子供を授かる) Manuela は何年も嘘をついた [*< anlügen*]。何かを読むはめになったらいつも話を替え、眼鏡をどこかに置き忘れたと言ったり、その課題を夫に押し付けたりした。

b. 下線部 < [Manuela lüg- ihre Kinder an] (活動)

c. *anlügen* [+持続的]

先行研究では例えば Felke (2012: 151f., 208ff.) が、*anlügen* を成員に含む *an-* 動詞群 (= [5a]) に対し「何かに向けられた活動の表現 (Ausdruck gerichteter Tätigkeiten)」という呼称を用いていることに鑑みて、*anlügen* のことも活動と、つまりは [+持続的] と見なしていると言える。²³⁷

²³⁶ ただし持続時間表現と共起するからといって事象性記述を活動表現と判断できるわけではもちろんない。ここで述べているのは、*anlügen* を活動表現と考えることを妨げる観察事実は現時点で得られていない、ということである。

²³⁷ Dehé et al. (2002: 15) にも *anlügen* などの *an* に対して同趣旨の指摘がある：“German *an* used for actions directed at someone” (Dehé et al. 2002: 15)

第2に **belügen** に関しても同様に、その意味に鑑みるならば、無標の事象性記述は動かつ内在的な終点を持たない活動表現ではないかと考えられる。実例の観察においてもこの見解と矛盾する例は見出せていない。例えば (74) の再掲である (93)、および新たに挙げる (94) におけるように、**belügen** の無標の事象性記述は開始表現 (**anfangen**) および終了表現 (**aufhören**) と問題なく共起する (下線は引用者)。²³⁸

(93)(=74) a. Ich hab dann also mit fünf angefangen, die Leute zu **belügen**. (Der Spiegel, 21.12.2002)

私は5歳でみんなに嘘をつき [**< belügen**] 始めたのです。

b. **< [ich belüg- die Leute]** (活動)

c. **belügen** [+持続的]

(94) a. Das System des Vermögens wird zusammenbrechen. Wir müssen aufhören, uns zu **belügen**. (Die Presse, 02.11.2019)

富のシステムは崩壊するだろう。私たちは、自分に嘘をつく [**< belügen**] のをやめなくてはならない。

b. 下線部 **< [wir belüg- uns]** (活動)

c. **belügen** [+持続的]

anlügen も **belügen** も共に活動表現を無標の事象性記述とするのであれば、両者は共に [-有界的] ということになる。そうすると、どちらがより結果的か (ないし、より過程的か) を問うことは、本稿では結果と過程という用語を有界性を前提に用いていることから、妥当ではないことになる。

5.3.2.2 比喩性・抽象性

anlügen と **belügen** はいずれも、第1項としても第2項としても常に人および人に準じる存在を選択すると考えられるが、有効データではどちらの語に関しても、こうした選択制限から逸脱した例というのは見出せなかった。したがって、比喩性・抽象性は、両語の差異に関わらないと言える。

²³⁸ ただし開始表現ないし終了表現と共起するからといって事象性記述を活動表現と判断できるわけではもちろんない。ここで述べているのは、**belügen** を活動表現と考えることを妨げる観察事実は現時点で得られていない、ということである。

5.3.2.3 その他の観点 1：有界性

5.3.2.1 で *belügen* の無標の事象性記述は活動表現ではないかと述べたが、先行研究では Harras (1995: 112) が異なる見解であると、すなわち *belügen* を [+有界的] (=Accomplishment 表現ないし Achievement 表現を無標の事象性記述とする) と見なしていると思われる。Harras (1995: 112) は、話し手を起点 (Source), 聞き手を着点 (Goal) と見なす伝達動詞の事象モデルを用いて *anlügen* と *belügen* の差を図示した後、その図を次のように解説している。

(95) der gerichtete Pfad von source zu goal endet im Fall von *anlügen* irgendwo auf der Strecke des letzten Drittels, im Fall von *belügen* endet er auf dem goal-Punkt (Harras 1995: 112)

起点から着点へと向かう経路は、*anlügen* の場合は、区間の最後の 3 分の 1 のどこかで終わるのに対し、*belügen* の場合は着点で終わる。

(95) に示されているように、Harras (1995: 112) は *anlügen* を、着点へと向かいはするが、その到達を必ずしも含意しない表現としている。Harras (1995: 112) は、例えば先述の Felte (2012: 151f., 208ff.) の表現を借りれば、*anlügen* は「何かに向けられた活動表現」という見解であると考えられる。²³⁹

(95) においては第 2 に *belügen* に対して、着点への到達を含意することが指摘されているが、これは Harras (1995: 112) が *belügen* を有界的な表現と見なしていることを表している。というのも Harras (1995: 112) 自身が次のようにも述べているからである。

(96) Aus dem Satz *Er hat ihn belogen* folgt *Er hat ihn angelogen*, aber nicht umgekehrt. Der Satz *Er hat ihn stundenlang angelogen* ist völlig in Ordnung, wogegen der Satz *?Er hat ihn stundenlang belogen* leicht korrupt erscheint. (Harras 1995: 112)

²³⁹ *anlügen* と *belügen* の差異だけが念頭に置かれているわけではなく、また具体的な論拠が挙げられているわけでもないが、Felte (2012: 214) 自身はこの点を次のように論じている。Alle Bildungsgruppen weisen systematische Beziehungen zu transitiven Präfixbildungen mit „be-“ auf. Beide motivieren sich gegenseitig. Während „be-“ eine ganzheitliche Einwirkung ausdrückt und häufig mit „etw. bedecken“ paraphrasierbar ist, impliziert die Konstruktion mit „an“ ein gerichtetes Tun, welches sich nicht ganzheitlich auf eine Größe richtet. (Felte 2012: 214) これらの造語グループ [[5a]: 「何かに向けられた活動表現」] はすべて、be- を持つ他動詞接頭辞動詞と体系的な関係を示している。当該 an- 動詞と be- 動詞は、互いに互いを動機付けている。be- が全体に及ぶ影響を表し、「何かを全面的に覆う (etwas bedecken)」で言い換えられることが多いのに対し、an- 動詞は、何らかの存在全体に対して向けられているわけではない、方向づけられた行為を表す。

Er hat ihn belogen という文からは、Er hat ihn angelogen は帰結するが、逆は真ではない。Er hat ihn stundenlang angelogen という文は全く問題ないが、?Er hat ihn stundenlang belogen は軽い間違いのように思われる。

(96) の前半部は、belügen と anlügen が有界性によって弁別できる、つまりは [er belüg- ihn] は Accomplishment 表現ないし Achievement 表現で [er lüg- ihn an] は活動表現であるとの指摘と考えられる。なぜなら Accomplishment 表現は活動表現を含意し、また Achievement 表現は活動表現を前提とし得るが、逆に活動表現は Accomplishment 表現や Achievement 表現を含意もしなければ前提ともしないからである。

そうだとすれば、(96) 後半部の持続時間表現との共起における容認性判断 ([^{OK}] Er hat ihn stundenlang angelogen; ?Er hat ihn stundenlang belogen) も納得できる。なぜなら、活動表現は、持続時間表現（ここでは stundenlang 「何時間も」）と問題なく共起することが知られているが、Accomplishment 表現や Achievement 表現は、3.3.1.2.1 で論じたように、持続時間表現とは特定の解釈変更を伴わないと共起できず、それ故に (96) では当該文に「?」が付されていると考えられるからである。

Harras (1995: 112) の見解は妥当なのだろうか。有界性に関しては例えば状態受動で用いられる頻度が根拠になると考えられるが (Helbig/Buscha 2017: 66f.), 非有界的であり状態受動で用いられ難いと考えられる anlügen だけでなく、²⁴⁰ Harras (1995: 112) が有界的と見なしていると考えられる belügen も、状態受動で用いられる頻度は非常に低く、belügen の 200 例の有効データには当該例は含まれていない。さらに、過去分詞に絞って検索し (2021 年 6 月 21 日) ヒットした 1 万 1679 件から無作為抽出した 200 例を分析しても、belügen が状態受動で用いられている例は見られなかった。実際に Harras/Proost/Winkler (2007: 79) は belügen (および anlügen) について [−結果的 (Resultativität)] と記述しているが、この記述はこうした観察に対応するものと考えられる。

このように現状では、belügen が [+有界的] であるという根拠は得られておらず、両語が有界性によって弁別されるという見解に与することはできない。すでに述べた

²⁴⁰ anlügen に関してさらに言えば、過去分詞に絞って検索し (2020 年 6 月 8 日) ヒットした 3038 件から無作為抽出した 200 例を分析しても、状態受動と解釈できる例は、次の 1 件のみとなった。Gut verkleidet ist eben nur noch halb angezogen, pardon: angelogen. (Die Zeit (Online-Ausgabe), 10.10.2001) 上手に変装したということは、まさしくまだ途中までしか服を着ていない、失礼、嘘をつかれていない、ということだ。

ように、*belügen* という事象が有界であるとは、すなわちそれが内在的な終点を持つとは考え難い（＝原理的にはいくらでも続けられると考えられる）ので、現時点では *belügen* も *anlügen* と同じく活動表現ではないか、という見解を保持することにした。

5.3.2.4 その他の観点 2 : *anlügen* の有標性

anlügen と *belügen* の競合を指摘する文献は、先述の Harras (1995) 以外にも多くあるが、それら先行研究は、*anlügen* を *belügen* よりも有標な表現と見なす点で共通している。

まず、*Variantengrammatik des Standarddeutschen* (2018 ; 最終アクセス : 2022 年 10 月 18 日) によれば、*anlügen* の方が次のような有標の使用域に属する。

(97) Das Verb *lügen* kann mit *an-* oder *be-* kombiniert werden. Die auf diese Weise gebildeten Varianten *anlügen* und *belügen* stehen ohne Bedeutungsunterschied nebeneinander. Ausser in CH und in STIR*, wo *anlügen* die üblichere Variante ist, wird im gesamten deutschsprachigen Raum mehrheitlich das Verb *belügen* gebraucht [...]

(*Variantengrammatik des Standard-deutschen* 2018: http://mediawiki.ids-mannheim.de/VarGra/index.php/Anlügen/_/belügen; 最終アクセス : 2022 年 10 月 18 日; 「*」の意味は引用者には不明)

lügen は、*an-* もしくは *be-* と組み合わせ得る。そうして出来た異形である *anlügen* と *belügen* が、意味の差なく並存している。*anlügen* がより普通であるスイスと南チロルを除くドイツ語圏全域では、*belügen* が用いられることの方が多い。

今回の収集データからも地域差の存在は示唆される。両語文例の出典地域は表 5.5 に示す通りであるが、*anlügen* の文例においてスイスを出典地域とする例は 44 件 (23%) であるのに対し、*belügen* においては 15 件 (8%) に留まる点は注目に値する。

	anlügen	belügen
ドイツ	108 (57%)	140 (73%)
スイス	44 (23%)	15 (8%)
オーストリア	36 (19%)	36 (19%)
リヒテンシュタイン	1 (1%)	1 (1%)
	189 (100%)	192 (101%)

表 5.5: anlügen と belügen の文例の出典地域分布（不明を除く）

しかし、地域差があるにしても、それが **belügen** か **anlügen** かの選択を動機づけるような決定的な差である、とまでは言えないと思われる。なぜなら、表 5.5 における数値の開きは、例えば **belügen** がドイツで、**anlügen** がスイスなどで用いられるといった仕方で両語が「棲み分けている」ことを示唆するほど大きいわけではないからである。加えて、*Variantengrammatik des Standarddeutschen* (2018) 以外に、当該の地域差を記述している文献が見出し難い、ということもある。例えば Ammon/Bickel/Lenz (²2018) や Meyer (2006) が、**anlügen** と **belügen** に関して如何なる地域差も記述していない。第 3 に、地域差の理論的根拠が想定し難い。

地域差については以上とし、次に Günther (1974: 237), Farrell (³1978: 90), Beaton (1996:402), Durrell (2000: 34f.) による、**belügen** に比べ **anlügen** は意味的に有標であるという記述を見る。以下表記を適宜変更しつつ（＝略語はひらき、注は [] で本文に入れる）順番に引用する。

(98) Konkurrenzpaare, bei denen eine Differenzierung kaum möglich erscheint, sind die folgenden:

Er lügt, schwindelt die Mutter an

Er belügt, beschwindelt die Mutter

Hier läßt sich wohl nur die stilistische Variation feststellen, daß die An-Verben „direkter“ sind (Günther 1974: 237) ²⁴²

区別することがほとんど不可能に思える競合ペアとしては次がある

彼は母親に嘘をつく [< anlügen], 彼は母親を騙す。

彼は母親に嘘をつく [< belügen], 彼は母親を騙す。

ここではおそらく、An- 動詞の方が「より直接的」であるという文体的な変異しか確かめられない。

²⁴² 引用箇所ではこの後に von Polenz (1968: 140) の参照指示がある。しかし同箇所では、具体的な差異の指摘はないので、「より直接的」という見解は、Günther (1974) のものと言える。

- (99) **Belügen** must be used when ‘deceive’ means ‘deliberately to tell a lie’ without further implication [*Anlügen* means ‘to lie to a person on a vast scale’]. (Farrell ³1978: 90)
- (100) Both **anlügen** and **belügen** need a personal object and differ only in that *anlügen* is somewhat more emphatic. (Beaton 1996: 402)
- (101) jemanden **anlügen** *tell lies to somebody* (blatantly) [...] jemanden **belügen** *tell lies to somebody* (Durrell 2000: 34f.)

以上の引用は、「直接的」「大々の」「強烈」である等表現は異なるが、**anlügen** が **belügen** とは異なる否定的な意味合いを持つという趣旨では共通していると言える。

こうした差異は実際に存在すると考えられる。それについて論じるためには文脈が明瞭であることが望ましいので、コーパスで収集したデータではなく、Stefan Zweig (1881-1942) の短編「燃える秘密 (*Brennendes Geheimnis*)」(初出 1911) を以下取り上げたい。まずは次の一節を見てほしい (太字と下線は引用者)。

- (102) Aber Edger warf die Stimme hoch und sagte hell und scharf, daß alle rings es hören konnten: »Ich will aber jetzt mit Ihnen reden. Sie haben sich niederträchtig benommen. Sie haben mich **angelogen**. Sie wußten, daß meine Mama auf mich wartet, und sind ...«

»Edgar! « schrie die Mutter, die alle Blicke auf sich gerichtet sah, und stürzte gegen ihn los.

Aber das Kind kreischte jetzt, da es sah, daß sie seine Worte überschreien wollten, plötzlich gellend auf:

»Ich sage es Ihnen nochmals vor allen Leuten. Sie haben infam gelogen, und das ist gemein, das ist erbärmlich. «

Der Baron stand blaß, die Leute starrten auf, einige lächelten. (Stefan Zweig: *Brennendes Geheimnis und andere Erzählungen*, Berlin/Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag, 1954, S. 52f.)

しかし Edger は声を高くし、はっきり鋭く、周りに聞こえるように言った。

「僕は今あなたと話がしたいんだ。あなたは下劣な振る舞いをした。あなたは僕に嘘をついた [**< anlügen**]。あなたは、ママが僕を待っていることを知っていて、それで…」

「Edger!」と母親は叫んだ。彼女は、周囲の全視線が自分に向けられていくと知り、慌てて彼に駆け寄った。

しかし Edger は今度は突然金切り声を上げた。彼女が自分の言葉をかき消そうとしているのが分かったからだ。「僕はみんなの前であなたにもう一度言う。あなたは恥知らずにも嘘をついた [infam lügen]。卑劣で情けないことだ」

男爵は血の気の引いた様子で立っていた。人々は顔を上げこちらをじっと見ているし、にやついている人も何人かいた。

(102) において anlügen (太字) には確かに強い否定的な意味合いがあると言える。なぜなら、Edger が同じ内容を繰り返して(「あなたにもう一度言う」) 男爵を糾弾する際、infam lügen「恥知らずにも嘘をつく」という表現が用いられているからである。この言い換えは、anlügen にも infam lügen におけるのと同様に強い否定的意味合いがなければ成り立たないだろう。

次に、(102) において、即ち Edger が男爵を糾弾するこの場面では、anlügen が用いているが、(103) に示すように、男爵が自分のような一少年に嘘をついたという出来事を Edger が内省する場面、および、(104) に示すように、当該出来事に関連して Edger が母親に対して嘘に関する一般論を述べる場面では、anlügen ではなく belügen が用いられていることに注目したい。この使い分けは、(102) においては Edger が男爵を面と向かって糾弾する場面であるために、belügen ではなく、あえて anlügen が用いられていることを示唆しているように思われる。なお、「燃える秘密 (Brennendes Geheimnis)」において anlügen および belügen が用いられているのは、この3箇所 (102) (103) (104) 以外にはない。

(103) Aber was für ein furchtbares Geheimnis mußte das sein, das erwachsene Menschen so weit trieb, ihn, ein Kind, zu **belügen**, sich wegzustehlen wie Verbrecher? (Stefan Zweig: *Brennendes Geheimnis und andere Erzählungen*, Berlin/Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag, 1954, S. 51 ; 太字は引用者)

しかし、大のおとなをそこまで追い込んで、自分のような子供に対して嘘をつか [< belügen] せるなんて、つまり犯罪者のようにこっそり逃げ出させるなんて、それは何とも恐ろしい秘密であるに違いない。

(104) „Mama,“ sagte er, „du mußt es doch selbst bemerkt haben, daß er nichts Gutes will. Er hat dich ganz anders gemacht. Du bist verändert und nicht ich. Er hat dich

aufgehetzt gegen mich, nur um dich allein zu haben. Sicher will er dich betrügen. Ich weiß nicht, was er dir versprochen hat. Ich weiß nur, er wird es nicht halten. Du solltest dich hüten vor ihm. Wer einen **belügt**, belügt auch den andern. Er ist ein böser Mensch, dem man nicht trauen soll.“

(Stefan Zweig: *Brennendes Geheimnis und andere Erzählungen*, Berlin/Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag, 1954, S. 55 ; 太字は引用者)

「ママ」と彼は言った。「彼 [=男爵] が良からぬことを望んでいることは、ママも自分で気づいていたはずだよ。彼がママを別人にしてしまったんだ。ママが変わったのであって、僕が変わったんじゃない。彼がママを僕に対してけしかけたんだ。ママを独り占めするだけのために。きっとママのことを騙すつもりだよ。彼がママに何を約束したかは知らないけど、彼は守らないだろうよ。彼には気をつけた方がいい。一人に嘘をつく [< belügen] 人は、他の人にも嘘をつく [< belügen] んだ。彼は悪い人間だ。信用してはいけない」

加えて理論的にも、*anlügen* に *belügen* とは異なるある種の否定的な意味合いがあるということは、*angreifen* 「攻撃する」といった他の *an-* 動詞群 (Dornseiff ⁸2004: 346: 18.32 *Angriff*; *angreifen* [～を攻撃する], *anfallen* [襲いかかる], *anpacken* [引っ掴む], *anrücken* [進撃してくる]) の存在に鑑みて、十分あり得ると言える。

5.3.2.5 項末まとめ

belügen と *anlügen* は〈～に嘘をつく〉という語義で競合している。両語の差異には、過程性でも比喩性・抽象性でもなく、*anlügen* が *belügen* よりも、特に意味的に、有標であることに求められる。

5.4 章末まとめ

本章での分析結果は表 5.6 の通りまとめられる。

競合語義	競合ペア	差異
咲き始める	erblühen	より原義的・具体的, Knospe を項として選択不可?
	aufblühen	より比喩的・抽象的, Knospe を項として選択可
咲き止む	verblühen	より比喩的・抽象的, 「しおれる」ことを意味し得る
	abblühen	より原義的・具体的, 分離・落下を意味し得る
鳴り始める	erklingen	より原義的・具体的?
	aufklingen	より比喩的・抽象的?
～に嘘をつく	belügen	より無標
	anlügen	(特に, ある種の否定的意味合いの点で) より有標

表 5.6: タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化動詞の 4 つの競合における差異

以下順に説明するように, 表 5.6 からは, タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化動詞の競合において, 比喩性・抽象性の差異が関与する場合が多いこと, また, 選択制限の差, 意味合いの差が関与的な場合もあることが分かる。しかし, いずれの差異にしても, 個別的な現象という面が強いと思われる。

まず, 比喩性・抽象性について言えば, 〈咲き始める〉という語義における *erblühen* と *aufblühen* の競合, および可能性としては〈鳴り始める〉という語義における *erklingen* と *aufklingen* の競合において, 不変化動詞の方が, 動詞の意味推移を起こしやすいという意味で, より比喩的・抽象的な表現である。

しかし, 〈咲き止む〉という語義における *verblühen* と *abblühen* の競合においては逆に接頭辞動詞の方が同様の意味でより比喩的・抽象的な表現であることに鑑みると, タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化動詞の競合において, 例えば不変化動詞の方がより比喩的・抽象的な表現という傾向がある, とまでは言い難い。なお, 〈～に嘘をつく〉という語義における *belügen* と *anlügen* の競合において比喩性・抽象性が関与的でない, ということもある。

次に, 比喩性・抽象性以外の差異について言えば, *erblühen* と *aufblühen* の競合における選択制限の差にしても, *verblühen* と *abblühen* の競合および *belügen* と *anlügen* の競合における意味合いの差にしても, どちらかと言えば個別的な現象と考えられる。例えば有標性という観点で見ても, *erblühen* と *aufblühen* の競合では接頭辞動詞の方が意味的に有標と考えられるのに対し, *belügen* と *anlügen* の競合においては不変化動詞の方が意味的に有標と考えられるなど, やはり何らかの傾向というのは読み取り難い。

なお, 今回扱ったタイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化動詞の競合においては, 過程性の違いは非関与的であった。具体的には, 一方で *aufblühen* と *erblühen* の競合および *verblühen* と *abblühen* の競合において (またおそらく *belügen* と *anlügen*

の競合においても) 接頭辞動詞も不変化詞動詞も [+持続的] でありかつどちらがより過程的とも言い難いことから, また他方で **aufklingen** と **erklingen** の競合において両者とも [-持続的] であることから, 過程性は非関与的と言える。

2.1 「タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞」で見たように, Erben (1972: 73) は, **aufblühen** と **erblühen** の競合等を念頭に, 開始相における競合においては, タイプ A 接頭辞動詞は瞬間的な開始, タイプ C2 不変化詞動詞は非瞬間的開始の表現と示唆する記述をしていたが, 本稿における **aufblühen** と **erblühen** の競合および **aufklingen** と **erklingen** の競合の考察からは, そうした差異は認め難いという結論になる。

6. おわりに

本稿の課題は、「接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合に関して少なからぬ先行研究が指摘する多かれ少なかれ規則的な内容的差異が、実際にはどの程度認められるのかを事例の観察に基づく事例研究を通じて検討すること」(1.1)であった。²⁴³ 以下ではまずその結論をまとめ、それから今後の課題について述べる。

6.1 結論

まず4章と5章の事例研究の結果を振り返るために、表4.14と表5.6をそれぞれ表6.1、表6.2として再掲する。

事例	語義	接頭辞動詞	不変化詞動詞
durchbohren	～を穿つ	[－持続的] より比喩的・抽象的	[?持続的] より原義的・具体的
durchblättern	～を通覧する	より結果的 ([＋持続的])	より過程的 ([＋持続的])
übersiedeln	拠点を移す	オーストリア中心	ドイツ中心
überführen	～を移す	より比喩的・抽象的	より原義的・具体的
unterschieben	～に…をこっそり押し付ける	[?持続的] より比喩的・抽象的?	[－持続的] より原義的・具体的?

表 6.1 (=表 4.14) : タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化動詞の
5つの競合における差異

²⁴³ より具体的な検討課題としては、「接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合において、過程性および抽象性・比喩性の差異はどの範囲の競合で規則的に認められるのか」「過程性および抽象性・比喩性の差異以外に、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合において規則的に認められる差異はないのか。またそうした差異があるとすれば、それはどの範囲の競合で認められるのか」「内容的差異の規則性に鑑みると、現代ドイツ語の複合動詞の分類として3分類と2分類ではどちらが適切か」(2.4)という3つがあった。

競合語義	競合ペア	差異
咲き始める	erblühen	より原義的・具体的, Knospe を項として選択不可?
	aufblühen	より比喩的・抽象的, Knospe を項として選択可
咲き止む	verblühen	より比喩的・抽象的, 「しおれる」ことを意味し得る
	abblühen	より原義的・具体的, 分離・落下を意味し得る
鳴り始める	erklingen	より原義的・具体的?
	aufklingen	より比喩的・抽象的?
～に嘘をつく	belügen	より無標
	anlügen	(特に, ある種の否定的意味合いの点で) より有標

表 6.2 (=表 5.6) : タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化動詞の

4 つの競合における差異

次に, 事例研究の結果から導き出された 2 つの仮説, すわなち 4 章の (81) (82) を, それぞれ (1) (2) として再掲する。

(1)(= 4 章 (81)) タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化動詞の競合に関する仮説 :

前者の方が後者よりも比喩的・抽象的な傾向がある。

(2)(= 4 章 (82)) durch- 接頭辞動詞と durch- 不変化動詞の競合に関する仮説 :

前者の方が後者よりも結果的である (=後者の方が前者よりも過程的である)。

(1) の仮説は, Duden (³2018: 294) や Helbig/Buscha (2017: 202) が durch- 接頭辞動詞と durch- 不変化動詞の競合について記述ないし指摘していたこと (2.2.2) をタイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化動詞の競合に敷衍したものに結果的にはなっている。

(2) の仮説は, Dunger (⁸1929: 81), Weinrich (1993: 1069), Duden (³2018: 294) の論述・記述 (2.2.1.1) と多かれ少なかれ同じ内容である。つまり本稿は, Curme (²1974: 328) や Erben (¹¹1972: 71f.) とは異なって, 接頭辞動詞と不変化動詞の競合において前者がより結果的 (=後者がより過程的) であるという差異は, タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化動詞の競合一般というよりは, durch- 接頭辞動詞と durch- 不変化動詞の競合に限って観察されるのではないかと考える。

タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化動詞の競合には, タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化動詞の競合とは異なり, 何らかの規則的な差異や差異の傾向というのは見出し難いというのが 5 章の結論であった。この結論は, Erben (¹¹1972: 73) から示唆される見解とも Dewell (2015) の見解 (2.3) と異なるものである。

タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合においては、接頭辞動詞と不変化詞動詞という構造の違いが決定的というわけではないと考えられる。当該競合においては、具体的にどの接頭辞とどの不変化詞の競合であるかということも当然関わってくる。そして、例えば同じ *er-* と *auf-* の開始相化における競合であっても、接頭辞動詞と不変化詞動詞が共に [+持続的] である例 (= *erblühen* と *aufblühen* の競合) もあれば、両者が共に [-持続的] である例 (= *erklingen* と *aufklingen* の競合) もあるように、具体的にどういった語義での競合かということも重要と言える。²⁴⁴

したがって、接頭辞動詞と不変化詞動詞という構造の違いからアプローチするのは、たとえタイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化詞動詞の競合に有効であったとしても、タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合にはあまり有効ではないと考えられる。

本稿が取り組んだ課題の背景には、1.1「問題の所在」で述べたように、なぜ接頭辞動詞と不変化詞動詞が数多くの場合で競合しているのか、当該競合の存在目的は何か、という問題意識があったが、この問題に関しても、タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化詞動詞の競合と、タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合とでは、答えは異なるものになると予想される。前者に関しては (1) や (2) の仮説が答えになり得るが、後者に関してはそういった形では答え難い。後者の存在目的は、ある程度個々の事例に即してしか語り得ないのでないだろうか。

以上の考察から、2章で提示した3つの検討課題についての本稿の結論は次のようになる。なお、検討課題3に関して、1.2.2の表1.3を表6.3として再掲する。

- (3)(= 2章 (13)) 検討課題 1：接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合において、過程性および抽象性・比喩性の差異はどの範囲の競合で規則的に認められるのか。
- (4) 検討課題 1 についての結論：過程性の差異は、*durch-* 接頭辞動詞と *durch-* 不変化詞動詞の競合において規則的に認められ、抽象性・比喩性の差異は、タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化詞動詞の競合において傾向として認められるのではないか。
- (5)(= 2章 (14)) 検討課題 2：過程性および抽象性・比喩性の差異以外に、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合において規則的に認められる差異はないのか。またそうし

²⁴⁴ なお同じことは、当該競合においてはいかなる語義での競合かによって接頭辞ないし不変化詞の潜在的な意味合いの現れが異なることに鑑みてもやはり言える。

た差異があるとすれば、それはどの範囲の競合で認められるのか。

- (6) 検討課題 2 についての結論：過程性および抽象性・比喩性の差異以外に接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合において多かれ少なかれ規則的に認められる差異というのは存在しないのではないか。
- (7)(= 2 章 (15)) 検討課題 3：内容的差異の規則性に鑑みると、現代ドイツ語の複合動詞の分類として 3 分類と 2 分類ではどちらが適切か。
- (8) 検討課題 3 についての結論：タイプ A 接頭辞（動詞）とタイプ B 接頭辞（動詞）の共通性は、音韻的・統語的特徴を超えるものではなく、抽象性・比喩性の規則的差異が傾向として見られるという意味的特徴に鑑みるならば、タイプ B 接頭辞動詞は、タイプ A 接頭辞動詞よりもむしろタイプ C1 不変化詞動詞とセットで扱う方が適切と言える。そうすると、タイプ A 接頭辞動詞とタイプ B 接頭辞動詞を一括りにする、接頭辞動詞と不変化詞動詞という 2 分類よりはむしろ、形態論に重きを置いた、非分離動詞（=タイプ A 接頭辞動詞）、分離動詞（=タイプ C2 不変化詞動詞）、分離・非分離動詞（=タイプ B 接頭辞動詞、タイプ C1 不変化詞動詞）という従来の方の 3 分類の方が適切ということになる。

タイプ	例	3 分類	2 分類
A	be-, ent-, er-, miss-, ver-, zer-	非分離前綴り	接頭辞
B	durch-, hinter-, über-, um-, unter-, wider-	分離・非分離	
C1	durch-, hinter-, über-, um-, unter-,wider-	の前綴り	不変化詞 (など)
C2	ab-, an-, auf-, aus-, bei-, ein-, gegen-, nach-, vor-, zu-, wieder-, zwischen-	分離前綴り	

表 6.3 (=表 1.3)：ドイツ語の前綴りの 4 タイプおよび 3 分類と 2 分類

6.2 課題と展望

本稿の結論については以上とし、次に今後の課題について述べる。今後の課題としては主に、前節で提示した仮説、(1) (2) の検証が挙げられる。

(1) が正しいとしたら、その理論的な根拠は、1.3.3.1.2 「抽象的・比喩的 vs. 具体的・原義的」で述べたのと同じことに、すなわち「接頭辞がアクセントを持たず、したがってそれが担い得る空間的・時間的な意味が弱まること」や「非分離の方が、構

成要素たる形態素それぞれの意味が弱くなって、全体として構成的な意味を超えて、抽象的ないし比喩的な意味を実現する」ことに求められるだろう。

(2) が正しい場合の理論的根拠は何だろうか。タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化詞動詞の競合一般ではなく、*durch-* 接頭辞動詞と *durch-* 不変化詞動詞の競合においてだけ結果的 vs. 過程的という対立が見られるとすれば、それは、*durch-* という前綴りの特徴から、さらに言えば前置詞としての *durch* および副詞としての *durch* の特徴から、説明されなくてはならないであろう。ではその特徴とは何か。

まず前置詞 *durch* の特徴は、(9) に示す 2 義性にあると考えられる。

(9) a. Die Kinder liefen durch den Garten. (Benware 1992: 158)

b. Die Kinder liefen durch den Garten hindurch. (Benware 1992: 159)

その子供たちは庭を走って通り抜けた。

c. Die Kinder liefen im Garten herum. (ibid.)

その子供たちは庭中を走り回った。

例えば (9a) は、*durch*+対格名詞句の解釈に応じて (9b) (9c) の 2 通りの解釈が可能である。Benware (1992) は (9b) の解釈を「線的 (vector) 解釈」ないし「連続的 (sequential) 解釈」と呼び、(9c) の解釈を「非線的 (non-vector) 解釈」ないし「非連続的 (non-sequential) 解釈」と呼んでいる。これはつまり、大野 (2008) の言い方に倣えば、*durch* には「横断中心」の意味と「広がり中心」の意味の 2 つがあるということである。

前置詞 *durch* におけるこうした 2 義性とある程度並行すると考えられる意味の違い、すなわち方向か場所かという違いは、(*durch* と同様に、同形の動詞前綴りを持つ) *über* や *unter* といった他の前置詞においては対格 (=4 格) 支配と与格 (=3 格) 支配によって表し分けられていることに鑑みると、「横断中心」の意味と「広がり中心」という 2 つの意味があることは、前置詞 *durch* の特徴と言える。

次に副詞としての *durch* について述べる。副詞の *durch* は、*durch und durch* 「すっかり、完全に」という成句に顕著なように、完結という、アスペク的な意味を有するが、この点は例えば副詞の *unter* と比べるとある程度特徴的と言える (ただし副詞 *über* も、*über und über* 「全面的に、すっかり」という成句に顕著なように、アスペク的な意味を有している点は留意が必要である)。

前置詞および副詞としての *durch* のこうした特徴ないし特徴的な性質から *durch-*

接頭辞動詞が競合する **durch-** 不変化詞動詞よりも結果的である（=**durch-** 不変化詞動詞が競合する **durch-** 接頭辞動詞よりも過程的である）ことを説明することはできるだろうか。例えば，1.3.3.1.1 で見たように，**durch-** 接頭辞動詞は前置詞 **durch** と，**durch-** 不変化詞動詞は副詞の **durch** との関連が示唆されるが，両者を結びつけても，結果性や過程性の違いを説明することは残念ながら難しいと思われる。(2) が正しい場合の理論的根拠に関しても，さらなる考察は今後の課題としたい。

引用文献

A. 辞書・辞典

- 岩崎英二郎／小野寺和夫（1969）：『ドイツ語不変化詞辞典』，白水社。
- 国松孝二ほか（編）（1998）：『独和大辞典』，第2版，小学館。
- 斎藤純男／田口善久／西村義樹（編）（2015）：『明解言語学辞典』，三省堂。
- 相良守峯（1978）：『大独和辞典』，第25版，博友社。
- 佐藤通次（1961）：『独和言林』，白水社。
- 中條宗助（1982）：『ドイツ語類語辞典』，三修社。
- Agricola, Christiane / Agricola, Erhard (1982): *Wörter und Gegenwörter: Antonyme der deutschen Sprache*, Leipzig: VEB Bibliographisches Institut.
- Ammon, Ulrich / Bickel, Hans / Lenz, Alexandra N. (Hgg.) (2018): *Variante Wörterbuch des Deutschen: Die Standardsprache in Österreich, der Schweiz, Deutschland, Liechtenstein, Luxemburg, Ostbelgien und Südtirol sowie Rumänien, Namibia und Mennonitensiedlungen, 2.*, völlig neu bearbeitete und erweiterte Aufl., Berlin/Boston: De Gruyter.
- Beaton, K. Bruce (1996): *A Practical Dictionary of German Usage*, Oxford: Oxford University Press.
- Bußmann, Hadumod (Hg.) (2008): *Lexikon der Sprachwissenschaft*, 4., durchgesehene und bibliographisch ergänzte Aufl. unter Mitarbeit von Hartmut Lauffer, Stuttgart: Kröner.
- Dornseiff (2004): *Der deutsche Wortschatz nach Sachgruppen*, 8., völlig neu bearbeitete und mit einem vollständigen alphabetischen Zugriffsregister versehene Aufl. von Uwe Quasthoff, Berlin / New York: Walter de Gruyter.
- Duden (2014): *Die deutsche Sprache: Wörterbuch in drei Bänden*, Bd. 1-3, Berlin/Mannheim/Zürich: Dudenverlag.
- Duden (2018): *Standardwörterbuch: Deutsch als Fremdsprache*, 3., neu bearbeitete und erweiterte Aufl., Berlin: Dudenverlag
- Duden 4 (2009): *Die Grammatik: Unentbehrlich für richtiges Deutsch*, 8., überarbeitete Aufl., Berlin: Dudenverlag.
- Duden 7 (2014): *Das Herkunftswörterbuch: Etymologie der deutschen Sprache*, 5., neu bearbeitete Aufl., Berlin: Dudenverlag.

- Duden 8 (1964): *Vergleichendes Synonymwörterbuch: Sinnverwandte Wörter und Wendungen*, Mannheim: Bibliographisches Institut / Dudenverlag.
- Duden 9 (2011): *Richtiges und gutes Deutsch: Das Wörterbuch der sprachlichen Zweifelsfälle*, 7., vollständig überarbeitete Aufl., Mannheim/Zürich: Dudenverlag.
- DWB (1984): *Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm*, München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
- ²DWB: *Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm*, Neubearbeitung (1965–2018), digitalisierte Version im Digitalen Wörterbuch der deutschen Sprache, <<https://www.dwds.de/d/wb-2dwb>>, letzter Zugriff: 08.01.2023.
- DWDS: *Digitales Wörterbuch der deutschen Sprache. Das Wortauskunftssystem zur deutschen Sprache in Geschichte und Gegenwart*, hrsg. v. Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften, <<https://www.dwds.de/>>, letzter Zugriff: 19.10.2022.
- Durrell, Martin (2000): *Using German Synonyms*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Eberhard, Johann August / Maaß, Johann Gebhard Ehrenreich (1826-1830): *Versuch einer allgemeinen teutschen Synonymik in einem kritisch-philosophischen Wörterbuche der sinnverwandten Wörter der hochteutschen Mundart*, 3. Aufl., fortgesetzt und herausgegeben von J. G. Gruber, Bd. 1-6, Halle: Ruffschen Verlags-Buchhandlung.
- Eberhard, Johann August (1982 [1910]): *Synonymisches Handwörterbuch der deutschen Sprache*, 17. Aufl., durchgängig umgearbeitet, vermehrt und verbessert von Otto Lyon, Tokyo: Sansyusya [Leipzig: Th. Grieben's Verlag].
- Eggling, H. F. (1961): *A Dictionary of Modern German Prose Usage*, Oxford: The Clarendon Press.
- Farrell, Ralph Barstow (1978): *Dictionary of German Synonyms*, 3. ed. (reprinted with corrections), Cambridge et al.: Cambridge University Press.
- Harras, Gisela et al. (2004): *Handbuch deutscher Kommunikationsverben*, Teil 1: Wörterbuch, Berlin / New York: Walter de Gruyter.
- Kiss, Tibor et al. (2016): *Ein Handbuch für die Bestimmung und Annotation von Präpositionsbedeutungen im Deutschen*, 2. Aufl. Sprachwissenschaftliches Institut, Ruhr-Universität Bochum.

- Langenscheidt (2008): *Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache: Das einsprachige Wörterbuch für alle, die Deutsch lernen*, Neubearbeitung, Berlin et al.: Langenscheidt KG.
- Meyer, Kurt (2006): *Schweizer Wörterbuch: So sagen wir in der Schweiz*, mit einem Beitrag von Hans Bickel, Frauenfeld/Stuttgart/Wien: Verlag Huber.
- Mater, Erich (1967): *Deutsche Verben 2: Grundwörter und deren Zusammensetzungen*, Leipzig: VEB Bibliographisches Institut.
- Müller, Wolfgang (1973): *Duden: Leicht verwechselbare Wörter*, Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Paul, Hermann (2002): *Deutsches Wörterbuch: Bedeutungsgeschichte und Aufbau unseres Wortschatzes*, 10., überarbeitete und erweiterte Aufl. von Helmut Henne, Heidrun Kämper und Georg Objartel, Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Pons (2018): *Großwörterbuch: Deutsch als Fremdsprache*, Neubearbeitung, Stuttgart: Pons GmbH.
- Sanders, Daniel (1924): *Handwörterbuch der deutschen Sprache*, 8., neubearbeitete und vermehrte Aufl. von I. Ernst Wülfing, Leipzig: Bibliographisches Institut.
- Sanders, Daniel (1968 [1876]): *Wörterbuch der deutschen Sprache: mit Belegen von Luther bis auf die Gegenwart*, Tokyo: Sansyusya Verlag [Leipzig: Verlag von Otto Wigand].
- Schröder, Jochen (1990): *Lexikon deutscher Präpositionen*, Leipzig: Verlag Enzyklopädie Leipzig.
- Schüler-Duden (1977): *Die richtige Wortwahl: Ein vergleichendes Wörterbuch sinnverwandter Ausdrücke*, bearbeitet von Wolfgang Müller, Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Variantengrammatik des Standarddeutschen (2018): *Ein Online-Nachschlagewerk*. Verfasst von einem Autorenteam unter der Leitung von Christa Dürscheid, Stephan Elspaß und Arne Ziegler. [anlügen / belügen]. Open-Access-Publikation. (http://mediawiki.ids-mannheim.de/VarGra/index.php/Anlügen/_/belügen, letzter Zugriff: 18. 10. 2022)

B. 論文・研究書・語学書など

荒木英彦 (1997): 「分離・非分離前綴りについて」, 『東京工業高等専門学校研究報

- 告書』29号, 国立東京工業高等専門学校, 1-6.
- 有田節子 (2019): 「スル・シタ・シテイルの意味をめぐる 3 つの問い」, 庵功雄/田川拓海 (編): 『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す 第1巻－「する」の世界』, ひつじ書房, 25-52.
- 池上嘉彦 (1980): 『意味論: 意味構造の分析と記述』, 大修館書店.
- 池上嘉彦 (2000): 『「する」と「なる」の言語学: 言語と文化のタイポロジーへの試論』, 10版, 大修館書店.
- 石川慎一郎/前田忠彦/山崎誠 (編) (2010): 『言語研究のための統計入門』, くろしお出版.
- 梅内幸信 (1996): 「ドイツ語における分離・非分離動詞の前綴りの意味機能について」, 『人文学科論集』43号, 鹿児島大学法文学部, 177-220.
- 大野克彦 (2008): 「動詞接頭辞 *durch-* の意味機能」, 『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文社会科学編』59, 259-273.
- 大矢俊明 (1999): 「概念構造と分離・非分離動詞－*über-* をめぐって－」, 『筑波大学現代語・現代文科学系科学研究費補助金研究成果報告書 レキシコンに関する総合的研究』(研究代表: 原口庄輔), 45-67.
- 大矢俊明 (2007): 「*smile at vs. anlächeln*－不変化詞の対照研究(1)－」, 『文藝言語研究 言語編』53, 筑波大学文芸・言語学系, 31-56.
- 岡村三郎 (1983): 「中條宗助編著『ドイツ語類語辞典』」(書評), 『ドイツ文学71』, 日本独文学会, 151-153.
- 岡本順治 (2002): 「いわゆる「分離動詞」とは何か?－近年の不変化詞動詞研究の動向－」, 岡本順治/成田節 (編): 『いわゆる「分離動詞」をめぐる』, 日本独文学会, 2-11.
- 岡本順治 (2013): 「複合動詞」, 岡本順治/吉田光演 (編): 『講座ドイツ言語学 第1巻: ドイツ語の文法論』, ひつじ書房, 193-217.
- 荻原俊幸 (2016): 『「もの」の意味, 「時間」の意味－記号化に頼らない形式意味論の話』, くろしお出版.
- 黒田廉 (1998): 「分離・非分離前綴りに関する一考察－分離・非分離の使い分けにみられる規則性」, 『日本獣医畜産大学研究報告』第47号, 日本獣医畜産大学, 57-63.

- 黒田廉（2008）：「分離・非分離動詞 *durchfahren* と対応する基礎動詞表現について」，三瓶裕文／成田節（編）：『ドイツ語を考える：ことばについての小論集』，三修社，231-238.
- 桜井和市（2001）：『改訂 ドイツ広文典』，改訂 57 版，第三書房.
- 佐藤宙洋（2021）：「競合と対立－現代ドイツ語の *blühen* とその派生動詞における意味分化」，『*Der Keim*』第 43・44 合併号，東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会，1-28.
- 在間進（2017）：『リファレンス・ドイツ語：ドイツ文法の「すべて」がわかる』，3 版，第三書房.
- 鈴村直樹（1999）：「名詞派生動詞の形成と語彙概念構造－分離前つづり，および分離・非分離両用の前つづりを持つ動詞の場合」，『慶應義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学』29，1-15.
- 関口存男（1980）：『新ドイツ語文法教程』，第 4 版，三省堂.
- 高瀬誠（1991）：「*durch-* を持つ動詞の分離・非分離に関する一考察」，『ドイツ文学語学研究』第 15 号，学習院大学大学院ドイツ文学語学研究会，101-126.
- 高橋輝和（1971）：「*Phasenaktionsart*（活動段階）の本質と機能」，『独逸文学』16，関西大学独逸文学会，341-358.
- 高橋亮介（2003）：「ドイツ語の場所格交替と複合動詞の意味構造」，『言語情報科学』1 号，東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻，203-216.
- 出水孝典（2023）：『語彙アスペクトと事象構造（上）：時間特性を診る 14 章』，開拓社.
- 成田節（1982）：「「場所の変化」から「状態の変化」へ－*den Wagen mit etwas beladen* 型の表現についての考察－」，『*Der Keim*』Nr. 6，東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会，19-33.
- 成田節（1987）：「移動空間関係を表示する 4 格目的語について－いくつかの *be-*動詞を例として－」，『*Spuren*』，野村滋先生退官記念論文集刊行会，三修社，205-216.
- 成田節（2003）：「ドイツ語動詞「前綴り」の分離・非分離をめぐって－ドイツ語授業での説明原理を求めて－」，『語学研究所論集』第 8 号，東京外国語大学語学研究所，1-19.
- 成田節／中村俊子（2004）：『冠詞・前置詞・格』，大学書林.

- 成田節（監修）／カン・ミンギョンほか（編）（2009）：『ドイツ語コーパスハンドブック 2009』，東京外国語大学大学院総合国際学研究院グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」.
- 野入逸彦／太城桂子（2002）：『語彙・造語』，大学書林.
- 橋本文夫（1961）：「前つづり *durch* と *um* の分離・非分離について」，橋本文夫（1980）：『橋本文夫記念論文集ードイツ語と人生』，三修社，9-30.
- 橋本文夫（1986）：『詳解ドイツ大文法』，三修社.
- 浜崎長寿／野入逸彦／八本木薫（2008）：『動詞』，大学書林.
- 藤縄康弘（2010）：「ドイツ語のアスペクトー言語における視点化の力学についての方法論的考察」，『語学研究所論集』15号，東京外国語大学語学研究所，81-104.
- 藤縄康弘（2023）：「現代ドイツ語の時制とアスペクトー完了時制と過去時制における参照時と事象時をめぐってー」，カンミンギョン／時田伊津子／藤縄康弘（編）：『ドイツ語学への視点ー成田節教授退職記念論文集ー』，同学社，31-47.
- 宮坂豊夫（1980）：「J.A. エーバーハルトの類義語辞典：Wörterfamilie という概念に関連して」，『人文研究』32（3），大阪市立大学文学部，195-210.
- 山村ひろみ（2016）：「De Swart（1998）を読むースペイン語の *pretérito perfecto simple* への応用から見えてくるものー」，『言語文化論究』37，九州大学大学院言語文化研究院，21-35.
- Behaghel, Otto (1924): *Deutsche Syntax: Eine geschichtliche Darstellung*, Bd. 2: Die Wortklassen und Wortformen: B. Adverbium. C. Verbum, Heidelberg: Carl Winters Universitätsbuchhandlung.
- Benoist, Stéphanie (2011): Verbale Derivationsmechanismen am Beispiel von *auf-* und *er-*. In: Maurice Kauffer / René Métrich (Hgg.): *Verbale Wortbildung im Spannungsfeld zwischen Wortsemantik, Syntax und Rechtschreibung*, 2. Aufl., Tübingen: Stauffenburg Verlag, 145-156.
- Benware, Wilbur A. (1992): Stress on particle verbs with *durch* in Modern German. In: *American Journal of Germanic Linguistics and Literatures*, Vol. 4, Nr. 2, Honolulu, Hawaii: College of Languages, Linguistics and Literature, University of Hawaii, 149-180.

- Bertinetto, Pier Marco / Lenci, Alessandro (2012): Habituality, Pluractionality, and Imperfectivity. In: Robert I. Binnick (ed.): *The Oxford Handbook of Tense and Aspect*, Oxford: Oxford University Press, 852-880.
- Blom, Corrien (2005): *Complex Predicates in Dutch. Synchrony and Diachrony*, Dissertation. University of Amsterdam.
- Boettcher, Wolfgang (2009): *Grammatik verstehen*, Bd. 1: Wort, Tübingen: Niemeyer.
- Bolinger, Randolph (1977): *Meaning and Form*, London / New York: Longman.
- Brinkmann, Hennig (1971): *Die deutsche Sprache: Gestalt und Leistung*, 2., neubearbeitete und erweiterte Aufl., Düsseldorf: Pädagogischer Verlag Schwann.
- Carlson, Greg (2012): Habitual and Generic Aspect. In: Robert I. Binnick (ed.): *The Oxford Handbook of Tense and Aspect*: Oxford: Oxford University Press, 828-851.
- Comrie, Bernard (1981): *Aspect: An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems*, reprinted with corrections, Cambridge et al.: Cambridge University Press.
- Cruse, Alan (2015): *Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics*, 3. ed., Oxford: Oxford University Press.
- Curme, George O. (1974): *A Grammar of the German Language*, 2. revised ed., New York: Gordon Press.
- Dehé, Nicole et al. (2002): Introduction. In: Nicole Dehé et al. (eds.): *Verb-Particle Explorations*, Berlin / New York: Mouton de Gruyter, 1-20.
- de Swart, Henriëtte (1998a): Aspect Shift and Coercion. In: *Natural Language and Linguistic Theory* 16, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 347-385.
- de Swart, Henriëtte (1998b): *Introduction to Natural Language Semantics*, Stanford, California: CSLI Publications.
- de Swart, Henriëtte (2012): Verbal Aspect. In: Robert I. Binnick (ed.): *The Oxford Handbook of Tense and Aspect*, Oxford: Oxford University Press, 752-780.
- de Swart, Henriëtte (2019): Mismatches and Coercion. In: Claudia Maienborn / Klaus von Stechow / Paul Portner (eds.): *Semantics: Lexical Structures and Adjectives*, Berlin/Boston: De Gruyter Mouton, 321-349.
- Dewell, Robert B. (2011): *The Meaning of Particle / Prefix Constructions in German*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

- Dewell, Robert B. (2015): *The Semantics of German Verb Prefixes*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Donalies, Elke (2005): *Die Wortbildung des Deutschen: Ein Überblick*, 2., überarbeitete Aufl., Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- Donalies, Elke (2011): *Basiswissen: Deutsche Wortbildung*, 2. überarbeitete Aufl., Tübingen/Basel: A. Francke Verlag.
- Dowty, David R. (1979): *Word Meaning and Montague Grammar: The Semantics of Verbs and Time in Generative Semantics and in Montague's PTQ*, Dordrecht/Boston/London: D. Reidel Publishing Company.
- Dunger, Hermann (1929): *Zur Schärfung des Sprachgefühls: 225 fehlerhafte Sätze mit Verbesserungen und sprachlichen Bemerkungen*, geprüft von einem Ausschusse des Deutschen Sprachvereins, mit einer einleitenden Abhandlung: Was ist Sprachgefühl? Warum soll es geschärft werden?, 8. unveränderte Aufl. von Karl Scheffler, Berlin: Verlag des deutschen Sprachvereins.
- Durrell, Martin (2003): *Using German: A Guide to Contemporary Usage*, 2. ed., Cambridge: Cambridge University Press.
- Durrell, Martin / Brée, David (1993): German Temporal Prepositions from an English Perspective. In: Cornelia Zelinsky-Wibbelt (ed.): *The Semantics of Prepositions: From Mental Processing to Natural Language Processing*, Berlin / New York: Mouton de Gruyter, 295-326.
- Eichinger, Ludwig M. (2000): *Deutsche Wortbildung: Eine Einführung*, Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- Eisenberg, Peter (2013): *Grundriss der deutschen Grammatik*, Bd. 1: Das Wort, Bd. 2: Der Satz, unter Mitarbeit von Nanna Fuhrhop, 4., aktualisierte und überarbeitete Aufl., Stuttgart/Weimar: Verlag J.B. Metzler.
- Elsen, Hilke (2014): *Grundzüge der Morphologie des Deutschen*, 2., aktualisierte Aufl., Berlin/Boston: De Gruyter.
- Engel, Ulrich (2009): *Deutsche Grammatik: Neubearbeitung*, 2., durchgesehene Aufl., München: iudicium.
- Engelberg, Stefan (2000): *Verben, Ereignisse und das Lexikon*, Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

- Erben, Johannes (1972): *Deutsche Grammatik: Ein Abriss*, 11., völlig neubearbeitete Aufl., München: Max Hueber Verlag.
- Erben, Johannes (2006): *Einführung in die deutsche Wortbildungslehre*, 5., durchgesehene und ergänzte Aufl., Berlin: Erich Schmidt Verlag.
- Eroms, Hans-Werner (1980): *Be-Verb und Präpositionalphrase: Ein Beitrag zur Grammatik der deutschen Verbalpräfixe*, Heidelberg: Carl Winter: Universitätsverlag.
- Eroms, Hans-Werner (1982): Trennbarkeit und Nichttrennbarkeit bei den deutschen Partikelverben mit *DURCH* und *UM*. In: Ludwig M. Eichinger (Hg.): *Tendenzen verbaler Wortbildung in der deutschen Gegenwartssprache*, Hamburg: Helmut Buske Verlag, 33-50.
- Felfe, Marc (2012): *Das System der Partikelverben mit „an“: Eine konstruktionsgrammatische Untersuchung*, Berlin/Boston: De Gruyter.
- Filip, Hanna (2012): Lexical Aspect. In: Robert I. Binnick (ed.): *The Oxford Handbook of Tense and Aspect*, Oxford: Oxford University Press, 721-751.
- Fleischer, Wolfgang / Barz, Irmhild (2012): *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache*, 4. Aufl., völlig neu bearbeitet von Irmhild Barz unter Mitarbeit von Marianne Schröder, Berlin: De Gruyter.
- Georgen, Pascal (1994): *Das lexikalische Feld der deutschen inchoativen Verben*, München: iudicium verlag.
- Grimm, Jacob (1824 [1974]): Vorrede zu Vuk Stefanović Karadžić: *Kleine Serbische Grammatik*, I-LIV [Neu herausgegeben und eingeleitet von Miljam Mojašević und Peter Rohder, München: Otto Verlag / Beograd: Prosveta Verlag].
- Grimm, Jacob (1878): *Deutsche Grammatik*, 2. Teil, neuer vermehrter Abdruck, besorgt durch Wilhelm Scherer, Berlin: Ferd. Dümmlers Verlagsbuchhandlung.
- Günther, Hartmut (1974): *Das System der Verben mit BE- in der deutschen Sprache der Gegenwart: Ein Beitrag zur Struktur des Lexikons der deutschen Grammatik*, Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Hallwass, Edith (1991): *Mehr Erfolg mit gutem Deutsch: Das Handbuch für alle sprachlichen Probleme des Alltags*, München: Mosaik Verlag.
- Harm, Volker (2015): *Einführung in die Lexikologie*, Darmstadt: WBG.

- Harras, Gisela (1995): Eine Möglichkeit der kontrastiven Analyse von Kommunikationsverben. In: Hans-Peder Kromann / Anne Lise Kjær (Hgg.): *Von der Allgegenwart der Lexikologie: Kontrastive Lexikologie als Vorstufe zur zweisprachigen Lexikographie*, Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 102-113.
- Harras, Gisela / Proost, Kristel / Winkler, Edeltraud (2007): *Handbuch deutscher Kommunikationsverben*, Teil 2: Lexikalische Strukturen, Berlin / New York: Walter de Gruyter.
- Haß-Zumkehr, Ulrike (2001): *Deutsche Wörterbücher: Brennpunkt von Sprach- und Kulturgeschichte*, Berlin / New York: De Gruyter.
- Heidolph, Karl Erich / Flämig, Walter / Motsch, Wolfgang (1981): *Grundzüge einer deutschen Grammatik*, Berlin: Akademie-Verlag.
- Heinold, Simone (2015): *Tempus, Modus und Aspekt im Deutschen: Ein Studienbuch*, Tübingen: Narr Verlag.
- Helbig, Gerhard / Buscha, Jochen (2017): *Deutsche Grammatik: Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*, 1. Aufl., Stuttgart: Ernst Klett Sprachen.
- Helbig, Gerhard / Buscha, Jochen (1984): *Deutsche Grammatik: Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*, 8., neubearbeitete Aufl. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.
- Hentschel, Elke / Weydt, Harald (2013): *Handbuch der deutschen Grammatik*, 4., vollständig überarbeitete Aufl., Berlin/Boston: De Gruyter.
- Henzen, Walter (1947): *Deutsche Wortbildung*, Halle/Saale: Max Niemeyer Verlag.
- Hinderling, Robert (1982): Konkurrenz und Opposition in der verbalen Wortbildung. In: Ludwig M. Eichinger (Hg.): *Tendenzen verbaler Wortbildung in der deutschen Gegenwartssprache*, Hamburg: Helmut Buske Verlag, 81-106.
- Horlitz, Bernd (1982): Valenz und Bedeutung bei den mit *durch-* verbundenen Verben. In: Albrecht Greule (Hg.): *Valenztheorie und historische Sprachwissenschaft: Beiträge zur sprachgeschichtlichen Beschreibung des Deutschen*, Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 259-270.
- Horn, Laurence R. (2001 [1989]): *A Natural History of Negation*, CSL Publications [Chicago: University of Chicago Press].
- Hundsnurscher, Franz (1997 [1968]): *Das System der Partikelverben mit aus in der Gegenwartssprache*, Hamburg: Helmut Buske Verlag [Tübingen, Univ., Diss.].
- Jackendoff, Ray (1991): Parts and Boundaries, In: *Cognition*, 41, 9-45.

- Kamp, Hans / Reyle, Uwe (1993): *From Discourse to Logic: Introduction to Modeltheoretic Semantics of Natural Language, Formal Logic and Discourse Representation Theory*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Kenny, Anthony (1963): *Action, Emotion and Will*, London and Henley: Routledge & Kegan Paul.
- Kim, Gyung-Uk (1983): *Valenz und Wortbildung: Dargestellt am Beispiel der verbalen Präfixbildung mit be-, ent-, er-, miß-, ver-, zer-*, Würzburg: Königshausen + Neumann.
- Kjellman, Nils (1945): *Die Verbalzusammensetzungen mit «durch»*, Lund: C.W.K. Gleerup.
- Klein, Thomas / Solms, Hans-Joachim / Wegera, Klaus-Peter (2009): *Mittelhochdeutsche Grammatik*, Teil III: Wortbildung, Tübingen: Niemeyer.
- Klein, Wolfgang (1994): *Time in Language*, London and New York: Routledge.
- Klimonow, Gerda (1989): Valenz als eine theoretische Grundlage der automatischen Sprachverarbeitung. In: Gerda Klimonow et al. (Hgg.): *Zur Syntax und Semantik prädikativer Strukturen*, Berlin: Akademie-Verlag, 16-77.
- Klofáč, Jan (2014): *(Un)trennbarkeit des Präfixes „durch-“ bei ausgewählten deutschen Verben. Eine korpuslinguistische Studie*. Univerzita Karlova v Praze Filozofická fakulta Ústav germánských studií (Bakalářská práce).
- Krifka, Manfred (1989a): Nominal Reference, Temporal Constitution and Quantification in Event Semantics. In: Renate Bartsch / J. F. A. van Benthem / P. van Emde Boas (eds.): *Semantics and Contextual Expression*, Dordrecht: Foris Publication, 77-115.
- Krifka, Manfred (1989b): Nominalreferenz, Zeitkonstitution, Aspekt, Aktionsart: Eine semantische Erklärung ihrer Interaktion. In: Werner Abraham / Theo Janssen (Hgg.): *Tempus – Aspekt – Modus: Die lexikalischen und grammatischen Formen in den germanischen Sprachen*, Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 227-258.
- Kühnhold, Ingeburg (1969): Über das Verhältnis von *auf-* und *er-*. In: Johannes Erben / Thurnher Eugen (Hgg.): *Germanistische Studien*, Innsbruck, 327–335.
- Kühnhold, Ingeburg / Wellmann, Hans (1973): *Deutsche Wortbildung: Typen und Tendenzen in der Gegenwartssprache*, 1. Hauptteil: Das Verb, Düsseldorf: Pädagogischer Verlag Schwann.

- Latzel, Sigbert (1995): *Lernschwierigkeiten mit deutschen Synonymen*, Teil 1: Eine Analyse von 30 Gruppen sinnverwandter stammgleicher Verben, Heidelberg: Julius Groos Verlag.
- Lechler, Andrea / Roßdeutscher, Antja (2009): German Particle Verbs with *auf*: Reconstructing their Composition in a DRT-based Framework. In: *Linguistische Berichte*, Hamburg: Helmut Buske Verlag, 439-478.
- Leiss, Elisabeth (1992): *Die Verbalkategorien des Deutschen: Ein Beitrag zur Theorie der sprachlichen Kategorisierung*, Berlin / New York: Walter de Gruyter.
- Lieber, Rochelle (2010): *Introducing Morphology*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Löbner, Sebastian (2002): Is the German Perfekt a Perfect Perfect? In: Ingrid Kaufmann / Barbara Stiebels (Hgg.), *More than Words: A Festschrift for Dieter Wunderlich*, Berlin: Akademie Verlag, 369-391.
- Löbner, Sebastian (2015): *Semantik: Eine Einführung*, 2., aktualisierte und stark erweiterte Aufl., Berlin/Boston: De Gruyter.
- Lüdeling, Anke (2001): *On Particle Verbs and Similar Constructions in German*, Stanford: CSLI Publications.
- Mair, Christian (2012): Progressive and Continuous Aspect. In: Robert I. Binnick (ed.): *The Oxford Handbook of Tense and Aspect*, Oxford: Oxford University Press, 803-827.
- Mani, Inderjeet / Pustejovsky, James / Gaizauskas, Rob (eds.) (2005): *The Language of Time: A Reader*, Oxford: Oxford University Press.
- McIntyre, Andrew (2004): Event Paths, Conflation, Argument Structure, and VP Shells. In: *Linguistics*, 42-3, 523-571.
- Mittwoch, Antia (2019): Aspectual Classes. In: Robert Truswell (ed.): *The Oxford Handbook of Event Structure*, Oxford: Oxford University Press, 31-49.
- Motsch, Wolfgang (2004): *Deutsche Wortbildung in Grundzügen*, 2., überarbeitete Aufl., Berlin / New York: Walter de Gruyter.
- Murphy, M. Lynne (2003): *Semantic Relations and the Lexicon: Antonymy, Synonymy, and Other Paradigms*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Mungan, Güler (1986): *Die semantische Interaktion zwischen dem präfigierenden Verbzusatz und dem Simplex bei deutschen Partikel- und Präfixverben*, Frankfurt

- am Main / Bern / New York: Peter Lang.
- Nicolay, Nathalie (2007): *Aktionsarten im Deutschen: Prozessualität und Stativität*, Tübingen: Niemeyer.
- Noma, Sari (2021): Bildungsmöglichkeiten des Zustandspassivs bei Aktivitäts- und Errungenschaftsverben. In: *Beiträge zur deutschen Literatur, Sprache und Kultur*, Zweigbezirk Chugoku-Shikoku der Japanischen Gesellschaft für Germanistik [『ドイツ文学論集』, 日本独文学会中国四国支部], 5-19.
- Olsen, Susan (1996): Partikelverben im deutsch-englischen Vergleich. In: Ewald Lang / Gisela Zifonun (Hgg.): *Deutsch-typologisch*, Berlin / New York: Walter de Gruyter, 261-288.
- Olsen, Susan (1997a): Zur Kategorie Verbpartikel. In: *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 119, Tübingen: Max Niemeyer, 1-32.
- Olsen, Susan (1997b): Prädikative Argumente syntaktischer und lexikalischer Köpfe – Zum Status der Partikelverben im Deutschen und Englischen. In: *Folia Linguistica*, Bd. 31, Heft 3-4, Berlin: Mouton de Gruyter, 301-329.
- Olsen, Susan (2017): Delineating Derivation and Compounding. In: Rochelle Lieber / Pavol Štekauer (eds.): *The Oxford Handbook of Derivational Morphology*, Oxford: Oxford University Press, 26-49.
- Paul, Hermann (1959): *Deutsche Grammatik*, Bd. III: Teil IV: Syntax (1. Hälfte), 5. Aufl., Halle (Saale): VEB Max Niemeyer.
- Paul, Hermann (1958): *Deutsche Grammatik*, Bd. IV: Syntax (2. Hälfte), 4. Aufl., Halle (Saale): VEB Max Niemeyer.
- Paul, Hermann (1959): *Deutsche Grammatik*, Bd. V: Wortbildungslehre, 4. Aufl., Halle (Saale): VEB Max Niemeyer.
- Primus, Beatrice (2012): *Semantische Rollen*, Heidelberg: Universitätsverlag Winter.
- Rapp, Irene (1997): *Partizipien und semantische Struktur: Zu passivischen Konstruktionen mit dem 3. Status*, Tübingen: Stauffenburg Verlag.
- Reichenbach, Hans (2005 [1947]): The Tense of Verbs. In: Inderjeet Mani / James Pustejovsky / Rob Gaizauskas: *The Language of Time: A Reader*, Oxford: Oxford University Press, 71-78 [In: *Elements of Symbolic Logic*, New York: Macmillan Company, 287-298].

- Rich, Georg A. (2003): *Partikelverben in der deutschen Gegenwartssprache mit durch-, über-, um-, unter-, ab-, an-*, Frankfurt am Main et al.: Peter Lang.
- Rothstein, Susan (2004): *Structuring Events: A Study in the Semantics of Lexical Aspect*, Oxford: Blackwell Publishing.
- Ryle, Gilbert (2009 [1949]): *The Concept of Mind*, 60th anniversary ed., London / New York: Routledge [Hutchinson].
- Schwenk, Hans-Jörg (2019): *Aktionsarten: Im Spannungsfeld zwischen Lexik(on) und Grammatik*, Berlin et al.: Peter Lang.
- Seuren, Pieter A. M. (1991): Präsuppositionen (Presuppositions). In: Arnim von Stechow / Dieter Wunderlich (Hgg.): *Semantik / Semantics: Ein internationales Handbuch der zeitgenössischen Forschung / An International Handbook of Contemporary Research*, Berlin / New York: Walter de Gruyter, 286-318.
- Šimečková, Alena (1995): Zur Valenz als Unterscheidungsmerkmal bei den komplexen Verben mit unfesten/festen Formen. In: Ludwig M. Eichinger / Hans-Werner Eroms (Hgg.): *Dependenz und Valenz*, Hamburg: Helmut Buske Verlag, 191-199.
- Skirl, Helge / Schwarz-Friesel, Monika (2007): *Metapher*, Heidelberg: Universitätsverlag Winter.
- Smith, Carlota S. (1997): *The Parameter of Aspect*, 2. ed., Dordrecht/Boston/London: Kluwer Academic Publishers.
- Stiebels, Barbara / Wunderlich, Dieter (1994): Morphology Feeds Syntax: The Case of Particle Verbs. In: *Linguistics: An Interdisciplinary Journal of the Language Sciences*, Vol. 32-6, Berlin / New York: Walter de Gruyter, 913-968.
- Stiebels, Barbara (1996): *Lexikalische Argumente und Adjunkte: Zum semantischen Beitrag von verbalen Präfixen und Partikeln*, Berlin: Akademie Verlag.
- Storch, Günther (1978): *Semantische Untersuchungen zu den inchoativen Verben im Deutschen*, Braunschweig: Vieweg.
- Storjohann, Petra (2010): Synonyms in Corpus Texts: Conceptualization and Construction. In: Petra Storjohann (ed.): *Lexical-Semantic Relations: Theoretical and Practical Perspectives*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamin Publishing Company, 69-94.
- Storrer, Angelika (1996): Verbbedeutung und Situationsperspektivierung. In: Joachim Grabowski / Gisela Harras / Theo Herrmann (Hgg.): *Bedeutung – Konzepte –*

- Bedeutungs-konzepte. Theorie und Anwendung in Linguistik und Psychologie*, Opladen: Westdeutscher Verlag, 231-255.
- Streitberg, Wilhelm (1891): Perfective und imperfective Actionsart im Germanischen. In: *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur*, XV. Bd., Halle: Max Niemeyer, 70-177.
- Streitberg, Wilhelm (1895): Rezension von „Wustmann R. Verba perfectiva, namentlich im Heiland. Ein Beitrag zum Verständnis der germanischen Verbalkomposition. Leipzig Grunow 1894“. In: *Anzeiger für Indogermanische Sprach- und Altertumskunde. Beiblatt zu den indogermanischen Forschungen*, 5. Bd., 1. Heft, Strassburg: Verlag von Karl J. Trübner, 78-83.
- Streitberg, Wilhelm (1900): Rezension von „Delbrück B. Vergleichende Syntax der indogermanischen Sprachen. Zweiter Teil. Strassburg Trübner 1897“. In: *Anzeiger für Indogermanische Sprach- und Altertumskunde. Beiblatt zu den indogermanischen Forschungen*, 11. Bd. 1. Heft, Strassburg: Verlag von Karl J. Trübner, 56-67.
- Szigeti, Imre (2017): *Derivation*, Heidelberg: Universitätsverlag.
- Takahashi, Miho (2019): Temporalität als Ableitung aus einer Räumlichkeit: Eine Fallstudie über die wegbezogene und die temporale Lesart beim Partikelverb *durchfahren*. In: *Linguisten-Seminar: Forum japanisch-germanistischer Sprachforschung*, Vol.1, 56-72.
- Thieroff, Rolf (1992): *Das finite Verb im Deutschen: Tempus – Modus – Distanz*. Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- Truswell, Robert (2019): Introduction. In: Robert Truswell (Hg.): *The Oxford Handbook of Event Structure*, Oxford: Oxford University Press, 1-28.
- Vendler, Zeno (1967 [1957]): Verbs and Times. In: *Linguistics in Philosophy*, Ithaca: Cornell University Press, 97-121 [In: *The Philosophical Review*, Vol. 66, Nr. 2, Duke University Press, 142-160].
- Verkuyl, Henk J. (1993): *A Theory of Aspectuality: The Interaction between Temporal and Atemporal Structure*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Verkuyl, Henk J. (2005): Aspectual Composition: Surverying the Ingredients. In: Henk J. Verkuyl / Henriëtte de Swart / Angeliek van Hout (eds.): *Perspectives on Aspect*, Dordrecht: Springer, 19-39.

- Verkuyl, Henk J. (2022): *The Compositional Nature of Tense, Mood and Aspect*, Cambridge: Cambridge University Press.
- von Polenz, Peter (1968): Ableitungsstrukturen deutscher Verben. In: *Zeitschrift für deutsche Sprache: Fortführung der von Friedrich Kluge begründeten Zeitschrift für Deutsche Wortforschung*, Bd. 24, Berlin: Walter de Gruyter & Co, 1-15.
- von Stechow, Arnim (2002): German *seit* 'since' and the Ambiguity of the German Perfect. In: Ingrid Kaufmann / Barbara Stiebels (Hgg.), *More than Words: A Festschrift for Dieter Wunderlich*, Berlin: Akademie Verlag, 393-432.
- Weinrich, Harald (1993): *Textgrammatik der deutschen Sprache*, unter Mitarbeit von Maria Thurmair, Eva Breindl, Eva-Maria Willkop, Meinheim et al.: Dudenverlag.
[協阪豊 (編訳) (2003) : 『テキストからみたドイツ語文法』, 三修社.]
- Weisgerber, Leo (1962): *Die sprachliche Gestaltung der Welt*, 3. neubearbeitete Aufl., Düsseldorf: Pädagogischer Verlag Schwann.
- Welke, Klaus (2011): *Valenzgrammatik des Deutschen: Eine Einführung*: Berlin / New York: De Gruyter.
- Wilmanns, Wilhelm (1899): *Deutsche Grammatik: Gotisch, Alt-, Mittel- und Neuhochdeutsch, 2. Abteilung: Wortbildung*, 2. Aufl., Strassburg: Verlag von Karl J. Trübner.
- Wunderlich, Dieter (1983): On the Compositionality of German Prefix Verbs. In: Rainer Bäuerle / Christoph Schwarze / Arnim von Stechow (Hgg.): *Meaning, Use, and Interpretation of Language*, Berlin / New York: Walter de Gruyter, 452-465.
- Zifonun, Gisela (1973): *Zur Theorie der Wortbildung am Beispiel deutscher Präfixverben*, München: Max Hueber Verlag.
- Zifonun, Gisela / Hoffmann, Ludger / Strecker, Bruno (1997): *Grammatik der deutschen Sprache*, Berlin / New York: Walter de Gruyter.

謝辞

本論文は、筆者が東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士後期課程で取り組んだ研究ならびに同研究科特別研究員として取り組んだ研究をまとめたものです。本論文の執筆にあたっては多くの方々からご指導とご支援をいただきました。この場を借りて感謝を申し上げます。

東京外国語大学大学院教授の成田節先生には主任指導教員として本論文に草稿段階から何度も目を通していただき非常に多くの有意義なご指摘・ご助言を賜りました。また同大学院教授の藤縄康弘先生には副指導教員として特に演習（月5）での発表時や事前審査の際に、同大学院教授の浦田和幸先生には同じく副指導教員として事前審査の際に、本論文に関して数多くの有意義なご指摘・ご助言を賜りました。さらに同大学世界言語社会教育センター特任准教授のクリストフ・ヘンドリックス先生にはドイツ語のインフォーマントとして本論文にご協力いただきました。

上記の先生方には筆者は東京外国語大学大学院博士前期課程に在籍中から様々な機会に言語学・ドイツ語学・ドイツ語に関して多くのご指導を賜りました。また慶應義塾大学文学部教授の田中愼先生には特に演習（月5）で多くのご指導を賜りました。さらに筆者が同課程に入学する前には東北大学大学院教授の嶋崎啓先生から多くのご指導を賜りました。

特にドイツ語に関しては他にも元東京外国語大学客員教授のハインツ・シュタインベルグ先生，元東北大学教授のブリギッテ・シュミッツ先生，元仙台大学教授の小松恵一先生をはじめとする方々に多くのご指導を賜りました。

研究・勉強仲間の方々，特に東北大学講師の小林大志氏，東京外国語大学特任講師の井坂ゆかり氏，東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会の成田吉重氏や永盛鷹司氏からも折に触れて助言や励ましをいただいています。

最後に、岩手と東京の家族からの支援も記しておきます。特に両親，そして何より妻の理解と支えがなければ本論文の完成はありませんでした。また，この間5歳になった息子からも日々よい影響を受けました。

みなさまありがとうございました。